
東方暴風警報

グゥワバス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方暴風警報

【Nコード】

N8487L

【作者名】

グウワバス

【あらすじ】

転生？憑依？……どう言った経緯かは知りませんが彼は気がつく
と見知らぬ森の中にいました。

穴（前書き）

独自解釈という名の捏造、どんどん入ります。納得いかねー、と言う方は回れ右の方向を推奨します。

穴

何がいけなかったのか。もう一度俺は振り返って見る。

道端に穴があった

覗き込んだ

足を滑らせ乙

……笑えよ。

でもまあ落ちたものはしょうがない。問題はその後にある。

気を失ってからどれくらいの時間が経った頃合いだろうか。ようやく目が覚め、とりあえず辺りを見回してみるも土ばかり。そりゃ穴に落ちたのだからそうなのだが。また、上を見上げると真ん丸お月様が俺の事を見下ろしている。夜なんですね、分かります。

幸い穴はそう深くなく、手を伸ばせば何とか自力で這い上がれそうなもの。汚れるなど言っていられる場合でもなく、不格好ながらも地上に這い上がったのだが

「……どこよ？」

『知らない天井』何てかわいいもんじゃない。穴から這い上がった
たら知らない土地でしたとか、マジウケるんですけど。

誰かいないか仲間を呼んで見ても反応無し。マジ孤独。これで俺
はなんかやる瀬なくなっただけ。何がいけなかったのか。

後悔からは何も生まれない。落ちてしまったものは落ちたんだか
らね。黒歴史として割り切ろう。だけど『穴から這い上がったら道
端が森になってました』は無いだろ。

森。辺りを見回すと全面木。しかも自分の何十倍はあるのかって
ぐらいの。あれだな。俺に森の住人になれて神様は言いたいんだ
な。

「H A H A H A。全く神様には困ったものだね。……いらないから！ マジそういう冗談とかいらなないから！ だから神様、俺を元いた場所に戻してくれよおおおお！」

もちろん返答は無い。空しくも俺の魂の叫びは夜の森にこだまするだけ。……鬱だ。しかしいつまでも落ち込んではいられない。不意ながらこんな場所にいるが、別に自殺願望があるわけではない。とりあえずここがどこか分からない以上、安全だと言う保証は無いのだ。

というわけで寝る場所の確保。皮肉にも落ちた穴は割りと広い。土で汚れる何て言ってられるほど余裕は無い。今一度穴の中に入り目を閉じる。次目を開けた時に、全てが終わっているという事を信じて……

「……だろうね」

おはようございます。本日もいいお天気ですね。空気も美味しい空気も美味しいし空気も美味しいし空気も（ry

さて、現実という物は余りに残酷らしく、一人の青年の日常をも劇的に変えてしまつらしい（逆ビフォーアフターの考えて）。

とりあえず朝飯を食いたい所なのだが、幸運にも木々には何やら果実が着いてる物もちらほら。手頃な物でピンクの球体っぽいのを食べてみると……うめえ。多少酸味は強いものの昨日の夜は何も食べていないのだ。今は何食つても美味しく感じるのだろう。

「つかこれ求めて獣が来ないとも限らねえよな」

三十六計逃げるに如かず。ある程度ピンクの果実を持ち、宛も無く森をさ迷う事にする。いや、狙いならある。

人を見つけるor飲み水を探す。前者は絶望的だとしても後者はなんとかしたい。つい訳で『一人森林クルーズ』を決行。手頃な木の枝を杖代わりにして出発。ちなみに方向は杖が倒れた方に真っ直

ぐ直進。自身の少ない幸運に賭けてみたいと思う。

「いや、正直あの果実を手に入れた時はいけると思ってたんですよ」

水場？ 何それ飲めるの？ 長い事歩いたけど周りは木ばかり。太陽の位置も最も高い場所にあるという事は時刻もお昼時なのだろう。休憩を含めて朝採った果実を食べはじめ。うん、うめえ。

「人が恋しい。一人こあい」

人間というのは淋しがり屋なのだ。俺とて例外ではない。自然に風化したのであろう、倒れた木を椅子代わりにして腰を下ろし、ふ

と考える。ここどこだよ。森っていうのは嫌って程分かった。そうじゃなくて世界と言った単位で。とりあえず日本……だと言いだけど。

そんな願望を抱いた時だ。俺の耳に入っただのは微かなノイズ。それも俺が待ち望んでいたやつ。「休憩終わり！」と自分を奮起させその音の方に向かって走り出した。

「いい、『water』ウォーター。これが水よ！」

ろ過？ んな必要ないほどにキレイに透き通った水。ここがどこか知らんがとりあえず湖に着いた。早速俺はそんな湖に躊躇するこ

となく顔を突っ込む。

うまい。いや、潤うと言った方がいいだろうか。こんなにも満たされると感じたのはいつ以来だろう。

開放感。何だか知らないが心の底からスーッとした風が通ってる気がする。ただ水を飲んだけなのに。

……今なら何でも出来る気がする。

「手始めに脱ぐか」

とりあえず脱いだ。

出会いは唐突に（前書き）

いろいろと至らない点とありますが、何卒ご勘弁を

出会いは唐突に

「あんだ、何で裸なの？」

どうしてこうなった……裸になって湖でバタフライ。上がってから目の前に現れたのは小さな氷の妖精。俺はコイツのことを知っている。……いや、今は正直どうでもいいや。

「ねえ、何で裸なのさ。人間ってのは布巻いてるってあたいは聞いたんだけど」

「お願い、これ以上僕を責めないで」

穴があつたら入りたい。いや、あつたか。じゃなくて無性に恥ずかしい。つか何この子。何でも僕ちゃんの事をガン見出来るわけ？ 一応俺もあれ生えてるオスだぞ。サイズは……そこそただけど。

チルノ。霧の湖近くに出没すると言われる氷精（幼女）。冷気を操る程度の能力を持つてるだとか。加えて俺は自分がどの世界に迷い込んだのか分かった。

「東方ですね、分かります」

「ねえ、何でさ？」

現世バイバイ。ようこそ幻想郷。目の前のチルノが如実にこれが現実だということを物語っている。……鬱だ。

とりあえずいつまでも恥をさらけ出すわけにもいかないから服を着る事にする。心なしに冷えてきた気がするからなるべく速く。

「いや、本当に寒い」

あるえー、俺って腕こんな太かったっけ？ ゴリラもびっくりのこの太さかつこの硬さ。

はい、凍り付けにされてる途中です。犯人はチルノ。年齢不詳。いやね、俺も声出してせめて助けとか呼びたいわけなんだけど、デフォ通りに凍っちゃったわけで上手く声が出せません。更に頭がポーツと……してきて……

（もう、ゴールしても……いやいや、いくない！いくない！）

○○程度の能力うううう！俺の中に眠る何かああああ！

頼むから今こそ封印を解き放つてくれええ！
諦めない。絶対死ねない。死んでたまるか。まだまだ俺は……

（いぎだああああい！ ああ、全裸でアホ顔したまんまで死ぬとかどんな羞恥プレイだよ）

どんな事を考えたって限界はやって来るもの。とり、あえず……
マジ、意識、が……

あらゆるものをふっ飛ばす程度の能力

(氷いいいいいい！！)

バリイン！と氷が砕け散る音と共に俺生還。生きてるって素晴らしい。ただ俺の意識は間もなく途切れた。

「氷！」

「あ、起きた」

ふと目が覚めた先にあつたのはチルノの顔。それはもう無邪気そうな顔であります。ただ、ちょーっとお痛が過ぎたな。
裸で立ち上がった俺はチルノの後ろに回り込み、ぐりぐり攻撃。けっして欲情したわけではない。

「痛い痛い！ やめないとまた氷に……ギブギブギブ！」

「ふ、無様なものよ」

「裸でバックとったあんなの方が」何て事を更に宣いやがるから、もう一度同じ事をやったら今度は大人しくなった。

どうやらこのチルノは俺が思っている以上に物分かりがいい。きちんと謝るとは思わなんだ。

いい加減全裸も飽きたしとりあえず服だ。服を着てから能力について考えて見る事に……いや。

「ふーん、変わった布ね」

「まあな。それよりもチルノ。この辺に人里と神社はあるか」

先ず人里だ。絶対にこの辺にある。チルノがそれを仄めかすような事を言っていたのだから。加えて能力についてもっと詳しく知りたい。要は困った時の巫女れーむってわけだ。

だがチルノから返ってきた返答は、俺の想像の遥か斜め上をぶち切るもの。

「あたい名前言ってないんだけど」

なん……だと？さつきから感じるんだがこのチルノそれほど馬鹿じゃない。全裸の不審者に自ら近付いて来たということを除いて。

一応「いや、名乗ったよね？」何てごまかそうとしたが、チルノ

の不信感を除くには至っていない。いや、ホントこれチルノか？

「まあいいわ。あたかも気になる事あるしね。『ギブアンドテイク』
ってやつね」

どー見てもチルノじゃありません、本当にありがとうございました。いや、チルノだよ。チルノなんだけどさ、目を疑うとかのレベルじゃないぜ。

とまあいつまでも驚いててもしょうがない。名前に関してはスルーしてくれるらしいから、出来る限り俺はあいつに従おう。

「把握。んじゃまあレディーファーストでチルノから」

「“じんじゃ”って何？」

よかった、いつものチルノだ。俺は安堵の目を向ける。あ、睨みかえされちゃった。

「神の住まいとでも言っておこうか？」

「神の住まい？ そんなもの見た事ないんだけど」

「……マジで（ギブアンドテイクは分かるのに？）」

そういった概念が無いとききましたか。うーん、どうやら時代は随

分前の前の前の東方（つか日本）の世界っぽい。ただこの湖があるってことは、将来この辺は幻想郷となるのだろう。いつかは知らんが。

何だかんだ思いつつもチルノに神社の在り方というのを一応教え、納得してもらう。説明の途中「ふむ、そういう仕組みか」何て呟き声が聞こえたが、幻聴であることを強く願う。

「今度は俺な。人里ってどこ？」

「ここから西に向かって一日歩けば着く。何ならあたいが先導しようか？」

願ったり叶ったり。だがその選択肢は今の俺には無い。そもそも人がいるって分かった時点で俺は安心した。

しかし神社が人里には無い。これは問題がある。何故なら人里の安全が保障されていないから。妖精がいるなら妖怪だっていても何ら不思議は無い。守りの無い人里なんて恰好の餌場だ。命がいくつあっても足りない。

幸いにも俺の前には話の分かる氷妖精チルノがいる。コイツならなんとなく、ここいらで生きてく術を知っている気がする。たがら俺は頼んでみようと思う。

「いやいい。それよかお前と一緒に行動したいんだけど」

「あたいと？ まあいいや。あたいは最強だし」

「違うぜチルノ。『最強』じゃなくて『サイキョー！』だ。こっちの方が何だか熱いだろ」

自分でもわけが分からない事を言いながら、俺達は森の中に溶け込んでいった。

妖怪がいつぱい。本当にあり（ry

俺の予想通りこの辺には妖怪がうじゃうじゃいるらしい。昨日の夜俺が襲われなかったのはあの穴周辺に妖怪達が何か違和感を感じたからだとか。

そこで昼時に調査に乗り出したのがチルノ。周りの妖怪も調査に乗り出そうとしたらしいがそこはチルノ。能力持ちは現時点でかなり珍しいため、チルノがみんなを黙らせたらしい（冷凍的に考えて）そして今に至る。

「基本妖怪は食べそうだったら何でも食べる。共食いは勿論人間だって例外ではない」

チルノのパーフェクト算数教室改め、チルノのパーフェクト妖怪教室絶賛開校中。生徒は俺だけだけど。

何でも妖怪というのは雑食らしい。食べそうだったら食うとかアバウト過ぎるだろう。ただそういった概念を除くと妖怪というのは非常に個性的らしく、中には食わず嫌いなどの妖怪もいるらしい。

取り分けチルノみたいに意思疎通を図るやつもいれば、問答無用で食にありつこうとする奴だっているにはいる。ただ後者はあまりいないらしく、前者の方が圧倒的に多いらしい。でなきゃすぐに危険分子と目を付けられすぐに捕食の対象になるらしい。微妙に人間

臭さも見せている。

また、チルノは前者の中でもかなり理知的だと自負している。穴の側にいた俺を「今直ぐ食べよう」と言った妖怪を宥めたのもチルノだとか。ありがとうチルノ。もう？なんて言わせない。手の速さは相変わらずだけど。

「オーケーチルノ。つまり君がこの森で生きる術を教えてくださいと？」

「話が半分飛んでるけど面倒は見るわ。あんたなんか能力持つてるばいし。ただし」

先に述べたように今現在、能力を持った存在というのは圧倒的に少ない。だからチルノは能力を持った俺の面倒を見る代わりに、俺にこちら側の味方になれと言ったのだ。

「いいぜチルノ。但し俺の能力の良し悪しについては保証しないぜ？」

「構わないわ。それ抜きにしたってあんた面白そうだから」

交渉成立。生物の種族を越えた対談で奇妙な関係が築かれた。

チルノの知り合い（前書き）

大妖精じゃありません

チルノの知り合い

東方生活三日目。チルノに面倒を見て貰う約束をした次の日。今は能力の解釈について話し合っている。

「能力についてだが『あらゆるものをふっ飛ばす程度の能力』だ。チルノの氷もおそらくその所為だろ」

「へえ、となると気になるのは本当に『程度』ね。検証しなくちゃ」

相変わらずチルノはチルノじゃあ無いが慣れなのか、大分抵抗が無くなってきた自分に驚きだ。概念つてのは厚いように見えるが思った以上に薄いみたいで。

まあそんなことよりだ。チルノの言う通りどの『程度』の能力なのか検証することに越した事は無い。これから先、生身で生きていける程甘くは無いと思うし、何かとアドバンテージは有効利用しなくては。

「という訳で手始めにお空に浮いてる雲さんに試してみよう」

「あははは！ やっぱりあんた面白いわ！」

「あはははははー。」

出来心だったんです。あんな事になるとは全然思いませんでした。結論を言うつぶつ飛ばせた。真上の雲に手を翳し「飛んでけ」なんて馬鹿にした口調で言ったら雲が霧散していました。「ああ、いい天気だ」なんて呟きながら別の雲に手を翳し、同じ事をもう一度。またまた霧散してしまいました。

俺とチルノは顔を合わせニヤニヤしたまま。しかし大量の冷や汗がダラダラ流れている。

「すごいね、人体」

「いや、あんたを人として見れない」

そいつあ、照れる。なんて思う訳無くただただ手にしてしまった能力の強大さに呆れるばかり。いや、雲った困った。……すまん、正直調子に乗りすぎたと思う。反省はしてるが後悔はしてない。

「何ぶつぶつ言ってるのさ。とりあえず検証するから、詳しく状況と状態を述べなさい」

切り替え早いっす。チルノさんマジ遅いっす。そんな手前、俺だけがうるたえる訳にもいかず、平静を装い（内心はマジやべえ）チルノの応答に応えた。

「ただ念じただけ。そしたら雲が霧散しました。反省も後悔も「成る程。それだけで雲をふっ飛ばすなんて、それはかなり強力な能力ね」

それからチルノは「ちょっと待ってて」と言い残しその場を去ってしまった。一人になった俺は食料確保のために例の果実を集め、その傍ら能力について考え中。

例えばだ。この能力は制御が効くのだろうか？ そこにあった木に手を翳し「内部から全方向に粉々にふっ飛ばす」的なイメージだと……もうイメージ通りにふっ飛ばしました。

今度は地面にある石ころを狙った木にふっ飛ばすイメージを浮かべると、木に石ころが命中。更に強弱、回転を石ころにイメージしてふっ飛ばすと、まさにその通りに。

……ばねえ。これは東方史上トップクラスの能力かもしれない。効能の素晴らしさもさることながら、何よりも凄いのはその凡庸性だ。思い通りにふっ飛ぶとか、重力を思い通りに操れるようなものだし。他にも能力の応用で空中浮遊も試してみた。これは出来るには出来るのだが、如何んせんまだまだ『頭』を使う。比較して見るとチルノだ。奴は羽根を用いて空を飛ぶ感覚を『身体』で掴んでいる（

と思う)。俺の場合『頭』で思い、『体』を動かすというかなり面倒臭い工程が存在している。いずれは『頭』と『体』を統一させて、『身体』で空を飛んで見たいものだ。今の状態だと空を飛ぶのにまだ束縛的な物を感じるから。と、ようやくチルノ……と

「なあ、チルノ。こいつ本当に強いのか？」

「さあ？　試してみなきゃ分からないって言ったじゃん」

時代を無視した白いワンピースを着た幼女。だが人間ではない。頭に生えた二本の角。先生、ここに鬼がいます。

角さえなければただの幼女だが侮る事勿れ。鬼つてのはものつそい強い。数多くの妖怪の中で頂点に立つ種族と言っても過言ではない。

そんな鬼幼女をチルノは連れて来たのだ。先程の不穏な発言からして嫌な予感しかない。

「えーつとMs・チルノ。彼女は？」

「鬼の『おーちゃん』よ。あんたの相手。さあ、ご兩人。思う存分暴れなさい！」

もついや、この子。やっぱりアホの子だね。調子合わせに鬼とか

マジねーよ。

対して鬼の方は何だかとても怠そう。だらうね。妖怪より弱っちい人間が相手なもの。加減間違えたら俺の姿がR18指定になってしまう（グロ物的に考えて）

……速攻しかないよな。何の躊躇いもなく鬼を地面にふっ飛ばした。

「お前ええええええ！！！」

あんなに急そうだった鬼幼女の見目が一発で大変な事に。ビビりにビビった俺は尚も地面にふっ飛ばし続ける。「ちょ……!」「待て!」「殺……!」などなんか言おうとしているのは分かるがガン無視。

俯せに鬼幼女はふっ飛ばされ続けたためか、地面に大分めり込んでるのが分かる。

「飛んでけ！飛んでけ！痛い痛いのに……人間がああ！」飛んでけ！」

危ない、隙を付かれる所だった。ここでチルノが鬼の安否を確かめに行く。勿論俺は攻撃の手を緩めるつもりはない。「ギブ？ギブ？」とチルノが鬼に問い掛けてる点に関してはスルーで。

鬼も限界だったのだろう。チルノの応答に最後の力を振り絞り縦に顔を揺らすとピクリともしなくなる。それを確認するとチルノは大きく腕を交差させた。

「 Weiner! 」

「……能力無かったら死んでた」

能力のおかげです。本当にありがとうございました。とここで再認識。俺の能力はパネエと。

チルノはチルノで鬼少女の介護をしてる傍ら、自分の考えをまとめ始めてるし。そんなチルノに俺は闘いの前の検証結果について話をする。「あんた、本当は妖怪でしょ」何て言われたりもしたが、何時も俺は人間だ。即座に否定。暫くの間視線が痛かったが納得してくれたのか、漸く目を逸らしてくれた。

「まあ言いわ。あたいはおーちゃんの面倒見てるからあんたはその辺でもぶらぶらしてて」

「却下。一人怖い」

てーわけで暫くはボケーっと一人物思いに耽る。いや、目、口を

半開きにしながらただただ無心でいるように心掛けていたと言った方がいだろう。そうやって俺は時間を潰した。

さてと、どれくらい時が経っただろうか。辺りはすでに暗くなっており、月明かりだけが唯一の照明となっている。

相変わらずチルノはそこで鬼幼女の面倒を見ているらしく、小さな膝を枕にしてじーっと鬼幼女を寝かせている。原因作ったのは俺

だがなんか和む。

「あんたの能力ってさ、おーちゃんの痛みもふっ飛ばせる？」

「ん？ 分からないけど試してみるか」

鬼幼女ことおーちゃんは俺の所為で何処かしらを痛めたらしく、先程からずーっと唸りっぱなしらしい。何だかんだで原因は俺にあるので特に抵抗無く、チルノの応答に答える事に。

ただ漠然とした『痛み』というものをふっ飛ばせるかどうかは知らない。そのことをチルノに説明してから俺はおーちゃんに手を翳す。とりあえず『今ある痛み』で試してみようか。

「飛んでけ」

別に掛け声は無くたって構わない。ただあつた方が何となく引き締まるのでわざと出している。若干おふざけ要素が入っているが、全力でふざけているわけではない。それを証明するかのように、おーちゃんの唸り声が止まった。

それでチルノも安心したのか、おーちゃんの頭をそつと下ろし、鬱憤を晴らすかのように大の字に寝っ転がる。何て言うか、食べちゃいたい。……いや、捕食的な意味合いがぶつと。

「 ! あんた、なんか妙な事考えてない? 」

「正直すまんかったと思う」

『雑念』をふっ飛ばし、俺は適当に目を閉じた。あー、蒲団恋しい。

チルノ、おーちゃん。時々パネエの（前書き）

最近東方関連の二次ばかり漁っている今日この頃です。

チルノ、おーちゃん。時々パネエの

森の中での生活は割と快適だ。木々のせせらぎと差し込む光で目を覚まし、大きく深呼吸をすることで意識を覚醒させる。澄み切った湖の水で顔を洗い、チルノと顔を合わせてその日の予定を話し合う。

朝飯はチルノが何処かしらから果実やら木の実やらを持って来るので、有り難く頂戴している。稀におーちゃんが自身の身体の何倍も大きい獣を持って来てくれるため、貴重なタンパク質を俺は十分に採る事もできる。たまに妖怪の肉も食しているが味、齒ごたえになんら問題は無い。問題があったら能力でふっ飛ばせばいいし。その影響なのか、近頃は身体の疲れが取れるのが早い。何だか複雑だ。おーちゃんとは親交を深め、チルノに次ぐ大事な俺の親友となった。まあそういった概念が妖怪などにあるかは定かではないが、少なくとも種族を越えた関係というのは条件さえ満たせば成り立つと言っておく。

「さて、今日の予定。の前に話す事がある」

「ん、どうしたの？」

先に述べたように、最近身体が嘘のように軽い。というのも、疲れが全く残らないのだ。特におーちゃんが持って来た妖怪を食べた次の日は決まって絶好調。もう妖怪肉の恩恵としか言いようが無い。最近は更に拍車が掛かり、「ネテ○会長ごっこ」と称し、湖の畔

で気を整え、拝み、祈り、構えて、（拳を）突いたら、音を置き去りにする所か湖を割ると言うオマケまで付いてくる始末。勿論能力何て使わずに、純粋な自分の力でだ。

常識的に考えると人間である俺がそんな力を持てる筈が無い。これが妖怪肉の恩恵の存在を裏付けている。

「と言う訳だ」

「確かに妖怪を食べるとその分妖力等を取り込めるって言うけど、そんな効率よく取り込められる訳無いわ。せいぜいお腹と妖力を満たす程度よ。きつとあんたの能力が関係してるとおもうわ。大方、あんたの中の『何か』が無意識の内にふっ飛ばされてるのね」

能力の影響ねえ。確かに今現在はそれしか考えられない。というかそれだろ。しかしどう作用してるかは分からない。複雑な工程が存在してる筈だ。

いつまでも考えてもしようがないのでとりあえず朝飯の果実を口に入れる。チルノも同様に果実を口に入れ、胃袋に収めてから今日の予定を話し始めた。

「今日は探検よ！」

「探検？ 何処を？」

今まではおーちゃんを含めて能力について熱く談義したり、人里に行つて例の果実を何か別の食べ物と物々交換したりと他の妖怪と交流することなく、俺としては非常に安全な生活を送っていた。

だが探検となると話は別だ。必ずと言っていいほど別の妖怪と遭遇する。それだけこの辺は妖怪が多いのだ。寧ろ今まで別の妖怪と遭遇しなかった方がチルノ達にして見れば驚く事らしい。

出来るならご遠慮願いたい。例えどんなに強力な能力を有していても人間なのだ。自分の命が一番。

「因みにこれは強制よ。この辺で生きていきたいなら妖怪の“ねつとわーく”くらい知っておくべきよ」

マジ何時代に流されたの俺。人里の人間は布巻いた位の人達だっただけど、“ねつとわーく”って単語が何故にある？

本気でこの世界の在り方について気になったが一応これは保留しておく。生きて行くためにこの辺の地理やら妖怪やらのことを知る必要があるのだ。不本意だが行くしかあるまい。

ただ、やっぱりチルノだけじゃ不安なためおーちゃんを呼ぶ了解をチルノから貰う。「どうせなら賑やかに行きたい」と言ったら喜んで賛成してくれた。ちよろいぜチルノ。

何ら変化も見られない森の奥。だがいつも俺が行動している場所とは確実に異なる事がある。

「チルノ、こいつら俺を食わないよな？」

「大丈夫。話せば分かると思う」

もうここいらは妖怪のテリトリーらしく、前を見る度に様々な妖怪が目に入ります。確かに割と人間らしい成りの妖怪もいましたが、何故人間らしい姿なのかチルノらに聞いてみると、「人間を騙して攫いやすいから」と笑いながら話してましたが笑えません。彼女らにとつて人間は捕食の対象であり、俺は畏敬の存在らしいです。う、嬉しくなんかないんだからね！

……ぶっちゃけホツとしている自分がいるわけなんだが、正直複雑だ。まあ今は自分の身を守る術で手一杯だから、人里の皆さんごめんなさい。なるたけ努力はします。

妖怪と顔を合わす度に俺を食べようとするが、チルノが説得（俺の強さを説明する的な意味で）。それがダメならおーちゃんが説得（鬼の私が手も足もでなかったと脅し的な意味で）。半分弱はここで手を引くのだが、それ以外はおーちゃんの説明が終わった瞬間に襲って来る。いきなり来るだろうと常に警戒していた俺は、二人が説得している間に拝み、祈（ry、襲って来た瞬間に例の正拳突きを放ったら、たいていの妖怪はそこで食欲を抑えてくれた。ただ、それでも分かつてくれなかったら能力発動。完膚無きまでに叩きのめし、無理矢理に納得させた。

「お前、そんなパンチ撃てたのか？」

「この前撃てるようになった。おーちゃんが持つて来る妖怪肉食ったら更に力が上がったんだよ」

心底驚いた表情をしていたおーちゃんだが、俺の無敵度向上の発

端が自分にあると分かった、膝を着いてorz状態になってしまった。

とりあえず頭を撫でて慰めてやろうと思ったなら「触るな、病る」って言われたので、ラブコメ展開というものを記憶の端から抹消して泣いた。因みに俺は決してロリコンではない。フェミニストだ。

「さてと。まあこの辺りで妖怪達への自己紹介は止めておこう」

「あたしもそれ思った。そろそろ本番に入らない？」

前方を歩く二人は足を止め、二人して笑顔で振り向く。その笑顔は幼女に相応しくない、良からぬ企みを含んだ奴の物。背中を駆け抜ける悪寒は決して間違っではない。

そもそもだ。こいつらが何年生きてるかは知らないが、精神的にはまだ幼いため「悪戯といったものが好きか？」と尋ねたら十中八九「大好き」と返ってくる事は間違いないと思う。

「……分かったよ。本番行っところ」

諦めも時には肝心なのだ。

「おーにごっこすーる人こーのゆーびとーまれー」こんな事言ってる時期が俺にもありました。

おーちゃんを先頭に連れられたのは森の最奥部。人間は疎か妖怪でもあまり足を踏み入れない場所。鬼が最も多く集まる場所らしい。だが、そこは森の最奥部と言われているが木という木が殆ど見当たらず、不自然に拓けた広場に見える。何でも鬼同士の力比べがよくここで行われるらしく、闘いの度に木々は折れてしまい、最終的に広場になってしまったそうだ。

……もうこの場所の説明を受けた時点で読めた。俺、ここで闘うんだろ。誰かは知らんが。

「相変わらずここの空気は心地いいね」

「おーちゃんおーちゃん。俺の相手は？」

「お、察しがいいね。あそこ桐株に座ってる鬼がいるだろ」

おーちゃんの視線の先になんか……ものっそい雰囲気醸し出してる鬼がいるんですけど！

体格は俺の鬼に対するイメージと違いややずらっとしてる。長い白髪を無造作に伸ばしており、その黒に染まった瞳は何だかギラギラといった形容が当て嵌まるだろう。

ねえあいつ、なんて雷○（らいぜ○）？ あんなのと闘うとか、俺に明日を生きる資格は無いのかと。

「おーちゃん、あの、冗談だね？ いや、冗談だな」

「いや、あれ」

本気だ。この鬼幼女マジで言うてやがる。隣のチルノも「あた

の背がもう少しあれば」とか何とか。背があれば何なんだよ。

あ、何だかあの鬼がこつちを見た。んでもって目が合った。ってあれ？ 周りを見るとみんな顔を逸らしている。もちろんおーちゃんや、あのチルノでさえも。

……ひよつとしてあれか。互いに目が合ったら闘い始めるとか、ポケ○ンバトル方式が採用されてたり？

「あいつ馬鹿か」

「あれと目合わせるとか、よほどの阿呆か実力者か？」

「俺は人間が瞬殺に獣二匹」

「それじゃあ賭にならんよ」

「……あはははははは！！」「」「」

笑えねーよ！ 相当あれってやばいんじゃない！

チルノとおーちゃんと言うと、いつの間にか隣から消え、遠くの木の上から「頑張れー！！」などと抜かしてやがる。周りにいた鬼も同様に、遠くから俺らを見てるっばい。

よって現在広場にいるのは例の鬼と俺のみ。その例の鬼はというとゆつくりと桐株から立ち上がり、ギラッギラツの殺気を振り撒く。いやゝな空気がこつちに飛んで来た瞬間に俺はそれをふっ飛ばしたけどね。

「おろ？　いつもならこれで終わる筈なんだが」

「人間だから？」

鬼基準で話してんだよね、この鬼。どんだけ規格外の存在なのかと。

「ふむ」と顎を掻きつつゆっくりとこちらに近付いて来る鬼。対して俺は自身の“恐怖心”をふっ飛ばす事で鬼と相對。本音は早退したいんだけど。

刻一刻と距離が近付く中で先手を撃ってきたのは鬼の方。顎を掻いてる手とは反対側の手を翳し、何か球体の様な物を俺に飛ばしてくる。無論、俺はそれをふっ飛ばす。ただあまりにも速過ぎて飛ばす方向までは定められず、その辺の木に轟音を轟かせ命中。木は折れ、残った部分も何故か電気を帯びていた。

「ちょ、あれ電気つか！」

「でんきい？　ありや雷だぞ」

らい〇えええええん！お前のルーツが今俺の前に！

恐怖心は拭いても流石にあればヤバイと感じ俺は早々にこの闘いを終える事を決意する。「んじゃ、行く」ぞ、と言いたかったのだ

ろう。鬼を地面に何度も何度もふっ飛ばすが如く叩き付ける。辺りに響く二度目の轟音は、周りの連中にも「信じられない」と衝撃を与える。

実際に叩き臥せられた鬼は、「何が起こったのか」と何も分からないまま、二度、三度と呻き声と共に臥し続ける。

「人、畜生がああああああ！！」

あれ、何てデジャヴ？ おーちゃんも確かこんな風に怒ってたよな。まあ、何はともあれ後暫くこうしてふっ飛ばしていればコイツも大人しくなるだろう。そう考えてる時期が俺にもありました。突然俺の身体全体に衝撃が走る。鬼の追撃を避けるべく、飛びそうな意識を堪え直ぐに自分を天高くにふっ飛ばす。そこで俺は何をされたのか漸く理解した。

「雷、は。基本、空か……ら」

身体が焦げ、如何に先の雷がとんでもない代物か物語っている。自身の痛みと共に、周囲を常にふっ飛ばし続ける。反射的に雷をふっ飛ばすとかは流石に出来ない。自分の周りを避けるように雷は轟き続ける。

地面に墜落する寸前に、墜落時に起きる衝撃の分だけ自分を空に

ふっ飛ばす。力加減はほぼ勘だが何とか着地。痛みをふっ飛ばしているため特に今は何とも無いが、身体が動かせる理由はおそらくそれだけでは無いだろう。自身の肉体も能力の恩恵で頑丈になっていた。出なきゃ今頃こうして満身創痍ながら身体を動かす事は出来ない。

「お前、不死身か？」

「はい、隙発見」

問答無用で地面に叩き臥せる。もう容赦も油断もしない。相手に口を開ける暇すら与えない。

周りの空気が張り詰める中、未だに地面にキスを続ける鬼にゆっくりと近づく。何しにかつて？ 決まってる。止めを差しにさ。

一步、また一步と近付いて行く。その間に俺は気を整え、拝み、祈る。もちろん元ネタはネ○口会長だ。そして鬼の元に。そこで俺は拳を構えて

「しっかり受け止めるよ。って無理か。背中だし」

いつもの調子だけは崩さずに振り下ろした。

S I D E おーちゃん

驚いた。あの“鬼神”のをもち打ち負かす人間の實力に。私も鬼の端くれだからそれなりに強いのだが、鬼神の称号を持つあの方は別

格だ。私はあの方が負ける所を、少なくとも一度も見た事が無い。その方が今まさに、しかも人間という弱い存在にやられたではないか。未だにその光景は信じ難い。

そもそも私が彼の人間をあの方と闘わせたのは、久々に鬼神たる方の闘いを目に収めたかっただけ、という酷く簡単な理由からだ。勿論人間は断る事も出来る。無論、奴の事がだからすぐさま諦めると思い、冗談半分。いや、九割で送り出したのが、あるう事が、あの方と目を合わせてしまった。

その時点で「正気か！」と思った（隣のチルノに関しても）もんだが、結果は人間の勝利。この時点でこの人間に手を出す存在はいなくなっただけでいいだろう。

「おい、おーちゃん」

彼の人間が私に近付いて来る。更に驚く事に、彼の人間に苦しげな表情が見られない。

あの方もおっしゃってたが、コイツは本当に不死身か？ 肉弾戦は無かったとは言え、あれだけこっぴどく雷を浴びたのに彼の人間に堪えた様子は全くない。今だに身体からはバチバチと、雷を帯びた音がすると言っている。

「いや、身体がボロボロ。悪いけど暫く休ませて。三日は穴周辺から動かないから、暇したら遊びに来て。後あいつには」

「名前」

「ん？」

「名前聞いてない。教えて」

虚を突かれたような表情で彼の人間は私を見つめる。だがそれもすぐに崩れ「……乱れ治めると書いて乱治^{らんち}。“らんくん”と呼んでくれ」そう言っただけの人間、乱治はその場を去っていった。

今日の日の闘いを私は決して忘れない。この場にいた鬼達もあの方でさえそれは一緒だろう。

暫くした後あの方は目を覚まし、私達に彼の人間の事を聞いてきた。

「小さき鬼に氷精よ。あれはお前の知り合いか？」

「ええ、あたいらの友達！」

「名は？」

「乱治。乱れ治めると書いて乱治です」

「乱治。乱治か。……くくつ。はっはっはっ！ 鬼神と称され数千年、不敗を誇る我が負けた。それも人間に！ よいか、者ども！ この森の頂点は現時点を以って我では無くなった。乱治、乱治が森の頂点だ！ 異論がある者は我が屍の上に立つを以って、異を申し

立てろ！」

いるわけ無かった。

勝者の特権（前書き）

さあ、どんどん妄想が加速しますよ。

勝者の特権

あの闘いの次の日。今日も今日とて朝日を浴び、顔を洗い、正拳突きをしつつ、チルノと顔を合わせる。寝倉に戻ると今日はおーちやんが来ていて、いつもよりボリューム満点の朝食に口を付ける。

俺が去ってから、らい○んもとい鬼神も気が付いたらしく、以後俺のここいらの安全もある程度保障してくれるらしい。「いや、実質鬼や妖怪の安全の保障じゃ」何てチルノが言い出したが俺はそれを止める。妖怪や鬼にも面子はあると思うから。

まあそれ以上に鬼神つつーか森のトップが安全を保障してくれるって言うてるんだ。余計な事言って危険が増えるなんて、そーんなのーは、いーやだ。夢なんて忘れてもいいから、俺が泣かなければそれでいい。

「鬼神様も中々傷が深い。回復しだい乱治に会いに来るって」

「すみません、泣きそうです」

痛みやら痛みやら痛みやらを俺もふっ飛ばしていたのだが、実際に俺の傷も深い。そもそも肉弾戦に持ち込まないでこれだけ傷が深いんだ。まともに撃ち合ってたらと思うと、それこそ原型を治めて無かったと思う。

だから少なくとも三日はここを動くつもりは無い。妖怪肉を食って進化してる筈の自己治癒力に賭けたいのだ。

「確かあんた“らんち”って言うのね！ あたしったら名前を聞くのすっかり忘れてたわ！」

乱れ治めると書いて乱治。……すみません、そげな大層な理由で付けたわけではありません。正直あの時（“昼飯”にチャーハンは王道）と、どうでもいい思考の一部を英訳しただけ、と言う非常に安直な名前に尤もらしい理由を付けただけなんです。

色々と誇張されつつある物の、まあ俺に掛かる火の粉が少なければ少ない程嬉しいので、今の所はスルーしておく。

それにしてもホントにここは幻想郷予定地なのか？チルノがいるから湖は霧の湖と分かるが、妖怪の山やら迷いの竹林などが全く見当たらないのは一体何故なのだろう？

「なあ、この辺に『妖怪の山』って無いのか？」

「山？ はて、聞いた事無いね」

「あたいは湖周辺にずっといるけど、山なんてこの辺には無いよ」

うーん、この辺に山らしき場所何て無いって事か。何だかここが幻想郷予定地かどうか不安になってきた。

正直、俺はこれから長い時間を生きると思う。能力の影響で“老

化”何て軽くふっ飛ばせるし、悪い病気に掛かったら“病氣”をふっ飛ばせば身体の健康は保たれる。例え概念がアウトでも、身体に悪影響を与える菌だけをふっ飛ばしてくれるから、この能力はすごい。

さて、飯を食ったはいいが今日は身体を動かすつもりは無い。チルノやおーちゃんは「どうでもいいから一緒に遊ぼう！」何て言ってるがオッサン無理。休日の親父スイッチ入ってる。いや、まだ学生だけどさ。しかし「遊べ遊べ！」とせがむ幼女の煩わしさときたら、俺の回復をも蝕む。どうせここにいたってコイツらが五月蠅いんだ。休む事なんて土台、無理な話。重い腰を上げ「しゃーない、近場でな」と言っただけで散歩する事にした。

「見て見て！ 氷像『あたい！』」

もはや芸術。腰に手を当て『二カッ』とした表情をしたチルノの氷像は、某雪祭り顔負け。素人のそれじゃない。

俺やおーちゃんにもでつかい氷塊をチルノは用意し「みんなで見せ合おう！」と提案したせいか、今現在俺とおーちゃんは地道に氷を削ぎ落としている。

おーちゃんは自身の拳で。チルノはその辺に合った石と、木の枝に氷を纏わせた鋭利な棒で、プロ顔負けの技術とスピードで仕上に取り掛かっている。

対して俺はと言うと能力を使い氷をふっ飛ばしていたのだが、如何せん、加減が上手く出来ず無駄に氷をふっ飛ばしてしまう。前はあまり気にしなかったのだが、この能力は非常に繊細なのだ。

「割と不器用なんだね」

「らんちったら変なの。あたいの方が数倍はいい出来ね」

「言ったな、てめえら。今から俺、本気出すからな。俺の本気とかすげえから。誰も対抗出来なかったから」

幼女の挑発に剥きになる俺自重。いや、譲れない思いつてのもある。……カッコ着けたかったただけだ。

馬鹿にされた以上こちらとしても黙っちゃいない。微調整に更に念を入れ、ミリ単位で扱えるように。いや、これは中々加減を覚えるいい訓練だ。

まあ、訓練。訓練だから。大切な事なので二回言いました。要は出来た作品が

「きやははは！らんちったら変なの！」

それはもう不細工な自作氷像『自分』が出来ました。チルノには馬鹿にされ、おーちゃんに至っては「人型？」と作品を根本から全否定する始末。よし、お前ら表出る。いや、外か。

納得いかねーと幼女二人に駄々をこねつつも、氷像を俺の洗顔場所でもある湖の湖畔に置き、チルノが何やら能力を発動。どうやら湖の水を原料に半永久的に氷像を溶かさずに済む仕掛けを施したらしい。この辺りとかは俺の知るチルノとは違うようだ。

しかし、これは思った以上に自身の黒歴史が一際映える。良作、^{チルノ}優良作、プギヤー（俺）とか、恥をこの辺に露出してごめんなさいって気分。穴が合ったら入りたい。いや、あるけど。

「さ、戻ろつ。剥きになりすぎて日が暮れ始めたしよ」

剥きになったのは俺だけだが、コイツらも満足はしただろう。なんだかんだ言ってどんなに知識があろうが、どんなに賢かろうが精神年齢はまだまだ幼いのだ。可愛いものさ。

おーちゃんは一応住居を確保してるらしいのでここでお別れ。ちなみに今度連れてって貰う予定。チルノにはそういった住居は無く、気が向いたらその辺で寝るといふ鬼以上にワイルドな生活振り。ここまで無防備でいられるのは能力は勿論、“妖精”と言った特異性が原因だろう。

妖精というのは本来脆弱な存在だ。鬼であるおーちゃんとチルノがガチで闘ったら、おーちゃんがチルノを圧倒する事となるだろう。そう、悪魔で“圧倒”である。止めはさせない。

確かに妖精は脆弱。だが自然が壊されない限り妖精は何度だって復活出来る。例え塵一つ残らず存在を抹消されたって、存在の源である自然さえあればそれが可能なのだ。

……って、チルノにおーちゃんとの交友関係について話を聞いた時に、そんな事を言ってた。

「今日も夕飯食ってくか？」

「うん、ランチの夕飯って割と美味しいのよね。不器用なくせに」

「よし、今日のオカズにあの苦い草追加な」

「そうね。健康で最強な身体は食べる事から始まるわ！」

お前は何処ぞの白兔かと。？<チルノは意気揚々として俺の前を歩いて行った。勿論迷う事無くだ。

どうしてこうなった。連日に引き続き、今日も安静にしよう、と言う思いを胸に秘め、昨日の氷像がある湖の畔で顔を洗いに行った

時だ。そこにはなんと

「あの、私の目に間違いが無ければ、あなた様は“鬼神”様ですよね？」

「ああそうだ」

鬼の筆頭局長（仮）鬼神様が部下っぽい鬼やら妖怪やらを引き連れてなんかいた。俺、顔洗おうとしただけなんだけど。

しかし改めて鬼の様子を見てみるとあれだ。本当に人外の回復力には驚かされる。目立った外傷が全く見当たらない。実際に俺自身も目立った外傷は無いのだが、身体の内部はそうはいかない（と思う）。痛みは無いがああの時の闘いを思い出すと……平気だとは思えない。もう少し様子見だ。で、鬼神様だけならまだしも、後ろの奴らは何なのかと。はつきり言っつてめっさ恐い。

「いや何、乱治よ。何も主を取って食うような真似はしない。だからそう気張るな。そもそんな事しよう物なら我らの存在意義が……いや、主に消されておるか」

「名前と能力はおーちゃん辺りからか。まあいいや。本題は？」

「協定だ。主個人と平和協定を結びたい。我の一存でもあり、ここにいる鬼、妖怪の総意でもある」

……え、何？ あの闘いだけで俺って妖怪や鬼やらに脅威認定されちゃったの？ とりあえず洗顔を始めて頭の中をすっきりさせる。そしてもう一度鬼神達の方に振り返る。

あ、何だかガチっぽい。もう目が笑ってないもの。鬼神以外の俺を見る目が何だか悪魔を見てるような目なの。いい、俺人間。Do you understand？

「俺に手を出すなら全力を以って応戦する。ただそれだけだ。後は簡単。お前らの気が向くままに行動すればいい。要は無差別に俺に暴れるなって言いたいんだろ？」

「まあそうだ。それを懸念していた訳だが、どうやら問題は無さそうだな」

「基本俺は妖怪の味方だが、俺の怒りに触れたら問答無用で殺すから」

良かった、自分の恐怖ぶっ飛ばしとして。顔洗ってる途中にぶっ飛ばしておかなかったら会話が成り立たなかったと思う。ちなみに基本妖怪の味方というのはチルノとの約束から。

鬼や妖怪もそれでよかったらしく、次々とこの場を去って行く。鬼神様が言うに「少なからずあの闘いを見ていた者は、主に手を出す事はない」とか。それだけかよ！と思わず叫びそうになったが、

闘い以前の草の根活動もあるしと、一応は自分を納得させる。鬼の大多数が自分を襲わないってだけでもかなりの好条件だもんな。全ての妖怪と鬼が去った後、最後に残ったのは鬼神とおーちゃん。加えてチルノだけだ。

「まだ何か？」

「いや、何我也闘いの後は消耗が激しくの。久方振りに呪い物を使つたのじゃ。良かったら主にも……と思ったのだが、いらん世話くれ」

何度も述べる通り俺も消耗している。能力のお陰でやせ我慢出来るだけなのだ。弱味を見せなかった俺、グツジョブって訳。

鬼神は「主が人間だと分かった」と何故かホツとしながら俺に呪い物（薬）を俺に手渡す。いや、散々人間だと隣のおーちゃんに説明しておいた筈なんだけどね。

それからはいつも通り。今回は鬼神も加えて朝食を摂り、しばらく居座った後鬼神は森の奥に帰って行った。帰り際に「また闘ろう」と言われたが「気が向いたら」とはぐらかして俺は見送った。

「さて、おーちゃん、チルノ。これから俺は本格的にここで生き抜くために、自身を鍛えようと思うわけだが、出来れば一緒に参加して欲しい」

「私は構わないよ。どうせ暇だし」

「あたいもらんちと一緒に修業する。真に強き者は、日々修練を己が身に課すのよ」

正直、この能力があれば、自分が元いた世界に帰れると思った。だが現実は一層厳しく、それだけは決して出来なかった。

故にここで生きてく覚悟は既に出来てる。永住上等だ。未練はない、と言ったら嘘になるけど。

ま、これから先、気長に行こうかなと、決意新たに修業Lifeが始まった。

積み重ねた日常（前書き）

通学中構想練って携帯にメモ。 暇な時間でPCに打ち込む。 ……ま、
暇つぶしですんで気楽に見てください。

積み重ねた日常

日々身体を痛め続けて早百年。人間の限界など数ヶ月で越え、人外の存在となるのにそれほど時間は掛からなかった。種族は一応人間だけだ。

ちなみに今なら素の身体能力でも鬼神と張れる。これはガチ。能力の恩恵を利用して鍛練を行った結果だ。とは言ってもその道は決して楽では無かったけど。

俺の『あらゆるものをふっ飛ばす程度の能力』と言うのは基本何だってふっ飛ばせる。例えばそれが何らかの“限界”だったとしても、それをふっ飛ばすの事なんて俺には造作も無い事。そこで俺は“肉体の限界”を完全にふっ飛ばして、鍛練を積みめば積む程屈強な体になる、と言う全てに置いての土台を作った。見かけの成長（身長やら体重やら）が止まると同時に、永遠に成長し続ける身体が誕生したのだ。

ちなみに見かけの成長が止まったのは永遠に俺が成長出来るための所為だと思う。これは憶測だが多分合ってる筈。

次に俺は“消化吸収の限界”を完全にふっ飛ばして、食った分だけ強くなると言う、某キメ〇アントの王を思わせるチートっぷりを発揮。凄いだろ、俺。人間なんだぜ、これで。

また、吸収に至っては何も栄養分に限った事では無い。闘いの技術やら、知識なども対象である。お陰でかなり記憶力も良くなった。ただこれは悪魔で体質を改善したに過ぎない。次に紹介するのは俺の鍛練方法だ。

ステップ1

『朝の正拳突』

言わずもがな。朝のご挨拶みたいなもの。流石に一万回は無理だが、毎日百回は全身全霊で放っている。一度湖が大変な事になるとひんしゅく顰蹙を買ったため、その時から宙に高く浮いてから放つ事になっている。

ステップ2

『ど突き合い』

朝飯を食べたらチルノとおーちゃんの二人を同時に相手している。ここでは能力を使うタイミングや、昨日吸収した技術の実用など、独自の戦闘技術の研鑽を兼ねて実戦訓練を行っている。なお、チルノやおーちゃんはバリバリ能力を使って来る。

おーちゃん的能力に関してだが『圧力を操る程度の能力』らしく、毎度毎度チルノと組んで、素晴らしいコンビプレイで俺をぺちゃんこにしようと躍起になっている。ま、軽くふっ飛ばしてるんだけど、俺にしるあいつらにしる得る物があるから問題は無い。

ステップ3

『ど突き合い（ハード）』

昼飯を食った後、次に待ってるのは鬼神との力比べ。これに関しては能力を戦闘時に使用せずに体術のみで闘っている。毎度毎度全力で闘っていたら身体以上に土地が持たないらしい（多くの鬼や妖怪談）。俺も鬼神も気持ちを含んだが、始めの内は素人丸出しの俺の実力に不機嫌だった。

この時の俺は何度もぶっ倒されては痛みにもがく、の繰り返しで非常に辛かった。鬼神は手加減せず全力だし、戦闘時に痛覚ふっ飛ばして無い状態で臨んだからね。思えば一番辛い鍛練だったと思う。しかし日々恐ろしいスピードで成長した俺は徐々に對抗出来るようになり、現在では鬼神と拮抗するまでの実力を身につけた。

ただ拮抗が始まったのはもう四十年前。その時は鬼神も「このままじゃいかん！」と強く思ったらしい。その思いが鬼神の成長促進したのか、俺達は六十年間抜いて抜かれてを繰り返している。ああ、持つべき者は良きライバルかな。

戦績は俺：一万飛んで二百三十一勝一万二千七百二十四敗

鬼神：一万二千七百二十四勝一万飛んで二百三十一敗

ステップ4

『靈力の扱い』

人間が扱う気と言うのは大底は生まれながらに持ち得てる靈力（修業次第で大幅アップ）なのだが、長い事森暮らしが続いたためか、俺は妖力しか持ち得てなかったのだ。試しに妖力を靈力に変換しよ

うとしてみたが、流石にそれは無理らしい。ただその逆、つまり靈力を妖力に変換というのは出来るっぽい。現に試したらそれは出来た。

その辺りの理由は分からないが出来る物は出来る。だから俺は靈力を増やし且つ操る術を独学で手にした。ちなみに靈力を増やすには今は瞑想ぐらいしかない。他にもそう言った類の食べ物を食べる、と言う方法があると思われるが、何を食えばいいか分からない。故に今は瞑想のみ。（実は正拳突も効果があった）

操る事に関してはどうって事はない。何よりもイメージが一番大切だ。術式とかは知らん。後世の奴ら、ガンガレ。

SPイベント

『ど突き合い（ルナ）』

年に一度鬼神とガチでやり合うイベントの事。能力もフルで活用するため、闘い後は毎度毎度悲惨な事になっている。

その所為なのか、どうせ暴れるなら俺達も、という事で他の妖怪やら鬼やらもこの日ばかりは全力で暴れ回る。もちろん、そんな事で里の人間を襲ったら俺が肅清すると伝えてあるので、人に被害は全く無いが、例の森の最奥の広場は、年々拡張傾向にある。

なお、このイベント。一応祭みたいなもので非殺生が原則だ。妖怪や鬼もそこは納得している。死者なんか出たら興が削がれる事間違い無いしね。

ちなみに戦績は俺の全勝。

色々とはしょってる部分もあるが大方はこんな感じ。瞑想なんかは夕飯を調達した後に日が沈むまで大体一時間くらいはやる。

毎日の鬼神とのど突き合いが三時間くらいで、瞑想の後に夕飯を食べるから……寝るのは十一時位だろうか。そして朝六時位に起床。珠に休みを入れ、チルノやおーちゃんらと遊んだり。こうやって俺は百年を過ごして来た。

そんなこんなで今日は久々に人里に来ている。勿論一人でだ。久々、というのもおよそ百年振りかと思われる。これはあれだ。年齢のつじつま合わせの所為だ。三十年経つても全然老けない姿を見せたら……ねえ。絶対に怪しまれる。

ちなみに俺の服装は極めて簡素な物。黒のじんべえ。以上。

いや、確かに今の時代を考えると遥かに最先端を先取りした服装だけど、そんな事言ったらチルノは例のエプロンドレスだし、おーちゃんは白のワンピースだから完全に時代を逸脱している。てーわけで俺のじんべえもOK、通る通る。

「あー、相変わらずの豎穴」

人里はそこそこ広い。加えてある程度階級制が存在する。その証拠にそれなりに頑丈そうな造りの家もちらほら。百年前と比べて家屋の数も数倍に増えている。

これは多少技術の進歩もあつたかな。そんな期待を胸に秘め例の果実をせっせと持ち歩く。

簡素な門前で里の守衛らしき者と俺は交渉。多少怪しい目で見られた物の、そこは百年の経験で培った話術でカバー。最終的にはお互いに笑みが漏れる位に打ち解け、俺は楽々里内に入る事が出来た。

色々と里の権力者と話し合った結果、例の果実は村にある酒と醤油と交換してくれる事になった。俺の読み通りこの果実は里の人間には取りに行きづらく、中々貴重な物らしい。

それなりの量の酒と醤油を俺は手に入れる事が出来たが、ただ一

つ、言わせて欲しい事がある。

「稲作始めろよ」

ジャパニーズ大和魂“米”。未だに作られてないとか渡来人、何やってんの！

昔学んだ歴史はやはり参考程度にしかないとかさ、俺って必死こいて勉強してたんだぜ。軽く凹む。

出来れば酒、醤油の伝来ルートは教えて貰いたかったのだが、それを知ったら歴史を勉強していたあの頃が全力で意味ない物となってしまうと思ったので、聞く事は止めた。

「妖怪だ！ 妖怪が来たぞー！」

「ったく、どこのどいつだよ一体」

先程の守衛を捕まえその妖怪が何処にいるのか教えて貰う。始めは心配されたが「森の中で生きて来たんだ。奴らのあしらい方ぐらい分かる」と言ったら渋りながらも教えてくれた。

予想からすると俺が住んでる辺りの妖怪では無い。奴らに見れば、ここの人里に手を出す。俺に目を付けられるだからだ。

目を付けるだけだぜ？ 一応襲ったって構わないって言ってるの

に。そもそも俺はこの世界の人間では無い。妖怪達のライフスタイルに口を出すつもり何て毛頭無いのだ。

冷たいと思われるかもしれないが、俺が来るまでは人間も妖怪そうやって暮らしていたのだ。そういった元ある関係を俺は尊重する。

……ま、心の奥底では襲わないに越した事は無いと思っているかもしれないけど。

ただしそれ以外の妖怪だとしたら話は別だ。ここは俺の住まい周辺にいる妖怪の縄張りだ……と思われる。いや、俺の目が光っちゃってるから大々的には言い切れないのかなと思うんだよね。

……一応今回は見逃して貰うか。よし、行ってみようかな。

里の門前にそいつはいた。黒い羽根に高い下駄。赤い面に長い鼻……のお面をデコに引っ掛けたおーちゃんサイズの幼女。

確かに天狗は妖怪っちゃん妖怪だけだよ、幼女見て「げえええ！妖怪！」って。まあそれだけ侮れないんだよな。人間ってのは弱いですから。

さて、とりあえず門前じゃあ話辛いから「里から離れた所で話そう」と言っつて酒を渡す。天狗幼女もそれに同意してくれたので、自分の住まいでそいつをもてなす事にした。

「して人間。天狗である我に何用じゃ？ 下らん用じゃったら消すぞ」

「うーん、あんた天狗だろ？ あの人里にちょっかいを出すのは止めといた方がいいぞ？」

酒を注ぎながら天狗幼女に話を進める。「何？」と幼女に似つかわしい表情をさせた点では興味を引けたと確信。

俺はこのまま話の中に鬼の事を説明する。曰くその力一騎当千。曰くその妖力妖怪の数十倍。曰くその気概大胆にして不敵。

他にも多少の誇張は入ったが、俺が見た鬼の様相を丁寧に天狗幼女に説明はした。説明はしたのだが返ってきた答えは予想通りの返答。

「恐るるに足らん。我等は天狗ぞ。気に食わぬ事があるなら弁など立たせず掛かつて来いと伝えよ。これは我等天狗の総意ぞ。運が良いで、人間。貴様を消せぬ理由が出来た」

完璧な敵対ですね、分かります。……しょうがない、うん、しょうがない。これは俺のせいじゃない。いずれはこうなったと思うから。

少なからず敵対の意を表す応えが返ってくるのは分かった。最もここまではつきり、下手したら荒事になるんじゃないかと思われる位の応えは予想してなかったが。

それからと言うと、天狗幼女は特に俺に敵意を向ける事なく酒を飲む飲む。鬼も人里襲って酒をよく飲むが、この天狗も負けず劣らずに飲む。

とりあえず鬼との間の関係だから、人間の俺に文句を言ってもしょうがないと判断したらしく、すぐにもてなされる側に切り替えたいらしい。当たり障り無い事を話し、酒が無くなつた時に天狗は俺の住まいを去った。

「機会が会つたらまた誘え。ここが貴様の住まいなら、鬼の縄張りであろうと咎められる言われは無いからな。誘いならしょうがないだろ？」

去り際にそんな事を吐かして言った天狗の背中を眺めつつ、夕飯の献立を俺は考え出した。

「で、昨日は天狗がここに来たわけだ」

「来たんじゃない、もてなしたただけだ」

ど突き合いをしながら昨日あったことをおーちゃんらに話す。途中チルノが「天狗殺しの妖精とか箔が付くわね」何て物騒な事を呟いてたから、天狗アツパーと称したただのアツパーを打ち込みノックアウトさせといた。

にしても最近おーちゃんは外見的に成長した。百年前は少女だったのに、今はというと俺と同じ位の身長だし。少しはチルノに分けてやれよ。

強さ的にはチルノもおーちゃんも物凄く強くなった。先にチルノが“天狗殺しの妖精”と言ってたが、百年間の鍛練で中・下手したら上クラスの鬼をも圧倒する古参の鬼クラスの実力が着いたため、既に“鬼殺しの妖精”と見事に順序を間違えた称号を手になっている。おーちゃんの方も僅か百年の鍛練で鬼神に次ぐ、四天王の称号を手にしたらしい。四天王の中では一番の小童らしいが、それでも鬼の中では異例の若さで四天王入りを果たした超ド級の存在として認知されてるとか。

やり過ぎたとは思ってない。と言うよりコイツらの器が量り知れないのだ。僅か百年で大妖怪に昇華とか、鬼神に言わせれば俺と同じ位に規格外なんだと。

残ったおーちゃんの全方位圧力攻撃をふっ飛ばし、存在をふっ飛ばしておいた（不可視状態）の妖力弾をおーちゃんに浴びせてど突き合い終了。両者が気絶^{のび}てる間に今朝捕れた魚を焼き始めた。

「ほれ、いつまでも気絶でないでさっさと来い。時間は待ってくれないんだから」

ゆっくり立ち上がりふらふらと歩いて来る二人？に例の果実を前菜代わりに投げ付ける。掴んで口に入れる元気があるって事は今日は少し甘かったかな。

百年間こうやって疲労の度合いを調べているのだが、コイツらときたら全然気付き心配が無い。少しは懐疑心を持って欲しいものだ。たき火の周りを囲み込むように座り、魚が焼き上がるのをひたすら待つ。ちなみにこの程度の火力はチルノにとって屁でもないらしい。

「なんか暇ねー。おーちゃん、なんか変わった事無い？」

「ああ、そうそう。乱治に話そうと思ったんだけど、鬼神様と私以外の四天王は今森に居ないから。何でも『乱治より強い存在を捜しに行く』とか言ってる私に森の統治押し付けてどっか行っちゃったんだ。乱治には悪いけど鬼神様とのど突き合いは当分中止してくれと」

「あたいには？」

「ない」

そっか、じゃあこれから午後はフリーか。まあ瞑想でもしてますかね。

この時俺はまだ気付いていなかった。強力な存在が森を去った時に及ぼす影響を。

迷いの竹林と天狗（前書き）

今回は面倒なので携帯から

迷いの竹林と天狗

鬼神らが去ってから暫く経った頃。穏やかだった森が酷くざわついた感じがするようになってきたのは。事実上の鬼のトップ（代理）のおーちゃんに理由を聞いても「乱治には悪いが今回は関わって欲しくない」と言ってはぐらかされ、チルノや他の鬼に聞いても気持ち汲んでやってくれ、と言って断られる。

正直目通しは着いてるよ。大方別の地域の妖怪の侵略だろう。この前俺を襲って来た妖怪を見て確信した。

鬼神の存在が消えるだけでこの始末。まあ四天王も三人一気に抜けてるつてもかなり痛手だな。俺もここまで露骨に影響が出るとは思はなんだ。荒事がいつ始まっても可笑しくない。と言うか

（鬼神と四天王三人は絶対にこの事態を想定してただろうな）

でなきゃここを出る道理がない。まさか俺より強い存在を本気で探すとは思えない。理由？ 簡単さ、俺すら倒せないのに三段跳びするほど奴らは馬鹿じゃ無いって事。

となると理由は一つだ。ずばり、おーちゃんを試しているのだろう。鬼神らと比べると、頗るおーちゃんは若いし、奴らなりに心配なのだろう。

全く。だったら四天王にするなつての。もつと違う奴選べよな。ん、俺？ 保険だよ、保険。俺がいるから鬼神らは安心して去ったんだよ。

何時かの間に建設した俺の住まいである木造の小屋の中で、木彫

りの人形を製作しながら愚痴を零していた。

木彫りを始めたのは鍛練を始めてから五十年位経った時。チルノと氷像を作って遊ぶ度に不器用だと馬鹿にされ続けたので、見返してやろうと思ったから。独学だが五十年もやってれば嫌でも上手くなる。チルノから貰った永久に溶けない氷で出来た小刀でせつせと削り続ければ……ほら出来た。チルノの木像。よし、また腕を上げたぜ。

ちなみにこの木像、人里の連中が中々良い物と交換してくれるため、例の果実と共に重宝している。

「つーか木彫りするようになってから霊力が飛躍的に伸びた気がするし」

木彫りと霊力にどんな因果関係があるか知らないが、五十年の間に相当な霊力が増えてしまったのだ。

また、木像の主役のチルノはチルノで、「あたいの知名度アップね！」なんて妖精狩りに来た妖怪を意気揚々と返り討ちにしたもんだから、それを偶然目撃した人間に「木像の氷精が里を守ってくれてるんだ！」と何を勘違されたのか、いつの間にか里の守護者として祭り上げられてしまった。

「最近、妙に力が沸いて来るのよね」と言ってるが、多分それは木像を通して信仰がチルノに流れているんだと思う。

それでもチルノは神では無い。妖精だ。いくら信仰されたからと言って本人にその自覚が全く無かったとしたら、その集まった信仰は神力に昇華せずに、妖力や霊力に変化してしまうのだ。これはチルノや木像チルノを検証した結果分かりました。

「らーんちー！」

「お、チルノ。どうしたよ？」

「人里から見てもこの森の反対側にでっかい竹林があるんだって！
ねえ、行ってみない？」

え、何。ここで迷いの竹林！ まだまだ“永遠亭”とか絶対無い
と思うんだけど、行ってみるかな。

「ちよつと待って」とチルノを待たせ、例の果実やら木像やらを
たっぷり用意する。大量に食糧を調達しておきたいし。

あっち行ったら何しよ。とりあえず竹の子食いたいし竹の子でも
掘ってみるかな。兎もいたら見ておこう。

「おーちゃんは？」

「今はあんまり森を離れられないんだって」

ま、竹の子ぐらいお土産として持ってってやろっ。

村から見ても霧の湖の真反対に迷いの竹林は位置する。いつの間にかこんな竹林ができていたのか？ 竹というのは成長が早いって言われてるけど、これは無いわ。

まだ人里にはまだ竹を食べると言う風習はまだ無いため、この世界に来てまだ一度も竹の子は食べたことが無い。だから今日は美味しくいただきます。

……知ってます。世の中そう上手く行かない事くらい。百年生き

てりや嫌でも分かります。

「何しに来た。人間に氷精？」

天狗です。本当にありがとうございます。流石にこの前みたいに幼女では無いが、男だと幼女の四倍位強く見える。

穏便に済ませよう。幸い力で抑えようと思っている程愚かでは無い見たいだし。

チルノにも俺の考えが伝わった見たいで、大人しくしてくれている。とりあえずここに来た要旨を伝える事にした。

「へい、ここいらに何でも食べられる竹があると旅の者から聞きまして、事実かどうか確かめに来やした。こちらの氷精様は里の守衛の妖精で、オラの道中に着いて来て下さるとの事でここに居られやす」

「天狗殿。何卒立ち入りの許可を戴けないでしょうか？ 人間達が妖怪は疎か、飢えて死んでしまうのはあまりにも不憫で」

ナイス、チルノ！ 完璧過ぎる。これ将に、阿吽の呼吸。

考えに考え込んだ天狗であったが、暫くすると「着いて参れ」と俺達に立ち入りを促してくれた。

「して人間。その食べられる竹というのは何処にあるのだ？」

「へい、おそらくはこの辺に……」

竹林の地面を漁っていると……ほーらあった。尖んがった小さい山が地面からちょこんと生えている。

チルノに予め用意させた氷精の小さいスコップで、竹の子の周り

に溝を作るように掘り、ある程度掘ったら上手く抜く。この時竹が上部の方で折れないように力加減には気をつける。

『ヌキツ!』という何とも例え様の無い音を発して見事に竹の子を一本掘り出せた。

だがまだ一本。他にも竹の子を見つけては掘って抜き、見つけては掘って抜きの繰り返し。その過程をチルノと天狗は興味津々な様子で見ていた。

「そう言えば氷精。そっちの森には本当に鬼神は不在なのか？」

「そうですね。確かに最近は姿を見ませんし、大きな気配も無くなりはしましたが、如何んせん、何処かに潜んでいるようにも見えるのですよ」

「と言うと？」

「炙り出してる、と言うのですか？ まるで誘い込んでるかのよう。現に森の至る所に強烈な妖力の残り香を感じるんですよ」

俺がせつせと竹の子を掘っている間に始まった情報交換。というかチルノが智ルノモードに入ってる。

もし、ここで下手に「鬼神？ 当分帰って来ないよ」的な事を言ったら明日にでも天狗は攻撃を仕掛けて来る。

だがそこは智ルノクオリティー。上手く鬼神はまだいるんじや的な雰囲気为天狗に伝え、カモフラージュ。竹の子掘りながら智ルノの成した偉業に心の中で拍手した。

「天狗殿の方はどうなのですか？ 何でも天魔様は勿論、大天狗様もその実力に磨きが懸かっているとか？」

「ああ、最近は特に大天狗様も力が入ってるようだったな。ただ懸念すべきは天魔様の娘様だな。気に入らん事があると直ぐに暴れ出すのだ。お主も気をつけろよ」

智ルノはあろう事か、相手からも情報を聞き出す。これがあのと言われたチルノ？ 俺には歴戦の智将にしか見えません。

俺？ もくもくと籠の中に竹の子を詰め込んでますが？
それでも大分竹の子が溜まったのでそろそろここも潮時かな。この天狗にはお礼に竹の子の調理方法を伝え、ついでに竹トンボを作ってそれもプレゼントした。

「ほほう、よく出来てるな」

「へい、手先が器用なもので」

「では天狗殿。あたい達はこれで」

竹林の出口まで天狗に先導してもらい、チルノと俺はその場を後

にした。

竹林の天狗を見て感じた事は、持っている妖力が普通の妖怪よりも一層大きい。流石に鬼には劣ると思うが、大天狗クラスになるとどうなるか分からない。

それに天狗は鬼に比べると絶対数が多い。それに加えてきちんと統制が取れているのだ。脅威認定したって問題無い。

鬼？ あいつらは自由気ままに生きてるよ。あそこじゃあ清々しい位に強さが全てだから。事実上のトップはおーちゃんだが、古参の鬼連中の中には老獪な者や元四天王だっているから侮れない。ちなみにチルノもこのクラスの強さ。妖精なのにな。

「入口付近にあの天狗がいたらこれからも入らせてくれるってよ」

「やったじゃない。行動範囲が広がったわね」

チルノと談笑をしながら人里に向かって歩いている時だ。空から物凄い勢いで何かが降って来た。

「うおっ！」

「おーう、人間。黒いじんべえ着てる奴なんてお前しかないからな。見掛けたもんだから来た」

例の天狗幼女。名前は知らん。大の酒好きで近頃はよく俺ん家に出入りをする数少ない知り合いだ。

尤もあつち俺の事をパシリ程度にしか思っていないと思うが、まあ別に構わない。強者の余裕ってやつかな？

さーせん。ウソです。ぶつちやけ幼女に対する背徳心から強い文句が言えないだけです。いや、男としては間違っていないと思うよ。多分だけど。

隣のチルノは一瞬不審気な表情をしたが、直ぐに智ルノモードに切り替え対応。天狗幼女もそれに応じた。

「あたいは氷精チルノ。あなた様の名前を差し支え無ければお聞かせ下さい」

「んー？ 我は邪々丸^{じょうじょうまる}。まだまだ幼名だが、一人前だと認められた時に違う名が付けられる。してお前ら。一体我らの竹林に何しに来ておった？」

今までの事を俺は天狗幼女こと邪々丸に説明。途中若干だが表情を険しくしたが、それ以外は特に黙って話を聞く。

説明し終えて早々に竹トンボをせがまれたので、その場で作りプレゼント。やはり精神年齢はまだまだ子供。ちよろいちよろい。

その後は特に何の問題も無く邪々丸をやり過ごす。だが、さあ戻ろうとした時だ。

「そうだ人間。三日後辺りは流石に森から避難しておいた方が良さぞ。何でもその日は鬼神を筆頭に鬼共が森で大暴れするらしいからの」

あ、そうか。そろそろ『ど突き合い（ルナ）』のイベントか……ってちよつと待て。なんでこいつがその日の事を知っている？少なくともあれはあの辺の鬼や妖怪限定の行事の筈だ。天狗などの竹林の妖怪はそんな事知っている訳が無い。

一応俺は“動揺”をふつ飛ばし平静を装うが、やはりどこかに隙があったのだろう。チルノの動揺をふつ飛ばすのを忘れてしまったのだ。

隣ではチルノが啞然とした表情をしており、邪々丸が豪快に笑っている。

……何と無く、邪々丸がそれを言ったのか分かってきた。そうか、その日か。その日何だな？

「邪々丸様……いや、天狗。“その日”なの？」

「ああそうだ、氷精チルノよ。既に“四天王”が一人には伝えるように言っているからな。お前も声を掛けとくんだな」

そう言い残して邪々丸は空に羽ばたいて行った。俺らも急いでおーちゃんの元に駆け付けける事にした。

森の奥深くにおーちゃんてんまつの寢床がある。そのおーちゃんてんまつの寢床で俺とチルノはこの顛末てんまつを聞き出している。で、話を纏めるところ。

『例の森の最奥部にて竹林組と森組のケンカ祭勃発のお知らせ』

理由。天狗の宣戦布告（縄張り拡張）。数は知らんと。

天狗と鬼の大乱闘（前書き）

長い。長かった。本当に長かった（遅筆的な意味で）。今回も独自設定という名の作者妄想が爆発しています。免疫のある方のみご覧ください。ダメだと思った方は即バツクを推奨します。

なおチルノに関してですが正直「ここまで強かったらもう妖怪じやね？」と思われる方もおられると思いますが、何卒、妖精と括っていただいて欲しいのです。括れない！という方は申し訳ありませんが、やはりバツクを推奨します。

天狗と鬼の大乱闘

三日後。年一回の強制ケンカ祭。『ど突き合い（ルナ）』開幕の日。太陽が見え始めた時から参加希望の妖怪は森の最奥部に集まるのだが今日は違う。森の妖怪全てが参加対象だ。

主戦場となる場所は二つ。森の最奥部の広場と、霧の湖周辺の森。森組にとっておそらく迎撃戦となるだろう。ちなみに例の氷像は俺が回収しといた。

森の最奥部広場では四天王の席におーちゃんが座って待っている。その後ろが鬼神専用の桐株。

霧の湖のと真ん中ではチルノが腕を組んで四方を見回している。俺はと言うとマイホームの存在をふっ飛ばしセコムしておいて、自身の存在も能力使って隠蔽。現在は天狗の飛行高さよりちょい高い所を飛行して、おーちゃんとチルノの様子を確認中。

「おうおうおう。大層な数揃えて来てんじゃねーか」

森の反対側に見える空を飛ぶ存在。言わずもがな天狗の集団だ。先頭を飛ぶのはあの中で最も強い妖力を持つ天狗の首領、天魔。鬼神より一回り小さいが、纏っている妖力は鬼神に匹敵する程。成る程、ありや強い雄だ。

その後ろを三体（羽）？の真っ赤な顔をした体格のいい天狗が堂々と飛んでいる。多分大天狗辺りだろう。持つてる妖力は中々のものだ。

だが何よりも俺の目を引いたのは天魔の横を飛行している小さな

天狗の存在。

「父様、母様は？」

「今日の勝利の祝いに豪勢な晩飯を準備して待ってるそうだ」

なんか非道く所帯じみた会話がなされている……じゃなくて、あの天魔の隣を飛行している天狗。あれは邪々丸だ。

ってことはだ。あいつ、天魔の娘だったのか！ いや、まあ何と無く納得は出来る。あいつは物凄く自分勝手に我が儘っぽいし。竹林案内をした天狗だってそんな事言ってた。

と、天狗達がどうやら二手に別れたっぽい。天魔率いる大天狗等の大多数の天狗が森の最奥部に向かって。邪々丸が多くの妖怪を率いて霧の湖の方へ。

「成る程ね。鬼と天狗は種族同士で決着を着ける訳だ」

ちなみに俺はおーちゃん率いる森組の味方だが介入するつもりは無い。今回はおーちゃんの力量を量るためでもあるからだ。ま、本当にやばそうだったら介入するつもりだけど。

というか霧の湖に邪々丸を向けたという事は……チルノ、“天狗殺し”の称号手に入れるチャンスだぜ。相手はかなり厳しいけど。

S
I
D
E

おー
ちゃん

凄い。ここにいる鬼の三倍の天狗がここに来た。数もさることながら、一人一人の力量も高い高い。中でもあの乱治に似た体格の天狗。下手したら鬼神様の妖力に匹敵しかねない。

……あれと闘うのは私か。鬼と言うのは常に強者を渴望しているとおっしゃっていたが、私とて例外では無かつたらしい。血が滾る^{たぎ}。

周りの連中を見回すと、そいつらも同様に身体をうずうずさせている。特に古参の者なんか「久々に暴れるかの」何ておっしゃっている。頼もしい限りだ。

チルノの方は大丈夫だろう。前々から“天狗殺し”の称号を欲しがっていたのだ。張り切って闘ってくれるだろう。乱治は……悪いが今回は黙っていて貰いたいな。

睨み合う天狗と鬼。私は天魔を。天魔は私を。互に見つめ合う事数分。一人の鬼が痺れを切らし天狗に突っ込む。それを皮切りに鬼達は動き出す。天狗も合わせて突っ込んで来る。

そんな中、いまだに私は座って天魔を睨み続ける。天魔もそれ同様に。天魔の後ろには三体の大天狗が控えている。対する私の方には誰も「ふむ、あの三匹はやりおるの」……え？

思わず後ろを振り向くと三名の古参の鬼が控えていた。その中の一名はつい最近、私に四天王の席を譲ってくれた者。他の二名もかつて四天王の名を冠していた者だ。

「……一体何故？」

「強者を呼び寄せる餌になって貰いました故。ほくら、来ましたぞ！」

こっちに突っ込んで来る三体の大天狗。成る程、私の後ろにこの方達がいたから奴らは下手に襲って来なかったのか。後ろを向く何てしたもんだから隙を付いて襲い掛かって来たが、三名の鬼が大天狗をそれぞれ牽制。あっという間に姿が見えなくなる。

ふう。私もまだまだ甘いな。

ゆっくりとその場から立ち上がり、顔を上げて天魔を見つめる。現在私は鬼の頭。惨めな姿は同胞に見せられない。腕を回してほぐし、首を左右に振ってリラックス。次の瞬間、私は天魔に踏み込んだ。

S I D E チルノ

湖のと真ん中に佇みつつ、その周りをうろうろしている竹林組の妖怪に氷の氷柱をぶん投げる。相手は「何が起こったのか？」と言った表情で湖を見つめるが、残念ながら霧で何も見えていないよう。この霧は非常に冷えてる。並の妖怪が湖を渡るうとするとなたいの元に来る前に先ず凍ってしまうだろう。

でももし、並の妖怪じゃ無かったら？

空高くから物凄く強い妖力を感じる。この量は百年間修業をしたあたひよりも多ければ、よく戦ってくれる古参の鬼よりも多い。

成る程。これが天狗ね。相手にとって不足は無いわ。

空から湖全体に物凄く濃厚な妖力の波が襲って来る。あたひは自分の周りにのみそれを強く纏って上に目を向ける。

いた。腕を組み、仁王立ちをした姿で空から悠然と降りてくる天狗、邪々丸。そう、つい最近あたひが出会った天狗だ。

「よう氷精。また会ったな」

「ええ、偶然ね」

「この辺で氷柱ぶん投げて悪戯を働いてる奴がいるって聞いたが、そりやお前か？」

「まあね。あんたが頭数ばっか揃えたもんだからのが無くならなくて助かったわ」

「そうかい。でも残念。お痛が過ぎた、ぜ！」

話し終わると同時に仕掛けて来た天狗の右拳をあたいは受け止め…… ようとしたが流石は天狗。右拳は牽制で本命は水面蹴り。それを湖の上に浮きながら仕掛けるものだから驚きだ。

だが甘い。あたいはこの百年で驚異的な進歩をしたんだ。その進歩の一旦を担った人間があたいに教えてくれた体術の一つ、“そばつと”を“かうんたー” 気味に相手の左側頭部に叩き込んだ。

S I D E 乱治

始まったな。あちこちでほこすかほこすかと、何ともまあご苦労なこった。とりあえず俺は今回の“ど突き合い”を見届けなきゃいけない。だから上空から観戦しているのだが、どうも迫力に欠ける。やっぱり地上で見よう。ゆっくりと地面に降り、いつも歩き慣れた森を見回すと、おお。やったら迫力があるな。

主な戦場となってるのは森の最奥部の広場と霧の湖周辺の森。規模で言うと霧の湖周辺の森が圧倒的にでかい。なんせ竹林と森の妖怪が集結しているわけだから必然的にそうなる。

しかし、森の最奥部の方は非常に見応えがあると思う。だって闘っているのが天狗と鬼だから。そんじょそこいらの妖怪が闘っているのとは訳が違うのだ。

だが今俺が足を向けているのは霧の湖。おそらくあそこではチルノと邪々丸が闘っていると思うから。と言うのも妖力が抜きん出て高い二人の事だ。必然的に引き寄せられてる筈だ。

「つーか湖に近付くに連れて大きな妖力を感じるし」

もしチルノが一般的な天狗と闘っていたら十中八九、チルノが勝利を収めていただろう。それで見事“天狗殺し”の称号を手に入れていたのだろうが、今回はかなりハードルが高い。

天魔の娘、邪々丸。幼女に似つかわしい口調に、常人……いや、常天狗離れた天魔譲りの妖力。あればっかりは才能だろう。百年間、鍛えに鍛えたチルノすらも上回る。まあ比較の対象つてのがチルノってのも変な気分だが。

ま、俺予想だとチルノが勝つと思うけど。もちろん、妖精の特権を使わずに自身の力量で。つまりだ

「邪々丸。百年の鍛練、見誤るなよ」

S
I
D
E

チ
ル
ノ

湖の上でこの天狗と闘ってどのくらい時間が経っただろうか。闘いの中でこの天狗の能力が“炎を操る程度の能力”だと分かった時は、自分との相性が悪すぎてかなり落ち込んだ。

妖力の大きさも天狗に劣り、さて、どう闘おうかと思ったたら天狗があたいに話し掛けてきた。

「おう、氷精。悪いがさつさと諦めてくれないか？ 我はさつさと父様の勇姿を見に行きたいのだ。尤も、既に終わってるかもしれないが」

「降参……あたいが？ あはは！ やっぱりあんた馬鹿ね」

「強がるな氷精。貴様と我の差には埋められない種族の差が存在する。始めの体術こそ驚いたがそれだけだ。能力も妖力も我に有利。勝機が貴様に見えたか？」

呆れた。あの闘いの中で天狗はそんな事を思ってたらしい。まあ如何にもその名の通り『天狗になっている』ようだ。

ホント、あたかも舐められたもんね。

天狗への返しにあたいは氷柱を投げ付ける。それをもちろん、翳した右手から炎を放出して天狗は溶かしてしまうわけだが。

「……それが貴様の返答か？」

「一つ聞かせて。あなたは闘争のために自身を鍛えた事がある？」

「鍛える？ 何故？ 気に食わない事があつたら“生まれ持った力で相手を屈服させるだけだろう？”

「そう、それがあなたの答えね。だったら話しが早いわ。あんたに“敗北”プレゼントしてあげるわ」

「抜かせ！ 格の差を見せ付けてくれる！」

この天狗は自分より強い存在を知らな過ぎる。誰よりも自分は強いと思ひ込んでいるのだ。まあ思ひ込むのは勝手だが、気に食わない。

“最も強い”と書いて“さいきよー”と読む。この天狗、言っている事は妖怪として相応しいが、“さいきよー”の名を冠するには些か役不足。少なくとも目の前の天狗より強い存在をあたいは知っているから。

そうこうしている内に、炎を体全体に纏い天狗はあたいに突っ込んで来る。その姿はまさに不死鳥の如く。

流石にあの熱量を浴びたら一たまりも無いわね。空は天狗の独壇場になりそうだし、さーて、どうしたものか。……いなして見ますか。

あたいも体にもありったけの冷気を纏わせる。あの熱量に限りなく接近するのだ。冷気は無いよりはあつた方が多少はマシになるだろう。“焼け石に水” だと思うが。

揺らめく炎を身に纏い、天狗も真つ青なスピードあたいに近付いて来る。次第に周りが熱くなってくるが、あたいの心内にまでその熱は届かない。びーくーる。びーくーる。感覚を研ぎ澄まし、その

炎があたいに触れる瞬間だ。天狗が突っ込んで来る以上のスピードであたいは身体を回転させて逸らす。刹那、あたいの背にいる天狗に思考する暇すら与えずに、回転の勢いを付けた“ばつくぶろー”（乱治命名）を、天狗の後頭部にぶつける。

手応えあり。水しぶきを上げて天狗は前のめりに湖の上を滑り、場外に弾き出される。もう立ってこないでね。一方あたいはと言うと。

右拳が完全に大火傷。治るまでに時間が掛かりそうね。他にも多々被弾したから全体的にボロボロ。尤も右拳以上の傷は見当たらないけど。まとめると

「やっぱり熱いのは嫌いね」

「そうかい。だったら次は特上の熱さをプレゼントだ」

殴られた後頭部を抑えながらふらふらと立ち上がるのは天狗。全く頑丈さまで天狗つてのは持ち合わせてるわけ？

立ち上がる際に天狗は先程と同じ位の炎を……いや、それ以上の炎を身体に纏わせる。げに恐ろしきは天狗の底力ね。

あたいはと言うと小さな体は満身創痍。加えて右拳は使用不能。更に先程のいなし見たいな奇襲はもう通用しそうにない。さーて、八方詰まり見たいね。

……でも手が無いって事は無い。ま、相打ちは必須だけどね。ただでやられる程あたいは甘くない。やられる時は“道連れ”がもつとーなのだ。

右半身を前に突き出し天狗の特攻に備える。どうせ右手は使えな

いのだ。今更何貰つても一緒だ。

相も変わらず物凄い速さで突っ込んで来る天狗。確かに速い。あたいが今まで見た特攻の中でも鬼神や乱治のそれに匹敵するくらいに。だけでも足りない。そう、磨きが。だからあたいには見えてしまふ。何の捻りも無い真っ直ぐな特攻など。

天狗がその速さを殺さずにあたいたい目掛けて鋭い右拳を放つ。この時あたいには天狗のほくそ笑む顔が確かに見えた。

一閃。確か乱治は“くろすかうんたー”と言つてたっけ。天狗には果たしてあたいの左拳が見えていただろうか？ 辺りに響く轟音と共に天狗は沈む。

最後の力を振り絞り天狗を湖の外に運び出し、あたいは勝鬨を上げた。

「あたい、さいきょー！」

間もなく意識が途切れた。

S I D E 乱治

「あたい、さいきょー！」

見事な闘いだった。特に最後の左クロスは絶妙だった。ゆうかりんも真つ青な威力だったと思う。俺は気を失ってるチルノの元へ駆け寄り様子を伺う。案の定右手左手と深い火傷を負っていた。まあ気になる怪我はそれだけ。全体的にボロボロだったがそれは時間が何とかするだろう。

一方邪々丸はと言うと、うわ。チルノに殴られた頬が女の子らしからぬ腫れ方を。……まあこちら時間も解決してくれるだろう。

様子を確認した後二人を両の脇に抱え俺は次の目的地に向かう。
その場所はもちろん例の広場だ。

S I D E おーちゃん

驚くべき速さで先程から攻撃が飛んでくる。流石は天狗の頂点とでも言っておこう。ただ私にも鬼の四天王としての誇りがある。だから私は相手の攻撃に真っ向から応じる。受けに回ったらじり貧は目に見えているのだ。守りなんてこいつ相手じゃ無意味。

攻撃は最大の防御と乱治は言っていた。今がまさにその時だろう。私も更に速さの段階を上げる。

「まだまだまだ！」

徐々に速さを上げていくも当たらない。天魔はと言うと私のそれを更に上回る速さで攻撃を仕掛けてくる。

まずっ！ 気が付くと天魔が私の懷に膝を叩き込んでいた。

思わず一瞬、動きを止めてしまったが天魔はそれを見逃さず、こぞとばかりに雨のような連打を浴びせてくる。一撃一撃が必殺となるそれを浴び思わず意識が飛びかけるも、湖で奮闘してるであろうチルノを思い出し踏ん張る。

そう、私は鬼神様や先人の四天王に森を任されているのだ。こんな事で醜態を見せたらきつと私を一人前として見てくれない。

次の攻撃を浴びつつも私は天魔に飛びかける。さっきまで一方的に殴り続けてた所為かすんなりと懷に潜り込め、お返しにボディーブローをくれてやった。

「ぶはっ！ 鬼ってのはタフだな」

「お互い様だよ。さっきのあれ、結構本気だったんだけど？」

「道理で腹が痛え訳だ」

全く効いて無い。って訳では無いのだがまだ喋るだけの余裕があるらしい。いや、こんなにしんどい相手は中々いないね。

躊躇つてもいられず私は能力を使う事にする。今までずっと肉弾戦だったのだ。そろそろ潮時だろう。相手の両側面から見えない圧力の壁を叩き付ける。本来ならこれでぺしゃんこになるはずなのだが……あろうことか、天魔は壁を感じ取った瞬間に妖力の籠った両の手でそれを押し返してくる。

だが私の攻撃は終わらない。天魔が両側面からの壁に対応してる隙に私は奴に駆け寄る。反応しきれない天魔に駄目押しの後方からの圧力攻撃。背後からの衝撃に流石の天魔も驚いた見たいだ。

後方からの衝撃で前に飛び出して来た天魔に更に追い打ち。タイミングよくやって来た私がここぞとばかりに殴り掛かる。洗練された。それでいて激しい打撃。一撃とはいかないが次に繋げる一発。対応する暇を与えないように能力も同時使用する。乱治との特訓の中で私が磨いた技術だ。

いける。まさにそう思った時だ。

突如私に物凄い突風が襲い掛かる。為す術も無くふっ飛ばされた私だが、空中で体制を整え追撃に備える。

「天狗にそりゃ悪手だろ」

気が付いたらまた懷に。無防備だった顎を殴られ凄い勢いで更に天に昇る。

ああ、忘れてた。空は天狗の独壇場だ。対応しようにも今私の目には天魔が写っておらず、非常に対応に困る所。

上から下に。右へ左に。縦横無尽に飛び回る天魔から放たれる妖力の一塊。なるほど、これで私を滅多打ちにしようという算段か。手を読んだ私は周囲に妖力を展開。これで少しは緩和は出来るだろう。ほんの気休め程度だろうが。

天魔の体が光り出す。そろそろか。瞬く間に私の視界が鮮やかな色合いの妖力の塊に埋められた。

「俺の能力は“暴風を操る程度の能力”。お前に目茶くそに殴られてる時にふっ飛ばしたあれがそうだ。で、今からやることだがお前の周囲に吹き止まないで循環し続ける暴風を起こす。その中に俺は今お前の目の前にある塊をここにある三倍、叩き込む」

天魔が言い終えると同時に私を中心にした周囲に暴風が循環し始める。それに伴って視界を埋めていた妖力塊が雨のように動き出す。為す術も無く私も暴風に流され、あの妖力塊を雨を浴びるかの如く浴び始める。

ドコドコドコッ！と重い音を立てて私にあたる妖力塊。循環する暴風の速さがだんだん速くなりにつれて、色鮮やかな妖力塊が益々増えてくる。まさに為されるがまま。全くの抵抗を許さないこの攻撃。もう何周したのかも分からない。

いよいよ駄目か。そう思った時だ。

「おーい、しつかりしろー！ おーちゃん、あんた鬼の代表だろ！
根性見せる根性！」

暴風の中を流れながらも確かに私は黒いじんべえを着た人型を捉えた。

なんだ、あいつ来てたのか。それよりも気になるのは両脇に抱えているぐったりした奴ら。片方は今回私の元に宣戦布告をしてきた天魔の娘、邪々丸。そしてもう片方は……視界には写らなかったが私には分かる。あいつしかない。

乱治があいつをここに連れて来たって事はそういう事。言わずとも分かる。

「ら、乱治！ そいう事がー！？」

「おお！ 分かったらさっさとそんな暴風域から脱出しろ！」

はは、あいつ馬鹿だ。ここから抜け出せとか。でも……あいつら前にして醜態は晒せない。鬼の誇り云々よりもっと大切な何かが私にそれを告げている。

畜生。私を煽りやがって。これ終わったら真っ先に文句言ってる。

妖力塊を浴びながらも私は周囲に意識を伸ばし、イメージを膨らませる。暴風が循環している空間全体を、大きな手で掴み込むイメージを。

手で、こう、握り潰す、感じかな。ゆっくりと左手を握りしめると私の周囲の暴風が止み、妖力塊が小さくなってほとんど消えた。

「鬼、一体何をした？」

簡単なことだ。私の周りを循環していた暴風やら妖力塊やらを纏めて掌中に圧縮しただけ。つまりだ。今私は掌中に天魔の暴風・妖力塊の塊を掌サイズで掌握している訳であって、私の掌中では形容し難い程濃厚な妖力やら、暴風の風力やらが暴れ狂っているのだ。もちろん握る力を緩めたりでもしたら再び循環する暴風が展開されてしまう。あれをもう一度展開されたら今度こそ為す術無くやられてしまうだろう。

「……まあいい。予定変更だ。俺が直接引導を渡してやる」

「上等さね。鬼の腕力舐めんじゃないよ」

とは強がって見たものの状況は芳しくない。私はかなり消耗しているが天魔はあまり息が上がってない。

救いなのは先程の技がもう私には通用しないと思い込ませる事が出来た事。あれをもう一度捌けと言われても無理だ。膨大と言っている程の妖力を消費したのだから。

ただ弱り切った私を見逃す程天魔は愚かではない。再び地上で私は天魔と拳を交わす事となった。

「う……ってあれ？ 人間？」

「起きたか。とりあえずあれ見とけ」

「な、おい！ あれってな……に！？」

相変わらずチルノは気を失っているが邪々丸の方は目が覚めたみたいだ。で、起きて早々目に入っただのは自分の親が鬼と殴り合っている姿。

もうね、鬼に肉弾戦とか何を考えているのかと……なんて思ってた時が私にもありました。

よくよく考えれば天魔とは天狗の頂点、天狗オブ天狗だ。はつきり言って今の鬼連中で対抗出来る奴と言ったら、それこそ現役四天王や鬼神位だろう。いや、四天王でも危ういかも。まあ総じて言くと

「今年の大一番だわ、これ」

周りでは鬼が天狗を制圧したつばく、そこら中で鬼どもが胡座を掻いておーちゃんの戦いの成り行きを見守っている。

天狗も強いちゃ強いのだがやはり鬼の方が一枚上手。数のハンデ

など物ともしないらしい。尤も結構鬼どももボロボロだが。

さて、おーちゃんはと言うと必死に相手に喰らい着いている。三発浴びて一発返すという状況だが、それでも目は死んでいない。右の拳を固く握っているのがすごく気になるが、きつとあれはなんかあれは狙っている。天魔はそれに気付いていないっぽいし。

「父様！ 頑張れ！」

邪々丸の声を筆頭に、地に伏した天狗達はふらふらと立ち上がり好き好きに応援しだす。闘う気はもう既に無いらしいが、仲間に声援をする力はまだ残ってるらしい。一瞬鬼も身構えたがそんな天狗の姿に触発されてか、鬼どももおーちゃんに声を掛け始める。カリスマ……って言うのかこれ。

正直な話、今年は鬼神が不在だから、名物である俺と鬼神のど突き合いがお流れとなり、鬼どもの中では今年の行事には乗り気では無い奴もいたんだけど、こんだけの闘いが見れりゃ満足だろう。

天魔やおーちゃんも周りの声援に触発されてか、更に攻撃の回転スピードを上げていく。打撃が当たった時のヒット音がもうとんでもない事になっている。

「あああああああー！」

「いい加減諦めろおー！」

ここ一番のヒット音。おーちゃんの跳び膝をタイミングよく上体後ろに逸らして避けた瞬間、天魔はおーちゃんの腹目掛けてロケットのような頭突きをぶち込む。

終わったな。だが天魔は手を緩めるそぶりを見せない。これから追撃に入る模様だ。

上空に再度打ち上げられたおーちゃん。流石に俺も止めに入ろうとしたが……何とか押し止どまる。固く握られたあの右拳はまだ離されていないのだ。

「終いだ！」

天狗の失敗は右手を振りかぶってしまった所にある。天魔が振りかぶった隙に、おーちゃんは右拳をただやつの腹に置いただけ。それだけ。ただそれだけで上空やって来た天魔は地上に舞い戻った。

天魔が凄い勢いで地面に突っ込んで来て、辺りには轟音と共に砂煙が舞い、二人の姿が視認出来ないでいる。

煙が晴れるのを皆、固唾を呑みながら待つ。間もなくして煙が晴れて、姿を表したのは立派な仁王立ちをしたおーちゃん。次いで片膝を地面に付きながらも顔は依然としておーちゃんに向いてる天魔。

「決まったな」

一瞬の静寂の後、鬼達かへの喚起の音が響き、天狗達に落胆の色が広がる。まったく、七面倒くさい奴らだな。

「くそ野郎ども！ この鬪いは森の住人こと俺、乱治が見届けさせて貰ったが、鬪いの勝者は天魔だ！ 分かったらさっさとおいちゃんを俺の小屋に連れて来いや！」

広場に響き渡る怒声に鬼、天狗、共に静まり返る。未だに目が覚めぬチルノを脇に俺は帰路に着いた。

森の最奥部の広場にて・おいちゃん対天魔

長時間に渡って両者闘ったが勝ったのは天狗。最後の最後で鬼は右に込めてた力を開放。それが天狗に当たるも天狗は堪える。鬼はそこで反撃の力を失い、天狗の耐久勝ち。

ただ地面に伏したままの醜態を晒せずと、反撃はせずとも鬼は悠然とした姿で佇む事を決意。それがあの仁王立ちであったとか。

重ねに重ねた日々（前書き）

相変わらずの妄想です。誤字脱字や、意味が分からない表現なども見受けられると思いますが、ご了承ください。

重ねに重ねた日々

天魔・おーちゃん・乱治・三者首脳会談

・見学

チルノ・邪々丸・大天狗三人衆・老鬼三人衆・天魔の嫁さん

・遅刻

鬼神・現役鬼の四天王三人

湖の岬にて現在、二十人近いメンバーが円となってその場に座り込んでいる。特に天魔とおーちゃん……と何故か俺は、例の氷像の前に座り、今後の鬼と天狗の関係について話を進めていた訳なのだが……なんかめっさ竹林組みに睨まれてる。

や、分かるよ気持ちは。得体の知らない人間が何故ボス面して場を仕切ってたかね。その場で騒ぎ出さないのは、鬼神や現役四天王は何の不満も無さそうに俺の話を聞いているから。というか竹林組みにとって鬼神らの存在は予想外だったろ。

そもそも鬼神を筆頭に三人の現役四天王が森にいなかったから、竹林組みは今回の騒乱を計画したわけだ。それが話し合いが始まってからしばらくして「すまぬ、遅れた」とか吐かして飛び入り参加して来たもんだからもう天狗涙目。

結局大多数の天狗が鬼の下に降るという事で話は進められてしまったのだから、更に天狗涙目。

ただ悪魔で鬼は実力社会だからね。当然ここにいる面々はそれなりに実力はあるから、それなりの地位にありつけるだろう。ちなみ

に実力を表すとかんな感じ。

鬼神>>天魔 鬼の四天王・天魔の嫁さん 老鬼三衆・大天狗三衆・チルノ 邪々丸

つかチルノ。お前どこまで進化すんだよと。
まあこれは悪魔で現在の實力早見表。邪々丸なんて成長はこれからだろうし。

「鬼の下に着く事に関しては異論は無い。ただ我々天狗の総意として人間の下に着くと言うのは見過ごせない」

「うんうん、おそらくそれは言われると思った。だからさ天魔……少し黙れ」

ゆっくり話し合ってもいいんだけど今の俺は気が立っている。隣
の天魔の後頭部を一瞬で掴み地面に叩き付けるように押さえ込む。
はつきり言って胸糞悪かった。話し合いを始めた時からずっと俺
に敵意向けてんだもん。いくら寛大な俺でもおこっちゃうぞ（はー
と）

ごめん、調子乗ってた。啞然とした天狗達に向かって「やだな、
気にせず話し合ってよ」と言ってニコニコしながら天魔を地面にぐ

りぐり。

流石にブチ切れた大天狗三人＋邪々丸が一斉に飛び掛かって来るも、甘い甘い。「フリッカー、フリッカー」と喋りながら空いてる左で軌道の読めないジャブを放つ。四人撃沈。話し合い一時中断。

その後は天魔の奥さんが俺に謝罪を入れ、それを俺は受け入れた。なお、天魔の奥さんは非常に美人で聡明だった。羨ましい。

話し合いも漸く終わり、その後は皆さんと酒を飲み交わす。色々
とあったけど、無事騒ぎが収まって本当に良かったと思う。

あれから鬼が俺と言う存在について散々説明してくれたらしい。
色々言ってた気がするけど鬼神より強い、って聞いたら天狗達は物
凄く顔を青くしていた。ざまあ。

酒を飲んでいないのはチルノと邪々丸。何時の間に仲良くなった
のか、チルノは現在邪々丸と天魔の氷像を新たに製作している。そ
れを邪々丸は目を輝かせながら見ているから、チルノの手腕が如何
に凄いか。

おーちゃんはおーちゃん、久々に再開した四天王三人や鬼神に
可愛がられながら酒を飲んでいる。しかもあの鬼神がおーちゃんの
頭を撫でるとか、俺初めて見たよ。
で、俺はと言うと

「そして鬼神にこう言わせたんだ。『主、俺の負けでござす』って
いや、二十三年前のど突き合いは盛り上がったな」

「「「ぶはははは！」「」」」

大天狗三人と天魔夫妻に鬼神の恥ずかしい迷言を暴露しながら酒
を楽しんで。「先の件。なにそれ？」的な感じで。

途中、鬼神が雷を球体に圧縮したやつをぶっ放してきたが、軽く
妖力込めた掌でナイスキャッチ。この程度なら能力なんて使う必要
ないのだよ、ワトソン君。あ、俺の能力については鬼が既に説明済
みね。

「らんち、らんち。見て、氷像“天狗大家族”！」

邪々丸を中心にして、その両脇に天魔と嫁さん。その三人の前に大天狗三衆が、肩を組み胡座を掻きながら横並びに座った姿の氷像が、俺らの氷像の隣に新たに加わっていた。

これには邪々丸はおろか、大天狗三人までが感激。「なんか暖かいなあ」なんて何故か号泣しながらチルノにお礼を述べていた。

……家族ねえ。俺にもいたよ、確かにいた。

始めの内はふと思い出しては一人静かに泣いていたけど、あれから百年が経ったのだ。おーちゃんやチルノ、鬼神などと言った、俺にとって血や家族の繋がり以上に大切な存在が出来たから、寂しさなんてほとんど無い。

いや、寂しいと思う事はあるか。けどもう泣く事は無くなったな。

「あれ、どしたのらんち？」

「いや、何、やっぱり森はいいな、なんてな」

ほんと、今が一番だよ。

何度も何度も季節は巡り、流れるように月日は過ぎ行く。十年、百年、千年……と、それはもうあつという間に。

俺に身近な妖怪達もこの長い長い年月を過ごして行つた。妖怪達の寿命は非常に長く、鬼神なども億単位で地上に君臨しているだとか。この段階でリアルえーりんとか、なにそれこわい。

尤も俺も万単位の年齢を晴れて突破したわけだが、身近な存在だと俺は二番目に若い存在だ。ちなみに一番若いのは邪々丸改め邪々天だ。天魔も娘の事を半分は認めたらしく、名前の半分を渡して上げたそうだ。

まあ、あいつも成長した訳だしね。身体的にも内面的にも。容姿はもうね、流石は天魔嫁の娘さね。色気マックスでさあ。「うらめしや」的な幽霊が着ている白い着物？を着崩してきてるんだけど、目のやり場に困るから止めて欲しい。

チルノ？ あいつは変わらず幼いままだよ。ってもおそろしく賢くかつ強くなったけど。最近ではよく鬼や天狗やその他の妖怪達の相談役をして信頼を集めている。元祖カリスマはまさかのチルノだった。

言い忘れてたけど今現在天狗達は全員この森に住んでいる。元々あの竹林じゃあ広さに限界があったのだ。故に何時かの大騒乱を引き起こし、森を侵略しようとしたわけらしい。振り返ちだったけど。

そうそう、長い年月過ごしてきた訳だけど一番でかいニュースがある。おーちゃんと鬼神が結婚しました。

大分前になるんだけど、一日単位で鬼神が「あれは大分美しくなった」なんて自分に言ってくる時期があった。一ヶ月、一年位は黙って聞いてたんだけど、流石に五十年も同じ事を言われ続けると鬱陶しくなる。だから俺は「いい加減夫婦の誓い立てろや！」なんて言っただけど……まさか次の日に二人が揃って「夫婦になった」なんて言いに来るとは思わなかった。

その日の酒宴は本当に騒がしかった。

無礼講。酔っていなかったやつなんてほとんどいなかった。また、四天王の一人は「あいつ、大きくなって」なんてほろりとなんか零しながら酒を飲んでたりもして、非常に感慨深くもあった。俺？天魔の嫁さんナンパしてたらすげえ形相した天魔に左頬を殴られた。久しぶり痛みを感じた。

また、限りなく長い時の中で俺はある考えに至る。「刀とか使えたらかつけ」……何とも厨坊臭い発想だったけど、それを可能にしてしまうのが限界を越えた肉体と、長い長い年月。五百年経った頃になると“乱々流”という自分流の剣術を大成してしまった。

呼び方に関しては“らんらんりゅう”だから。Mドナルドの人がは全く以って関係無い。

ちなみにこの乱々流、なんと体術の部もある。伝承者は里の人間の一部+チルノ。妖怪への対抗手段として日々研鑽を重ねているらしい。

というのもこの乱々流。自分で言うのも何だが非常に応用の利く剣・体術に仕上がってしまった。元々素人である俺が暴力的な時間を費やして昇華させた流派なのだ。時間さえ掛ければ誰でも独自の物が新たに構築出来る。かく言う俺も現在進行形で研鑽中だしね。

残念なのは武器としての刃物が人里には存在しないため、剣術を伝承出来ないこと。こちらはチルノ限定で、氷の刃を持たせて日々伝承中。あ、俺もチルノに作ってもらった刃を使っている。なんせ刀が無いもんだから、代用品を用いるしかなくてね。

それでも流石はチルノと言った所だ。九千年使っても刃零れが無いとか、村正も真っ青っす。ただこれには理由があるらしく、どうやら刀の傷などは自動的に自身の妖力が使われて修復されてるから、何千年使っても平気なんだとか。

「分かったか、少年」

「よく分かりませんが、一応あなたが限り無く人外の化け物に近い人間だと言う事が分かりました」

そして現在。人里に住んでいる一人の青年が俺の住まいに遊びに来ている。

そもそも前にこの青年が、例の穴付近にある果実を取りに来たのが事の発端だ。案の定図体のでかい妖怪に襲われていたため、しゃーないと思いながらもその妖怪に俺の縄張りであることを主張。

大量の果実と酒とを引き換えに青年を助けた訳なのだが、「あなたの教えを乞いたい」なんて宣い、彼の青年はかれこれ三日は俺の小屋に居座っているのだ。

人里では一応、森に住んでる武術の達人、で通っているのだが、どうも妖怪を前にしても悠然とした態度の俺に憧れを感じたらしい。「体験を語るだけでいい？」と言ったら「是非！」なんて返されたから、その覚悟ありと見て今までの俺の人生をピックアップして話しているのだ。

「というか青年、里に帰らなくていいのか？」

「いや、乱治さんの能力で俺を村に返してくださいよ」

中々図々しいやつだな、なんて思いながら能力を発動しようとする。発動間際に「また来ます」って言われた時は冗談かと思ったの

だが、次の日

「ごめんください」

本当にまた来やがった。

そんなちよつとしたサプライズもあったものの、三十年もするとぱったりとその足音も途絶えてしまう。や、人間の寿命なんてそんなもの。特にこの時代ではそう珍しくないのだ。

ただ……俺はどんなに気張ったて人間らしい。身近な者の“死”と言うのはいつまでたっても慣れるような物では無い。これは妖怪にとつては有り得ないことで、いつまでも俺が持ち得ていたい感情である。

「……ふう。俺も、歳食つたな」

しみじみとそう思う、今日この頃である。

発展の果てに（前書き）

短いです。

発展の果てに

?????

私達は発展し過ぎてしまったのだろう。元はこの地域、よく妖怪に狙われる場所として有名だったのだが、私達の先祖は凄く逞しかったのか、ありとあらゆる手段を用いて妖怪に立ち向かったらしい。でも、その行き着いた果てが科学兵器による武装。確かに妖怪のその絶対数は減らせたけど、少なくとも「そこに信念はあったのか？」と問われたら、私は胸を張ってその問いには答えられない。

そもそも妖怪が私達人間を襲うには理由がある。食糧としてはさることながら、何より自分らの存在を保つために、妖怪は私達を襲い続ける。

詳しい事は知らないが、言うなれば生きるため、と確固たる理由があるのだ。

では、私達はどうか。少なくとも始めは私達も生存を賭けて妖怪に立ち向かっていた筈だ。それが今では「もつと快適に暮らしたい」という、人間の欲望を満たすためにだけに妖怪を討伐。いや、討伐という名の虐殺を繰り返す始末。

やり過ぎだ。何度も私は上に駆け寄ったが、返される返事はいつも同じ。「先代から続いている」。

だから何なのだ？ 先人達に倣って私達は虐殺を繰り返しているのか？ ……馬鹿げてる。

止めはつい最近入った討伐記録を目にした事だった。

『先住の民の討伐：毒ガスをコミッティー一帯に散布。所用時間五分。 済』

ついに同じ人間にまで手を出し始めた。
もう何を言ってもこの狂喜は止まらない。私は……このやり方に賛同出来ない者達にある提案を切り出す。

月への移住計画

「私達はやり過ぎた。もっと早くにここから離れるべきだったんだ」

逃げたと捉えてくれたって構わない。私達は地上で犯した罪の大きさに踏み潰されぬよう、責任を地上の侵略者達に責任転嫁をしただけなのだから。

既に技術者は私が掌握済みだ。故に月への経路は完全に絶ったと言っている。

残った者達など科学の恩恵を受けるだけ受けて、この惨状の一端に加担した者達だ。甘い蜜を享受し過ぎた奴らに、一から月へ飛ぶロケットを作る技術なんてある訳が無い。

「さよなら、地上。恨むなら私を恨みなさい」

「ふん。奴ら、月に逃げおつたは。確かに宇宙なら我らとて手は出

せん。だが……」

邪魔者があちからいなくなってくれた。これで我等の思うように地上統一を押し進められる。周りの民など今だ土器を使用して生活しているのだから。

寧ろ気掛かりなのは妖怪の方だ。奴らの中には核兵器並に危険な妖怪もいる訳だからな。油断は出来ない。

しかし……我等の遙かな先人達は科学兵器を用いずに、どうやって大妖怪等を退けていたのか。今となっては誰も答えられる者はいない。」

「まあよい。手始めに最も大規模な妖怪コミッティを落とす。どこだ？」

「は！ “妖怪の森”と呼ばれてる森だと思われます」

目の前に写しだされた妖怪の森の衛星写真。隣に立っていた我が部下に概要について説明させる。

「この森には手強い妖怪が数多く存在しています。中でも鬼神は別格で、雷を自在に操る事が出来ます。他にも強力な妖怪が多々……」

「雷の対処にはありったけの避雷針を。手始めに強力な毒ガスの散布、ガスが沈静した後上空から実弾の雨を浴びせ、タイミングを計って武装兵による森の制圧を開始せよ。なお相手は妖怪だ。白兵戦をするつもりで武装兵には任務に当たらせろ」

大底は毒ガスで全滅してくれるのだが、相手は最大規模の妖怪軍団。慎重に取り掛からねば痛いしっぺ返しを食う事となる。

我等の覇道を成す為にはこの妖怪の森は避けては通れない。だが始めにここを制圧しさえすれば、後の妖怪達の制圧を楽に進められる。それほどまでにあの妖怪の森は影響があるのだ。

しかし月の移住組の馬鹿さ加減にはほとほと呆れる。我等が地上を治めさえすれば争いなど永久に無くなると言うに。「それがために争いをしては本末転倒だ！」などと吐かしおる。

分らん奴らだ。我等の代で争いは収まると言うておるに。

「せいぜい月でひっそり暮らしておるがいい」

終幕・またね（前書き）

短いです。なお、タグは理解されておられると思いますが、作者は病気です（いや、『駄目だコイツ、早くなんとかしないと』的な意味で）

その所をよく理解していただくと幸いです。あくまで趣味の範疇なので、反りが合わない方は例の如くバックを推奨いたします。

終幕・またね

木々は傷み、地には多数の妖怪の屍。その中には……俺の見知った妖怪達も含まれている。

「はは、みーんなやられちゃった……」

「もう喋るな、チルノ！」

湖の岬。あれほど澄んでいた湖の水も、今となってはもう見る影もない程に汚染されている。

発展を尽くした人類を相手に俺達は森の住人は必死に抗った。だが結果はこの様。ほぼ壊滅と言っていい。

「無理、よ、らんち。あん、たも、もう限界、でしょ？」

「うるせえ！ 湖の汚染位ふっ飛ばしてやるからさ！」

地を這い、体を湖に向け、力を発動しようとするも、全く力が入らない。

何故、どうして！ 今力を使わないでいつ力を使うんだよ！

「あんだけ、でかい妖力、使ったの。だから、もう、無理、しないで」

「あの程度屁でも無えよ！だからもう少し待つてろ！」

本当に限界だった。先に俺は敵を全滅させるべく、ある大技を放ったばかりだったんだ。

これで確かに全妖怪の未来は守れた。だが……あまりにも代償が大き過ぎる……

俯せになりながらも、俺は見知った奴らの氷像に顔を向ける。その下には……そいつらの亡きがある。長らく人生を共にした俺の友人達の亡きがらが。

何で？ どうして……どうしてこいつらが殺されなきゃならない？ いや、こいつらに限った事じゃ無い。どうして森の妖怪達が同じ目に合わなきゃいけないんだ！

そりゃ、こいつらは妖怪だ。長命と言えど何れは死ぬ。だけど……これはあんまりだよ。

「鬼神、起きろよ。早くど突き合い始めようぜ？」

「……………」

「おーちゃん、もさ。起きろよ。じゃないと鬼神が起きないからさあ」

「……………」

「はは……天魔、嫁さん。ほら、早く娘を起こさなきゃ。あいつに名前、継がせるんだろ？」

「……………」

「ほら！ 邪々天！ お前、早く起きないと貰い手無くなっちまうぞ！」

「……………」

「馬鹿ね、らんち、みんな、森を守つ「手前えの命も守れねえで何が森だよ！」

ふざけんな。ふざけんなよ！ 森を守るだあ？ 馬鹿言ってるじゃねーよ！

妖怪は妖怪らしく、自分の身を一番大事にするんだろうが。何で

森なんだよ……何で未来に繋げるんだよ！

「悪い、わね、らんち。あたい、先に行くね」

「なあ、待てよ、待てつてば？ な、チルノ。すぐにこんな汚れふつ飛ばしてやるから、な？ 悪いと思うならもう少し……」

「あたいは、氷精チルノ。自然の、この湖の、具現体。願わくば、もう一度、あんたに、会いたい……ぼっくり逝ったりしたら、承知しないんだからね！」

飛び切りの笑顔を残して、霧のように消え行くチルノ。同時に消え行く友人達の亡きから。

……馬鹿野郎、ばやけてよく見えなかったじゃねーかよ。

「逝くな！ 逝くな逝くな逝くな！ 逝くな……！」

「ふふ、らんち。“またね”」

友のいなくなつた森に、俺の慟哭が響き渡つた。

泣いた、泣き続けた。氷像の前に座り込み、その涙を枯らす事無く。

どんな力を持つとも俺は人間だ。妖怪と違い身近な存在の死をそう簡単に割り切る事なんて出来ない。ましてや一万年以上喜怒哀楽を共にしたのだ。何故簡単に割り切る事が出来るのか逆に妖怪に問いたい。

ともかく今は泣きたい。涙が枯れ果てるまで……

何時まで泣き続けたらう。よく覚えていないが結構な時間泣き続けていたと思う。

精神的には大分落ち着いてきたが、今は何もやる気にならない。ただぼんやりと、皆の氷像を眺め始めた。

更にどれだけの時間が経っただろうか。ぼんやりと氷像を眺め続けていた時に、ふと、こう感じたのだ。

「……忘れたく、無いな」

久々に喋った台詞がそれだった。その日から俺は目を閉じ、チルノの最期までの思い出を振り返り始める。始めは俺がここに飛ばされて来た時から……

何度も、何度も、思い出し、振り返る。決して忘れないように、強く、つよく、自分に言い聞かせるように。

いつしか、チルノが最後に残した台詞が気に掛かるようになる。

『またね』

また……また？ これは“もう一度会える”という事を示唆して
いるのだろうか？

チルノの最後の台詞について考えてから幾年。ある日俺の前に一人の人間が現れる。

そいつは珍しく森のちよい奥にまで木を刈りに来ていたらしいのだが、偶然、湖の側で座り込んでいた俺に気付いたらしく、「この辺りは妖怪が出るから危ねえ」と、わざわざ俺に注意を促しに来てくれたらしい。

「まったく、人間ってのはお節介な生き物だな。でも、割と嬉しそうな俺がそこにいた。」

「というかおっさん、人里ってその辺にあるのか？ 湖の水が汚れて水場が無くなったって、遠い噂で聞いたけど？」

「湖がよごれてたあゝ？ お前えさん、若けえ癖に目ん玉腐っちゃまんでのか？」

おっさんは顎で湖を示し、俺にそれを見るように促す。おおそ見当も着かない時間振りに立ち上がり、ゆっくりと湖が見える位置に足を運ぶ。

そして、氷像の後ろにある湖を眺めた。そこに広がっていた光景は……かつての見慣れた、美しかった頃の湖の姿が。

驚きに顔を染めていると、またも俺に向かっておっさんが喋り出す。

「なんでえ。こんな近くにきれいな湖があつたつてのに、お前さん、気が付かなかつたのかい。若けえ癖に馬鹿だな。いいか、この湖は愛されてんだよ」

「“氷精”に、だろ？」

「おお、ボケちゃいねえ……つてあつ！ お前えさんもしかして泣いてるのか？ 悪いな、強く言い過ぎ「いや、違う」」

目からとめどなく流れ出る涙。でも、この涙は悲しみに暮れていた頃のそれでは無い。

「ん？ じゃあ……何で泣いてたんだ？」

俺の傍には、何時の間にもあいつがいてくれたんだ。

「はは、なぐに。湖見てたらダチ公の事を思い出していただけさ」

『またね』。それはもう一度会いましょうと言つ暗黙の了解。チルノは去り際に確かにそう言った。
だったら俺のする事は決まっている。

「そうか。……とりあえず忠告はしたぞ、若けえの。くれぐれも妖怪には氣い付けな」

「はは、森の中で生きて来たんだ。奴らのあしらい方くらい分かってるさ」

「ちげえねえや。じゃあな、若いの」

「ああ、“またな”」

何時の間まで待ち続けてやるさ。

諏訪大戦観光ツアー（前書き）

今回も独自設定という名の原作捏造が行われています。一応〇イキってはいのですが、「原作と違う」と感じましたら「ち、そういうご都合主義かよ」と、割り切ってくださいと幸いです。

割り切れ無い方は申し訳ありませんが、やはりバックを推奨いたします。ご了承ください。

諏訪大戦観光ツアー

俺がいじいじしている間に、どうやら途方も無い時間が過ぎ去ってしまっただけらしい。人里では稲作が始まり、待望の米が俺の口に入るようになった。

また、以前まではただ布を巻いてるだけと言うイメージが強かった衣服が、きちんとした形を為したのを見ると、俺の知る弥生、若しくは縄文時代に突入したのかなと思うようになる。となると始まるであろう事は大方予想が着く。

「土着の神々の信仰かな？」

あんまりそっち方面には明るくないが、土偶やらが見受けられる点あながち間違いでは無いかと思われる。俺の木像チルノも崇拜してた時があつたし。

土着の神。善くも悪くも俺の頭に浮かぶのは例の原作キャラ。そう、諏訪子。通称ケロちゃんだ。

我が日本では諏訪大戦とは妄想の話であつたと言われているが、ここは東方の世界。先ずこのイベントはあると見ていいだろう。

では俺はどうするべきか？ そんなもん決まっている。

「この目で見たいと思います」

膳は急げ。俺の住まいと例の氷像に能力を発動。その存在をふっ飛ばし、更に俺は靈力を込めて不可視結界を張り巡らせる。ちなみにいい感じしている間に、とんでもない位に靈力が増えました。ある程度米や果実、塩や酒などを濃い緑茶色の風呂敷に包み、脇にはチルノ作の氷刀を注す。草履を掃いていざ行かん。湖を大きく迂回して、『さあ、進もう！』とした時だ。

「……山、ね」

何時かの間に出来たかは知らんが、それなりに大きな山が俺の行く手を阻んでいる。

妖怪の山。おそらくこれがそうだろう。山の中からは妖力持ちの妖怪達をうじゃうじゃ感じる。

それもその筈だ。この山、妖怪達にとって非常に都合のいい場所であるからだ。

試しに山の土を手に取りその匂いを嗅いでみる。……やはり妖力が混じっている。

この山はかつて俺と共に生きた妖怪達の亡きながらが積み重なって出来た物だろう。いや、どうして山になったかまでは判らないが。

「本当、未来に繋がってたよ」

山を大きく迂回しよう。もう少し気持ちの整理が着いてからここには足を踏み入れよう。

気を取り直して俺は歩を進める。目指すは諏訪子がいるであろう諏訪大社。

あつるゝ日ゝ、森のなつかゝ、くまつさゝんゝにゝ、出会ゝった
……いつもの森とは違う森を、歌いながら歩く馬鹿一人。

一応熊対策の為に常に声を出している。出て来ても晩飯のおかずになるだけだ。

知らない森を一人で歩くというのはどこか違和感を感じる。そもここは既に俺の縄張りでは無く他の妖怪の縄張りなのだ。そんな所を人間である俺がうろついているんだから、妖怪達にとってはいい鴨だろう。

尤も妖・霊力を、能力を使い完全に隠蔽しているわけだから、不用意に俺に喧嘩を売って来た奴はフルボッコされるのがオチだろうが。妖怪はある意味じゃあ自己責任なのさ。

「だからって五分おきに襲い掛かって来るとか」

今倒した、腕の四本ある二足歩行のゴリラでもう三十四匹目。温い、又ル過ぎる。デコピン一発でふっ飛ぶとか、俺なんて“ッ〇デ”？
ああ、鬼神とど突き合ってたあの頃が本当に懐かしい。マジこんなやつばっかだと調子狂うわ。

さて、歩き始めて半日以上経つが今だ人里は見えず。どうなってるのさ日本？

別に歩こうと思えば何日だって歩ける自信があるけどさ、肉体的にはともかくやっぱり精神的には疲弊しきってしまう。ああ、人が恋しい。

「なんだ、また人間k…ブフォ！」

言った、今“人間”って言ったよ、このゴリラもどき！　ウホッ、期待が目に見えて来たぞ。オラ、何だかワクワクすっぞ。

だけでも世の中はそう上手くいかないように出来ているらしい。いや、だ〜いぶ永い時を過ごしてたから分かってるつもりではいたよ？　でもさ、故意に目を逸らしたいって時もあるよね。

「縄張り争いの最中とか無いわ」

目と鼻の先で妖怪の一同同士が……何だか小競り合いをしている。なんだ、あのヘナチヨコパンチは？　ゴリラもどき、やる気あのか、やる気！

でもまあ当事達の問題だからね。俺は関係無いからね。遠回りになるが大きく迂回「そこのお前」

……聞こえない。聞こえないから。妖怪達の他に微かに別の気配を感じてはいたけど、俺はその気配の主と断じて係わり合うつもりは無い。

「そこのお前だ、人間。聞こえておるだろ？」何て言ってるっしやるけど、気配を感じ取った瞬間から係わり合う気は無くしたから。

「妖怪に遭遇してしまい、困っているのдар？」

すぐに気配絶って迂回し始めたから無問題。だから勝手な妄想止めれ。

しかし相手は一步も引かない。「困っているのдар？ 困っているのдар？」とくどい位に俺に付き纏う。

いや、姿はもろ見えなんだよ。なんか能力の副産物で辺りの気配にはすんげえ敏感なんだわ。そういった感じたものを俺はふっ飛ばせる訳だし。

ただ向こうは気付いてないんだよ。自分の姿が俺の目に入ってる事が。

や、本来は人間はおるか妖怪にだってその姿を見るのは困難に近いだろうよ。でも相手が俺じゃあ効かないの。

「いい加減にしろ！ 神の声を蔑ろにするな！」

肩に手を置かれ俺の目の前に現れる声の主。結論から言えば神様だ。そうゴッド。しかも洒落にならないくらい力の強い神。

白い長袖シャツの上から赤い……半袖？ 見たいな何かに黒いロングスカート。しめ縄を頭に巻いておおよそ一般人が放つ事の無い神力を撒き散らす女性。

八坂神奈子。農耕だか風だかを司る大和の神だっけか？ それほど詳しくないからよく分かんが、とりあえず原作キャラ。出るの

はずつと後だけど。

「すいません。別に困ってませんのでこれ「まあまあ、祈れば助かるからさ」。というか祈れ」

両の肩に手を置き「さあ、さあ！」とうぜえ位に圧力を掛けてくる。し、信仰もくそも無え！

本当にこいつ神か？　なんて思い足を進めると何故かゴリラもどきの妖怪達がこちらを向いている。

横目で神奈子を睨む。あ、目え逸らした揚げ句どこ吹く風で口笛吹いてやがる。「ほ、ほら、気付かれたじゃないか？」なんてにやけた面で俺に吐かしやがるから更にうぜえ。

「ったく、わーったよ。助けて、かーみーさーまー！」

「言い方は腹立つが、まあ信仰はしてるのが分かるしな……良からう人間、神の気まぐれに感謝するんだな」

突如一陣の風が吹き、ゴリラもどきがその場に崩れ落ちる。まああれか。神風ってやつか。

神の奇跡を目の当たりにしたものの、その、なんと言つか。鬼神は雷、天魔は暴風を操ってた訳だし。

神奈子も“乾^{けん}を創造する程度の能力”という、チート使用の能力を持つてる筈だから、それなりに強いとは思っただけど……やっぱ慣れってやつなのか、割とスゲエとは思わない。礼は言うけど。

「あー、一応助けてくださりありがとうございます」

「うゝむ、一応感謝の念は感じるのだな……人間、貴様は我に頭を下げようとは思わんのか？」

「全然！ 僕、神様の前だからきっちり正直に話したお！」

じとーっと今度は神奈子がこちらを睨んでくる。おそらくあいつは神力で俺を心酔させ、畏敬の念を刷り込もうとしたのだろう。ほとんどの人間はその術中に嵌まるのだが、生憎俺には例の能力がある。だから多分効かないのかと思うんだけど……

だから一生懸命俺の精神内を讀心しようとしているのは分かるが、能力が働いているのでそれは絶対に無理だからね。

「ふゝむ、記憶も読めないな」

「人の心に土足で踏み入るのはどうかと思っただけど……まあいいじゃん、神様。だから俺はこれで」

「待て待て。とりあえず今日は我が治める土地に泊まって行け、頭

を垂れぬ人間よ」

俺としては早く諏訪大社に行きたかったんだけどな。……まあ
これも何かの縁かね。今日と言わずしばらく厄介になりますかね

ぶっちゃけた話しここがどの辺かは分らんが、例の森からは大分離れた場所っぽい。前の人里と比べて、この人里はかなり発展してるっぽい。千歯扱きを見かけた時は「何段跳びで進化してるんだよ」と思わず口を滑らしそうになった。

更に驚くべきは、神奈子の神社の本殿の大きさ。もうね、こんな立派な奴は修学旅行で京都で見て以来、久方振りに見たわ。

参拝客の脇に控えてる宮司さんに挨拶を済ませ、神奈子が連れるがままに奥へと立ち入る。途中、ふらふらと漂ってた八百万の神の一柱が、俺を連れて来た神奈子に何か言ってたが、神奈子が何か囁くや否や、その神は俺を見てフレンドリーに喋り掛けて来て驚いた。

「なあ、神様。神様なのにこんなに砕けて人間と話していいのか？」

「八坂神奈子だ。あんたは別に私のことを呼び捨てで呼んだって構わないからね。そもそも私に屈服しないのなんて極僅かしかいないさ。人間で私を崇めないなんてあんたぐらいの物よ？ ま、いつも体裁を保ってなきゃいけないってのも何だか息の詰まる話しでな、対等かつ気楽に喋れる奴が欲しかったんだ」

「ふーん、神様ってのも苦勞してるわけだ」

「まあな。だからお前さんにストレス発散をしようかな、とした訳だ。さ、ゆっくり愚痴を聞いて貰うぞ？」

で、たどり着いたのが八畳一間のちゃぶ台付きの部屋。脇には木製の引き戸が全開になっており、縁側の道は本殿へと続いているのだとか。

なお、引き戸が全開のため、部屋の中からは外を一望出来るように見えるっぽい。実は部屋の外からはこの部屋の引き戸は締め切っているように見えるらしい。まあ神があまりにもオープンに生活していたら、信仰に関わるんだと。俺は例外らしいが。

「まあその座布団に座れ」

「……もつつつこまないよ」

昭和だろうが何だろうがもう驚かない。よくよく考えれば服装の時点で歴史三段跳びをしている訳だし。

言う通りに座りちゃぶ台の上のお茶を啜る。ついでに風呂敷から例の果実を取り出し、二、三個神奈子に差し出す。

始めは胡散臭そうに手に取って観察していたが、次の瞬間それを一齧り。「ほう、中々の味だ」と、どうやらお口に合ったようだ。

途中、「これは私への供物か、供物なのか？」とうるせえ位に尋ねてきたからもちろんスルーした。

諏訪大戦観光ツアー〜鬼再び〜（前書き）

はあ。今回もちよい長かった。

毎度毎度メタ発言に気を付けながら作品を打ち、その分前書きやら後書きやらで羽目を外させていただいてます作者です。

リリース“なのは”の“なのは”を昔、リリース“なのは？”と、“なのは”という名詞を“なのは？”と、何故か疑問形で捉えていた時期がありました。

どうでもいいですね。作者のぼやきです。

諏訪大戦観光ツアー〜鬼再び〜

とりあえず暫くはここに厄介になる事になってしまった。本当は俺の方から切り出そうとしたのだが、神奈子から真つ先に「面倒見てやる」と言ってきたのでお言葉に甘えることに。

泊まる場所に関しては隣に空き部屋があるらしく、そこを使わせてくれるらしい。

じゃあ俺がこの人里でやることは？ 簡単なこと。森に出て食えそつな奴を狩るだけ。余った時間は瞑想やら正拳突き……は土地荒らすからやらない。

泊めて貰えるとしても一応自炊位自分一人でやろうかと思ってる。神奈子の方は宮司さんがいつも作ってくれてるっぽいし。

「つーわけで森に行くわ。なんか食えそつなの拾ってくるから、欲しかったら言って」

「ああ、期待はしてないが。一応気をつけて行けよ」

草々を掻き分けて森の奥に進んで行くと、耳元に段々川の流れを伝える音が聴こえてくる。ああ、なんか凄く清涼感を感じる。こう、「リフレッシュ！」って思わず叫びたくなる的な。

本当はでかい獲物を捕らえてそれを里の人間に分けてやろうと思ったのだが、やっぱり川魚をたくさん釣って、それを今日の晩飯のおかずにすることにした。

そうと決まれば竿だ。その辺のちよい太めで長い枝を手に取り、能力使って一瞬でイメージした形に加工。甚平の布地をちよい拝借しそれを釣り糸代わりにする。

餌はリグ……じゃなくて地面掘ったら出て来たミミズを使用。永く生きたけど一度も釣りをしたこと無いから、正直ミミズが餌になるかどうかは分からないんだよね。

一応格好だけは釣りをしてそうな人になった。川の傍の大きな石に座り込み、釣り糸を川に投げる。『ぼちゃん』と音を立てて餌が

川に沈んでいく。ちなみに浮きは小さな小枝で代用。

「はあ……」

訳も無くため息一つ。ついでに感覚を研ぎ澄まして周囲の確認。……いるいる。差し詰め「代打、俺」ならぬ「餌、俺」って所か。全く、妖怪つてのは中々学習しない生き物だねえ。昨日あんなに痛目付けたのに。川の石ころを手に持ち、気配の元にぶん投げる。能力は使ってない。もちろんその傍らで釣りをしながらだ。

ん、どうやら一発じゃ牽制程度にしかないらしい。今度は片手いっぱい石ころを持ってそれをぶん投げる。しかも繰り返す事三回に渡って。

遠くから散弾の如く襲い掛かってくる石ころに流石にびびったのか、俺の領域に足を踏み入れた妖怪どもは漸く退散してくれた。

「兄さん、すごい力で石ころをぶん投げるね」

「ああ」

ごめん、嘘。一匹だけ逃げ出して無いのがいました。しかし、あれ見て逃げる所か自身の姿をくらまして俺の目を欺こうとするから

……小癪な奴だ。

伊吹萃香。種族、鬼。白のノースリーブに紫のロングスカート。頭には赤い大きなリボンと、鬼の象徴とも言える角が二本。

だが今の俺の興味を満たさない。故に俺はそれ以上突っ掛かるのを止め、再び川へ意識を向ける。

「……ねえ、あたし鬼何だけど、角、見えてるよね？」

「立派になりそうな角が生えてらあ」

「えへへ、いや」何て頭を掻きながらニヤニヤするロリ鬼。ちらつと見ただけで判断したが今まで鬼連中を散々この目で見てきたんだ。その位の判断は着く。

ともかく今は釣り。たくさん釣って焼き魚にするという己の願望を満たすんだ。

しかし萃香は色々と喋ってくる。俺はそれにぼんやりと返答するだけ。や、ちゃんと内容は入ってるわけだから返答の内容はきっちりしている。

「うーん、なんか反応がいまいち何だけどな」

「こっちの釣りに無理矢理介入してるんだから、それくらい目を瞑ってくれよ」

「んー……まあいいや。なんかあんと喋るのって割と楽しいし。何て言うか、鬼のツボを捉えてるって言うか」

そりゃそうだ。付き合い長かったんだから。

その後も喋り続ける萃香に、俺は相変わらずの返答。

途中自分の名を名乗ってきたから俺も自分の名を名乗……ろうとしたけど止めた。正直まだその辺に関しては気持ちの整理が着いてないのだ。かと言って下手に嘘は言えない。鬼は嘘を極端に嫌うから。

しょうがないので「名前はいずれ分かる。今は勘弁してくれ」と言っ^て風呂敷の中の酒を差し出してやり過^ごした。

ちなみに萃香はこれを承諾。始めは怪訝^{げんげん}そうな表情をしてたが、酒の味に満足したのかすぐに表情を綻^はばし、再び機嫌よさ気に喋り出した。

「さて、それなりに釣れたしそろそろ帰るかね」

「えゝ、もう帰っちまうのかよ」

「そう言うな。それになんだ。鬼神様だかはおつかねえんだろ？」

「しまった！ 母さんに怒られちまう！ じゃあな、人間。機会があつたらまたな！」

日が暮れ始めた頃。焦った萃香が急いで走り出し川から去っていく。俺はと言うと魚を籠に入れて里への道をひた歩く。

妖怪にも遭遇せず無事帰還。神奈子の加護があるから、それなりに里の人間も外を回することも出来るが、それでも進んで外に出る者はおらず、今回の川魚は中々いい物と交換してもらうことが出来た。その後は意気揚々と神社に戻り宮司さんに挨拶と魚を分けてから神奈子の部屋に直行。ちゃぶ台の上で紙になんか書いてたっぽいから邪魔にならないように静かに座った。

「ん、帰ってたのか」

「ちょうど今な。と言つか何書いてんだ？」

「ああこれか。これは宮司に渡す農耕のお触れだ。私の専門だしな。その前は神々との話し合い。近い内に私はある強大な神に喧嘩を売るからね」

「ふゝん。その喧嘩、見てもいいか？ 神様同士の喧嘩って見た事無いし」

「ふむ、命が惜しくなければそなたも呼ぼう」

やりい！ 観戦予約完了！ このために足をすすめたような物だしね。

さて、暫くして宮司さんが食事を持って来てくれた。しかも俺の分まで。何でも「貴重な素材を人々にを分けて下さった客人に自炊なんかさせられない」んだって。

有り難くその好意に甘んじて、俺は神奈子とともに晩飯を食べる。まさか神とお櫃を共にするとは想像だにしなかったけど。

しかもメシウマ！ ちょ、まじ食材のスキルばねえ！ いやはや流石神奈子。きつといい農婦になれるわ。

「米ウマー」

「ははは、そりゃ我が人里の自信策だからな。そうだ、食べ終わったら本殿行くとしよう。夜と言うのは時たま厄介な仕事を持ち出す

輩が多いからな。私の働きぶりをよく見ておけ」

「飯食つたらか……まあ暇だし言ってみるか。あ、人参残すなよ」

神奈子は人参が苦手。少し神様に親近感が湧いた。

本殿。ほとんど何も無いただの広い板張りの間。よく供物やらが置いてあるらしいのだが、今は酒の入った瓢箪と盃しかこの場には無い。

持参した座布団に神奈子は座り、酒を飲みつつ木の格子の隙間から外を眺めている。何でもここに拝みに来た連中の思いを気まぐれ（本心じゃない）で成就させてるらしく、夜になるとそれはもう面倒な連中がやって来るのだと。

特に身内絡みの生き死に関わる願いが多いらしい。これが寿命やらだったら完全にシカトを決め込むらしいが、病気が原因だったら状況に応じてある程度は回復させるらしい。特に若ければ若い程回復力を強めるみたいだ。

で、先程からその様子を傍観しているのだが、やはり感じる事がある。

「……自分勝手だよな」

「全くだ。思いが成就されないと見るや我を見限る人間も少なからずはいる。いや、表面上はしょうがないと言っているが、心内では

強く恨んでいる輩だって少なくはない。儚くて脆い。それでいて傲慢なんだよ」

「前者二つは俺には当て嵌まらないが、後者は強く同意する。俺がその最たる例だからな」

「ふん、自意識過剰は結構だがあまり無茶はするもんじゃないぞ。ただでさえそなたに關しては何も読み取れないのだ。神である私はそのたにだけは何も助言を与えられない」

などと話しているとまたもや神社に参拝客がやって来た。だが今回の参拝客はその慌て様が尋常じゃない。神奈子曰はく「非常に厄介」だそうだ。

まあ俺には関係無いし、出来る範囲で頑張れ神奈子。もう片方の盃に酒を注ぎそれを一飲み。や、流石神への献上物。美味えうめえ。こんな代物口に出来るんだから神奈子も神様冥利に付く限りじゃねえか。

尤もそれを飲み交わす友人がいれば、なお酒は美味えんだけどな

……

「お願いえしやす！　どうか……どうか家の子を！」

「しげさん、もうよしなって」

「宮司さんもどうしようも無いって……」

何やら外が騒がしい。神奈子も難しい顔をしているし。啜り泣く声と共に外から人の気配が漸く消え、神奈子は大きなため息を吐いた。

「はあ……山から子供が帰って無いらしい」

「そりゃあ、無理があるだろう」

日が沈んでからの森は妖怪達の独壇場だ。迷い込んだ人間を掠う絶好の機会であるからだ。

前の湖周辺の森では日常的に人掠いがあった“みたい”だ。“みたい”と言うのは俺の前ではそういう事を言うな、やるな、と伝えておいたから。だからそういった光景を直接見た事はほとんど無い。稀に目の前で食事を行う寸前、最中だった所を目撃した場合、見付かった妖怪には悪いが“人間”として俺はケジメを着けている。同族目前で食われて正気を保ってられるほど、俺は妖怪に染まっては無いからな。限りなく黒に近いグレーゾーンだけだ。

「いや、まだ子の気配は……微かに感じるんだが、な、判断に鈍る所なんだ」

「と言うと？」

「私が助けに行ったら里が妖怪共に襲われる。僅かな可能性の為に里を危険に曝せない」

事実を淡々と述べる。ホント、本心と建前を上手く分けてらっしゃる。いや、いい意味で言ってるんだよ？ 神だから当たり前、なんて俺は思わない。

さて俺は…… 黙認は出来ない。世話になる人里でもあるし。

「把握、俺が行ってくる」

「……………」

「判断に困るか。まあ心配は無用だ。そこらの妖怪よりよっぽど妖怪は扱い慣れてる」

渋りながらも神奈子は肯定を示すように頭を縦に揺らす。さて、ぼちぼち妖怪退治といきますかね。

妖怪が蔓延る夜の森で人の気配を探るなんて俺にとっては造作も無い事。一応方角は聞いておいたが全く以って問題ない。

今俺が心配なのはその子供。正直言つて望みは薄い。どうも子供は夕方から見かけてないらしく、いなくなつてから大分時間が経つてしまっている。食べられていない方が不思議だ。

一刻も早く子供を見付けるために自身を子供の気配を強く感じる場所にふっ飛ばす。すると僅か数秒で俺は目的地に着いた。……いや、着いたはいいのだが

「まさか妖怪の山とは」

緊急事態だ。四の五言つてられない。急いで山に入り気配の大元向かって全速力で滑空する。

そこから懐かしい妖気を感じるのは、やはりこの山があの大戦の犠牲者を元に形作っているからだろう。不謹慎だが俺としてはここはすごく落ち着ける場所だ。

おそらく山のずーっと上、頂上付近にはかつて鬼神とよく戦った例の広場があるのか、上からは特に強い妖力の残り香を感じる。

と、ようやく体操着を着た長い一本角を携えた鬼に出会えた。：

…いや、この鬼ってまさか。

「ん、人間がここにいるとは珍しい。強いのか？」

いやいや、見た事はあるんだけど名前が出てこない。しかしそこで考え込むのがいけなかった。目の前の鬼は俺の左頬目掛けて殴ってきたのだ。

でもまだまだ動きが粗い。若いなコイツは。じゃれ合ってる暇も

ないし速攻で決着を着けよう。

相手に殴られる前に左手で鬼の顔面を掴む。相手の力を左手の腕力で全て封殺して動きを止める。これで俺との力量差を理解してくれ。

「なあ、今日人間の子供を掠った鬼を知らないか？」

「あ、あ……話す義理は『ミシツ！』」 分かった分かった！ 私の負けだ！ 多分四天王の誰かだ！」

始めからそう言えはいいのに。というか大の字で寝るな。まだお前には仕事が残ってるんだから。

倒れてるそいつを無理矢理起こして道案内をそいつに頼む。「あ？ 何で私が」何て言うから左手見せて無理矢理同行させる。

あれ、コイツってこんな奴だっけ？ もっと真っ直ぐな感じだった気がするんだけどな。原作と違ってある程度しか参考にならないらしい。

全速力で山を駆け登る事数十分。これは一体何の因果なのか。周りを見回すと木々がちらほら。度重なる戦闘で平地と化してしまつた森の最奥部にあった広場。それが……山の頂上にあるとか。

「あ、昼間の人間！ またなんか話してくれるのか？」

「いや、ちょっと急用でな。あの桐株に座ってるのは鬼神……いや、

母さんか？」

「うん！ 一番強いんだ！」

そうか、やっぱりあの大战で全ての鬼が消えた訳じゃ無かったのか。でもやっぱりここにいる鬼連中は見た事が無い。あの桐株に座ってる鬼神でさえも。

やっぱり相当永い間俺はいじけていたのか。ここにいる鬼連中あの大戦を経験していそうにないから……もういいや、考えるのはよそう。

道案内をした鬼は萃香を見付けるやいなや、直ぐにそこに駆け寄る。なんでえ、そんなに俺が嫌いだよ。つつか自分より図体小さい鬼に慰めて貰うとか、鬼としていいのか？

「ここは人間が来るような場所では無いが？」

「突然の訪問申し訳ない。ただ察してくれ、ケジメを着けに来た。萃香に慰められてる鬼には勝った。故に此処を案内して貰った」

桐株の上で胡座を搔いて座っているのは俺の知らない鬼神。どう言った経緯で鬼神を名乗ってるかは知らんが、まあそれなりに力はあるのだろう。尤も、歴代の猛者達に及ぶ実力かは不明だけど。

今回の鬼神は女。しかもおーちゃんの着てた白いワンピース着用。あれか、強い奴ってのは皆容姿に恵まれているのか？

「……まあいいや。でさ、早速だけでも今日“八坂神奈子”っていう神様が治めてる里の近くで人間の子供「ああ、俺が食った」

……まあ予想はしてたさ。どうせもう無理だっというさ。

現・鬼神の後ろに控えていた一鬼が俺の前に身を乗り出して来て何か喋り出す。やれ「若い女子の肉」だ「量が足りない」だ。口回りが赤く汚れているから間違いは無いだろう。

「何か持つて無かったか？」と尋ねたら「ほれ」と言って何やらお守り見たいな物を俺に寄越してきた。そうか、これで神奈子は子供……女の子の位置を特定出来たんだ。

「何だ、お前さん。敵討ちか？ いいぜ、何時でも掛かって来な」

「ん、まあケジメを着けに来た訳だしな。俺はこの身とあの里でしか飲めない酒を掛ける。お前もその身を賭けてくれ」

「ああ、酒までくれるなら願ったり叶ったりだ」

そっか、なら交渉成立だ。鬼神や周りの鬼連中が見守る中、向かい合う俺と例の鬼。俺は……もう我慢する事を止めた。

それはもう“決闘”の名を借りた圧倒的強者の蹂躪。速攻でタックルかましてマウントを確保。後は力で抑え付けて殴る撲る撲るの繰り返し。

秒速数十発単位で拳を叩き込み続ける。もちろん鬼が碎けない程度に加減して。それでも四天王だけあって流石に頑丈だ。

「……………」

鈍く重苦しい音が響く中、無言。ただ無言で俺は撲り続ける。

別に人を掠ったって構わない。食ったっていい。ただ……こいつは運が悪かったただけだ。

何度も言うが俺は人間だ。頭じゃこの摂理を理解してるとは言えやはり拭え切れない感情はある。だから俺は大戦前の妖怪にはそう言った注意を促していたのだ。

と、俺はここで手を止める。下にいる鬼はギリギリで意識を保っている。よかった、死んでなくて。これからケジメを着ける大事な時だから。

鬼の頭部にある角の内一本を掴みそのまま持ち上げる。途中呻き声が聞こえるも無視。勿論周りの騒ぎなど最初からシカトだ。食った人間の喧騒など気にもしないのだからお互い様だ。

「ケジメ着けるぞ」

空いた左手で鬼の右二の腕を掴む。そこに俺は徐々に力を入れていく。途中、体操着鬼の叫び声が聞こえたからそつちをチラッと睨み込んで黙らせる。俺だって好きでやってる訳じゃ無えんだよ。

嫌な音と感触がする中最後の一握り。『ビチャ!』とした音と共に、鬼の右腕が俺の掌中に収まる。

返り血を浴びて真っ赤に染まるも最後の作業に取り掛かる。

「この痛みは手前が食った子の親の痛みより軽い。それだけ分かってくれればそれでいい」

鬼の傷口に向かつて能力を発動。回復力の殆どをふっ飛ばす。そして鬼の角を握り潰してその鬼を鬼神の前にぶん投げた。

「人間食うな、とは言わない。ただ俺の目の届かない範囲でやってくれ」

「そのまま返すと思うか？」

周りを見回すと……はあ。敵意剥き出しの目で俺を見てやがる。鬼つてのは妙に仲間意識が強いから懸念はしてた。まあ「だから？」って話しなただけど。妖怪だろ？ 文句があるなら四の五言わず掛かって来な。こっちも苛々しているんだ。手前えらから喧嘩を売って来てくれんなら喜んで買ってやる。

この日、妖怪の山に激震が走った。

諏訪大戦観光ツアー〜決戦〜（前書き）

今回も独自解釈という名の捏造多々入ります。タイトルでどの辺が捏造されてるかにはあらかた分かんと思いますので、原作を弄られた作品を読むのに抵抗を感じる方はバックをオススメします。

ただ、言い訳になりますが今回も一応はウィ〇ったり他サイトを利用して本当に軽くは調べてあります。

でもまあご都合主義に弄っておりますので悪しからず。

諏訪大戦観光ツアー〜決戦〜

里に帰る頃には既に朝となっていた。帰って来るや否や俺に駆け寄って来る一組の親御さん。ああ、この人達が親だったのか。

俺は黙って血濡れのお守りを渡す。

……見てられない。その場に泣き崩れる二人の前に角を差し出して俺は神社に足を運ぶ。一刻も早くこの場を去りたかったから。

足を速めて俺は神社に向かう。鳥居の前には宮司さんが待っており、温かく出迎えて来れた時に漸く俺は強張らせていた表情を崩す事が出来た。

そのままされるがままに神奈子の部屋へ朝飯と一緒に案内され、ここで漸く一段落。暫くは黙々と飯を食べていた。

「……………」

「……………」そなたは何者なんだ？ あの子の鬼を屈服させるとは普通考えられんぞ？」

あの後俺はあの場にいた鬼連中とガチンコでやり合った。人海戦術で蟻のように俺に群がって来たが俺から見れば所詮烏合の衆。四方八方から襲い掛かって来たが、能力使って一気に地面にふっ飛ばす。

仲間意識が強いのは大いに結構。だがそれに長々付き合ってやる程俺はお人よしでもない。

ま、胡座を掻いたままその場を動かなかった現・鬼神は中々賢い、

とだけ言っておこう。あいつ自身はおそらく動く気は無かったっぽかったし。

茫然としてる鬼神に「ちゃんと言い聞かせておけ」と念を押して俺は妖怪の森を去ったのだ。

「強くなきゃ生きていけない世界を生きてきたからな。見た目以上に歳はいつてるよ」

「そうか。して、子供の方はやはり……」

「ああ、駄目だ。だからケジメ位はな」

清めた布に包まった鬼の右手を神奈子に差し出す。所々赤く染まってる部分があるも神奈子は気にせずそれを手に取る。

一体何を思いその腕を見つめているのか。さとの能力が俺には無いから分からないが、少なくとも心内は穏やかではないだろう。

じっと見つめる事数分。漸く神奈子は口を開いた。

「私が言えた義理じゃ無いが、ケジメを着けに行っただのはあんただけだったのかい？」

「だろうね。誰が好き好んで妖怪やら鬼やらの巣窟に足を突っ込むと思う？」

「神の役目なんだよそれは。本来なら土着の神々が治めてる土地なんだからな。だがこれでは……神々を名乗る資格なんて無い！」

神奈子が怒るのも無理はない。これつまり土着の神々は妖怪を野曝しにしているようなものなのだから。

理由？ 自分らより妖怪達の方が強力だからに決まってる。まあ妖怪の山じゃあ相手が悪過ぎるつても事実だけどさ、ある程度抑止力にはなつて欲しい所だ。俺がいた時は今ほど手の付けようが無い訳じゃあ無かったし。

今回の子供の件だつてそうだ。神奈子の怒り様からしてこれが最初の被害つて訳でも無いのだろう。

「なあ、そなたよ。このような力の無い神まで神と祭り上げられる状態にはもう飽きた。私は一度この体制をぶっ壊そうと考えている。それで三日後、私はそれを証明する」

だから諏訪子を倒してより広い地域の信仰を得て、自分の管轄を更に広げようとしているのか。妖怪達から人間達を守るために。

道理で神奈子の里が異様に広い訳だ。おそらく二度三度は同じ事を繰り返し管轄を広げているのだろう。そして今回もまた。

鬼の右腕を持ったまま神奈子は部屋を出て行き、残った俺は食後にお茶を一杯啜る。

「優し過ぎる、神様だな」

そんな事を口走っていた。

二日以内に神奈子の神社に多数の神々が集まった。これは神奈子が留守の間に里を守るために集めた者。嘗この土地一帯を治めていた神でもあるらしい。加えて宮司さんも残るらしいから里のセキユリティは万全を期した。

注連縄しめなわと二本の御柱を背中に背負う重装何のその。準備を整えた神奈子は悠然とした佇まいで俺の前に現れる。なんかみんな頭を垂れているんで形だけ俺も頭を提げる。まあ神奈子には本心からじゃあない事位分かつているか。

風呂敷には最低限の食料と酒瓢箪を持てるだけ持った。今回の俺の同行は観光の意味合いが強い訳だからね。

「なあ、神奈子。お前はこの喧嘩に勝つたらどうしたいんだ？」

「知れた事。その土地で信仰を得て私の格を上げるまで。そうすれば……いや、そんな所だ」

木々の中をゆっくり歩きながら俺達は話し合う。見た目や言動は偉そうなのだが、神奈子は誰よりも優しい。短い付き合いだがこれは分かる。でなきゃ宮司さんだってあんなに尽くしてくれない。

土着の神々土地を奪ってもそのまま追いやる事もしない。現に里

には人に混じってそういった輩もちろほら見受けられた。

「時間が勿体ない。そなた、飛べるか？」

「余裕」

さーで、諏訪大社まで一気に生きますか。

諏訪湖

諏訪湖の唯一出口が源流の天竜川を挟み片側に俺と神奈子。向こう側にはぎよる目の付いた帽子を被った神様、諏訪子がフラフラサイズの鉄輪を両手に持ち、ミシヤグジ様を後ろに控えさせている。流石土着神の頂点に立つ者。不穏な空気を読み取ったからこそこの場で俺達を迎撃しようとしたのだろう。あちらも闘つる気満々だ。

「我は大和より出でし八坂神奈子。洩矢諏訪子、貴様の国に新たな風を通してやる」

「余計なお節介さね八坂神奈子。黙って自分の国を治めてな」

何だろう諏訪子。威厳はたっぷりなんだけど頭下げたら負けな感じがするんだよね。神奈子になら下げても平気だけど。

それに既に二人とも自分の世界に突入しちゃって、俺アウトオブ眼中。もう君しか映ってないのかと。

さっさと俺は川から離れた安全地帯の丘だかに避難してどっと座り込む。持って来た盃に酒を注ぎ観戦準備完了。

「洩矢の神よ、参るぞ！」

「はは、土着神の頂点舐めるんじゃないよ！」

ビックサイズの御柱を両手で持って振りかぶり、縦にそれを振り下ろす。それだけで神奈子が充分強い事が分かるが、それを二つの鉄輪真つ向から受け止める諏訪子も同様に強い。

微妙な金属音がそこら一帯に響き渡り、辺りに警告音を撒き散らす。接近した神奈子に多数のミシャグジ様が襲い掛かる、が、空を飛んでそれを回避……したかのように思われた。

あろう事かミシャグジ様も空を飛んだのだ。しかし、俺は驚いたのだが神奈子にとっては予想の範疇だったらしい。背中の注連縄から何かミシャグジ様が嫌うような気を出して対処。加えて空が覆われる位大量の霊弾を放ち、更に巨大な御柱をおまけとばかりに投げ付ける。

「ちよ、神奈子さん。それなんて鬼畜っぷり！」

なんて思ってた時期が俺にもありました。地上の諏訪子の方を見ると、こちらにもまた大量の霊弾＋ミシャグジ様がスタンバっているじゃないですか。

何、戦争でも起こすの？ いや、起こしてるんだけどさ。コイツら加減つてのを知らな過ぎる。

思わず酒を嘔き出しそうになったものの、まあ俺も無茶やったな」と感傷に浸りながら観戦。御柱が放たれる度に水しぶきが上がるため、視界はあまり良好では無いが。

兎にも角にもこれほど大規模な闘いは久しぶりに目にする。天魔と鬼神（先代）がガチで喧嘩した時もこんな感じだった。尤もあの時は地上どころか空まで酷く荒れたんだけど。

ちなみに理由は夫婦になる前の鬼神が、邪々天をエロい目で見ていたと天魔が怒り心頭で宣ったから。なお、その際鬼神はおーちゃんに少し距離を置かれてしまった故にこちらも激怒。それが大喧嘩へと発展した。

「……阿保だったわ、あいつら」

と、闘いに新たな動きが見られる。箆手調べとばかりの弾幕合戦に区切りを着け、ミシャグジ様をその場に留まらせ諏訪子も空に移動。神奈子も背中 of 注連縄を外し諏訪子の方に目を向ける。

ああ、これからはガチンコで闘い合うんだな。天竜川上空に一時の休息が訪れる。ん、何か神奈子が言ってるな。

「これから私はこの身と御柱のみで闘う」

「奇遇さね。私も鉄輪とこの身だけで闘いたくなつた所なんだ」

次の瞬間、二人を中心に物凄い衝撃が辺りに波及した。両者の武器同士が再び交じり合ったのだ。

すぐに俺も妖力を出して対応。そうしなきゃ酒が零れちまう。と言うか俺の晩酌が妨害されるなんて果たしていつ以来だったろうか？ 神の底力には本当驚かされてばかりだ。

神奈子が御柱を投げ付ければ諏訪子は鉄輪を振るって叩き落とす。お返しとばかりに幾重にも増やした鉄輪を投げ付けては、神奈子もそれを再び用意した御柱を投げ付け相殺。

時折両者隙を見ては相手に近付き接近戦を仕掛けるも、何れも決定打にはならない。これは辺りが暗くなるまで続けられた。

辺りが暗くなると視界が悪くなるのだが、諏訪大社でスタンバってたであろう神々が、神力を使い辺りを明るく照らし始める。

やれ「頑張れ！」だの、やれ「負けるな！」だの様々な掛け声が聞こえてくるが、これがアウエー戦の嫌な所かな。ま、俺は神奈子を応援してる訳なんだけどね、ここまでアウエーってるのによく神奈子は集中して闘ってるよ。

「あ、また酒切れた」

大量に持って来た酒瓢箪もいつの間にか後数本しか残っていない。つーかあの二人の闘いが長過ぎるのだ。賭けてる物が賭けてる物だから、やはり双方共に必死になるのも当然だけどさ。

個人的には当然神奈子応援。勝敗分かっていようが短いながら付き合いがあるしね。

さて、闘い続ける事更に数時間。均衡は意外にも諏訪子から崩した。例の如く御柱を避けつつ神奈子に接近。ここで諏訪子は一計を為す。片方の鉄輪を捨てて両手で鉄輪を振るつたのだ。

速さを読み違った神奈子の脇腹にそれが直撃。ふっ飛ばした神奈子を追撃とばかりに、諏訪子は物凄い勢いで飛び掛かる。

何とか体勢を整えたと思ったら目の前に諏訪子。そっからはずっと諏訪子のターン。猛攻に次ぐ猛攻が神奈子を徐々に追い詰めていく。

あれ、これ神奈子ピンチじゃね？

何て思ってた時（ry

諏訪子の猛攻は夜通しで続けられた。流石の神奈子にも疲労の様子が
見られ、攻撃を続けてた諏訪子もそれなりに息が上がり始めていた
頃合い。

諏訪子の真正面から太陽が見え始めたのだ。お天道様の光に思わず
瞬きをしてしまう諏訪子。神奈子にはその一瞬だけで十分だった。
零距离からエクスパンデッド気味に御柱を投げ……発射がいいな。
それが諏訪子に直撃。そのまま諏訪子陣営の方までふっ飛ばして諏
訪子ノックアウト。諏訪陣営阿鼻叫喚。

神奈子も限界だったらしく、最後に一柱の御柱をその場におっ立
て、そのてっぺんで胡座を掻きながら眠り始めた。

や、まさに“大戦”。神々の力、確かとこの目に焼き付けたよ。

「いや、終わってみればすげえ荒れ様だな」

天竜川に突き刺さった多くの御柱やら鉄輪。これは一体誰が処理するんだろっと思いつつ、闘いに勝利した神奈子を回収することにした。

諏訪大戦観光ツアーもまたのご利用お待ちしております（前書き）

それほど長くはありません。一区切りしたかったので作りました。なお、この諏訪大戦編は神奈子のイメージを作者風味にテイストしてあります。自身のイメージ損ないたくないという方は、予めご了承ください。

……というか前書きがいつも注意書きなのは使用です。

諏訪大戦観光ツアーもまたのご利用お待ちしております

いや、実に見応えのある闘いだった。久し振りに俺も熱くなつたよ。

あの後直ぐに俺は神奈子を起こしに行った。周りに諏訪陣営の神々が纏わり付いていたが抜かりは無いらしく、きちんと結界を張ってから眠りについたみたいだ。

そんな結界を俺は難無くふっ飛ばす。周りの神々も一緒に。肩をとんと叩いて見るも起きる気配は見られない。しょうがないからビンタ一発。それも猪○さんばりのやつ。

パチンといい音を立ち、神奈子も「何事か！」て言った表情で慌てて起きる。○木さん、あなたのビンタは世界を越えても強烈です。とりあえず寝る前に收拾を着けると神奈子に忠告していざ、諏訪子陣営へ。「自力じゃ歩けない」と吐かしたので「神は死んだのか」って返してとりあえず煽って奮起させた。

「なあ、神奈子。言いたか無いがこの辺の信仰を得るのは無理だと思うぞ。如何んせん諏訪子への信仰が根強過ぎる」

「何を世迷い事を。強い者に惹かれる。古来より生物が持つ憧れに人間が抗える訳無かるう」

ふう、やつぱり。自分が信仰を得られるものと思つてらっしゃる。なんつーか……不憫だよな。今後の内容を知ってるだけにそう思っちゃうよ。

でもまあ大丈夫だろう。全力でぶつかり合った二人だからこそ通じる物があるだろうし。

未だに気絶ちてる諏訪子の元に俺と神奈子は降り立つ。神奈子の方は勝者の意地でまだ意識を保っているようなものだけど。

「洩矢の神よ、いい加減に目を覚ませ」

「う、ん……ああ、負けたんだな私」

お、意外とあっさり自分の負けを認めたな。ただやっぱり悔しいのだろう。悠然と佇む神奈子を見上げて、えぐえぐと泣き始めた。……すげえ罪悪感。幼女泣かせるとかマジ心が痛む。両者了解の元とは言えやはり後ろめたさを感じるな。

と、一体何処で見ていたのだろう。そろそろと人間が諏訪陣営に集まる集まる。その中から一人、見覚えのあるノースリーブ巫女服を着た巫女さんが代表として、諏訪子と神奈子の元にやって来た。

「神託を授かる役目を果たさせております東風谷の巫女です。今後の事を話される前に一つご忠告を」

「なんだ？ 申してみよ」

「では。この辺りの人里一帯の信仰の対象が、あなた様に移ることは先ずありません。皆、やはり崇りを畏れているためにそれは非常

に難しい「分かっておる」

「元からそんなこと土台無理な話だと分かっていた。私の隣にいる人間にも同じ事を言われて一度は強がったがな。冷静に考えれば分からない事ではなかった」

ため息を着き諦めたような表情で神奈子は話し出していた。あれだけ苦戦して勝利を収めたわけだから、みすみす勝者の権利を捨てたくは無かった訳だ。

ただどうも完全には諦めてはいないらしく、何やら顎に手を充てぶつぶつ呟きながら、自分の考えを纏めようとしている。

同様に東風谷の巫女も何やら同じ様に考え込んでいる。とりあえず勝負には負けたのだから何か吹っ掛けられるのは目に見えている。だったら双方納得のいく折衷案を早目に立てた方がいいだろう、つてな感じなのかな？ 当の諏訪子は泣き止んでも今は使えそうにないいし。

ぶつぶつ自己談議が続く事数分。突如両者の目が光った……様に見えた。

「「信仰の流れをごまかす！」」

要は“洩矢”の名前を神奈子自身が“守矢”と換^{もじ}つて対外的には神奈子が支配を強いつたかの様に見せる。

けどこの辺りの人里一帯は“洩矢”の神を変わずに信仰し続けてる訳だから、実際には前と変わらずに諏訪子が信仰を得ている事になる。

つまり神奈子が得たのは……一つの会社で言う会長の権利を得たって事でいいのかな？

「諏訪子様の面目は保てました」

「実質的に傘下に収められた」

「フフフフ」

怖っ、笑いに神格を感じ無え。話しも終え、そろそろと引き返す里の人達に土着の神々達。現在この場に残っているのは神奈子と諏訪子と東風谷の巫女に俺。

さて、そろそろかな？ 神奈子もよく頑張ったと思うし。

「おい……身体借りるぞ」

「お疲れさん」

だろうよ。ぼろぼろの体でよく今まで頑張って体裁保ったもんだ。俺に身体を預ける形で神奈子は倒れ込む。えっらい美人さんだからな、役得役得。流石に東風谷の巫女と諏訪子の視線が痛かったから、背中に背負う事に止めたけどね。お姫様抱っことかこのリア充かと。いや、リア充でも流石にねーよ。

でもまあこれで諏訪大戦も収拾が着いた訳だし、神奈子のオマケとしてこれから生活するのも悪くは無いんだけど、やっぱり性に合わない。一応これでも待ち人なのだが時間は余る程ある。来たい時にここに来ればいい。

「ったく、餓鬼見てえに眠りやがって。俺からして見りゃ手前えらなんざ皆子供にしか見えねえんだよ」

「え、それって？」

「巫女さん、人を見た目だけで判断しちゃいけないぞ。じゃ、悪いけど神奈子頼むわ。こんなのだが根は優しいやつだから仲良くしてやってくれ。だからな、頼むよ諏訪子様？」

「あー、うー……分かったよ人間それがあんたの願いなら叶えてあげるよ」

「ありがとよ、神様。さて、一度俺は帰りますかな。じゃあなお二人さん。神奈子にはよろしく」あ、あんた名前は！」

やべ、すっかり忘れてた。

「乱れ治めると書いて乱治。それじゃあ“またな”」

SIDE 諏訪子

不思議なやつだった。霊力は全く感じなかったし、まさかと思って妖力を探ってみても全く感じられなかった。それでいて私らよりずっと年上だつて言う。本当何者だったんだろう？

試しに記憶を覗こうとしても全然覗けなかったし、一層謎は深まるばかりだ。

隣の巫女さんは特に何とも思つては無い見たいだが、神である私やおそらくこの神奈子と言う神もやつについては色々不可解な点について頭を抱えているはず。起きたら詳しく聞いてみるかね。と言うかコイツ

「お前さん、ずっと起きてたろ」

「……………」

「まさかあれが気に入るとか、あんたの感性を疑「諏訪子様！」

何だつてんだ巫女さん。声を荒げちゃって。だって私に勝ったあの神がまさかあの人間を……ってあ！

私の方からは横になつて神奈子の後頭部しか見えないが、巫女さんの位置からは神奈子の顔が正面から見える。

今度は落ち着いた声で「諏訪子様」なんて巫女さんが私に話し掛ける。

私とした事が迂闊だったね。神奈子が起きてたって事はあいつがここを去つ行くのを黙って見てたって事だ。つまり神奈子は……いや、ここから先は考えるのはよそう。コイツの誇りのためにも。

「まあ、その、なんだ。これからよろしく頼むよ、“神奈子”」

「……ああ」

非道く、震えた声だった。

スキマの埋め合わせ（前書き）

捏造＋マイナーネタ＝とんでもない事に

だんだん捏造が酷くなります。妄想という名の創作が施されます
がご了承ください。（特に次回は酷いかと）

スキマの埋め合わせ

比較的短い間だったけど中々濃い時間を過ごせたと思う。やっぱり何かをしながら待ってた方が充実するよね。

あれから俺は自分の小屋に戻ってそこでひっそりと生活。鍛錬や木彫りをしながら人里の者達とも怪しまれない程度に交流も交わした。

また、妖怪の山では独自の社会が築かれつつある。

あれだ、発展した人類。おそらく月人の原型が地上に残した機械やらの使い方を、どこその河童が研究したっぽい。

まだまだリペアなんて出来そうにも無いが、機械を分解しながらその仕組み学び取り、簡単な玩具を作るまでには発展してるらしい。たまに寝過ごした河童が湖に流れ着いては研究の過程を熱く語るから困る。いい暇潰しにはなるんだけどね。

ただ、そういう時は俺からも妖怪の山の情勢について尋ねる事もある。何でもトップは相変わらず鬼らしいのだが、「奴らは我等の研究に殆ど興味を示さない！」とよく激昂している。

対照的に天狗は「研究に積極的に協力してくれる、頭の上がない存在」と、どうやらない意味で河童に目をつけてくれた、大企業の社長さんらしい存在らしい。となると差し詰め河童は開発部って所か。

ただ年一度のど突き合いは未だに続いてるらしく、毎年新たな玩具を持って来ては鬨みに挑んでるらしい。連戦連敗らしいが。

なお、ここで俺が河童の作った物を“玩具”と発言してるのは、現時点ではその程度の働きしか見られないから。河童もそれは理解している。

「で、そんな俺に何かアイデアは無いかと」

「うむ、あんな機械を生み出すくらいなのだ。何か助言位は出来るだろう？ 現にその刀はこの世に例を見ない程立派な出来ではないか」

そうきたか。河童はどこか人間に友好的だなと思ってたらそういう事だったのか。まいったな。でもまあ、素人な俺でも一応言える事はある。

「開発のベクトルが足りねーんだよ。機能だ何やらに走り過ぎてお前らは大切な事を忘れている。より、小さく、よりコンパクトにだ！ 機能や性能に納得しただけじゃダメなんだ。それを如何に小さく纏める事が出来るってのも大切な事なんだ」

さーせん、適当こきました。でもさ、毎度毎度試作品として俺に持って来る玩具が、河童八人掛けで持って来る程大きな物だったらそうも言いたくなるよ。

「おおお！」と納得してくれた河童は「こうしちやおれん！ 早速会議だ！」なんて言い残して喜びのバタフライをして泳いで帰って行った。日本古来の伝説的な生物も、ここまで日常的だと泣けてくるわ。

「おーす、乱治。さっきのって河童かい？」

「ああ、今日は助言を請うて来たよ。で、後ろの体操着は相変わらずか？」

「体操着言っな！ 別にあんたがここ、怖い訳じゃ……」

最近新たに俺の小屋に集まるようになった萃香に、立派な一本角を生やした体操着改め星熊勇儀。俺のアイアンクローの前に数秒で屈した鬼だ。

あの“ケジメ”の騒動以来鬼から見事に脅威認定された俺だが、特に萃香は気にすること無く俺と交流している。

ただ、萃香だけじゃ何されるかたまったもんじゃない、と言う事で勇儀も自発的に付いて来てる訳だがあの様だ。あれであの一件は終わったのだから何もしないって言ってるのに。尤も、言い付け破ったらそいつは晩飯のおかずにするけど。

何はともあれこういった環境は本当に久しい。昔はよくおーちゃんやら邪々天やらが遊びに来てくれたからなあ。特に邪々天はチルノと一緒に毎日訪ねてくれてた。

曰く「ひ、暇だから来たんだ」だっけか。馬鹿だよなあ。顔そば向けたって耳が真っ赤だから照れてるのが丸分かりなんだよ。一応種族は違うからさ、気に入る奴が出来るまでは付き合ってたさ（酒を飲む友人としてな）

自惚れかもしれないが、俺に好意を持ってくれるのは凄いい嬉しかったなあ。

「ん。どした、乱治？」

「いや、昔の友人達を思い出してただけさ」

「お前に友人が？」なんて信じられないと言った表情の勇儀をアイアンクローしつつ酒の用意をする。

季節は夏。枝豆なんかあれば最高なんだが時代はそこまで進んじやいない。今日のつまみは一口サイズの燻製肉に、冬の乾燥する時期に例の果実を干して作った天然ドライフルーツ。

試行錯誤の上、ふっ飛ばす能力で水分を調整しながら作っていたら出来るようになった。なお、冬の間でも一応腐食は進むので、そう言った類の菌を毎日ふっ飛ばしていました。

萃香は燻製肉が気に入っているのだが、ドライフルーツの方は実は勇儀が気に入ってたりする。だからいつも勇儀には萃香より多めにドライフルーツを出している。

前に萃香より一欠片程少ないと駄々をこねられた事がある故の教訓だ。食い物の恨みは恐ろしいと言っし。

「で、あんたは今年もど突き合いには出ないのかい？」

「ああん？ ああ、あれね。俺が出たら俺が一番になっちゃうから今年も出ないよ」

「母さんの方が強い！」

「おお、ハモった」

ははは、まあ森の住人や鬼連中も誰もがそう思ってるだろうさ。
鬼神でさえもきつとね。

ちなみに二人は鬼神を母さんって言ってるけど、幼い鬼は皆そう
言ってるんだとか。勇儀ってあれでまだ幼いんだ。もう鬼は不老で
いいだろ。

「いや、相変わらず酒が美味いね」

「全くだ。この果実は山には無いしな」

「結構結構。で、今年は誰が鬼神の相手をするんだ？」

「んー、何でも“すき間”の妖怪が相手になると「マジで？」

いつ来るのかなあ、とは思ってたけどこの時期にあなた様は動き
出すのですか？ まあいいんだけどさ、生半可な實力じゃあ鬼神に
は勝てませんよ。

気になったが今はまだ接触は考えてない。ただ鬼神と闘うという
のには興味がある。今年のと突き合いは見に行こうかな。

二人は俺が強い興味を抱いたのを珍しがっており、「何で何で！」
と巻くし立てて来る。迂闊だったわ。流石に記憶をふっ飛ばすのは
可哀相なので、永年磨き抜いた話術で何とかその場をやり過ごす。

しかし“すき間”かぁ。何を目的にして鬼神を相手にするんだろ
うか？ 勝手な解釈だがまさか戦闘狂って訳じゃあ無いと思うし。
ま、当日を楽しみにしてますかね。

「あら、立派な氷像ね」

「あ、ありがとう」

どうしてこうなった！いつもの様に湖の岬で洗顔をし終えたらそいつはいた。何度か言ってると思うが、能力の特性上何か物事を察知する事は俺にとって造作も無い事。

例に漏れず“すき間”改め“スキマ”の妖怪然り。

紫の派手目なドレスに優雅な白い日傘。なんかパーマを掛ける時着けるあれみたいな形状をした白い帽子を、金の長髪の上から軽く被った見た目絶世美女。

ただその含みのある笑み。要は胡散臭い笑みを向けられた俺はただただ顔を引き攣らせるしかない。

「あら珍しい。大底は誰でも驚く」勘弁してください」

土下座。何か今コイツに付き合ったらとてつもなくどうしようもない事に巻き込まれそうだから。

身の上よい話して仲良くなるより今はまだ係わり合いになりたく無い。わざと妖怪にビビった人間役を装い、強力な妖怪の目を欺く……楽な仕事じゃ（ry

「何、コイツ。なんか阿保らし」的な視線を送られたが気にしない。今はビビったふりだ。絶対に目を合わせちゃいけない。

「……記憶も読めないっぽいし何故か境界も見当たらない。まあ本来ならモルモットが瞬殺コース何だけどまあいいわ。興が削がれちゃいそうだし」

そう言つて『うにゅ』なんて音と共に気配が消えた。

ふう、助かった。完全に気配が絶たれたか確認してからゆっくりと立ち上がる。しかし何たつてあいつがここに来たつて言うんだ。

“八雲紫”。境界を操る程度の能力の持ち主。チート。ともかくチート。今はどうか分からないが未来の幻想郷最強候補。今もこれから俺ならあいつに負ける事は無いとは思うけど、厄介事はごめんだからね。係わらないに越したことは無い。

「心臓止まるかと思った」

だからどうしてこうなる。久々に山に登ったら妖怪達によく絡まれる。いや、それはいいんだ。なんか与えるか鬼の名前を出せば直ぐ引いてくれるから。ただ例の広場に着いた時だ。

何で……何で山の妖怪達と紫率いる妖怪軍団が大量に向かい合ってたんだよ！ 何、今年は団体戦なんですか、そうなんですか？

速攻で自身の存在を隠蔽して安全地帯に退避。面倒臭い事にならないようにと祈りながら成り行きを見守る。

ん、なんか鬼神と紫が前に出て……ちょ、紫さん、マジすか！
一瞬でスキマホイホイしやがった。もう山の妖怪啞然。

「闘うと面倒だからちよつとズルさせてもらつたわ。でもよく聞きなさい。私達はこれから物凄く広い戦場で大暴れするつもりなの。これは嘘じゃないわ。で、あなた達の中にも『別の場所で暴れたい！』って者がいたら私について来て。極上の戦場を与えてあげる」

確信した。あいつ、月に戦争仕掛けるつもりだ。確かそんな話だった筈。

月ね。詳しくは知らないが多分行けば身の程を知るだろう。というか十中八九全滅だな。

とりあえず今は萃香と勇儀の確保。あいつら今にも爆発しそうな気配だし。そーつと二人の背後に忍び寄り、一瞬で小屋に強制移動。何が起ったか分からない表情をしていたが、俺の顔を見るや少しは気を落ち着けてくれた。

「乱治、母さんは無事なのかい？」

「ああ。あの胡散臭い奴がどっかに強制移動させたただけだからな。どっかで鬱憤を晴らしてから帰って来るだろうよ」

「そっか、良かったよ、勇儀い」

親離れは勇儀の方が早いらしい。年齢はおそらく萃香の方が上だとは思うが。

しかし月ね。あまりいい思い出は無いのは確かだ。月に行った連中は何故あの大戦を止めなかったのか。今更ながら常々思う。

どう言った理由で紫が月に戦争を仕掛けるのかは知らないが、この際それに伴うのもありだと思う。

今の俺なら月を粉々にふっ飛ばす事も出来る気がするし。でもそんなことは……いや、時と場合によつてはやる。それだけ俺の怒りはでかい。長らく経った今なお、だ。

「決まりだな。萃香、勇儀。悪いがちょっと寝ててくれ」

理由を問われる前に両者の意識をふっ飛ばす。暫くしたら気が付くからまあ大丈夫でしょう。

月に進攻する際に確か紫達はこの湖を利用する筈。それにさり気なく付いて行けばいいだけだしね。あ、身体も一応月使用にしないとね。妖力は一般妖怪並に抑える。

多分今日中に紫達は来るだろう。大きな妖力の流れがこちらに向かってるのが分かる。

「さーて。ある程度は鬱憤を晴らさせて貰うかな」

月面の攻防（前書き）

マイナーネタ入ります。しかも作者自身あまり理解してない状態です。ネタは『儚月抄』です。イメージを著しく損なっていると思われます故、気になる方はバックを強く推奨します。

月面の攻防

うわ、うわあ。うわあ。一言言わせてもらうなら「地球は青かった」。じゃなくてすごい数だよ。敵も、味方も。よくもまあ紫もこれだけの数の妖怪を集めたもんだよ。

今俺達地上組の目の前に見えるのは、未来兵器を兼ね揃えた月の軍隊。数にして俺らの四、五倍。更にガンダムっぽいビルスーツも見受けられるし……無理だろ。勝てんべ。

ただそのずっと奥には、俺だって最近見てなかった超高層ビル群が、所狭しと建ち列んでいる。一体月人は発展の果てに何を見ようとしているのか。まさか戦争起こすつもりだったら迷わずに滅ぼすつもりだけど。

さて。周りの妖怪達は目の前の珍しい形をした悪魔にしか興味を示して無いらしく、作戦もへったくれも無しに突っ込んで返り討ちの繰り返し。

そんな中紫は妖怪達には目もくれず、ずっと先にある高層ビル群に目を向けている。一種のカルチャーショックだろう。「こんなにも差が……」なんて零したのを耳に入れた。

俺から言わせりゃ予想通り。ま、こんなものだろう、ってレベル。同期の非常に強力な、俺の昔の友人クラスの妖怪が全員揃って居れば、まだまだ抵抗は出来たと思うけど。

「この分だと後数分で鎮圧されるし、早目に俺もやる事やっそこ」

久々に妖・霊力の隠蔽を解く。隠蔽を解いただけで、まだまだ力

は抑えているため特に注目とかはされない。

目の前に片手を翳し、ゆっくりと遠くにある一つのビルに照準を合わせる。少しずつ妖力を込め、大体溜まった所で発射。ビルに届くと思ったのだが、何か結界に阻まれて消滅してしまった。流石月、ここまで守備が固いなんて。

と、突如辺りに声が響き渡る。

「総員速やかに退避。汚れを被うために直ぐさま決着を付けます」

突如方向転換をして、速やかに退いていく未来兵器軍団。何が起こったのか分からないといった表情の紫だったが、気を取り直して急ぎ、スキマを用意してこちらも退却させる。

僅かな時間だったが、こっちの妖怪が半分も撤退しない内に、未来兵器軍隊は退却を完了させてしまう。

それと同時に、白いシャツの上に紺のワンショルダースカートを着た物凄く雰囲気のある女の子が、何やら扇子を構える様子が見られた。

ゾクッ！

久しく感じなかった究極極限に嫌な悪寒が、俺の背中を駆け抜ける。紫は必死に撤退活動を行っているために気が付いてる様子は無

い。

反射的に俺は紫の目の前に動き出しており、ギリギリで紫まで覆える程度に能力を発動出来た。

「あ、あなたは？」

「今はいい。それより周りを見な。後はあんたが帰れば撤退完了だぜ。敵さん、泣かせてくれるじゃねえか」

一振り。たかだかあの扇子の一振りだ。周りの妖怪達は一瞬で消えてしまったのだ。驚いた。文字通り消えてしまったのだ。それまるで何かを浄化するかのように。

もう一度あの女の子の方を見る。やっぱり駄目だ。あんなの俺だつて見た事が無い。

つて言うかいいきなり後ろに瞬間移動とか反則だろう。俺でさえギリギリ反応して紫の前をキープするだけしか出来なかったんだ。紫なんて反応以前に何が起きてるのか分からない状態だったよ。

今俺の目の前にいる金髪の少女は今まで俺が見た中で最も驚異的な存在かもしれない。旧・鬼神だつてここまで速く移動しなかった。

「とりあえずスキマ。地上でもう一度やり直せ」

何か言われる前に問答無用で紫を地上にふっ飛ばす。さて、これで足手まといは去った。ま、あいつはまだまだこれからだから。今死んで貰っても困る。

俺の当面の問題はと言うと、目の前にいる超弩級規格外の女の子。移動はおそらく何らかの能力かな？

ただその発動スピードはとんでもなく速く、あれは何て言うか。空間自体を入れ替えたと言う、数あるチートの中でも最上級にチートな能力で瞬間移動をしゃがったのだ。

ばねえ。あのスキマを有する紫がこいつの能力を感知出来なかったのだ。こりゃ無茶苦茶に強い。

「片方は取り逃がしましたがまあいいでしょう。あなたにも出来れば早急に去って頂きたいのですが？」

「……遠い昔。月の民が残した端くれが地上を制圧しようと戦乱を引き起こした。あなた達に何か関係性はあるか？」

おっとりした。だけでも威厳を誇示するかのように話し掛けてくる女の子。

これで俺が気にする程度の関係性が無かったら、幸か不幸か、闘う理由が無くなる。

但し引っ掛かる程度に関係性があったとしたら……この身が砕けるまで暴れるつもりだ。奇しくも目の前の女の子の返答しだいな訳。

「私は月で生まれましたので直接関係はありません。ですが……地上に住む。生きる。死ぬ。それだけで罪なのです。あなた達地上の生き物の罰は一生地上に這い蹲って死ぬ事。

この美しき地を穢した罪。せめて私、わたつきのとよひめ“綿月豊姫”が慈悲を持つてあなたに死を与えることで、地上に生きる事の罰から解放して差し上げましょう」

「そっか。それがあんたの答えね。だったら俺は……こんな場所ぶっ壊してやる」

もう駄目だ。こいつらは地上で末端が起こした大戦について何とも思っていないみたい。それどころか、地上に生きる事自体が罪なんて吐かしやがる。

腐ってる。あの大戦で死んでった者達。何より俺の友人達は何を思い死んでっ逝ったと思ってるのだ？ ……未来を繋げる為に死んでっただんだ！ それをこいつは……こいつらは！

何を言う前に女の子は扇子を扇ごうとする。俺は間合いを一瞬で詰め、その扇ごうとした左手首を掴んだ。

「穢らわしい！」

「飛べ」

手首に力を入れる寸前に豊姫が消える。同時に四方から浄化の風

がこちらに向かつて来るのを察知。その間僅か一秒足らず。

俺は能力を駆使し、全方向に能力を付加させた妖力を展開。事実上対処不可能な妖力。“不可妖力”とでも名付けようか。

これはあらゆる存在の干渉を受けない妖力。これなら多分豊姫つてやつにも、多少は対応出来ると思う。空間ごと妖力を移動させられたらどうしようもないけど、あの浄化の風は防げる。いや

「……どうやら私の能力がどう言った物か分かってる様ですね」

「何だか知らんが空間を弄るっばいな」

「まあ大体あつてますね。そういうあなたはどうも他者の干渉を妨げる能力をお持ちなんですな」

「ちょびつと合ってるな。と言うかまだ気付かないのか？」

俺の妖力を以ってすれば月全体を自身の妖力で覆う事だって可能だ。尤もかなりの妖力を消費するのがネックだが。

「何を世迷い事を」なんて表情で周りの気配を感じ取っているみたいだが、表情が固まった所を見ると漸く気付いたらしい。

別に俺特別性の妖力を空間毎別地域に移動させればいいだけなのだが、果たして豊姫にそれだけの力があるのか。要は俺の有り余る妖力を使った超力技である。

「くっ！ 舐める「ほら隙が出来た」

女の子？ だから何。はつきり言っただけ長年の怒りを更に煽られているのだ。加減なんてする訳が無い。

恨みつらみ積もった一撃を腹部に与える。衝撃で後ろにふっ飛んだ所を追い撃ちの如く、豊姫の腹部に足で踏み付ける。呻き声だけが聞こえたが正直気にならない。

こいつの敗因は三つ。一つ目は単純に最大妖……いや、感じられたのは霊力だから最大霊力の不足。二つ目は人生経験が俺より短い故の経験不足。それでも随分長生きだとは思うが。

そして三つ目。これは俺にも当て嵌まる事なのだが、能力を絶対に過信し過ぎているのだ。そもそも豊姫の能力と言うのは、俺や能力の影響を受けた“単体”自身には影響を及ぼさないが、“空間”毎“単体”を弄る事は出来るのだ。速い内に俺を空間毎捉えておくべきだったのだ。

早い内に例のやばい扇子攻撃を封殺され、加えて豊姫の能力を無効化した俺の作戦勝ちだわな。

尤も、空間毎俺の妖力を移動させられたら俺の負けだったが、例えばそれは不可能だったと思う。対象の存在がでかければでかい程、能力と言えど自身の霊力にも影響してくるのだ。月人より長生きしてる俺に、高だか千、二千年クラスの霊力では太刀打ちなど先ず出来ないだろう。

「結論。テメーは今ここで殺す」

怒りを煽った人物且つ、自分の脅威と成り得る人物を果たして誰が生かしておくだろうか。

足で踏み潰したまま、俺は氷剣“チルノ”を抜く。悪いな、豊姫。恨むならその歪んだ固定概念を恨んで死ね。

大きく振りかぶり一突き。だが残念な事に、俺の一撃が豊姫を捉える事は無かった。突如、上体左側面部に衝撃が走ったのだ。

油断した。攻撃を。しかも打撃系統のやつをこんなきれいに貫つたのは久々だ。数メートルふっ飛ばされた所で目に入ったのは、何だか似た感じの服を着た、豊姫そっくりな女の子。決定的に違うのは髪の毛で、こちらは淡い紫色の髪をボニーテールにしている。

「姉様！」って言って寄って寄り添っている所を見ると、姉妹ってやつかなと推測できる。まあいい、こちらにも念のため聞いておこう。

「その人、はしょって聞くぞ。過去に地上で起こった大戦に何か後ろめたさを感じることは？」

「無い。どうして私達月人が地上の事に気を向ける必要がある？」

そう言っただけは豊姫の片割れが俺に剣を向けて来る。確かにあれだ、中々に気合いが入った構えだ。つかあいつ、神降ろししてね？

何故分かったかは非常に簡単。さっきと雰囲気全然違うから。というか俺もすっかりし過ぎてたし。いつの間にか豊姫も起き上がり、その扇子を俺に向けていた。

「穢れは祓う！」

「汚ねーのはテメーらの方だ」

全力全開。真っ向から俺達はぶつかり合う。また厄介そうなのが現れて来たからさ、加減なんて愚の骨頂。気になるのは片割れが降ろした神。昔神奈子から聞いた事があるがあれは確か

「天照大御神ね。月に太陽の神とか矛盾してるだろうよ」

太陽を神格化した神だと言ってた気がする。や、それより流石神。剣捌きが速い速い。豊姫は豊姫で片割れの援護に性を出しており、様々な角度から霊弾が俺に向かって飛んでくる。それも全く予想も付かない所から。

それでも俺は二人を圧倒、と言う訳にはいかなかったと押し氣味で闘えている。そう、乱々流のお陰だ。

一体どれだけの月日をこれに費やしたと思っっているのか。ぶっちゃけそれほど長いとは言えないが、それでもこの二人を相手に出来るって事はそういう事。無駄な時間を費やした訳じゃあ無かった。

片割れが綺麗に俺の胸辺りを突いて来るも、バックブロー気味にそれを避けて、勢いを殺さぬまま刀の柄の先を片割れのテンプルにぶち込む。

鈍い音がして後ろにのけ反った瞬間に追撃、と行きたかったがそれは許されないようだ。今度は豊姫がああ扇子で俺の一撃を受け止めたのだ。

「良かった、姉妹愛はあるんだ」

「妹が降ろした神をも圧倒するなんて……あなたは何者ですか？」

「何でこれから死に行く奴らに俺の名前を伝える必要がある。もう一度生まれ変わってから出直しな」

もういい、疲れた。片割れの手を肩に掛けて必死に立ち上がろうとしてる姿は非常に微笑ましいけどさ、全く躊躇なんてする気はない。

月より遙か上空に飛び上がり、全体の七割程の妖・霊力に能力を付加して、自分を中心に大きく循環させる。始めは円を描くように循環してる妖・霊力が、次第に球体を擬える様に循環して行く。

暫くして出来上がったのは超規模の妖・霊力の球体。かつての大戦の際に未来兵器軍団を全滅させ、加えてその本拠地までを飲み込んだ俺の特技、“不死嵐”ふしがらす”

これはガチ技。イメージは元〇玉。相殺は多分不可能。大戦の時はサイズは今の三分の一程度だったけど、多大な爪痕を大地に遺した。

「なあ、最後に言い残す事は？」

わお、まだ挑んで来る。空を飛び俺に突っ込んで来る豊姫に、額から血を流しながら剣を翳す片割れ。片割れの方からは何やら複数の神格を感じる。あれは一気に複数神を降ろしたな。

特に物凄い勢いでこちらに突っ込んで来る片割れだが、俺の前ではこいつは無力。折角降ろした神々だが俺の能力で一瞬でふっ飛ばされてしまうのだから。

一気に力が抜けた片割れを前蹴りで。豊姫の方を頭突きで月面にふっ飛ばす。

さて、そろそろ頃合いだろう。

地面に伏してなお、気丈にも俺を睨め付けてる二人を見下ろし、“不死嵐”を右手に移動させる。これであいつらも多少は報われるかな？ ゆっくりと、右腕の力を抜い「待ちなさい！」

月面の攻防（後書き）

ごめんなさい m (——) m

ここまで主人公無双するとは思いませんでした。しかも非常に無理矢理であつたので……何か気になる事がありましたらお気軽に感想の方にお書き下さい。“答えられる範囲”でお答えします。

なお、○キればキャラについて多少は分かります。作者が参考にはしていますが……

言い訳

手を抜いたら主人公が瞬殺されてました。

終幕・一つの節目（前書き）

沢山の感想ありがとうございますm（――）m

碌でもない返答かとはございますがお許しください。

なお、感想以外の連絡がありましたらユーザーページに直接ご連絡下さい。多分反応は出来ます。

さて、今回も例の如く短いです。しかも詰め込み過ぎたので色々突っ込みどころ満載です。ご了承ください。

終幕・一つの節目

長い銀髪の三つ編みに、左右青赤の特殊なツートンカラーの服装。頭の上のナース帽は自身の職業を如実に表している。

やこころえいりん
八意永琳。月の頭脳とも言ったっけか。俺のイメージで言うなら物凄く頭のいいやつ。

さて、そんなお方が大声を出して俺に制止を呼び掛けたのだ。そこには何か重要な理由があるのだろう、と考え俺は今一度“不死嵐”を押し止めた。尤も、まともに闘り合おう、何て世迷い事を言わないだろうと信じて。

「私は“八意永琳”。そのままの状態で聞いて頂戴。このまま月を破壊したら地上だって無事では済まないわよ」

「あー、忘れてたわ。でも規模縮めて月面を壊滅させる事も可能何だけど」

俺とした事がうつかりしてた。月を無くしたら地球だってそれなりの影響を受けてしまうんだった。

ただ、まさかそれだけで俺が思い留まるとでも思ったのか？ 巨大だった一個の球体をサッカーボールサイズに幾重にも分裂させる。これなら月の表面。つまりはこいつら月人だけを消滅させる事が出来るしね。

もう一度永琳を見ると、あれ？ 何故か大きな溜め息を着いている。……ああ、忘れてた。これこそ完全にうつかりしてた。

「違うな。月人にとっては地上なんてすぐにでも消滅させることが出来るんだな」

「そう言う事よ。私達とてただでやられるつもりは無いの」

「成る程ね。俺も地上は無くしたくないし、今回は思い留まろう……
…と言いたい所だが、最後に聞いておく。あんたにとって月人の端くれが地上で引き起こした大戦とは何だ？」

おそらく永琳はその大戦時に存命のはず。あいつが漂わせている
霊力には、僅かに地上にあるそれを感じるのだ。

だからこそ俺は信じたい。先の二人が述べたクソみたいな回答以外
のものを。いや、そうでなかったらもういい。月を滅ぼすのに何
の躊躇もいらぬ。あつちは同士討ちみたいな事を言ってるが、別
に俺は相手のそれをもふっ飛ばせばいいだけだから。

つまりはこの駆け引きは始めから駆け引きとして成り立っていない
訳。それでも俺が押し留まってるのは。

「そうなのね。あなたが生き残りだったのね。さっきのあれで地上
の愚か者達を殲滅したのも」

「俺だ」

「そう……あれは私達、月の民の前身が責任を放棄した故に起きた人災。あなたには謝っても謝り切れないわ」

「で？」

「許して貰うつもりはさらさら無いわ。出来るなら私の命と引き換えに今回は見逃して欲しい」

悩む……訳が無かった。理由はどうかあれあの大战について漸く過ちを認めてくれたのだ。今俺がここで永琳を殺したら、それこそ月の民は俺を恨みながら死んでいくだろうから、俺としても寝覚めが悪い。

簡単に許すことは出来ないが、ここらへんで一応の区切りは着けておくべきだとは思ってはいたわけだから。

まあ二人程調子こいた存在がいたけど、いつまでも尾を引く程俺も子供じゃない。永琳庇ってる二人の姿を見るとそんな気も失せる。

とりあえず氷剣チルノを構えて、永琳の髪を狙って横薙に振るった。

「その心意気やよし。髪は女の命って言うし。でも忘れるな。“今回は”見逃しただけだから。俺の気が変われば月なんて軽く滅ぼせる」

「……そうね。金輪際あなたを怒らせる事だけは私としても避けたいわね。と言う事で分かった？ 豊姫、依姫」

「「よがっただです、師匠」」

全く、圧倒的強者に出会った時の対処法くらい永琳も教えとけての。つーか永琳も永琳で冷や汗一つ掻かないなんて、一体どんな修羅場潜り抜けてんだか。

終わって見れば実に締まりの無い終わり方。ただこれはこれでよかったと思う。ある程度の恨みつらみの鬱憤は晴らせたしね。

月人の考え方も変えたい所だったけどやはりそれは遅過ぎた。そんな考えに至ってしまう奴らも許せないが、元は俺がいじめてないで早い内から行動に移しておけば、未然に防げたかもしれないのだから。一体どれだけ長い時間いじめていたんだ俺は？

目の前で泣きじゃくる二人とそれを大きく受け止める一人。考え方は違えど本質は同じらしい。親しい人が居なくなったら悲しくなるのだ。

たじたじになりながら苦笑いを浮かべている永琳を見て「髪切つて悪かったな」と謝ってから俺は月を去った。

彼の気が変わったのかどうかは知らないが、私は未だに生きている。やりたい事はそれほど見当たらないが、強いて言うならこの二人を一人前になるまで面倒を見る事だろうか。彼みたいな存在にも対応して貰わなくちゃならない時が来るかもしれない。

いや、何よりこの二人が無事でいられるようにいるためにだ。別に月が滅んだって構わない。地上に逃げ延びればそれで事は済むのだから。

ただそうする際にこの二人は素直にその選択をするだろうか？

「月で果てます！」なんて事を先ず間違いないと思う。

そういった点も踏まえてこの二人にはまだまだ教育をしなくてはいけない。私達月の民の前身は“穢れ”云々より、元は地上で犯した罪の大きさに耐え兼ねて、ここへ逃げ去ったのだから。

「いい、豊姫、依姫。これから話す事は今後も決して忘れてはいけない事。私達月の民が月の民では無かった頃の話……」

私はゆっくりと語り始めた。

閑話・山菜と山の住人（前書き）

ネタが浮かばない今日この頃。いつもよりちょい短いですがお楽しみ頂けると幸いです。

閑話・山菜と山の住人

月から帰った後は予想に反してこれと言った事は無かった。萃香や勇儀が文句を言ってきたが「つまみを無くしていいのか？」と強気に出たら直ぐにへたれてくれた。

また、物凄く強い妖力を月から感じ取ったとか。その辺は俺も知らんぷり。それ知られたら更に面倒臭い事になると容易に予想出来る。

あ、鬼神は紫と早い内に和解したんだと。今度はちゃんと真正面から紫が鬨いに臨んだらしく、鬼二人曰はく「久々に全力を出せたって母さんが言ってた」らしい。実力が拮抗して決着こそ着かなかったものの、近年の妖怪の山の中では、後世に伝えるべき名バウトであつたとか。

俺はと言うと月の一件以来は特に前と変わらず飄々と生活している。尤も今は人里とは交流しない時期に入ってるため、やる事がほとんどないのだが。まあ二トだな。鍛錬はしてるけど。

「……山で山菜でも調達するかな」

背に籠を背負い、せつせと山を登る事数分。比較的近場で食べられそうな草やら葉っぱやらを探すことにしたわけだが、今一よく分からん。そもそも妖怪の山に食える山菜があるかどうか不明だし。黄色いごぼう（つばい何か）？ 食べる勇氣があるだろうか？ ある訳がない。別に食ったって問題はないのだが、まずだけは能力でもどうにもならんのだ。

何か見分け方法は無い物が……と、突如俺の頭の中に雷の如く閃きが！

「あやややや！ 山に人間が「グツタイミンッ！」

黒いスカートに白いフォーマルなシャツ。この時代を無視した服装でコイツが妖怪だと言う事が分かる。加えて赤い高下駄を履き、八手の葉で出来た団扇を所持。そして背中黒い羽根。

天狗。何を言うまでもなく天狗。しかも俺でも割と知ってる未来の幻想郷最速候補。その名も“射命丸文”。

そうか、時代はもうそこまで動いているんですね。俺も長く生きた甲斐がありました。……じゃなくてコイツに毒……でもなくて味見をさせればいいんだ！

「人間。ここを妖怪達の山と知っての「ほら、食べ」

「いや、だから妖怪の山「さあ、食べ」

「あの、妖怪「さっさと食べ！」

文の口が開いたタイミングを見計らって一口大の黄色いごぼう（みたいなやつ）を放り込む。だが入れただけでは駄目だ。

何が起こったか分かっていない文の背後に回り、無理矢理口を閉ざしてやる。「ほがつ、ほがつ」と何やらパニックを起こしているが気にしない。妖怪は丈夫だから。

そして最後の作業、含んだ物を噛ませる作業へ。今度は顎を無理矢理動かす。『さくつ、さくつ』と何か歯ごたえのある物を噛んだ時に出る特有の音を立てながらごぼう（だと思いたい）を噛ませる。ちなみにその間僅か数秒。未来の幻想郷最速もびつくりの速さである。ただ、誤算もあった。

「むきよ！ひらひま〇

」

」

「……科学の進歩に失敗は付き物さ」

正直済まんかったと思ふ。診断したところ特に命には別状無いのだが、そのあまりのまずさにショックを受け、気を失うにまで至っている。妖怪の気を失わせるごぼう（でいいだろもう）とか聞いた事ねーよ。

流石にこのまま放置というのも酷な話なので、面倒だが起きるまでは居座ってやることにした。べ、別に気にしてる訳じゃないんだからね……ってこの歳で何考えてんだろ、俺。

自分の頭の出来に酷く絶望しつつも、ふとある考えに思い至る。別に今度は相手を気絶させるような事ではない。

落ちていた調度いい太さの枝を拾って、手持ちの小刀（チルノ作の氷製）でどんどん削っていく。お詫びのお品を与えて許して貰おうと思った訳。

「ふつ。またつまらぬ物を作ってしまった」

秀逸の出来だ。果たして誰が文句言えようか？ いや、誰もが文句を言いたくなるだろう。

この洗練された曲線美。。ふてぶてしいまでの一〇〇万ドルスマイル。そして無駄という無駄の全てを省いた究極の作り。

ゆっくり射命丸。もうあれだ。きもかわいいってやつ。正直あげるのが勿体ない位に。

ちようにどよく当の本人も目を覚ましてくれたので、お詫びの意味も込めてもう一個加えて譲ってあげよう。

「はっ！ 私は一体……って人間！ よくもとんでもない物をこの口にぶち込んでくれたな！」

「卑猥、じゃなかった。まあ正直すまんかったと思う故、お詫びと言ってはなんだがあんたを元にして作った木彫りを受け取って欲しい」

「え！ いいんですか？」

先程の怒った顔はどこへやら。爛々とした笑顔を見せてくる君はとっても魅力的だ。まだまだ天狗って言ってもコイツは幼いんだな。

じゃーん！　なんて効果音を自分で言ってみたりして、ゆっくり射命丸お披露目タイム。「これが、私？」なんてビューティーなんたらの喜びを表現する前の状態なのだろう。酷く身体を震わせている。

ふっ、やはり永年の経験は伊達じゃなかった。人に感動を容易に与えるまでの腕になってしまったようだ。“感動を与える作品を作る程度の能力”って付けてやってもいいんだぜ？

「ふ、ふふ、ふざけるなああああああ！！」

ですよねー。つー事でまあ悪ふざけはこの位にしておこう。流石にこれ以上弄ったって仕舞いには泣かれるだけだし。

「冗談、冗談」と宥めつつもう一つ用意しておいた三品目をプレゼント。今度のはマジなやつ。残念ながら塗装は出来ないが、それを抜きにしても本当に秀逸の出来。唯一の心残りと言えばモデルよりカッコよく作ってしまった事かな？

気に入ったおもちゃを買って貰った子供みたいに目を輝かせている所を見ると、そういった失敗など杞憂でしか無かったと思うけど。

「凄いです！　私カッコイイです！」

「喜んでくれてよかったよ。じゃ「いや、それとこれは別だから」

き、きたねえ！ さっきまでのあの笑顔はなんだったのさ！ 汚れ切った大人の世界を久しぶりに垣間見た俺は、文が言う自分の上司に俺の身柄を渡すんだと。

多分大天狗辺りだろうか。まあコイツよりは話が通じるだろうと見越して、黙って着いてつてやる事にした。

道中文に似た天狗が「それ餌？ それ餌？」なんて言ってくるもんだからヒヤヒヤしてたが、そこら辺はしっかりしてる文はきちんとして「上司に引き渡すんです！」と、ぷりぷり怒りながら俺を引き連れて行った。

「大天狗様、人間が山に紛れ込んでいたのですが」

「人間が？ ん、ああ。そなたか」

「よかった、知った顔で」

実は天狗とは河童との交流を通してちゃっかり面識があったりするのだ。今回の文の上司は運よく俺の見知った顔だったので、早いに疑いも晴れそうだ。

……というかいつの間にコイツらは建築術を学んだのか。山奥の中にそれなりに大きな小屋。中には木製ながら机と椅子がずらっと並んでおり、鴉天狗に哨戒天狗とが机に向かって必死になって書類を片している。

そんな姿を一瞥出来る場所に机を陣取りどんと構えてる大天狗の様子は企業の上役さながら。もうこいつら人間でいいだろ。

今一状況を掴めておらず一人混乱している文を持ち場に戻るよう
に指示し、大天狗は俺を奥の接待室に案内してくれた。

「何、こちらの手違いだ。少しはゆっくりしていけ」

「いや、ソファーとか……まーた河童か」

「ふはは。あやつらの腕には驚くばかりだ。我等天狗はそれに綾か
つて山の地位を築いていったに過ぎん。尤も鬼には勝てんがな」

「それでいいさ。身の程を弁えれば鬼は手出ししないさ。ところで
……」

その後も大天狗と当たり障り無い事を話し、二、三アドバイスを
残してこの場を後にした。ついで、見返りには山の山菜と、その見
分け方を教わったから俺の登山は無駄に終わらなかつたようだ。

で、帰り道なのだが既に山は真っ暗。気を利かせてくれた大天狗
は俺に護衛の天狗を寄越したのだが

「何で私が……」

「そう言ったって。また木彫り作ってやるからさ」

またコイツ。正直護衛なんていらないのだが。まあここ最近は力を発揮する機会がほとんど無かったので、天狗からは『鬼と仲のいい河童のご意見番的なただの人間』という位置付けをされた故の護衛って訳。

「さあ、ばりばり護りますよー！」と急に張り切り出した現金な天狗を尻目にずいずいと山道を行く。

何を彫ろつか考えていたが不意にあいつを思い出す。そういえば文の能力はどこと無くあいつのそれに似ているな。

早速手頃な枝を拾い歩きながらそいつを彫る。そうそう、あいつは今の天狗程大きくなかって……

ゆっくり歩いて作っていたため住まいに着くのは遅くなったが、彫っていた作品はきちんと完成させた。

「あれ？　今回は私じゃあ無いんですね。まあカツコイイからいいんですけどね。ちなみに誰を模したんですか？」

「ん？　そうさな。俺が思う理想の天魔様、かな？」

またもよく分からないと言った表情の傍ら、「きめえ」と文にどストレートに呟かれたのに気付いたのはまた別の話。

旅人は暇を潰す（前書き）

ども、作者です。では早速。

射命丸のゆっくりについてなのですが、これに関しては申し訳ありませんが、各々の捉え方をお願いします。統一はされてない（はず）です。納得がいかない方はお手数ですがご自身で調べてください。この作品ではゆっくり射命丸で通します。

ちなみに『らめえ丸』を想像して興奮した作者はやはり病気かもしれない（「ダメだコイツ、早く何とかしないと」的に考えて）

旅人は暇を潰す

「れい○ん！ れい○ん！ れい○ん！ モー○ンの右い！」

最近取り入れた暇潰し。使えそうな技をパクって見ようかなあという試見は思いの外面白くなかった。と言うか“れい○ん”を苦もなく指先から放ってる俺は中々に重症だと思う。

さて、相変わらずの長い待ち時間に飽き飽きしている俺だが、今一度原点に返り自分の能力という物を見直して見たいと思う。

そもそもこの“あらゆるものをふっ飛ばす程度の能力”というのは極めてチート性が高い。ふっ飛ばすと言うのはただの決まり文句で、あらゆる物質を手に触れる事無く自在に操る事が出来ると言っても間違いではない。

更にふっ飛ばす対象。これは物質や他者に限ったものではない。例えば記憶なんてのも一つの対象だ。

一度だけ自分の前世世界の記憶をふっ飛ばそうとしたのだが、「それだけは越えてはならない一線だろう」と自分に言い聞かせ、以来“記憶”をふっ飛ばそうとはしていないんだけどね。

他にはあらゆる物の限界。肉体や成長などの限界をふっ飛ばしたからこそ、長い年月俺は自身を鍛えられるのだ。

能力乱用して無双しまくってもいいのだが、いつか俺の能力を完封し得る能力持ちが現れるかも分からんしね。何時でも対応出来るように常に進化をし続けてる訳だ。決して「暇だから」と言った安直な理由から鍛錬をしている訳ではない。断じてない（大切な事なので二度言いました。ただ最近には確かに暇だからという理由もあるっちゃある）

そんな能力を活用した鍛錬の結果なのか、素の實力ですら今は無

双を行えるまでに至ったのはもう昔の事。今は能力以外の力を極稀に使って身を護っている。尤も長年培ってきた話術を以って争う必要すら無くなってきているのだが。

「あゝ、このフラストレーションはどうにかならんものかね」

昔はよかった。チルノですら能力使わない俺と全力で三分は闘えた。退屈だと思った時はあつちの方から向かって来てくれたので、すぐにストレスは発散出来た。

今はどうだろう。勇儀や萃香が時折挑んで来るがどうも物足りない。全く消化仕切れない。

個人的には気に食わないが月のあの……片割れ？ 依姫と言ったか。あいつなら多分その問題を解決してくると思うのだが、まあ闘ってくれないだろう。それどころか豊姫や永琳とか呼び出して、月の総力を懸けて俺を駆逐しようとするかも。無駄だけど。

「考えてもしゃーねーし、誰か相手を探しに行くか」

つーわけで再び旅に出ようかと思いに至ったため、前回と同様の持ち物を用意。

加えて今回は萃香と勇儀のために、能力使って急ぎで大量の燻製肉とドライフルーツを能力作り置きしといて、河童達に書き置きを残しておく。内容は『研究のアイデア探し』とでも題しておこう。

今回の旅の目的は強者もとい、俺の退屈凌ぎの相手を探し出す事。方角は適当。行き当たりばったりで行く。

大量に出来上がった一口大の燻製肉を摘み、いざ行かん。前のように湖を大きく迂回してから、適当な感覚でふらふらしてみようか。

始めは軽いノリでふらふらしてたんだ。でもさ、考えてみりゃ分かるよね。森の中で生活してんのは何も妖怪だけじゃないってこと。見た目は村の好青年の俺がほぼ丸腰の状態で森をふらついてたらね。こりゃ絶好のカモだよね。

山賊さんがログインしました。乱治さんはログアウトしようと思いました。でも山賊さんはそうはさせてくれません。

「身ぐるみ置いて（ry」

「かもーん」

イラッとした乱治さんは数十人からなる規模の山賊をフルもつこしました。山賊さんは涙目です。

逆に山賊さんから乱治さんは何か使えそうな物を奪い取っています。山賊さんは更に涙目です。

「外道……で、それが何？」って話です。ホツカホカに暖まった懷に氣をよくした乱治さんは、鼻唄交じりにこの場を後にしようと思いました。山賊さんは直も涙目です。

「ま、待ってくれ！　それだけは勘弁してくれ！」

「あぁん？　無理無理。お前らも同じ事してきたんだろ？」

「確かにオラ達は人の道を外したど畜生だ。だども……おら達も生きるために今回見たいな事をしてる！　好きでやってるように見えるか？」

まあふざけるのもここまでにしよう。ボ口を纏った山賊かぶれが

くしゃくしゃな顔をしながら俺の足元にしがみ付いてくる。んなもん知らん！とはつきり言えがいいのだが、気持ちは分からないまでもない。

俺に当たったのが運が悪かったと言えばそうなのだが、きっとコイツらは今後も同じ事を繰り返すだろう。誰だって死にたくはないのだ。

この時代。まだ平安が始まっていない頃だろうか。詳しくは知らないが人々の生活は相当苦しいものだったと記憶している。

このまま見捨てるのは簡単なのだが一応俺は人間だ。人並みの情はある。加えてコイツら程度を何とかする力も持っている。

当初の目的とは違うがいい暇潰しにはなる筈だ。ここでコイツらをもこ……ばこったのも何かの縁。自立くらいさせてやった方が世のため人のためだろう。

「おいおめえら。これから俺を案内しろ」

「え？」

「分かったらさっさと手前えらの集落に俺を案内しろっての。別にここで野垂れ死にたいなら別だが？」

森の奥の木々の開けた所にそいつらの集落はある。相変わらずの
竪穴住居かな？　なんて思っていたがそうでもなく、案外きちんと
した造りの小屋だったりした。凄くボロボロだったけど。

元々この集落は朝廷の目をかい潜り独自に発展してたらしいのだ
が、つい最近になってとんでもない大妖怪に目を付けられたらしい。
九尾の狐。直接目にした事は無いが、前に流れて来た噂によると
それほど畏れる存在でもない（妖怪達によると）。

やっぱり前世の某忍者漫画の“あれ”のイメージが強いから、俺
も話を聞くまではおっかねー存在とイメージしてたんだけどね。

ただ膨大な妖力を有しているのは事実らしく、一度その逆鱗に触
れると死ぬまでトラウマとして纏わり付くとか。それが恐ろしい事
に人間はもちろん妖怪でも。

「昔から九尾の狐は村に幸運をもたらしてくれるという事で、村一
丸となつて丁重にお供え物をして毎年奉っていました。だから村に
も災厄は持ち込まれず、朝廷の目だって避ける事が出来たのですが

……」

「それが何故か今年は大暴れして今の惨状に至るって訳か」

またまた涙目の山賊もとい村の代表者。いや、お前は体格からして山賊の方が天職だとは思うよ。

ただ「今年に限って大暴れしちゃいました、テヘツ」だと洒落じや済まないらしく、冬になったら村人全滅と言う壊滅フラグが現在立っているらしい。

「九尾の狐に頼り過ぎだろ」とも思ったが案外そうでも無いらしく、九尾の狐への信仰は半ば社交辞令のような物らしく、今回見たいに農場を非道く荒らされなければ自分らで自給自足は出来るんだとか。

まるで九尾の狐が暴れた理由が分からない。「信仰でも求めているのかな」とも考えたが、だったらもつと早い内に怒りは爆発させてると思うし。

「九尾の狐は何処にいる？」

「毎年決まった時期に現れるんで、特に私共は場所把握してません。ただ森の奥に妖怪すら寄り付かない場所があるらしく、多分その辺にいるかと昔村に流れ着いた賢者様がおっしゃっていました」

賢者って誰よ。もう色々謎だらけで訳が分からない。ただ九尾

の狐の居場所が分かっているのは大きい。早速足を運んでそいつに理由を聞いて見ようかと思う。

必死に村人は俺に静止を呼び掛けるが、もちろんそんなものは知らん。結局村人も最後は諦めて俺を送り出してくれたが、「なんまいだ〜、なんまいだ〜」とお経を唱えるのは止めて頂きたかった。

森の奥の開けた所に確かにそいつはいた。姿形は狐そのもの。ただ大きさはそれらの比ではない。加えて尻尾の数も九本と、「それ、なんてナ〇ト」とツツコミたくなるのは俺だけでは無いはず。

ただ圧倒的に違うのは“邪気”が全く感じられないと言う事。九尾の狐を直接目にしても、コイツが暴れる理由が全く分からないのだ。

いや困った。何て切り出したらいいか分からない。そんな俺の心情を察してくれてか、有り難い事にあちらから俺に話を持ち掛けて

くれた。

「人間がここに来るとは珍しい。聞きたい事は村での一件か？」

「ああ、話が早くて助かるよ。で、暴れた理由は？」

「ふはは。なーに、主と一緒にだ。暇だったのさ」

「……お前見たいな奴、嫌いじゃ無いぜ」

はは、大事な事を忘れていた。妖怪が村を襲うのに果たして理由があるだろうか？ いや、ない。結局九尾の狐だってその例に漏れず、気が向くままに暴れたに過ぎない。

それを人間はやれ、『守護神だ』やれ『幸運を運ぶ』など勝手に持ち上げては失望する。

今までは“たまたま”九尾の狐の気が向くままに、人に力を貸していただけであって、今回は“たまたま”村で暴れていただけなのだ。本当、清々しい位に純粋な妖怪だ。

と言うか俺の心情をも理解し得るなんて、コイツ一体何者よ。……いや、理由なんかいらぬか。コイツはただ気が向くままに俺と闘っただけなんだから。

「さて。暇潰しと行くか」

森の中で究極の暇潰しが始まった。

暇はすぐに潰れる。故に暇なり（前書き）

スランプ。課題が増えて妄想する暇がありません。だから題名には“暇”という言葉が入っただけで、直接物語と関係ある訳ではありません。

暇はすぐに潰れる。故に暇なり

え、闘い？ 俺の圧勝ですが。

あれから俺は村の救世主として盛大に祭り上げられた。いや、正直九尾の狐を倒したからではなく、大量の熊を狩って村人の食料を確保してあげたからなんだけどね。もちろん村ではその日の内に大宴会。ご馳走はもちろん熊鍋。

どこからともなく酒も注がれ、隣の熊……じゃなくて山賊よりも山賊らしい村の代表者はいらぬ気を利かせて大量に肉をよそってくれる。

いや、旨い事は旨いんだけど調味料はどうしたんだよ？ なんて事が言える筈もなく「うまうまー」と食い続ける事数十分。流石に飽きてきた俺は、例の要領で未だに余っている大量の熊肉を燻製肉に仕立てる事にした。

と言うか熊も熊で一丁前に智恵を働かせて集団で俺に襲い掛かるなつての。

「救世主様、何してるだか？」

「ん、肉を長持ちさせるための作業だけど？ このままだとすぐにダメになるからな。今やってるのは特別な方法だけど、あんたらにも一般的なやつを教えるからちゃんと覚えろよ。多様な肉に応用効くから」

うわ！ いつの間にか俺の周りには人、人、大勢の人だらけ。何

となくこの村が独自の発展を遂げた理由が分かる気がする。

手取り足取りとまではいかないがやり方を口頭で説明。流石に紙は無かったが、何やらまっ平な木の板にメモを取っている様子が見受けられたので、ちょい早口で説明を続けた。

ただ説明が終わったのはかなりの夜遅く。俺が話終わると同時に村の代表はボタンと木の板に顔を突っ伏した。いや、最後まで起きて話を聞いたコイツはたいしたもんだよ。

「さーで、俺も寝る「ま、待ってよ兄さん！」

声の元に顔を向けると、ぞろぞろと木陰から小さな子供達が現れる。一応気配は感じ取っていたのだが、何か悪さをするわけにも見えなかったので放置していた訳だが……夜更かしはいけないな。

「お前えらもさっさと寝ろ」と声を掛けたのだが全く寝ようとする素振りが見られねえ。

何なんだ一体。誰かおねしょでもしたのか？ ひそひそと話を続けていた子供達だったが、そいつらの代表格っぽいちよつと小熊見たいな体型をしたガキが、俺の前にどつと座り込みなんだか胡座まで掻き始めた。

「兄さんがどうやって九尾の狐をやっつけたか知りたい」

小熊体型のガキに続くように他の子供……もうガキでいいか。ガキ共もそろそろと俺の周りに集まり出し、同様にどつと座り込む。成る程。コイツらにとってそういった英雄譚ってのは一種の憧れだからか。斯く言う俺も子供の頃は戦隊者のヒーローに憧れた口だから、コイツらの気持ちってのはよく分かる。

「しゃーねー」と思いながらも夜遅くまで頑張って起きてた子守唄になればと思い、ついさっきあった九尾の狐との闘いについてゆつくりと話し始めた。

妖力の大きさで言うとなんて俺が闘って来た妖怪の中で上位クラスに入ると思うな。ここまで強そうな妖怪は最近で言うとなん・鬼神以来か。現・鬼神よりは強くはないと思うがそれでも久方振りの獲物だ。一分は持つて欲しい。

先制したのは九尾の方。目にも留まらぬ速さで確実に俺の胸元に爪を入れようとする。

だが甘い。基本俺は相手に“先制”させてあげるのだ。加えてこの程度のスピードなんて既に経験済み。はつきり言っていたい事はないように見えた。

とまあこれは完全に俺の怠慢。完璧に避けたと思ったら俺の甚平の胸元がきれいに裂けていました。

驚いたね。避けたと思ったら服が裂けていたとかさ。俺ってもしかして狐に化かされてましたか？っての。

ただ驚いたのは俺だけではないらしく、あっちの方も仕留められ

なかった事に目を見開いていた。

「お前、何をした？」

ぶつちやけ言つと俺の場合は無意識の内に避けていただけなのだが、そこまで俺を追い詰めたあつちの技が全く以って分からない。きつと九尾の方も同じ事を考えていると思う。

まあ尤もあの程度の攻撃力で俺を倒そうなど、リアルに千年は早いんだけどね。

何をしたかは分からない。けど今度は真面目に対応するから問題ない。再度胸元に爪を立ててきた九尾の動きをギリギリまで見続ける。見えない見えない……見切った！

結論から言つとあれだ。妖力でもう一本腕を作つてやがったんだ。しかもそれを俺が攻撃を避けた瞬間にするのだから驚きだ。

「ふむ、よもや人間に見切られるとは」

「甘え甘え。もっと全力で来いよ」

今度はどんな手で来るんだ？ などと思つてると今度は身体からまばゆい光を辺りに撒き散らす。目眩しか……と思つたが違った。まあある意味で驚かされましたよ。

狐つてのは人に化ける類のやつもいる。しかもその存在が強力である程美しい女性に化けると言う。

今回九尾が化けたのも例に違わず美しい女性だった。だが俺はその姿に非道く見覚えがある。

金のシヨートボブに同色の瞳。古代道教の法師服っぽいゆつたりした長袖ロングスカートの上から、青い前掛けのような服を装着。頭には角のような二本の丸っぽい尖んがりを持つ帽子を被っており、腰からは髪と同色の九本の尾が扇状に広がっている。

そう、あれ。これは絶対に将来“スキマ”の配下になる。つか式神か。もう見てるだけで俺の脳内では「ちええええええん！」って叫び声がリピートされる。

「ふん。我の力をこの非力な人間の肉体に凝縮させた。果たして貴様は我の暇潰しとなってくれるか？」

「あー、うん。近い内に忙しくなると思うから、今のうちに人生を楽しんでおくべきだと思う」

「吐かせ！」なんて言ってこっちに向かって来るが、至って俺は本心からそう言っている。

だって将来こき使われまくるんだぜ？ もう俺は目の前のコイツが哀れで憐れで、なんか情まで湧いてきちゃうよ。

でもまあ先程からクルクル回りながら雨霞とばかりに攻撃を仕掛けて来るのだが、一発もそれが俺に当たる事はない。キャリア年を甘く見るなよ。えっ、年って何年だって？ 殺すよ。

「はあああああ！」

「はああああ……」

片や力を出す際の掛け声。片や呆気ない幕切れになりそうだと言う溜め息。確かにあの妖力弾を真つ当な人間や妖怪が浴びたら一溜まりもないだろう。

だがそこは俺クオリティ。この程度のダメージはダメージとは言わない。ぶっちゃけまともに浴びたってグレイズ判定で許されるだろう。つまり浴びるだけ得点になるってか？ や、Mっ気はないんだけどね。

時折接近しては肉弾戦を挑んで来るのだがあまり続かない。と言うか九尾はヒット&アウエーが上手い。俺は攻撃を全部防ぎ切ってはいるんだけど、引くタイミングがあまりに絶妙過ぎて追い撃ちをする気になれない。

「くっ、人間！ 真面目に闘「ウホッ、いい九尾」

九尾が引く瞬間に更にタイミングよく俺は九尾の両肩に手を掛ける。引きながら俺の手が肩に掛かっている事に驚いているようだが、大丈夫。苦しみは一瞬で終わるから。右の膝を一発。あいつの意識を刈り取るにはそれで十分だった。

んで冒頭。俺の圧勝。はっきり言って俺に負ける要素など何処にも無かったのだ。

そして結果的には両者の暇は潰せたと思う。九尾にとっては痛い結果だろうが、俺にとってはやはりいい暇潰しだったのだ。

未だに倒れてる九尾をいい加減肩から降ろしちよいと書き置きを。これだけ賢けりゃ俺の伝えたい事くらい分かると思うけど一応ね。

「うん、いい暇潰しだったよ」

ま、こんなもんかな。

「納得いかねー」

一応はしよる所ははしよって英雄譚風味に話してたつもりなのだが、ガキ共ときたら揃いも揃って寝てやがる。

確かに子守唄代わりだ何だとは言ってたけどさ、本当に寝るか？ 畜生、無駄に話して損したぜ。

落胆していた俺であつたがただ一人だけ。未だに起きてる存在がいる事に気が付く。そいつは半分寝てると言っても過言ではない。が、寝てる訳でもない。

そう、例の小熊体型のガキンちょ。そういえばさっきの村の代表者もこんな感じでうつらうつらしていた気がする。てか親子だろコイツら。

「兄さん。どうしたら……強くなれ……る」

最後にそんな事を言い残して遂にダウン。「お前、答え聞くんもりないだろう」と言ったが無反応。ここまで来て残念なやつだ。ただここまで起きていた褒美だ。質問に答えるくらいしてやらないとな。

そいつの耳元で俺は静かに呟いてやる。

「手前えがそう思えた時でいいじゃねーか」

暇はすぐに潰れる。故に暇なり（後書き）

追加・藍であって藍であらずです。

約束と迷子（前書き）

ども、作者です。夏が近付くに連れて非常に忙しくなつて参りました。学生の身分故に私はレポートやら課題やらから逃げることは出来ません。更新が滞る事があると思いますがご了承ください。

加えて、歴史の方に関しても明るくないため、誤った記述をしてしまうかもしれません。重ねてご了承ください。

約束と迷子

例の集落を出発して早三日。相変わらず森の中を一人で歩いてる俺であつたがなんつーか。孤独？

「お前、友達いないの？」何て友達だと思つてたやつに面と向かつて言われた時見たいな気持ちだわ。

代わり映えしない森の景色を眺めながら歩を進めるに連れて、段々とフラストレーションが溜まつていくのが分かる。この前の九尾と闘つて少しは解消出来たと思つたんだけどな。

兎にも角にもこれじゃあ何のために旅に出たのか分からない。何とかしてこの状況を打破せねばなるまい。

「ごめんあそばせ。お強い方」

ごめん、訂正。やっぱり孤独でも暇でもいいや。『にゅっ』って感じで裂けた空間からスキマが現れました。以上。

「バイバーイ！」って手を振りながらその場を去ろうと思つたんだけど、問答無用でスキマ……八雲紫は俺の行く手を遮る。

何度も言うつうだが能力の特性上俺は何かを察知することに非常に長けている。今回のスキマに関しても例外ではなかった。

ただ例の如く、ぐーたらしきつてる状態では全く以つて反応は出ない。故に紫に遭遇してしまうという痛恨のミスを俺は犯してしまったのだ。

「あら、どうしてあなたともあるうお強い人間が私から逃げようとするのかしら？」

「面倒臭そうだから。それ以外に何がある？」

案の定攻撃を仕掛けてきましたよ。しかもいきなり等身大以上の妖力弾とか、俺以外だったら絶対に死んでるぜ？

加えてあの胡散臭い微笑み。ありや絶対あの程度では俺が死なないと確信してる表情だな。扇子で表情を隠そうとしてるが、誰の目から見ても笑ってるってのが丸分かりだ。

悩み抜いた結果俺が取った行動は土下座。「勘弁してください」と言わんばかりでもう額をガンガン地面にぶつけまくる。だが俺の考えは非常に甘かった。

と言うか同じ事が二度通用する相手じゃない事くらい分かれよと自分に問いたい。

だからほら、めっさ睨んでるし……前の呆れた表情とかそんなんとかじゃなくて、目を細めて刺すようにこっちをね。

「この期に及んでまだシラを切るつもり？」とか言ってますがその通りでございます。

「あなたには色々聞きたいことがあるの。月の戦争に付いて来た理由に、私を助けたあの能力に、あのやばそうな二人からどうやって生き残ることが出来たとか！鬼神にも聞いたけど昔に鬼の集団をしたこともあるんですってね」

「あの頃は俺も青かったな」

「感傷に浸って誤魔化そうとしないで。いい加減に私も堪え切れな
いわよ」

全く最近の若い者は……や、俺から見たら誰でも若いかな。大量の
妖力を辺りに充満させてる所を見ると、本気で怒ってるのが分かる。
流石にやばいと判断した俺は土下座を止めて仕方なく、だが出来
る範囲でこいつの話を聞いてやる事にした。っても何を話すか位既
に目処が立ってるんだけどね。

「分かった分かった。だからとりあえず落ち着いてくれ。話なら聞
いてやるからあまり俺については言及しないでくれ」

「善処するわ。今日あなたに会ったのはあなたにお願いしたい事が
あったから。手短に言つと私の作る“楽園”で住らして欲しい」

“楽園”とは十中八九“幻想郷”の事だろう。で、俺にここに住
めと言うのは妖怪と人間のパワーバランス云々って事だな。

別に住む分にはかまわないんだよね。最初っからそのつもりで霧
の湖周辺に住居を構えていた訳だし。問題はパワーバランス云々。
そもそも俺はチルノと『森の妖怪の味方』と言う約束をしてしま
っている。もう既に反故になってるかもしれないが、大前提はそれ
だ。

まあ俺は人間だし、俺の目の前で人間を食ってる妖怪を見かけたら迷わずに血祭りにするけど（もちろん妖怪を）、ただそれだけ。後は黙認状態。

「妖怪に子供が食われた」と言われたって俺は敵討ちに行くつもりはさらさらない。前にあったあの“けじめ”の騒動も元は子供の安否を確認しに行っただけだし。

「住む分には構わないが、他に目的があるんだろ？　そこもきちんと話せよ」

「ええ。その“楽園”ではね、妖怪も人間も共存とまではいかないけど、限りなく近い距離で生活させるつもりなの。もちろんある程度の規則は設けさせてもらうわ。じゃないと人間はすぐ妖怪の餌食にされちゃうと思うから」

「でも規則を設けた所で大した抑止力にはならない。そこで“人間”の中でも妖怪に勝るとも劣らない実力を持つ俺に抑止力になって欲しい。そう言う事だろ？　悪いがそりゃ無理だ。俺にも信念があるからな。そこだけは譲れない。が、妥協点なら示せる。限りなく中立に近い妖怪の味方。それでどうだ？」

「中々鋭いわね。お願いしたい事とその回答を全部言われちゃったわ。そうね、出来ればもっと具体的に話してくれる？」

「妖怪の悪さが俺の目に入る、若しくは怒りに触れたら人間の味方。目に入らなかつたら黙認」

「へえ、随分と大きく出たわね人間。言いわ、それで構わない。

ただし、私の怒りに触れたら……」

そう言つて首を掻つ切る素振りを見せる紫。成る程、俺を脅そうだなんて大した野郎だ。

何故“楽園”なんか創ろうとしてるのか俺には分かん。けどそう言つた壮大な計画を練る妖怪と言うのは後にも先にも紫位の物だと思う。

と、紫が右手を俺に差し出してきた。握手か。俺も返しの手を差し出し紫の手を握る。手を握る……るってレベルの力じゃねえっ！これは手を握り潰すレベルの力だ！

っ！かなに、紫つて中々好戦的じゃん。俺に力で勝負挑んで来る奴らつて昔は数える位しかいなかったつてのによ。

なーんか時代は動いてるんだな。俺に対する認識つてのは最近薄れてきてるつて言うか。じゃねーと紫がこんなに強気で俺に迎つて来る訳ねーし。それはそれで強さを誤魔化す事が出来るからいいんだけど。

ある程度力を入れた所で苦しそうな表情をすると……ほら、紫も自分の方が力が強くてホッとしている。

「で、俺はこれからもう少し旅を続けるけどそれでいいか？」

「構わないわ。その代わり緊急時になったら問答無用で呼び出すわよ。と言うかあんた名前は？」

「乱れ治めると書いて乱治」

紫との契約が平和的に結ばれ将来の目通しがより明確なものとなった。だがこれから何をするのか結局は振り出しに戻っただけ。暇人モード絶賛好調中だ。

……恋しい、虚しい、淋しい。ほら三拍子揃った。だから何なんだよー！　ね、もうダメぽ。相当な重症だろ？

なんか幻聴も聞こえてきたし。「助けて、助けて！」と物凄くリアルな声で。考えても見て欲しい。こんな森の中で俺以外に人が歩いていると思えるだろうか？

例え目の前で可愛いらしい少女がたべられようとしても、それは幻。幻想でしかないのだ。そう、幻想でしか……幻想でしか……無い訳では無い！

「た、助け「この子食べちゃめええええええ！」

ふざけてるって？　いや慌ててたからしょうがないよ。ともかく間一髪だった。でさえ口開けたイエティもどきが少女を飲み込む前

に俺が飛び込んで少女を掴み上げたのは。

何が起こったか分からないと言った表情をしてるが今はそれでいい。下手に俺の脇で暴れられたらうつかり落としちまうかもしれない。

少女を横に抱え我戦線離脱。ちなみに今回イエティもどきは生かしておく。少女食う前だったからギリギリセーフって所だろう。

それよりコイツだな。このまま放って置いたら間違いない妖怪共の餌になるだろうからスルーは出来ない。まあ暇だし。コイツを親元に位返してやろうとは思ってるさ。

「ほれ、ガキンちよ。お前ん家が分からんから案内しろ」

「が、ガキじゃないです！ “藤原妹紅”です！」

な、なんだってー！ 妹紅とか、ええ……妹紅とか、ええー！？
髪の毛は黒いから多分蓬萊の薬使用前なんだと思われるけど、何だってこんな所にコイツがいる？ 最近原作キャラとの遭遇率が妙に高い気がする。

ともかくだ。何時までもここに居たって話にならん。コイツを家に帰さないと。

ガキらしくぶーぶー文句垂れてる妹紅にもう一度自宅までの道を聞く事にした。

「よし、妹紅。お前ん家教えろ」

「……人をガキ扱いしたあなたを屋敷に招待するなど」「バイバーイ」「ごめんなさい」

ふ、ちよろいぜ。まあガキ相手に剥きなる俺もどうかとは思うが、自分の立場位弁えて欲しいもんさ。

大人の汚さを垣間見させた所で今度こそ自宅の場所を聞き出す。都が云々言ってる所を見ると、妹紅はどうやら中々にいいとこのボンボンの家の生まれっばい。隠し子らしいけど。

ただ都か。人が集まる所にはその規模に見合った数の悪霊やら妖怪やらが集まる。

特に鬼や天狗なんてこの時期が最盛期だったりするから普通の人間じゃあ手に負えない。だから妖怪退治屋や、鬼専門の退治屋。あまつさえ、陰陽師なんてのも大活躍する時期であるのだが、如何んせん絶対数が以上に足りない。

故意に家の外。況してや都の外に出るなんて自殺願望があると思えない。

「そもそも何だっつて外なんか。それも森の中」

「それは……言いたくない」

はあ、これだからガキは。こりゃゆっくりお話をする必要がありそうだわ。

都の変わり者（前書き）

先に記しときますが色々と誤った表記があると思いますがご了承ください。

都の変わり者

都到着。その規模にただただ俺は驚くばかり。

平城京。名前ばかりは聞いたことがあるが現物を見るのは初めてと言っか見る機会なんてある訳が無かった。

「あなた、何処の田舎者？」なんて真顔で言われた時は思わず妹紅を森に捨てようか真面目に考えたが、言われて見れば確かに「田舎者だ」と非道く納得出来てしまったのでその考えは破棄。一応コイツの前ではまだ田舎者で通しておこうと思う。

ともかく平城京のその造りだ。唐の都の“長安”を模倣したと言われるこの都の建築物の配置には非常に驚かされた。

縦縦横横と碁盤の目のように整備された道とその景観に見合った建築物は、一重に当時の建築技術の水準を物語っている。大昔の先人達ってマジすげえ。

色々思うところはあるのだが今はとりあえず妹紅の家に行かないと。いい加減妹紅の機嫌も悪くなってきたし、早い所コイツを送り届けますか。

何度俺のことを驚かせば気が済むのだろう。縦の長さこそあまりないけれど横の長さははんばじゃねえ。妹紅のパパ上の力にもよると思うがこれは圧巻だ。周りの屋敷もこれほどのサイズのやつは見られないし。一体妹紅のパパ上様って何者よ？ めっさ気になる所だけど先ずはその屋敷に上がる事にした。

一応従者の方が簡単にお礼を申してくれて何か持て成してくれるとの事。もちろんお言葉に甘える事にした俺は何をくれるのかワクワクテカ。今か今かとお礼の品を楽しみにしていた。

「お待たせ」

「随分フランクな挨拶だな」

「ふらんく？ まあいいわ。先ずはお礼を言っわ。ありがとうね」

「んな事はどうでもいい。お礼の品くれ、お礼の」

「……あんたに助けられたと思うと何だか自分が惨めに思えてくるわ」

うるせえ。

見事に整った服装で歩くことが非常に困難そうな姿で現れた妹紅を一瞬でもかわいいと思った俺は死ぬ。

ただ俺の予想と反してそれほど重装備でもない。もっとう、小林○子ばりの衣装を予想してたんだけどな。

それについて聞いてみると、どうやら妹紅はあまり“美しさ”や“ファッション”にはあまり興味が無いらしい。「お前女だろ」って言ったら「だから何？」と一蹴された。

この時代の女性としては妹紅は非常に変わり者だ。当の本人もそれを自覚してるらしく、周りの貴族はもちろん従者にも敬遠されがちであるとか。しかもそれを自分で話してくるからすごい。「コイツ本当に少女か？」と思わず目を疑いたくなる。

ただこの少女にも年相応に悩みがあるらしい。

「ふーん、父上に女がねえ。でもそれって普通なんじゃねえの？」

「力の入れようが半端では無いのです！ このままだと私に構ってくれないのではないかと心配で……」

目を潤ませて悲しそうな表情をする所を見るとまだまだ「パパ大好き！」な少女なんだよね。だから今回、そんなパパ上の気を引くためにこんな自殺紛いの行動に移ったらしい。

甘え方を知らなかった故の行動。もちろん褒められた行動ではないが妹紅の気持ちも分かるっちゃ分かる。とりあえず「二度とするんじゃないぞ」と釘を刺しておいた。

「まあなんだ。甘えたかったら素直に甘えろや。甘えられた父親程扱い易い奴は居ないぞ。ここで会ったのも何かの縁。何なら俺に甘えたっていいんだぜ？」

「それはない」

……やっぱりかわいくねえや。

いきなり冷たい視線を俺に向けるんだぜ？ 癖になりそう……じやなくてコロツと表情変えるとかホント、飽きっぽいガキに見られる兆候だわ。

結論。どんなに変わり者でもお嬢様はお嬢様。我儕というのは一種の付加アビリティだと理解しました。

さて、それから一ヶ月後。なんだかんで屋敷に案内されたのだが、暫くはここに居座る事にしました。というか俺の本能がここなら暇を潰せるって言うてるからさ。

確かに妹紅の成長と言うのは見ていて非常に楽しみ。だがそれ以上に驚かされたのは、なんとここには母親や従者がほとんど来ないと言う。

なんでも母親は宮中で日々男を漁ったり、父親は例の如く女を追っ掛けたり。加えて従者の方は飯を用意するしかないらしく、最近の妹紅にとっては一人ぼっちが当たり前なんだと。

従者も従者で自分の破天荒な振る舞いには付いて行けないと妹紅談。全く以ってだらし無い。

つーわけで俺がコイツの従者になって成長を見届ける事にした。つまりはお礼の品は受け取らず、代わりに働き口を受け取った訳。俺あつたまいー！

「馬鹿やってないで早く朝ご飯を作ってください！」

「はいはい」

自炊位出来ないと貰い手なんて出来ないぞ。と思つたがよくよく考えりゃこの時代じゃあんまりそいつた家事の技術なんて、貴族にはさほど必要じゃないと考え直す。

従者と言つたってほとんど形だけであり、俺は別に妹紅の事を主だとは思ってない。同様に妹紅の方もそいつた身分に固執しない分、俺に気軽に話し掛けてくる。

よく高貴で美しい女性というのは直接殿方にお顔を見せる事とい

うのをしないらしいのだが、妹紅はそれを「馬鹿ですか？」とまたまた一蹴。

こう言った事に限らず、妹紅は時代と掛け離れた感性を如何んなく発揮し、見事に変わり者の称号を手にしていた。道理で誰も妹紅の下に付きたがらない訳だ。

「で、今日は何処に連れてつてくれるんですか？」

「いや、今日は蹴鞠でもして遊んでようぜ」

「あれは蹴鞠ではありません。妖術の類です。少なくともあなた以外にあんな鞠の蹴り方をする人を、私は見た事がありません。と言うより足以外の部位も使っているではないですか」

ただ『ロナウジー〇ヨ』をイメージしたりフティングをしてただけですが。まあ確かにあれを初めて見た人にとっては衝撃だとは思うが。

最近では妹紅をよく外に連れ回しては色々な体験をさせてやっている。食える野草、食えない野草の観察。キノコ採集。蹴鞠の新しい動きの追求など、本当どうしようもない事ばかり。

しかし、元気が有り余っているのであれば外で発散させればいい。年柄年中部屋に閉じ込まつてたらそれこそ病気になるっちまう。

そんな俺の教育理念であるがためか、周りからの評判は一気にがた落ち。都一番の暴れん坊と言ったら妹紅の事を指すようになった。まあ最近ではよく笑う妹紅も見れるし、妹紅自身別に気にしてる様子は無いから問題は無いでしょう。楽しければそれでいいじゃない

いか。

「ごめんください」

ドンドンドンと戸を叩く音が屋敷に広がる。まったく朝っぱらから誰よ。飯の途中だが気怠そうに立ち上がり戸へ向かった先には……鴉天狗の射命丸がいました。

あるえ、なんでコイツがここに？　と言うかこの都によく妖怪が侵入出来たな。結構結界とかうざったく張られているはずなんだけど。

その事について尋ねると「よくぞ聞いてくれました！」と言わんばかりの勢いで俺に話し掛けてきた。

どうやら人里内の神社の巫女からありがた〜いお札を受け取って今日ここにやって来たらしい。つか博麗神社ってもう出来たのだよ。

「で、何しに来たんだ？　俺だつて暇じゃないんだぞ」

「私だつてそうですよ！　ただ大天狗様があなたを人間の里に至急向かわせるように、なんて言いますから不本意ながら私がここに来たという訳です」

「……………何か里で問題でもあったのか？」

「ええ。何でも神社に物凄く強大な存在が憑いたとか。放っておくと人里は全滅ですね。今は巫女が必死に抑えているようですが、時間の問題でしょうね。まあ、あなたが行っても変わらないと思いますよ。所詮強いといっても人間の域を出てないと思いますし。霊力もほぼ皆無のあなたじゃ」

強大な存在？ 全く以って見当が付かない。

「急いでいるなら紫に頼んで俺を移動させればよかったのに」と言ったら、どうも紫も紫で非常に忙しいらしく、そこまで手が回らないらしい。

「妖怪の山連中は？」と聞いたら「人里が妖怪の縄張りになりますね」と返された。まあ当然だな。奴らにとっちゃ人里など体のいい餌場でしか無いのだから。

これに託^{かこ}けて人里を乗っ取られたらそれこそ人里の連中にとってはたまったもんじゃない。

おそらく紫もそれを見越して俺を今回の救援に呼んだんだろう。ただその伝達が天狗なのはあれか。妖怪の山連中に人里を乗っ取られたく無いと説得をしたからかな？

ま、妖怪の山連中も人里を乗っ取る気はそれほど無かったろ。河童辺りが文句言いそうだし。

兎にも角にも早速人里の救援に迎わないと。巫女さんがどれほどの実力者が分からないが長くは持たないだろうから。

「じゃあ私は戻りますよ。伝えたいことも伝えましたし」

「ああ、ありがとうな」

流石未来の最速候補。目にも留まらぬ速さで飛び去って言ったよ。奥からは妹紅が俺を呼ぶ声が聞こえるため、足早に部屋に戻った。つーか今日の行き先は必然的に決まりだわ。

「長かったですね」

「ちよつと野暮用でね。それより今日の行き先決まったぞ」

「え！ 何処ですか？」

「化け物退治の見学旅行だよ」

神社の悪霊さん（前書き）

ども、作者です。今回の話はあの方が出ます。題名で分かった方もし気に入らないのでありましたら、お手数ですがバックを推奨いたします。

それでもオーケーと言う方は引き続きお楽しみください。

神社の悪霊さん

久々の能力は紫が創ってる最中の“楽園”近くの人里への移動手段として利用。もちろん妹紅も連れて来た訳だがやはり色々ツツコまれた。

だから能力について軽く説明をしたのだが「ふーん、すごいわね」と割と反応が薄かった事に関しては触れないでおく。

兎にも角にも久々の人里。ここには変化といった変化がほとんど見られない。変わった事と言えば見知った顔が全く見えなくなった事位だろう。

隣の妹紅も都とは違う人里に言葉を失っている。「都と違って凄く狭い。ですが何故かここは都以上の活気で溢れている」との事。

そりゃそうだ。ここでは自分達が働いた分だけそれに見合った生活が保障されているのだから。

ただそんな里の活気は俺から言わせりゃ物足りない。里外からの珍しい来客に表面上はにこにこしているが、妖怪の山とは違う方の小さな山から感じられる邪気に内心ビクビクと言った所か。

「乱治、何か悪寒を感じませんか？」と割とがさつな妹紅が言う位だから間違いないだろう。

「さてと、一丁神社で悪さしているいけない子を懲らしめに行きますかね。兄さん、神社はあっちかい？」

「あ、あなたが応援でしたか！ はい、神社はあちらで合っていますか……そのような軽装で討伐に行かれるのですか？」

そうツツコミたくなる気持ちも分からなくはない。黒の甚平に鞋わらじとか、登山客にケン力を売ってる服装ですからね。

ちなみに隣の妹紅は例の如く貴族方が着られる服を最大限、動き易さに特化した加工をさせた服です。こちらも登山客に空き缶でも投げ付けているのか？　ってくらいケン力を売っています。

でもまあこれが俺の最高の戦闘スタイルでもあるから、その所を目の前の兄さんに熱く語り掛け、俺達は邪気の大元である神社に向かった。

鳥居が見える頃になると隣の妹紅はぐったり。邪気にやられたんじゃないくて体力的にね。そこらの貴族連中から見ると妹紅の体力は尋常ではないと思うが、それでも全然物足りない。この、モヤシつ子め。

鳥居の先に見える者。紅白の巫女装束を纏った巫女さん。脇は……まだ出てないな。ただその巫女さん。非常に疲れ切った表情をしており、今までいかに踏ん張っていたか痛いほどに伝わってくる。ほんの十数年位かな？ 生きただけなのによくここまで頑張ったよ。

懷から自家製のお札を数枚取り出し、それを巫女さんの真ん前にいる敵方に投げ付ける。敵方が怯んだ隙に巫女さんを救助。

ボロボロになった巫女さんだったがまだ意識はある。「救援を頼まれてやって来た」と伝えたら「わ、分かりました。一緒に、頑張りましょう！」と起き上がろうとしたので、「少し回復してからでいいから、そしたら援護を頼む」と言う旨を伝えてから妹紅に手当を任せた。

「畜生、何だっただんだ？ 巫女のお札より強力じゃないか」

「ふーん、あんたがこの騒動の原因かい？」

ロングの緑色の髪に黒い瞳。白いワイシャツの上から青を基調とした魔法使い仕立てのロングドレスを着用。黒いマントを羽織り、三日月状の刃が穂先に付いてる長い得物を所持。そして青い三角帽。そいつの名は“魅魔^{みま}”。確か……と言うか感じる気配からしてやはり悪霊。証拠に足が無い。

原作……や、旧作か。詳しくは無いが確か異名が“Revengeful Ghost”^{リベンジフルゴースト}だっけか？ 人間に恨みを持つていないとか。

いや、あれほどの狂気内包してるとなりや完全に黒だろ。口調は軽いが目がやばい。

「さっきの巫女といい、今の人間といい。あゝ見てるだけで手前えらは腹が立つんだよ！」

「なんつー妖力。いや魔力もか」

ここ最近では最大クラスの総量。九尾？ なにそれって感じた。木々は震え、妹紅は怯える。それでも慣れない手付きで巫女さんの手当を続ける妹紅は凄く根性があると思う。

念のため妹紅ら周辺には、過保護なまでの霊力で結界を張り巡らせ大事に備えさせておく。

そして真正面。笑った表情。だけどそこに狂気を含んだ表情で俺

を見据える悪霊がいる。こりゃいい。久々に腹を満たしてくれそうな相手が目の前にはいるのだ。思わず俺も顔を綻ばしてしまう。甲高い笑い声を上げながらそいつは……姿を消した。

「甘え」

「うはっ！」

『キーン！』と金属音が辺りに鳴り響く。微かに感じた妖・魔力の気配を擬え刀を振り抜くも、それに反応した魅魔は手持ちの得物で難無く防ぐ。

追撃とばかりに速い攻勢を仕掛けるも驚く事に、魅魔は俺のトッブスビードに付いてくる。そしてまたも魅魔はその姿を消し、俺の目を欺く。

実を言つとこの時ばかりは全く以つて魅魔の妖・魔力を感じ取る事が出来ない。さつきはあいつが攻撃を仕掛けて来る瞬間に漏れた妖・魔力を感知出来たからこそ攻勢に出る事が出来たのだ。

つまりだ。こいつの隠匿術は究極のそれに近いって訳。能力使用するにも目の前魅魔にいたやつの存在を感知出来ないんじや使用したくても出来ない。俺の感知能力もそこまで完璧じゃないのだ。

「けどまあ、潜った修羅場の数がちげえ。……ほら、そこ！」

「うおっと！ はあゝ、驚いたね」

戦い辛さで言うなら月の豊姫ら以上にやり辛い。魅魔の隠匿術は純粹に自分の力なのだ。

だが粗が無い訳じゃない。特に魅魔が攻勢に出る瞬間などは感知が出来るから、攻撃をさせる前に俺が攻撃をして、魅魔の攻撃を無効化している。魅魔が驚いたのもその辺りだろう。

尤も俺も感知をした瞬間に能力を行使しちまえばいいものの、勘のいい魅魔は何かに気が付いて一瞬で姿を消しやがる。いや、ホント強いよこれ。

「しかもだんだん感知すらし辛く『キーン!』なってるし」

二度、三度は俺が攻撃を仕掛ける事が出来たのだが、次第に感知し辛くなってる魅魔に主導権を握られるようになる。

今では魅魔の攻撃を俺が一方的に受ける始末。俺が攻勢に出ようとすると姿を眩ますからその勘の良さが伺える。

なんて戦略的なんですかこの悪霊さん。今まで見た中でもここまですで俺を追い込む存在は居なかった。戦略っつーかは勘の良さか。まあ総称して戦いの嗅覚がばねえって事。

とにかくこのままじゃ埒が空かない。力でゴリ押しするにしても俺に力負けしない程度に奴も力を持っているしな。加えてスピードもあるし。

……一計交えますか。奴もこの状況に辟易してるっぽいしさ。さ、善は急げ。更に強い霊力と妖力を身に纏おうと俺はその場に留まる。

敢えて隙を作ったのだ。

ちよつと大きな餌かもしれないが今の状態の魅魔なら間違いなく食いつくだろう。と、予想通りと言った所か。がついてくれたようだ。いつの間にか俺の背後に居た魅魔は、見事なまでに長い得物の石突き（穂先と真逆の位置）の部分で俺を串刺しにしていた。

痛い。そりや痛いけど別に耐えられない程では無い。そういった鍛錬を既に大昔に俺はこなしているのだからさ。

「痛え……けど捕まえた」

貫通した得物を通して俺の妖力を魅魔に流し込み奴を捕捉。魅魔もこの一撃で仕留めたと思っただろうが残念。

俺を殺したければ俺の生命器官を塵一つ残さずに消滅させることだな。出なきや細胞分裂の限界を裕にふっ飛ばしている俺は、不死鳥の如く何度も復活するぞ。

驚愕の表情で固まったままの魅魔。体？を動かそうと抵抗を試みているが、残念ながらそりや無理だ。妖力の桁が違うよ。

姿消したとしても俺の妖力が混じっているのだ。今更そんな事も無意味。第一俺の妖力で縛られているんだから、自力で動く事すら不可能だろ。俺の背後に居るのは分かっているの。

「自慢していいぞ、お前。俺に攻撃を“喰らわせ”たのはお前が久しぶりだからな」

「はっ！ 人間如きが馬鹿言ってんじゃ」

そこから先は言わせなかった。振り向き様に渾身の右ストレートを顔面に放ちぶっ飛ばす。そのまま乱々流空中コンボをお見舞い。全方向から打撃ラッシュラッシュラッシュ。止めは首を脇に抱えそのまま地面にDDT。

ここまでボコせばもう平気だろう。帽子毎地面に頭が突き刺さった状態の魅魔を見下ろし、妹紅の元へ向かった。

が、まだまだ俺は甘かったようだ。背を向けて僅か数秒の出来事だ。背中を突き抜ける見覚えのある長い得物。あー、またやっちゃった。奴はまだ倒れちゃいねー。

目の前の妹紅と巫女さん絶叫。でしょうね。モロ貫通しちゃってますしね。しかも俺の動きを縛ると言うオマケ付き。パクリよくないよパクリ。

「ははは、よくやった方だよ人間。その巫女よりずっと強くてホント焦ったさ。でも残念だ。今から放つ“モノ”はお前ら每人里を飲み込む代物だ。せめて後数秒の人生を楽しめ」

「舐めるなよ、悪霊風情が。この程度の縛りで俺を縛れると思うなよ」

敢えて俺は自力で振り向き奴を見据える。少し驚いた表情をされるもすぐに気を取り直す。寧ろ驚いたのは俺の方だった。

大量の妖・魔力を魅魔が掻き集めてやろうとしている事。何時の間にか魅魔の元に戻っていた長い得物を前に携え、何だか凄い勢いでそれを高速回転させている。

脳裏に浮かんだのは“マスタースパーク”。元祖はまさかの魅魔様でしたか。魔理沙が片手サイズのミニ八卦炉使ってあの規模だったんだ。きっとこいつのマスタースパークはとんでもない事になるだろう。

俺も急いである程度霊力を掻き集め“不死嵐”を生成する。マスタースパークであろうが無かるうがあのだの妖・魔力は洒落にならん。規模に応じて相殺しないとこの辺一帯が荒地地になってしまう。

「吹き跳びな！」

「テラ甘え」

やはりマスタースパークか。しかも無茶苦茶な規模の。が、完成した不死嵐の前ではそんなものは無力……のはず？

超規模の妖・魔力と霊力の衝突。轟風ととてつもない振動が、木々を薙ぎ倒し、大地を揺らす。

能力を付加した俺の不死嵐は本来なら奴のマスタースパーク位ふき飛ばせる筈なのだが、ふき飛ばしてもふき飛ばしても次々に流れ込む妖・魔力のせいでふき飛ばし切れないでいる。

やべえ、計算見誤ったかも。そう感じた俺はマスタースパーク絶賛ぶっ放し中の魅魔に接近。やり口は汚ねえがしょうがない。隙を突いて決着を着けようとした。……………が、敵は俺の更に上を行っていた。

「あんた専用だ。とつときな」

ま、マジか！ ダブルスパーク！ 前程の威力は無いがこの超至
近距離じゃ流石に俺も

「……ゴホッ」

全身が痛え。これほどまでに俺がボロボロにされたのは今回が初めてだろう。前・鬼神。月の姉妹でさえ全力の俺をここまで追い詰める事は無かった。ホント、体鍛えてなかったら“負けてた”わ。

「お前さん、怪物かい」なんて言われたが「あんたも十分怪物だよ」と返しておいた。悪霊だし。

まあ追い詰められたと言ってもまだ俺には余力はあるけどね。それでも“疲れた”（悪霊だけに？）と思っただのは前・鬼神以来だ。

でも快進撃もそこまで。悪いけど勝たせて貰うよ。そいつが気絶する前に見せた表情は、こっちが清々しくなる位綺麗な笑い顔だった事を伝えておく。

井の中の蛙大海を知る（前書き）

短いです。うとうとする中で書いたんで変な表現もあるかもしれませんが。ご了承ください。推敲、美味しいんですか？（やってる人に対する嫉妬です。ああ、妬ましい）

・冗談さておき。この作品の進む先が最近になって漸く固まってきた今日この頃。元々は東方関連の上位作品を見て自分も作ろうと思った訳ですが、もう一ヶ月以上も続いていますね。

始めの内は勢いのみで作っていました、今では要領を得て継続的に作る術で地道にやっています。

・と言うか旧作とか、作者は疎か皆様だって実際にやったことはどうか（一応某笑顔になる動画サイトでプレイ動画は見ました）

・儚月抄（漫画）を読み直して思ったこと。てゐの可愛さが異常。だけど作者のジャスティスはにとり。異論は認める。

必要以上に前書きが長くなりましたが、引き続きお楽しみください。
い。

井の中の蛙大海を知る

博麗神社にて

魅魔との戦闘の後、先ず煩かったのは巫女さんだ。やれ「その強さは何ですか？」やれ「なぜ妖力を使えるんですか？」など、とにかく質問を矢継ぎ早に投げ掛けて来る。

あまりにウザったかったので傷口を『ちょんちょん』と触り一応は黙らせた。ただ、苦しそうな表情をしながらも「な、何故？」と俺に尋ねて来た執念には感服。

閑話休題

魅魔の処遇。これは全面的に俺が話を進めた結果、今回の事に関してはお咎め無しという事になった。当然巫女からは反発を貰ったが、「じゃあこいつに罰でも与えてまた暴れ始めたら、巫女さんに対処出来るのか？」と返したら割と簡単に引き下がってくれた。

ただ罰は与えないが、今後人里に悪影響は及ぼすなという制約は課す。魅魔はそれを承諾。これも割とあっさり受け入れられたため、気になった俺が理由を尋ねると「今度は殺されそうな気がする。死んでるけど」と、実に聡明な答えが返ってきた。

「なんだ、よく分かってるじゃん」なんて笑いながら言ってるやると、心なしか魅魔の顔が青白くなってるように見えた。悪霊だけど。

とにかく今後は人里に手を出さない。これを強く約束させた。

加えて俺という存在を辺りに吹聴するなと言う事も約束させた。

これは魅魔だけではなく、巫女さんや妹紅にも。

もし俺の力が妖怪の山連中に伝わったらどうなるだろうか？ 間違いない人里に対する過剰な警戒心を抱くようになるだろう。少なくともまだ俺はこの“楽園”に安住するつもりはない。

過剰な警戒心を抱いた妖怪連中を、果たして巫女さんや数少ない人間の実力者だけで抑え切る事が出来るだろうか？ 否、抑え切れる訳がない。

という事で目撃者＆被害者の口封じ。妹紅は納得いかないと云った表情だったが、巫女さんは分かってくれたようだった。魅魔は最初っから話す気は無いとの事。

「そういえば古くからの言い伝えに『黒き衣を羽織った青年が、雷を操りし鬼神を退治した』と言う物がありますが、あなたはその子孫とかですか？」

「まさか。寧ろその話に憧れたからそれに似た成りをしてるだけさ」

P
S

博麗神社の巫女の勘の良さは昔から。

その後は妹紅と人里をぐるっと回ってから都に帰った。都とは違う活気ある市場に妹紅はもうキラキラした表情で可愛いらしさを爆発させて、俺を悶えさせたのもいい思い出。（ただ俺はロリコンではないという事を強く主張しておく）

それはいいや。ともかく帰ってからコイツ何て言っただと思う？

「私もあんな風になりたいです！」だぜ。これからお前は蓬萊の薬飲む訳だから、嫌でも強くならなきゃいけない環境に置かれるよ……なんて言える訳もなく、とりあえず「腕立て伏せをやれ」と半ば投げやりに言っただが

「ふん！ふん！ふん！」

マジでやるとは思わなかった。しかも一週間も続けて。知ってるか、コイツ。貴族のお嬢様なんだぜ、これで。

始めにやり方を教えただけ。ただ、初日は数回でギブアップ。泣きを入れてくるかな？ 何て思ったがともかく限界までやって倒れ伏し、回復したらもう一度限界までやるといった事の繰り返し。

目を疑ったね。朝から晩までこの作業の繰り返し。途中飯は食ったけどさ、まさこここまでやるとは。

更に驚いたのは次の日。筋肉痛に喘ぎながらも必死こいて腕立て伏せを行っている妹紅の姿が見られたのだ。なんつーか……少女ながらにエロかった。

ともあれそんなことが一週間も続いたのだ。凄いな。「やれば、上がる」って嘘じゃなかったんだ。スムーズに腕立て伏せをしてい

る妹紅の姿がそこにはありました。

「ふう。ねえ、乱治。七日やって気付いたのだけれど、これだけであなたみたいに戦えるようになるとは到底思えないの」

「……何で俺みたいに戦えるようになりたい？」

まあそうなんだけどね。これだけじゃ強くなれる訳は無い。が、何故妹紅は俺の様に強くなりたいたいのかが分からない。や、思いの強さは伝わったのだが、如何せん動機が読めない。

別に言いたく無ければ言わなくても構わないが、聞けるもんなら聞いておきたい。ただ、結局妹紅はそれを言わず仕舞い。

しゅんと項垂れる妹紅に「別に言わなくても戦い方位教えるから」とフォローを入れて安心させ、具体的な話をする事にした。

「ここ数日で妹紅の気持ちの強さは分かったからな。稽古位付けてやるよ。で、具体的な内容だが……」

当分の間は身体作り。もちろんこれは成長に見合った形で行う。今回の様にずっと腕立て伏せなんて以ての他。始めはランニングから。

次に靈力の感じ方と、瞑想等と言った靈力を伸ばす事を中心とし

た鍛練。妖力に関しては自力で使える様にならなきゃ無理。俺が教えて使える様な代物じゃないのだ。

きつと何らかのきつかけが必要なのだろう。俺もいつの間にか使えるようになってたし、妖怪だけの特権とは限らないと思う。あくまでも俺の推測の域だが。ちなみに霊力を操る事が出来れば妖力も操る事は容易い。これは身を以て体験してるから確実に言える。

後は乱々流（体術）の基礎を教えておく事。今から教えておけば早いうちから自分にあった独自の技の研鑽に取り掛かれると思うしね。元々『独自色を強めさせる』事を目的として作った流派だから、割と教える事はそれほど多くはないのだ。

これらの鍛練は全て“妹紅”と言った“強さの器”を大きくするための鍛練だ。何れは蓬萊の薬を飲んで永遠の時を過ごすん訳だから、その膨大過ぎる時間を使い実力は伸ばせばいいのだ。かく言う俺は能力を使って、基本的にはそうやって強くなった訳だしね。

これらの事を俺は妹紅に詳しく説明。もちろん、蓬萊の薬の事などに関しては一切触れずに。

ああ後霊力の扱い方に関して言及されたので、妹紅の成長の度合いで俺が見極めた時に教えると述べた。

「百里の道も一歩から。地味かも知れないが文句は無いな？」

「無いです」

「じゃあ早速始めますか。まずはランニ……俺の後をちゃんと走って着いて来い」

S I D E
妹紅

本当に変わった人。私もここじゃ相当変わっていると自覚していますが、目の前の黒い衣を纏った男、乱治は更に拍車をかけて変わ

っています。

皆が嫌がる私の従者を買って出たり、その癖に私を敬わないし、いつも変わった事を私に経験させるし、ともかく変なお方です。まあ私は楽しいから別にいいんですけどね。

この前なんかは都で今注目を集めてる美しいと噂の奥方を「ケバ過ぎてきめえ」等と言ってる事は理解出来なませんが、明らかに嫌悪感を表してると言った表情だったので、その異常性がよく分かると思います。（通常の殿方の好みと明らかに異なっている点で）

また最近になって気が付いた事は、この人は何にも縛られていないという事。窮屈な都や宮中の掟など乱治には関係ないのです。だからこそ自分の理想の奥方の好みもずけずけと言える様です（何でも面が整った事を前提に、胸がふくよかな方は“じゃすていす”かと）

何よりこの人は強い。この前なんか凄く恐ろしい悪霊を、何か突き刺されながらも退治しましたし。

そういった強さを兼ねているからこそ、この人は何にも縛られない考えを通す事が出来るのかと。加えて旅の方も出来たのかとも思いました。

また、乱治は博識です。一月の間ですが私の知らない事を沢山経験させてくれました。それらは皆、「自分が旅の中で経験した事」と言っていました。

そもそも“旅”と言うのは、己の力量に相当の自信が無ければ普通はしないのです。ここから、乱治が如何に強いかと言うのが推測されます。

そして私は……何時しか旅と言う物に強く憧れを抱く様になっていました。確かに旅と言うのは、大好きな父の元を離れて、一人で道無き道をひたすら歩く寂しい事かもしれません。それでも私の旺盛な好奇心は抑えられないのです。

知らない事、楽しい事、もしかしたら悲しい事もあるかもしれない

い。それでも私は“都”以外の外の世界を知ってみたいのです。

「ふふ、言ってみる物ね」

だからこそ私自身が強くなる必要があるのです。いつか見知らぬ、大地を歩き回るためにも……

蓬萊の玉の枝（前書き）

今回の話からかなり捏造があります。原作自体を弄っているので原作と完全に違う話になっています（今に始まった事ではないのですが）

今まで一番（前もそんな事言っただけかもしれませんが）捏造が酷いです。前以上に。

それでもオーケー、という方はお進みください。

尚、次回も捏造が酷いであろう事を先に話しておきます。

蓬萊の玉の枝

子供の成長は早いと言う事を先に記しておく。

あれから数年の月日が経った。今更俺にとつて数年など大した月日ではないのだが、日々成長を続ける者を見ると言うのは非常に楽しいもの。おーちゃんやチルノが日々切磋琢磨していた頃が本当に懐かしく感じる。

で、どのくらい強くなつたかと言うと、その辺の陰陽師に負けないう位には強くなり、今ではたまに陰陽師として仕事をこなして生計を立てている。と言うか資産を増やしている。理由は旅費とか訳の分からない事を吐かしていた。

また非常に美しく成長したとも思う。この前なんか久し振りに帰つて来たパパ上が、「よし、宮中に行こう」といきなり言い出して妹紅を困らせていたり。「いや、隠し子持つてたら虐められますから」とたじたじだったが、やはり顔はどこと無く嬉しそうだったのが印象的だった。

つーか藤原不比等つてどつかで聞いた事あるんだけどな……まあ細かい事はいいか。

それに美しいと言っても俺やパパ上から見たらであり、この時代の男性陣からして見るとそうでも無かつたりする。どうやらこの時代の男性と言うのは風流心と言う物を非道く大事にするらしく、そんな物とは殆ど関係無く成長した妹紅というのは恋愛の対象外だったりする。

尤も本能にはちゃんと忠実らしく、妹紅が通るとその顔を一目見ようと振り返る事位はするのだが。

「いやいや、あれの従者を勤めてくれて何とお礼を言っていていいもの

か。で、胸の方はどうなのだ？」

「はい、大きさも形も申し分ない「父上！」

いやいや、本当に成長と言うのは（ry

中々気さくなパパ上とは割と反りが合うためか、たまにここにやって来てくれた日には俺と妹紅とパパ上の三人でこうやって談笑をする事が多い。

特に妹紅の成長に関しては詳しく話している。もちろん妹紅の前で堂々と。えっ、セクハラ？ いつの時代の言葉ですか？と言った具合に。

いや、真面目な話もしてるよ。“大宝律令”なんて言う俺でも聞いた事ある法律の編纂作業をしてらしく、その助言なんか俺はしてたりするんだぜ？ と言うかやっぱり不比等パパ上ただ者じゃないね。エロいけど。

「さて、私もそろそろ行くかな。乱治よ、今後とも娘を頼むぞ」

「御意」

ただ妹紅の手は離して行けよ、親バカ野郎。

今都には“かぐや姫”という、それはそれは大層お美しい女性が
住んでいるらしい。……いや、おそらくあれだろうね、あれ。月の
お姫様。

何でも前に貴族の屋敷に悪霊祓いに行った時に、その屋敷の主が、
聞きもしないのかぐや姫について熱く語っていたのだとか。

「いや、しっかり聞いてたんじゃん」、なんて言ったら攻撃のス

ピードが速くなつて面白かつた。あ、今俺は妹紅に乱々流の稽古を付けている所ね。

筋良いんだよね、コイツ。前に青い靈力の炎を滾^{たぎ}らせて悪靈被^ひいてた時なんか俺も驚いたし。

「甘い、甘い！ そんなちやちな炎じゃ魚も焼けねーぞ！ もっと

……もっと、熱くなれよおおおおお！！」

「暑い、キモい、うざったい」

何なのこの子。母さん、こんな悪い子に育てた覚えはないわよ。

……や、口調がね。俺と数年生活している間に「こんななつちやつた！」んだよね。

子供の成長早いってもこりゃねーよ俺。しかもこの腐れ外道はこう言つた口調を気に入らない奴にしか使わない。貴族の屋敷行つた時の大半はこれだし。更にパパ上の前ではきちんとした口調。

え、俺？ 気に食わないランクの上位ランカー舐めるなよとだけ言つておく。

……だつてさ、だつてさ、非道いんだぜあいつ。最近ギャグでも「お風呂一緒に入ろう！」なんて言つた日には、すげえ冷めた目で「きめえ」とか言うんだぜ？ もっと、癖になりそう……じゃなくて俺のハート粉々もんよ。

「隙あり！」

「お、いいタイミングだ」

中々侮れない奴だな。いきなり右のフィニッシュブロー放つてくるとか俺もびつくり。

だがそんな妹紅の右ストレートを俺は前に体を屈める事で避け、その状態を保ったまま相手を見ずにお返しの手を放つ。

ドラゴンファイ○シユブロー。某有名ボクシング漫画であるキャラが編み出した必殺の拳。それを俺は妹紅の頬に当たる寸前で止める。

「はあ。参りました」と妹紅が言った時点で稽古終了。両手を上げて降参の意を示している妹紅に寄り、先の稽古の批評を行う。色々雑な点もあったが今の所は及第点をあげられるかな？

「で、妹紅の集中を邪魔した“かぐや姫”と言つのは何なのかな？
今更都で美しい奥方とか珍しい者でもないだろう」

「あー？ かぐや姫つてのは今まで美しいと言われてた女性とは比べ物にならないくらい美しい存在なんだと。実際に見に行つたがあれは確かに美しい。ただなんて言うかな、容姿と言つより雰囲気、気が神秘的と言つか……」

そりゃ元は月在住ですからね。神秘的っちゃ神秘的ですがね。で、その神秘的な雰囲気に見事に妹紅のパパ上もやられちゃったそうなの（一目惚れの意味で）。最近では妹紅に構ってくれる時間も減っ

てる始末で、妹紅も態度には出さないが寂しがつています。

どさくさ紛れに「泣きたいときは泣いて良いんだぜ……俺の胸の」と言ったら言い切る前に炎が飛んできてびっくりしたさ。

や、それは元気の無い妹紅を元気付けるためであって、決して本心から言った訳では無くて云々。

たまにパパ上の様子を見に言ってるが、ありや末期だな。「かぐやかぐやかぐや！」なんていい歳こいたおっさんが叫んでるかな。妹紅に近況を伝えたくても伝えられない。

まあノリで俺も参加しちゃったからと言う理由もあるのだが……話を戻そう。

ただパパ上から話を聞く限り、「それはそれ」と割り切っては入るっぱいので心配は無い。何よりも娘が一番だと彼自身が言ってくれてる。母の方はもう知らないそうだが（宮中の方で新しい男を引っ掛けてるらしく、妹紅が会おうとしない限り絶対に会わせる気は無いとの事） 育児放棄ダメ、絶対。

「ふーん。じゃあ今度一緒に見に行くか？」

「嫌だね。あいつは父上を私から奪ってるから嫌いだ。父上も父上だ。あんな女に鼻の下のばして……」

「そう言いなさんな。それ以外にも色々多忙な人なんだからさ。それに腹違いの兄弟が居るとはいえ妹紅は末っ子。たっぷり可愛がってもらってるじゃねーか。寧ろ一人立ち出来るか俺は心配だよ」

「よ、余計な心配だ！ 私ほひ、一人でも全然」

「バーカ、家に家族が居るってのはそれだけで安心できるもんさ。

例えお前が一人立ちしても、帰って来る家があるってのはな」

「……乱治が何を言いたいのかさっぱり分からない」

要は父親を信じてやれってこと。名誉のため直接俺が言うことは出来ないけど。

珍しく妹紅が「一人で修行したい」と言うことで暇を貰った今日この頃。やる事も無いのでパパ上の所に行こうと宮中に着てみた。門番にはパパ上から戴いた紹介状を見せ、超一級のvip体制で屋敷の中に案内されたのだが、何でも今日は「かぐや姫の所に行きました」との事。あの工口親父め。

だがこれはよくあること。慣れてる俺は従者にお礼を述べてからかぐや姫の屋敷へと向かう。大抵その屋敷はざわざわと騒がしいのだが、今日は今日とて何だか別の騒がしさがそこにはあった。

「一体何があつたんですか」と庭で立ち往生している別の従者に話を聞いた所、「求婚ですよ、求婚」との返された。

求婚ねえ。中の様子を見るためにその辺の高い木に登って見た所……居るは居るは。見事に地位の高そうな御人達が。確か右から“石作皇子”、“右大臣阿倍御主人”、“大納言大伴御行”、“中納言石上麻呂”、“車持皇子”だったつけ。割と竹取物語は詳しくかつたりするんだぜ……ってあるえ、車持皇子が妙にパパ上に似ている気がするお。

いや、無いな。こんな馬鹿げた会場に「かぐやかぐやかぐやかぐや！」居たよ。一人空気読まずに気合いを空回りさせてるバカ親父が。そもそもあんたもう歳だろうが。それが娘と同じ年齢の……いや、そうでもないか。あれでかぐや姫ってパパ上の年齢をぶっち切つていそっだし。それでも「幼女愛好者！」と、面と向かって言つてや

りたい。

そんなパパ上の気合いにかぐや姫も……もう輝夜でいいや。輝夜も引き攣った笑みで“蓬萊の玉の枝”を持って来るように伝えていた。

お題を受け取った四人の貴公子と馬鹿一匹は、従者を伴い意気揚々と屋敷を後にする。その中の馬鹿一匹は従者達を解散させて、そのまま妹紅のいる屋敷へと向かって行った。当然俺も付いてったがね。

「妹紅、居るか」

「今日は一人で修行したいと言っていたのでここにはいませんよ。それよりも何ですか、『かぐやかぐやかぐや！』って。あそこで言いますか普通？」

「何だ、覗いておったのか。だったら話は早い。“蓬萊の玉の枝”って何処に「ねーよ」

数秒の後「どうしてこうなった……」と、orz パパ上はこんな状態になった。ざまあ、としか言いようがないが、何故か俺の背筋に悪寒が走る。パパ上の目が光ったのだ。

「……そういえばぬしは手先が物凄く器用だったよな？」と何かを思い出した様に俺に擦り寄って来る。「知りません」「記憶にございません」と、永年鍛えた話術で必死に抵抗を試みるも尚も食い下がる。恐るべきかなエロパワー！

結局俺の根負け。共同作業という事で妥協させた。

「いいですか、私は必死になって“蓬萊の玉の枝”の贋作を作ります。その間の炊事などは任せましたよ。何よりこの屋敷は、今ではあなたと私しか妹紅は受け入れないんですから」

「任せろ。何、宮中の仕事？ 妹紅といた方が楽しいから嫌に決まっておろう」

断言しやがった。天皇、コイツどっかに左遷してやれ。絶対喜んで都離れると思うから。

でもま、たまには家族サービス位してやれや。

「で、出来た……」

三日、三日だ。俺の妄想と忍耐力の限りを尽くして作った作品をだ。

無駄の限りを尽くした無駄の無いこのフォルム。加えて艶、輝き、そして手触り。完璧だ、完璧過ぎる。誰が見ても“蓬萊の玉の枝”だと信じてくれるだろう。

というか三日間ずっとパパ上がこの屋敷に居て、逆に妹紅は仕事をクビになったのでは？と心配していた。いやホント、三日間仕事サボタージュはまずいでしょ。

「出来る事なら風になりたい」なんてバカげた事を吐かしている

所を見ると、割と本気なのかもと思ってしまふ。というか俺そつちのけで「明日は寺でも巡るか！」なんて宣つてる所を見ると本気としか考えられん。

「バカ言つてないでくださいよ。さつさと用を済ませて遊びに行きましょう」

「おお乱治。なんだか久し振りだな。そうだな、さつさと用を済ませよう。妹紅、ちよつと宮中に行つてくる」

つゝわけで再び来ました、輝夜の屋敷に。いやね、何食わぬ顔で宮中行くみたいな事吐かしたからすげえ驚いたね。

まあ今に始まつた事じゃないし驚いたつてしょうがないんだけどさ。

輝夜の屋敷にはいつもの人ばかりが出来ていて非常に入り辛かったが、パパ上の姿を見て今日はやけにあつさり道をお譲りになった。聞き耳を立てて見るとやれ「天界まで行つた」とか、やれ「龍の胃袋を貫いて帰つて来た」とか、あらぬ噂でいっぱい。現実実は三日間、屋敷に引き籠つて妹紅と遊んでただけなんだけど。

小声で「何だか勝手に盛り上がつてるの」「何て俺に言つてきた時点で、この親父はこうなる事を予想していた事を伺える。流石と言つておこつ」

「して、“蓬萊の玉の枝”は？」

「はっ、ただ今」

受け渡し係りは俺ね。これに関しては揉めた。自分が渡したいとか馬鹿言うから説得にホント苦労したさ。

結局「堂々と人を動かしてる様を見せた方が見栄えが良い」と俺が口を回して何とかこの係を勝ち得たのだ。

超至近距離で輝夜を見るのは俺も初めて。パパ上さまぁ。ただ俺作の“蓬萊の玉の枝”を見た時に、輝夜の目が物凄く変わったのが分かった。

まずっ、やはりばれたのか？

（ら、乱治よ。完璧な出来ではないのか？）

（し、知らないですよ！ 初めに「妄想でも大丈夫ですか？」って言ったじゃないですか！）

（馬鹿者！ これで偽物何て言われた日には宮中追い出されて……
ゆっくり妹紅と生活出来て幸せいっぱい、夢いっぱいではないか！）

（ちょうどいいですね。願ったりじゃないですか）

（そうだな、乱治の言う通りではないか）

（（ははははは……妹紅に何て言おうorz））

などくだらないやり取りもつかの間。ついに輝夜の審判がやって来た。

「結論から言いますとこれは偽物。おそらく誰かに作らせたのでしよう。違いますか？」

「……申し訳ありません、これは今渡した従者に作らせた偽物です」

「あなたが……そうですか。ですが私はここまで見事な物をこしらえたあなたの腕に感服しました。つまらぬ物ですが褒美として私の着ている服を一着差し上げましょう。少々お待ちを」

という訳で何故か褒美を頂きました。ちなみに頂きましたのは非常に立派な作りで、女性の美しさを立てる服一着と大量の銭。やったね、これで今後の生活にも困らないね。うん？ 隣では主のパパ上が物欲しそうな目でこちらを見ている。
銭を上げますか？

はい
いいえ

乱治は銭を上げた。だがパパ上は受け取らなかった。今度は……服を渡そうとした。
服を渡しますか？

……はい
いいえ

乱治は服を渡そうとした。パパ上は『くんかくんか』しようとした。何とか止めた。……いや、ここまで変態が深刻だとガチでこの人の“せい〇く”をふっ飛ばしたくなる、“せ〇よく”を。

「はあ。それよりも妹紅には何と言っておつもりで？」

「なーに、心配ないさ。少しばかり暇が出来たと言えば、聡明なあの子は皆まで言わずとも察してくれ「父上。私が何を察すると?」

「……まさか全部「見てました」

……般若ばかりはパパ上にも対処出来なかったとか。

尚、本来の話であるなら、“蓬萊の玉の枝”の偽物を作った職人を、なんやかんやで逆恨みした“車持皇子”が、血が出る程のお仕置きしたというもののだが、今回はパパ上が血が出る程のお仕置き受けたことをここに記しておく。

ただ、この時俺は少し浮かれていたのかもしれない。頭の中から完全に正史が抜けていた事も、加えてここに記しておく。

蓬萊の玉の枝（後書き）

次回か、その先一回辺りで妹紅編は終わる予定です。何れにせよ、次回辺りで話は大きく話は動きます（……多分）

そして誰がいなくなった（前書き）

東方正史、実際の史実とは大きく異なります。それでも構わない方は閲覧ください。誤字脱字も多いと予想されます。重ねてご了承ください。

更に、前回の後書きで妹紅編は今回。または次回で終わるなどと申しましたがごめんなさい＞（――）＜訂正させていただきます。故に前回の後書きはスルーでお願いします。

最後に独り言を。

早く夏休みを僕にください

そして誰がいなくなった

あれからもう三年が経った。二十前だと言うのに妹紅はそれはもう綺麗な女性になった。パパ上もパパ上で宮中を追われた訳だが、それほど悲観している訳じゃない。いや、寧ろ生き生きしている。

宮中を追われたって、別に都で生活しちゃうダメなんて法律は存在しない。それにこんな性格の人だ。周りから何言われようが別に気にしない。だから今は妹紅の屋敷でひっそりと。それでも充実した毎日を送っている。

そんな中俺はと言うと、相変わらずこの屋敷で従者をやっている。「ぬしの宮中での地位くらい確保してやると言うに」と言われても興味などない。寧ろ居心地の良さをここに感じる。「物好きな男よのお」なんて言われたが「お互い様です」と、二人で笑いあったのもいい思い出。妹紅に「寄るな、気色悪い」と言われたのは黒歴史だけ。

「にしてもぬしは未だに若いな。老ける事を知らんと言うか」

「あれ？妹紅から聞いて無かったですか？ 特別な力の関係上、私って老けないんですよ。かれこれ長い月日を生きてますし」

「……道理で何事にも動じぬ訳だ。歳を取ったら怖い物が無くなると言うのは本当だったか」

多分釈然としないものを感じているのだろう。身近な所に不老の

存在がいると言うのだから。ただそれ以上は何も言及してこない。

本来なら超高級品である茶（但し自家製）を嚙り心を落ち着かせ、ぼんやりと庭を眺めるパパ上は果たして何を思ったか。余談ではあるが妹紅には単純に「すげえ！」と驚かれた。

「まあよいか。ただ私より長生きするだけなら。これなら妹紅をぬしに「いりませんから」

油断も隙もねえ。ちなみにパパ上が同じ事を妹紅の前で吐かしたら、冷酷無慈悲なまでに妹紅がパパ上をフルもっこにしてたわ。

そりゃ魅力的な話だとは思うがやはりごめんだ。一体何年歳が離れていると思うんだ。この年になって結婚願望とか（苦笑）って感じだよ。それは妹紅も同じらしく、俺の事は「気の許せる従者で兄貴的存在」と前に話してくれたのを例に挙げておく。

ただそんな妹紅も結婚適齢期をもう超えてしまっており、最近では専らその事に頭を抱えているパパ上でもあったりする。と言うかこの時代の連中ってどんだけロリコンなんだよと今一度問いたい。前なんかその辺の貴族は六歳児に将来像を見出していたし、妄想力が著しく発達し過ぎだろう。

「しかし本当にどうたものか……」

「いいじゃないですか。あれももう立派な大人ですから、好きにさせてやれば」

「やらん。絶対に私が認めた男以外に娘はやらん。と言うかこのまま私と共に生活していくというのも」

「ダメですよ、あれの人生を勝手に決め付けちゃ。それこそあいつは幸せになれない。あなたも何れは子離れをしなくては」

「うゝむ。それはそうなのだが……そうか、妹紅もそこまで成長したか」

このまま妹紅には“蓬萊の薬”を服用せずに“この時代”を生きで欲しい。最近はそのを常々思う。少なくとも今は“幸せ”なのだ。この幸せを壊すなんて俺には出来る訳が無い。無論、他人に壊させるなんて論外だ。

原作がどうあれ大切なのは“今”。ひよんな事から元々暇潰しでここに居着いた訳だが、僅かな年月で久々に人間の温かみを身近に感じる事が出来た。故にもっとその温かみに触れていたいのだ。

いつそのまま、“あいつ”が戻って来るまでこの生活が続いたら……なんて思う時もあるが、やはりそればかりは叶わぬ夢。人間というのは儚く、そして脆いのだ。

だったらせめてこの二人の最期くらいはこの目で見届けたい。それが二人の従者として俺が出来る最後の務めだと思うから……といけねーな。最近はどうもそういった事も考えるようになってしまった。

「む、どうした乱治よ？ よもや娘の婚姻の儀にすら参加しないと云うのは流石に許さないぞ？」

「……ふ……ふは………っははは！ いやいや、先程まで「娘はやらん」と言ってた方が、もうそんな事を言っんですか」

でもやっぱり今は幸せだな。俺が悲しむ前に愉快的な事が起きるのだから。

「かぐや姫が月に帰っちまうんだってよ」

いつもの悪霊被いの傍らに妹紅が耳にした噂だそうだ。何でも月から使者が訪れて、かぐや姫を連れ戻すとか云々。

だが当の本人こと輝夜は、実は月に帰りたくないとか云々。まあ俺らには関係無いからどうぞ勝手にやってください、と言うのが俺らの本音。結果的に地上に居座る訳だしね。

それに奴らも不老不死の存在。何れは幻想郷で会う事になるかもしれないし、焦って今会つとく必要なんて俺には皆無なのさ。

「ふーん。まあどうでもいいや。それよかあの親父はどうした？」

「父上？　なんだ。てつきり乱治と一緒にいるもんだと思ってたけど」

何だつてんだあの親父は。もう日は沈み掛かっていると云うのに帰らないとか、一体どこほつつき周ってんだ？

まあでも一応あんなのでも雇い主だし、主迎えに行くのも従者の仕事なんだよね。夕飯は妹紅の分だけ用意して心当たりでも当たっ

て見るか。「ちょっと迎えに行つて来る」と妹紅に伝えてから早速
搜索開始。

だが、近隣の美しい奥方が住んでいると噂されてる屋敷を、一軒
一軒当たつて見るが全く手掛かりが掴め無い。こいつは困つた。

「真ん丸お月様もうあんなにはつきり見える頃合いだつてのに、
あの親父と来たら」

こんな綺麗な満月であつても、妹紅一人じゃ味気無いだろうな。
そう考えるとパパ上がまだ歸つて来ないと言つのは本当に珍しい。
“娘命”のあの親父が、今日に限つて娘に寂しい思いをさせる訳と
は何だ？

暗い夜道の中一人足を止め、もう一度よく考えてみる。パパ上の
身の回りに最近起きた何か特別な事は……無いな。いやいや、もう
少し考えてみる。

ご飯食う、妹紅愛でる。三人で和歌でも歌う、余りの駄作に三人
涙目、妹紅を愛でる。妹紅に内緒で輝夜を覗きに行く、こちらに
気付いた輝夜が軽く微笑んでくれてパパ上メロメロ、それが尾行し
ていた妹紅にばれてパパ上ボロボロ、見ていた輝夜と俺は大爆笑、
警備の者に気付かれて三人で脱走、妹紅を愛でる。

ちなみに輝夜を覗きに行ったのはこれが初めてという訳では無い。
三年前からこうやって犯罪紛い……っつーか犯罪か。ともかく覗き
に行っている。

「お陰で三人共顔を覚えられちまつたし……覚えられちまつたし……覚え、られた？」

『あなた達を見てると、地上も捨て難いわね』

『はっはっはっ！ だったら私めがあなたのために戦……痛っ！
ちよ、我が愛しの娘よ。こんな所で痛み付けなく……イタツタタタ
タツ！』

見る見る内に俺の顔が青醒めていく。いや、だって本気であんな
事言つてたなら、間違いなくあの親父は「何だ！ 月から何か降り
て来るぞー！」ヤベエ！時間がない！！ 気が付くとフルスピード
で夜道を駆け抜けていた。

頼むから。頼むから馬鹿な真似だけはしないでくれ。

月の技術というのは途方も無いくらいに高い。地上に生きる当時の人達から見たら、何らかの妖術を操っているようにしか見えない。いや、俺だって驚く。一回しか引き金を引いて無いのに何十発も弾が発射されるとか、一体どういう構造になっているのかと。

この時はまだ心のどこかに余裕があった。なんせあんなお方だ。殺したって死にはしないだろう。

ただ大きな振動と伴って衝撃音が辺りに轟いた時は、流石に俺も余裕が無くなった。何が起こってるか分からない分、下手に能力で移動して瞬殺されたら意味が無い。とにかく急ぐ。輝夜の屋敷へと急ぐ。

「おい！ 無事か？」

……知ってるさ。いつも。気が着いた時にはもう手遅れ。この世界に来る前もそんな感じだったよ。でもさ、こんな結末は……あんまりじゃないか……

屋敷に着いたと同時に中庭を目指す。目の前に見えたのは親父さんと輝夜。急いで俺はそこへと向かう。十メートル、七メートル、四メートル。距離が近づくに連れて俺は落ち着きを取り戻す。「全……さ、一旦ここを離れ」だが、この先の言葉が親父さんに届くことは無かった。

空からこちらに流れてきた一本の高速の矢。俺を絶望の底に突き落とすのには十分すぎる一撃。

貫かれる親父さんの胸。服の上から滲み出るおびただ夥しい出血。真っ白になる俺の頭。断片的にしか物事を処理できなくなった俺の脳内だったが、輝夜に横たわる親父さんの姿を見て漸く理解に迫り着いた。

「お、おい！　しっかりしろよ！　あんた、何倒れて「乱治！」

「聞き取ってあげなさい。あなたが……あなたがこの方の従者として出来る最後の仕事であり、それをこの方が望んでいるから……」

その細い腕でしっかりと親父さんを支え、凜とした声ではつきりと輝夜は告げる。その目に止まない雨を宿らせながら……

「ふらふらになりながらも俺は親父さんの口元に耳を近付ける。」「しっかり……しろ」と早々に言われたがそりや無理だ。「あんたがな」と強がって返すのが精一杯。必死になつて笑顔を作る必要なんて無いからさ、頼むから早く言いたい事を言い切ってくれよ。

俺の視界が揺れる中、親父さんは精一杯の声で俺に伝えたいことを伝えてくれる。妹紅の事。将来の事。あまつさえはこの前俺が取っておいたお酒を盗み飲みした事まで。「死んで詫びるから許せ」だと？　生きて謝れよな、馬鹿野郎……

「ははは……こうやって惚れた女の膝元で死ねる。なんて幸せな最期だろうか？　惜しむべきは……娘の嫁入りをこの目で見届けられない事かな」

「もういい、喋るな！　頼むからさ……」

「これが我が運命ならしかと受け止めよう。よいか、乱治。死者が望むのは生きてる者の幸せ。その事を妹紅にもしっかりと伝えてくれ」

これが親父さんの遺した最後の言葉。この日俺はまた一人、大切な者を失った。

そして誰もいなくなった（前書き）

ども、作者です。今に始まった事ではありませんが今回も独自解釈と言つ名の捏造が入ります。ご了承ください。

尚、今回で妹紅編は終わりです。数話（出来れば）挟んで、また新しく妄想をふくらませようかな、と考えております。

PS ピク○ブ百科のもこたんの画像を見て「はあはあ」した作者は変態だと常々思う（だが我がジャスティスはにとり。異論は認め）

そして誰もいなくなった

「姫様！」

「……永琳」

「追っ手がまだ残ってます。さ、早　　！！　　あなたは……」

「どけ」

もういい、疲れた。いちいち反応するのも面倒くさい。怒りに任せて敢えて大量の妖力を展開。空からやって来た“穢れ無き御仁”というのは極端に穢を嫌うらしいし……せめて穢に塗れたその身体を地に埋めて死ね。

展開した妖力に更に妖力を注ぎ込む。絶望に溢れた叫びの聲が一瞬間こえたように感じたが、空から降ってくる残骸の雨がすぐさま俺の意識を逸らす。

悪い夢でも見ているかのような目で俺を見る両者。夢であつたらいいと思ってるのは何もお前らだけじゃない。

傍に倒れている親父さんに目を向ける。永琳も釣られる様に視線を移し、胸に刺さった一本の矢を見て僅かに表情を歪める。次に俺の方を見て……大方の事情は察してくれたようだ。

「必死で抗え」

「……気が済むまで相手をするわ」

もう俺は怒りを抑え込む事を放棄した。

強い、強いよ。肉弾戦や個としての戦闘力なら確かに月の綿月姉妹を凌ぐだろうよ。俺の攻撃を何度も去^いなし更に反撃までしてくるんだから。

でもさ、今の俺にそんな攻撃は通用しない。力が尽きるまで戦い続ける勢いを有している。この感覚はあの大戦以来。久しく感じることの無かった“憎悪”が糧となっている。

永琳の“踵落とし”が俺の脳天を目掛けて落とされる。本来ならきちんと防ぐ所だが生憎今の俺はキレてる。首を右に傾け左肩でモロに受けながらも、返しの右フックを永琳の左脇腹に叩き込む。軋む俺の左肩に、脇腹を押さえ尚も果敢に攻めてくる永琳。

あいつは頭がいいからな。簡単に自分が斃^{くたは}つたら輝夜の身が危ないと考えているのだろう。はは、全く以ってその通りだ。

「怪物め……」

「薬の効力ですぐ回復する奴に言われたかねーよ。敢えて言うなら手前は既に人でもねえ。寧ろ手前が怪「黙れ！」」

容赦なんてしない俺の一撃一撃が必殺のそれ。当たる度に永琳の身体の一部が弾けながらすぐに再生を行う。これが怪物と言わずしてなんと言っのだろうか？尤も俺も似たようなものだが。

永琳も永琳でこちらに攻撃を当てるが如何んせん、致命打になら

ない。否、なる訳が無い。攻撃を浴びてもすぐに回復してしまうのだから。

それに今更“痛み”云々なんて在って無い様な物。痛覚は通っているが戦闘中にはさほど気にならない。そこまでの域に既に俺達は達しているのだ。……心の痛みばかりは対処の仕様が無いんだけどね。

能力を使い永琳を粉々にふっ飛ばす。輝夜は思わず顔を背けるが俺は一切視線を逸らす事をしない。小さな光の塊を中心に再びその肉体を形成しだす。やがてそれは人型を模すようになり、再び永琳をこの地に呼び戻した。

ああ、これが不死か。殺しても死なないとはこれ如何な物だろう。一連の流れを俺は憐れみと蔑みの目で見ていたのだ。その目に永琳は気が付いたのだろう。顔にこそ出さないが、大気が揺れる程にその怒りを靈力に注ぎ込んでいる。

そうだ、もつと怒り猛れ。そしてそれすらも通用しない俺を前にして、どうする事も出来ない自分の無力さに絶望しろ。

「その目を止めろおおおお！！！」

空中に飛びのき、手持ちの弓を極限のサイズまで大きくする。夜空に広がる巨大で歪^{いびつ}な狐。膨大な量の靈力で形成されるそのサイズに見合った矢。

いいぜ、その量。この辺一帯の事なんてもう頭に無いくらいに手前もキレてるな。左手で敢えて妖力を使い俺は不死嵐を生成する。

永琳が時間を掛けて、俺を滅ぼさんとする矢を形成してる間に、だ。膨大過ぎる靈力と妖力の展開は、やがて辺りにまで波及する。木

々はざわめき、大地は揺れる。雲は荒れ……そして生物は環境の变化を敏感に感じ取っていた。

空より放たれし矢は俺毎この地を滅ぼさん勢いでこちらに向かって来る。だが忘れてはいないか永琳。俺の能力は“あらゆるものをふっ飛ばす程度の能力”だぜ？ いや、忘れてるも何も説明した覚えは無いがね。

空いてる右手を翳して永琳が放った矢を難無くふっ飛ばす。霊力の残り香すら残さず一瞬で。流石の永琳もこれには表情を崩さずにはいらなかったようだ。

「一体、何が？」

「安心しな。訳が分からないままお前は死ねるんだから」

蓬莱の薬の不死が魂と強い関係にあるのだとしたら、そいつの魂毎相手を滅ぼせばいいだけ。まあそんな事が出来るのは俺くらいな者だと思っが。

“不死嵐”^{ふしがらす}はただの妖・霊力の力技にあらず。“あらゆるものをふっ飛ばす”。そんな能力が付加された難攻不落の巨大な妖・霊弾。前こそマスタースパークにやられそうになった物の、あの時はさほど力を入れてなかったからこそ拮抗してしまっただけ。真面目に力を注ぎ込むと誰であろうと対処はし切れ無いだろう。

さて、そんな不死嵐をまともに喰らったらどうなるだろう？ 以前放った時は一つの文明を滅ぼした。永琳がまともに喰らったら？ 間違い無く死ぬ（ねる）だろう。

左手に渦巻く妖力の嵐は、一つの球体の如く循環を繰り返してい

る。月を背にして夜空の中で呆然と佇んだままの憐れな彼女。彼女の人生の巻く引きは俺が引き受けてやる。俺の左手より遂に不死嵐が放たれた。

「で、どういっつもりだ？」

忘れていた。蓬萊山輝夜。“永遠と須臾しゅゑんを操る程度の能力”。これは後に生まれるだろう咲夜の能力“時を操る程度の能力”に非常に似ている。決定的な違いは咲夜が一時停止に対し、輝夜が超スロ―再生から超速早送りが出来るという点だろう。

要はそんな超速早送りみたいな事をして永琳を自分の元に引き戻した。大方そんな所だろう。このまま逃げられちゃ敵わないので、他者能力干渉不可の空間を“不可妖力”を辺りに展開する事で、その手段を選ばせないようにした。

「まあ結局は無駄なんだけどね。輝夜、そいつを寄越せ。塵一つ残さず魂を抹消してやる。さすれば二度と復活する事は無いだろうよ」

「嫌よ。目の前で親しき友人が殺されて、その上同じ苦しみを今一度味わうなんて私には出来ない。いや、させないわ！」

怒りで熱くなっていた頭の中が輝夜の涙によって急激に冷やされ

る。冷静に考えればそうだ。こいつにとって永琳は大切な存在なのだろう。失う苦しみを知ってる俺が輝夜から永琳を奪う。……無理だ、出来っこ無い。前に出て必死に永琳を庇う輝夜を前にして、俺に為す術は無かった。

無言で親父さんの亡きがらを抱えて二人に背を向ける。どんな事を突き付けられても先ずは妹紅に報告しないと。

ふと、妹紅の姿を思い浮かべ、俺はその場に足を止める。ああ、そうか。妹紅はこれがために復讐を誓うのか。俺の手で直接決着を着ける事は出来ないが、だったら援助くらいはしとかないな。

「……何年、何十年、何百と何時になるか分からないが、何れ輝夜の前に白い髪をした一人の娘が現れる。唯一の肉親を失ったそいつの怒りにお前は真面目から応えてやれ。それがお前らを見逃す条件だ」

「待つて！ あなたは一体？」

「詳しくは永琳に聞け。数百年はお前らを見たくない」

それだけを言い残し、二度と来る事は無いだろう輝夜邸を後にした。

富士山

「……本当に飲むのか？」

「ああ。この手で奴を葬り去るまで私は死ねないからな」

天皇が遣いの者に薬を富士の火口に捨てるように命令したのが数日前。その事を最初っから知っていた俺は妹紅と先に早回りをして

遣いの者達を強襲。殺しちゃいないぜ？

この時代にそぐわない容器の中で得体の知れない不気味な液体がこれまた不気味に小さく波打っている。

効能は不死。副作用は身体的成長のストップ。おおよそ人間の手には余る代物の。一人の娘が復讐の為に飲用するには明らかに手に余る。しかしその意思は非常に固く、目の奥で復讐の炎が燦々しているのが容易に分かる。

人としての人生を謳歌して欲しいのが俺の本音。そのためだったら俺は協力を厭わないと説明はした。だが妹紅は復讐を選択。『復讐を果たさずして余生は楽しめない』だそうだ。

まあ蓬萊の薬って言っても俺の前じゃ無力なのだが、この手で妹紅に引導を渡す事なんて俺には出来ない。魂と強く結び付いたその効能は、魂毎ふっ飛ばす事でしか消し去る事は出来ないのだ。

「いいのか？ 俺じゃあお前はどうかやってたって殺せないぞ。死にたくなっただけで死ねない」

「大丈夫だよ乱治。少なくとも奴を殺すまでは死なないから」

馬鹿野郎が。優しさと憎悪を含ませた薄い笑顔。どうせなら優しさ100%の笑顔を俺に向けるよな……

真つ当な人として見せてくれた笑顔を最後に、妹紅蓬萊の薬をその口に納める。「うつ」と何かにたじろぎながら必死に何かに抗っている様は、永遠の生への罪の所為か？

自分の身体を自身の両腕で必死に抱き込む妹紅であったが、やがてはその苦しみも和らいだのか。次第に落ち着きを取り戻していく。

だが同時にその黒かった髪の毛が沢を含んだ艶ある白へと変色。正気を取り戻した時には前の様子とはすっかりイメージが変わっていた。

「はあ、はあ……乱治。私に変わった様子は？」

「髪の毛が白くなって、瞳の色が深い紅に。前とすっかり様子が違って別人見たいだが……気を付けろ。今のお前は明らかに迫害の対象となるだろうよ。と、ほらよ、饑別だ。こんな服じゃ旅もままならねーだろ？」

渡した服はあれ。原作仕様の白いカッターシャツと紅いモンペ（サスペンダー付き）。余りにごわごわした服だと歩き辛いから故の配慮も込めて仕立てた俺の自信作。

そして妹紅とはここでお別れ。だらだらと別れるより日本で一番高い（と思われる）山の頂上から別々の道を降りる事で区切りを着けた方が、俺としても妹紅にしても別れ易いと踏んだから。

「風邪引くなよ」「男が出来たらすぐ連絡するんだぞ」などなど鬱陶しいくらいに念押しをしたのだが、何故か今回は一つ一つしっかり聞いてくれた妹紅に寂しさを感じたのは内緒。

「旅に疲れたら子供の頃に訪れた人里に行け。運が良ければ出会いが待ってるはずだ。親父さんもそこに葬っておくからさ」

「ありがとう乱治。私なら大丈夫だからさ」

「馬鹿野郎。何時まで経っても子供ってのは親を心配させるんだよ。『大丈夫』ってそいつが言ったら尚更な」

雛は何れ親元離れ、何時しか大きな羽ばたきを空で魅せてくれる。こんな機会で飛び立って行くというのは非常に残念だけど、せめてその姿を更に天高くから眺めていることを祈るよ。

「またね……父さん」

果たして妹紅が誰に向かって言ったのかは俺の知る所では無い。それでも俺は片手を挙げてそれに応える。妹紅がその姿を見てくれている事を信じて……

以来都では誰も見ていない。

そして誰もいなくなった（後書き）

妹紅編も終わったし主人公の創作秘話でも（「そういうのいらないから」という方。スルーを推奨します）

元々この作品（妄想）を作ろうとしたきっかけは東方関連の作品を読み漁って「自分も！」と言う思いに至ったから。

だがいざ主人公を立てるとなるといいアイデアが思い浮かばない。当時（というか今もだが）最強物に憧れていた作者はともかく凄そうな能力を連発。が、あまりのチートっぷりにいまいちこうしつくりこず。（ただ某作品の“切断”云々。あの発想は驚かされました）と、気分を変えて題名を考えて見る。何故かアメリカのハリケーン“カトリーナ”を思い出し、連想ゲームの要領で『東方暴風警報』完成。更に連想ゲームを続けると「台風ってすげえ物ぶっ飛ばすのな」って事でちょいと今ある能力に加工。乱治（前名不明）が完成。

どうでしょう、何とも無駄な時間を費やしてしまわれましたね。何か質問がありましたらどうぞ質問ください。ただし東方正史に關しての質問はあまり詳しい返答が出来ません（それほど詳しく無い故に）。ご了承ください。

閑話・里帰り（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。“まだ”夏休みじゃ無い故色々
と試練が私を襲ってる状態で、話を作る時間すらありません。暫く
はかなり更新が滞ると思います（次回は一週間位間隔が空いてしま
うかと）。こればかりは作者も無念としか言えませんので、何卒
ご理解ください。

また、前回咲夜さんの“時を操る程度の能力”を一時停止と表現
しましたが訂正します。咲夜さんの能力は“一時停止”も“スロー
再生”も“早送り”も可能です。いや、一時停止は知識が怪しい故
断言できませんが、後者は可能です。間違った情報を流してしまい
申し訳ありませんm（――）m

更に今回の話ですが、時々系列に問題があると思われませんが、二
次創作故の設定と理解していただくと幸いです。

長い長い前書きになりましたが最後に一言言わせてください。

ほんと、誰か夏休みを僕にください。

閑話・里帰り

身近な者の別れと言うのは流石に堪えた。永い時を生きてると言っても相変わらずそのへたれっぷりは健在だ。だが時代は停まる事なく、貴族がその権力を振るいに振るう平安へと突入する。

妹紅と別れた後はそのまま自分の住まいには一度しか帰らず、地方を点々とする時期が続いた。確かに圧政を強いられた村というものも存在はしたが、それ以上に都の存在を知らないという村も多かった。

そりゃそうだ。日本狭しと言えど時代はまだ平安。正確な地理さえ把握出来ていないのだ。全ての村を認識出来た方が逆に凄い。多分紫でさえも知らんだろうな。月人は言うに及ばず。

ここ最近では野良陰陽師兼妖怪退治屋として全国を行脚している。北は北海道から南は沖縄まで、自由気ままに津々浦々。……いや、この二つは平安時代現在で日本と呼ぶかどうかは疑問に感じたけどさ。

とにかく強い悪霊&妖怪がいると聞いたら即成敗。散々痛め付けた後「白い髪した美しくて美しくて美しくて（ryな娘に手え出したら殺す」と脅しを入れ、屈服したと思ったら釈放。反論した奴は『ピー』だ。お陰でその辺の妖怪や悪霊からは『妖怪より恐ろしい人間』といらぬ二つ名まで付けられてしまった。

ただ俺が退治する妖怪や悪霊というのは、聞いても聞かないどうしようもないやつだけで、ひん曲がった根性がボコされた事によりある程度治った奴に関してはそれ以上手は出さないでいた。そんな事もあってか、仲の良い妖怪や悪霊も割と多かったりする。

「でさ、あんちゃん。その幽霊ときたら俺ん事を『寄るな、未練臭

が伝染る！』なんて言うんだぜ。手前だつて未練残したから幽霊やつてんじゃねーかよなつてんだ」

「騒がしいと本当に成仏させつぞ。……ほら、あの村だろ」

「おお、あれだあれだ。これで奴に借りが返せる。あんがとな、強いあんちゃん」

最近ではこうした慈善事業もしてたりする。俺を憑り殺そうなんて輩もいたが、まあ札ぶん投げて二度と逆らわないように拷問（耳元でお経を囁いたり）したのもいい思い出。今ではそんな輩は一人もない（悪霊ネットワークというのは情報の出回りが非常に速い）また一人悪霊を届け終えた俺だであつたが、たまに日本国外にも目を向けてみたりもする。昔は「外国の地を踏む事なく日本で働きたい」なんて現代若者を象徴するような思考を持っていたが、今となつてはね。

かと言つていざ、日本を離れようと考えて行動に出ようとする、何故だかテンションが下がる。いや、理由は分かり切っているんだ。ここを離れるには思い出を作り過ぎてしまったのだ。日本の周りが海に囲まれていない陸続きの地理だったら、迷わずおれは大陸の果てまで旅をしていたんだけどね。

ま、世界中を旅してあらゆる神々にケン力を売るつても考えようによつては面白かつたかな？ ……流石に返り討ちに合いそうな気もするけど。

「で、スキマに隠れるおっかない妖怪さん。今日は俺に何の用です

かね？」

「あら、気付いていたの。数百年振りかしらね、あなたと喋るのは」

例の如く『ニヨ！』って感じで一裂のスキマから現れたのはご存知八雲紫。こうして会うのは……うん、考えるのは止しておこうと思う。

別段大した理由もなく、ただ単にふと思い出したから様子を見に来ただけらしい。相変わらず楽園作りは順調らしく、最近では順調過ぎて手が回らなく、猫の手でも借りたいんだとか。

これ、遠回しに俺に手伝えって言ってるんじゃない？ あっちは割と見せないニコニコした表情。こっちはあいつにはよく見せている、冷や汗をたらたら流した焦った表情。考えろ、考えろ乱治。お前はあいつの何十倍は生きているんだ。今まで生きて来た人生の中に必ず答は隠されてる筈だ。

紫 忙しい “猫”の手も借りたい 猫Ⅱ 燈（ 燐 ） ちえええええん！ 藍

「ちええええええん！」

「ど、どうしたの急に」

「いやいや居るんだよ。今のお前にピッタリの相棒が。そいつは俺なんかとは比べ物にならないくらいに頭が切れて、俺みたいな放浪癖も無い」

「……分かってるじゃないの」

『にまあ』と口許を隠さずに見せてくれた紫は、俺の肩を叩きながら「誰なの？」と尋ねてくる。「九尾」と言ったら泣いて喜んでくれた。

余程忙しいのだろうな。愚痴にも似た話を聞いてるとその多忙がガンガン伝わってくる。特に妖怪の山関連は本当に頭が痛くなるのだとか。逆に人里に関しては非常に楽になったとか。巫女だけでなく魅魔と言う強力な悪霊が里にいただけで、妖怪達を牽制してくれるらしい。

「でも誰が彼女を説得してくれたのかしらね？」と真顔で尋ねてきた所を見ると、紫にも真実が伝わってない事が確認出来て安心した。「あなたじゃないの？」なんて言われもしたが、「冗談半分で聞いてきた紫を捲くのはそれほど難しい事ではなかった。

「どう、少し里の様子でも見に行く？ 送るくらい造作もないわ」

「ん、じゃあ久々に神社でも覗いて見るかな」

神社手前の山道にスキマを繋いでもらい、『ニヨ！』つとした感じで半身を出す。なんつか、すごく不思議な感覚。

一通りお礼を述べてから身体を完全に露出し地上へ。扇子で口許

を隠さずにニコニコとした笑顔で紫はスキマを閉じた。ごめん九尾。君を多忙に陥れた真犯人は僕です。でも、ぶっちゃけ他人事感です。

まあいいや。神社に行くのも久しぶりだし。魅魔は元気にしてるかな？　なんて思いを胸に山道を登る登る。紫め、随分と遠くに降ろしやがったな。全然手前じゃねーじゃん。

「いや、そうでもないか」

神社の鳥居も見えてきたし、人を模した姿が四つ程。しかもその一つ一つが強烈な妖力やら霊力を有している。……何この量。妖怪の山にケンカをふっ掛けるつもりなのか？　鳥居に近づくに連れて圧迫感を感じるんだけど。

永年の勘が告げている。このまま神社に行ったら厄介事に巻き込まれると。確かに俺は強力な妖怪に出会った時、高確率で戦闘に巻き込まれている。しかも強ければ強い程、その確率はなお高くなっているという鬼畜っぷり。なんだかねで攻撃を仕掛けなかったのは紫だけだ。

……駄目元で戻ろう。ややこしくなるのはごめんだし。僅かな希望に賭けて来た道を戻ろうとしたわけだが「お、乱治じゃないか！」と空気の読めない悪霊が遠くから叫んできやがった。

もう無理ぽ。行くしかないのね。厄介事にならないよう、念のため特製のお札を三枚程使って厄払いを行っておこう。

「あら魅魔。あなたに巫女以外の人間の知り合いがいたのね。はい、お茶お願い」

「まあな。だがコイツは並の人間じゃないよ。あ、私にも」

「そうなんですか……特に霊力や妖力の類は感じられませんが。すみません、何かおつまみを」

「うう、私は巫女な」なんか言った？「いえ、何でも無いです！」

世にも奇妙な光景。人外の者にパシられてる巫女さん。ただ巫女さんをパシってる存在というのがマジパネ奴ら。

知つての通り魅魔はもちろんのこと、後の二者。一人は“風見幽香”。癖のあるショートの前髪に真紅の瞳。白のカッターシャツにチェックが入った赤いロングスカートを着用。その上から同柄のベストを羽織ったあのお方。さっき巫女さんに睨みを利かせたのももちろんこの方ね。

もう一人は知らない。ただ有している力は二人に劣らない。多分魔力かな？ 赤いローブに同色の肩掛け。何となく後に出てくるアリスの肩掛けに似ているような気がする。性格は見た所はおっとりしてそう。

まあ何より目を引くのはその銀髪のロングヘアーにぴょこんと跳ねたアホ毛。先程から上下にぴょこぴょこ動いているのがめっさ気になるんだけど……聞ける訳ないわ。だってゆうかりんが刺すように睨んでくるんだもん。

というか何なのコイツら？ 魅魔にしるゆうかりんにしるアホ毛にしる何で三人でツルんでいるんだ？ 三人組はプリズムリバー三姉妹だけで十分なんですけど。

「ああ！ 参拝客の方ですね。すみません、今取り込んでいますんで、そちらのお美しい御仁方とお茶でも楽しみながらお待ちください」

と言つて本殿の奥に行つてしまつた巫女さん。ぽつんその場に残された俺と、そんな俺を縁側からじーっと見つめる三者（内一人からは殺気が含まれた眼差し）……この罰ゲームをどうしろと？

閑話・里帰り（後書き）

「どちらのネタを使用するかな」 今後の展開に関する作者のぼや
き

踊る阿呆（前書き）

あれ、今回で戦闘が終わる筈だったんだけど……

あ、ども。夏の暑さのせいで脳内ブレーキがイカれました作者です。

色々と書きたい事はありますが一言でまとめますと『祝・チルノ自機化』

さーで、次への一休的な意味合いで書いた話の筈だったんですが、書き切れない。どーか長い目で見てやってください。

踊る阿呆

アホ毛の名前は神綺というそうだ。何でも「魔界で創造神やつてます」と笑いながら言われた。うん、笑えない。

出会いは魔界人の人間界ツアーを魅魔が侵略云々と勘違いしたらしく、暇だったゆうかりんと侵略を阻止しに行った際、なんやかんやで戦闘を経て今の関係に落ち着いたらしい。誤解も解け、今ではこうして神社の居住スペースの縁側でお茶を飲んだりして穏やかな毎日を送っているらしい。

で、巫女さん。パシリははとうやら一種の『務め』らしい。元々は魅魔だけで牽制役を担っていたらしいのだが、何時の間にかゆうかりんが居て、「喉が渴いたわ。その巫女、お茶容れて」と堂々と言い放つたらしい。流石に怒った博麗神社歴代の巫女とバトル勃発。激戦の末、巫女を下したゆうかりんが今の地位を確立したそう
だ。

以来、巫女の代替わり毎に相手をしては返り討ちにして、今もこうしてお茶を穏やかに飲んでるらしい。ちなみに「一番最初に闘った巫女が一番強かったわ」とのこと。そりゃあ理不尽な要求されたら巫女さんだつてブチ切れるだろうよ。

「で、そんな御三方を紫は無視してるのか……ですかね？」

「さあ？　ただ何をするにしたって私達には何も出来ないでしょうよ。それとも何、あなたが何か制裁を下すとても？　確か魅魔をボコボコにしたのよね。ちょうどいいわ、敵討ちになるわね」

ちよつとー！ 無理矢理闘う方向に誘導しないで！ 確かにゆうかりんを見た瞬間から嫌な予感ばぶんぷんしてたけどさ、この段取りの良さは酷すぎはしないか？

ただ「幽香、それはいきなり過ぎじゃあ」と、やる気満々の幽香をおどおどしながら宥めてくれた神綺に全俺が泣いた。「ああ？」とゆうかりんにガン付けられて魅魔の後ろに結局隠れちゃったけど、空気を読んでくれた魅魔が何やらゆうかりんにばしっと言ってくれそうです。いやー一時はどうなるかと思っただね。ゆうかりんと闘うとか体力以上に精神擦り減らしそうだもん。

「幽香、それはあんまりだ。私は見てられない。コイツは余力を残して私を倒せるんだ。闘るなら私達も一緒にだ」

駄目だコイツ、早くなんとかしないと。予想の斜め上に行く魅魔の発言に俺も神綺もプキヤー！状態。ああ、なんか神綺から俺と似た何かを感じる。

ゆうかりんの俺を見る目つきが何かすげえレベルに進化した。蔑みの目 喜々とした物を見る目になったみたい。素直に喜べないのが今の心情。

おもむろに二者は立ち上がり（神綺は魅魔の背中にしがみつながら）促されるままに神社の広場に集合。あ、なんか本当に闘う気っぽい。

何時までコイツら相手に嫌々しててもしゃーないし、いい加減現状を真正面から受け止めましょう。向けられた敵意に真正面から向き合ってた。

魅魔と神綺は辺りから気配を消し、ゆうかりんだけがその場に姿を現している。あれだな、前に魅魔と闘った以上に今回は厄介そう。思考に耽てる内に先に仕掛けて来たのは、意外にも神綺だった。

俺の背中にしがみつき「ケンカはダメです」とか、言ってる事とやってる事が矛盾してるんですけど。驚くべきはこの俺に気付かれずに背後をとった事。俺も前と違いかなり進化したはずなんだけどな。

能力使って無理矢理剥がすのもいいんだけど、何て言うか……「んー！」とか言って締め付けてくる姿が愛らしくて剥がしたくない。

ちょっと痛いだけだしコイツはスルーしておこう。

「今です！ 私每一緒にお願いします！」とか言つて、完全に俺を捕えたと思つてる神綺がそんな事を宣つた瞬間、ゆうかりんの方からマスタースパークがぶつ放される。加えて目の前に現れた魅魔からも零距离でマスタースパークが。

コイツらの頭の中に“躊躇”^{ちゅうちゆ}と言う文字があるのだろうか？ いくら神綺があんな死亡フラグを立てたとはいえ……つてあるえ、背中^{せなか}に神綺がないぞ？

考えてみりやそうだ。俺に気付かれないで背中にしがみついていたんだから、離れる事だつて出来るに決まつてる。

そんなこんなで両方向からのマスタースパークに対応する間もなく、きれいにそれを喰らつてしまいました。あちゃー、こりゃ一本取られましたな。

豪快な炸裂音が辺りに響き渡る。砂煙を吸つてしまいケホケホ咳をしながら辺りを見回すと……いたいた。流石に魅魔は驚きはしていなかったが、残り二人は目を見開いていた。

「おいおい、まだまだ始まつたばかりだろ。簡単にやられる訳ないさね」

「幽香、神綺、気をつけろよ。まだまだコイツはくたばんねーから」

「……そうね。私も本気でいくわ。神綺、何時までもダラけてたら……お仕置きよ」

「さ、さて！ あの人間をぶつ飛ばしますか！」

神綺のへたれキャラ確定しました。でもまああれはあれでまた厄介そうな奴だから手加減はしない、かな？ あんなんでも魔界の創造神らしいし、有してる魔力なら魅魔より多い。

で、ゆうかりんだが完全に近接戦闘タイプだろ。溢れんばかりの闘気が完全にそれを物語っている。

魅魔はあれだ。ゆうかりんに似たタイプだが割となんでもこなせるオールラウンダー。トリッキーと言っても差し支えないと思う。

魅魔と神綺が消え、ゆうかりんが真正面から一瞬で突っ込んで来る。しかも分身付きで。キックやらパンチやらが雨霰あられと降ってくるがたじたじになりながらも全部捌く。永琳と比べたらまだ粗っぱいからね。いっぱいいっぱいだけ。

隙を突いてゆうかりんの頭を掴んだ俺はそのままアイアンクロー……と行きたかったがそうはいかないらしい。首筋に向かって魅魔が空中から蹴りを落としてきたから思わずゆうかりんの頭を離してしまう。

苛々した俺が問答無用で能力を発動しようとするも、何時の間にかゆうかりんまで消えてしまう始末。信じられないがコイツらの隠匿術というのは粗がない。紫のスキマなら簡単に感知は出来るのだが、こっちの隠匿術はどうしようもない。所構わず能力ぶっ放すつても手だけど、神社をボロボロにしてまで勝ちたいとは思わない。例のやられた振り作戦は前使ったから通用しないし、不可妖力は隠匿術を使ってるコイツらの前じゃ無力。本来不可妖力は相手の特異能力の発動のみを封じ込める物である。要はあいつらの隠匿術には及ばないってこと。

時間さえあれば場所は特定出来るが、その暇を与える事なく三人が三人、タイミングよくヒットアンドアウエーの如く、消えては現れ消えては現れと繰り返す。

やっべー、このままだと消耗戦に持ってかれちゃうな。別に消耗戦なら消耗戦でいいんだよ。俺は“疲労”をふっ飛ばせば何時まで

だって闘い続ける事が出来るんだから。ただね、時間が掛かりそうなんだよね。無駄にこいつら耐久力ありそうだし。と、思ってたらゆうかりんが姿を現してきた。

「何で人間相手にこそそ闘わなきゃいけないのよ。相手が何であろうと私は力で掀^{ねじ}伏せる」

どうやら隠匿術を使う闘いがお気に召さなかったようだ。地面を『こんこん』と日傘で叩きながらこちらを睨^{にら}んでくる。「おつかね」と思っ反面、正直あの日傘の出所が気になったりするんだよね。聞かないけど。

今度は俺からゆうかりんに攻撃を仕掛けてみる。接近後、後ろ回し蹴り……と見せ掛けてのバックブロー。タイミングを速めて確実に狙ってっただけど、まあ見事に屈んで避けられましたさ。

追い撃ちに左の膝を入れようとしたんだけど、放った瞬間を狙っていたんだろ。傘の先でおもくそ膝をど突かれました。勢いも付いていたから、普通の人から見りゃそりゃもう悶絶ものの痛みだろう。

しかし相手は俺だ。顔も歪み若干くるものがあつたけど、決して隙は見せない。が、歪んだ俺の表情を見てか、好機と踏んだゆうかりんが渾身の右ストレートを放って来てくれたみたいだ。

流石はUS。弱った姿を見せた瞬間にいっきとした表情をしよう。でもまあ人生の先輩として一つ教えてやる。真に恐ろしいSってのは、かつてMだった者がSにジョブチェンジした奴だ。

俺の顔面目掛けて飛んでくるゆうかりんの右拳であつたが、残念ながら俺の顔面を捉える事はなかった。何故ならゆうかりんの右拳

には俺の左膝を宛がいましたから。

「ッ!」

「アハハハ! たーのしーいなー!」

ゆうかりんが痛みを堪えて俺の事を恐ろしい目付きで睨んでくるが、俺から言わせてもらうと手負いの虎状態。さして怖い存在ではなくなった。さて、止めを刺しに行きますかね。

片膝を着いていたゆうかりんであつたが、やはり意地はあるのか。立ち上がって俺を見据えて痛みを堪えながらも迎撃体勢を取る。

や、あっぱれ。よく隠匿術無しでここまで闘えたよ。散々手を焼かせてくれたけど、漸くこれで一人片付いたな。最後まで、全身全霊の俺の一撃で気絶^{おと}してあげよう。

地面が凹む勢いで足を踏み込み、お返しの右ストレートをゆうかりんにプレゼント。……出来ませんでした。何者かに俺の一撃をがっちり受け止められたのだ。

「そ、それ以上幽香さんを痛め付けるなら、私が相手しますよ」

神綺。まさかの神綺が俺の渾身の一撃を受け止めていた。いや、神綺は神綺なだけでさ、先程のへたれ具合とは全然違う雰囲気

醸してる。あれか、こつちが本来の姿か。有してる膨大な魔力が、あいつの力量にちょうど馴染んで見える。これで安心魔界神。

何時の間にか魅魔もゆうかりんの前に姿を現し、俺に不敵な笑みを向けてきやがる。「どうだい、骨があるだらう？」とかさ。悪霊に骨は無いだらうての。

ゆうかりんもゆうかりんで何だか更に妖力が高ぶっているようだし。どうやらゆうかりんの力の源は“怒り”だと見た。「殺す殺す殺す!」なんてヒスッちゃってさ。拳の痛みなんかもう目じゃないらしい。

ああーもう! わーったよ、こうなったらとことん付き合ってるよ!

「さーて、ここからが本番かな?」

「「「当然!」」」

高まる士気に躍らされる馬鹿四人。第2ラウンドのゴングが鳴らされた。

踊る阿呆（後書き）

わーい、夏休みだー

ガス抜き（前書き）

短いです。加えて文もしつちやかめっちやかだと思ひます。ご了承ください。

ガス抜き

再度ゆうかりんと真正面から殴り合う。怒りに狂ったゆうかりんの打撃は非常に重く、一撃一撃が俺に痛覚があつた事を思い出させてくれる。

力任せにゆうかりんを蹴り飛ばすも、息着く間もなく今度は神綺が目の前に姿を現し、強烈な蹴りをお返しとばかりに俺にお見舞い腹にきた物凄い衝撃と共に後方にふっ飛ばされてしまう。

更に何時の間にか魅魔が俺の後方から両・側頭部ににその白く細い足を掛けていたので、俺は思わずフリーズ。うむ、けしからん脚だ。が、それがいけなかった。

突如頭から体全体に衝撃が走る。見える景色は真つ逆さまで、俺が頭から地面に突き刺さっている事に気が付くのにそれほど時間は掛からなかった。

変形フランケンシュタイナー。まさか平地で。しかもこの時代でそんなプロレス技喰らうとは思ひもなかったよ。もしかしてこの前のDDTのお返しだったり？

にしてもアホか俺は。悲しい事に男としての習性は長い年月を経た今でも健在のようだ。これは喜ぶべき事なのだろうか？

頭から真つ逆さまに地面に突き刺さっている状態の俺の目の前に再び迫ってくるスラッとした細く白い脚。魅魔が俺の顔面向かって走り込み、まるでサッカーボールを蹴るかのようにその脚を蹴り抜く。間一髪両腕を差し出して何とか防ぐ事は出来たが、勢いは殺せずそのまま上空に飛ばされてしまう。

そこには待つてましたとばかりに神綺が待ち構えており、戦場が空へと移り変わってしまった事を直ぐさま俺は悟った。

「私だつて闘る時は闘ります！」

上空に展開されるいくつもの魔法陣。その一つ一つ……一部一部はあまりに複雑。初見の俺には何がどうなっているのかなんて全く分らない。

面倒だからふき飛ばす。そう思った矢先、一瞬で俺の背後に回った神綺が俺の側頭部目掛けて膝を放ってくる。「ちっ」と、何年振りになるであろう戦闘中に舌打ちをし、神綺の膝を流すように避けながら上体を捻り、振り向き様に神綺を驚掴みにしようと左手を差し出したんだけど……まずったわ。

左腕が伸び切った所に突如現れたゆうかりんの右膝が、俺の肘の関節部を突き上げるように入る。見事に俺の左腕は曲がってはいけない方向に曲がってしまい、俺涙目。びっくり人間コンテストに出るのかと。

畜生、さっきからいいように翻弄されているのが分かる。ってか奴ら息合いです。加えて神綺の接近戦がここまでレベルが高かった事は完全に誤算。ただのへたれじゃなかったんだね。

魅魔は神綺が展開した魔法陣を引き継ぎ発動作業中。神綺、ゆうかりんは空中で俺の妨害を妨害。こりゃあの魔法陣の魔法と真っ向から向き合いそうになりそうだ。

「幽香、神綺！ どいてな！ あいつならこの程度軽く弾き返すから神社の心配はいらないよ！」

すみません、ぶつちゃけ不安なんです。何が不安って無茶苦茶な魔力があれには込められているって事。いや、正確にはあの魔法陣が魅魔が持っている魔力を幾重にも増幅させているという事なんだけど。

完全にマスタースパークだな、あれは。しかも前の奴とは比較にならない位大規模なやつ。しかもゆうかりんも魅魔の隣に移動。パネエあの魔法陣。上限を知らないのか？

……まあいいや。あれなら俺の全力の“不死嵐”ぶつけても平気っぽいし。自身が持ち得る妖・霊力を引き出し、月の一件以来の大規模不死嵐を地上にて生成。土地が狭いからもうともかく圧縮にくぐ圧縮を重ね、それなりにでかいが神社の許容範囲内のサイズには収めた。

「マスタースパークは魔力垂れ流しだからな。ぶっ飛ばし続けてもキリが無え。おい！ 手加減は出来ねえからな！」

返事はマスタースパークの発射だった。

「いや、相変わらずの強さだね。あ、博麗の、お茶」

「完敗だわ。私達でも勝てないなんてね。……いつか殺すけど。私

にもお茶」

「……魔界の創造神なのに負けてばかり。私にもお茶ください」

「そう言うなって。今まで闘った中でも突出して闘り辛かったんだから。巫女さん、お「何であなたは馴染んでるんですか！」

現在俺らは縁側にてお茶を啜っている。もちろん巫女さんをパシツて。いや、これが中々いける味でして、巫女さんをパシるコイツらの気持ちこそはかとなく理解出来る次第。

先のマスターパークはそりやもう永琳の全力クラスに。いや、それ以上にやばい代物だった。が、全力不死嵐の前には太刀打ち出来なかったらしく、纏めてKO。何とか勝ちを拾えました。

とりあえず認められたのかな？ ゆうかりんにタメ口を使っても特に何言われる事も無いし、神綺は……いいや。ゆうかりんにデコピン喰らって「へぼお！」とか「ふがあ！」とか。明らかにデコピン喰らった奴の出す声じゃ無いぞそれ。

後魅魔。チラチラ脚をこっちに向けるんじゃない。確信犯だろ貴様。ニヤニヤした表情向けやがって……クソありがとうございました！

「うう、黒い服を纏った青年は神社の救世主だって先代の方々が言ってたのに……」

「まあまあ巫女さんそう言うなって。使い走りやってるだけでコイツらが妖怪の山の連中を牽制してくれてるんだから「私の自由は何

処に！」

バカ、そんな事言つてると「ふべらっ！」ほら、ゆうかりんのデコピンが飛んで来た。成長しないなホント。しくしくしながら巫女はツマミを取りに奥に行ってしまった。

「そんなイジメてくれるな」と一応擁護はしたが、「あら、一種の愛情表現よ」と元凶はニコニコした素知らぬ顔で告げてくる。いや、愛情表現がデコピンってあんた。まあ嘘ではなさそうなのが唯一の救いか。

それからツマミを持つて来た巫女さんを含め五人で談笑を楽しむ。途中紫が「何事！」って感じでスキマから現れたけどみんなスル―。

訝し気な表情で俺を見てたけど「この御仁方に力見せびらかしたら『生意気だ！』って感じで死なない程度にボロボロにされました」と、一応事実も織り交ぜて言ったら可哀相な目で見られました。

納得いかねー、と思いつつも紫を加えた六人で談笑は続く。優雅に美しいティータイムは更に盛り上がるを見せてくれた。そんな中、俺の気を引く話の一つ。

「そついえば最近都の近くの山に風変わりな神社が出来たらしいぞ。流れの悪霊からそんな話を聞いたんだわ」

「侮れないな、悪霊情報網。で、風変わりって何が？」

「んー、人間が切り盛りしてるってのは普通なんだが、その人間、どうやら妖怪とも仲がいいらしいんだ」

「どこもそう見えるけど？」

「根本が違う。悪魔でここは人間の信仰を得るがための神社。噂の神社は人間からも妖怪からも信仰を得ているらしいよ」

ふーん、妖怪からも信仰をねえ。記憶には……引つ掛からないな。でもま、折角だし久々に都辺りでも行って見ますかな。チルノもまだ現れそうにないし。

（ぶんぶんぶん）鉢が飛ぶ（前書き）

お久しぶりです、作者です。

いやゝ更新が遅れた事遅れた事……すみませんm（――）msラ
ンプと用事が重なっておりまして。

散々更新が遅れた癖に話の内容は短いのですが、どうか勘弁願
いたいです。

尚、実際の史実や東方正史と異なる事もあるとは思いますがご了承
ください。

（ぶんぶんぶん）鉢が飛ぶ

信貴山。話によると毘沙門信仰をしている山らしいのだが、人々の焦点はそこで布教？を行ってる尼さんの慈悲深さにいつている。日はく、「容姿も然る事ながら、その寛容な御心には誰もが涙する」とか。

……妖怪の信仰とかどうなってんのさ。人々から色々話を聞いたが全くそんな話は聞こえてこない。完全に訳ありですね。

ともかく実際に足を運ばない事には何も始まらないので、早速信貴山とやらの麓に来てみたのだが

「鉢、だよな」

目の前には鉢。しかもそれが宙に浮いてるときた。何度か言ってると思うが俺は詳しい歴史という物は知らない。況してや寺やら神社やらの細かい建設理由など以ての外。かつて学校で学んだ大筋の歴史だって怪しいのだから。

つまりだ。鉢が浮いている理由を俺が知る訳無いと。「てか山道やべえ」見たいな感じで周りに人なんか居やしない。どうやら尼さんが自ら山を降りて布教をしているという事が考えられる。

未だゆらゆら浮き続けている鉢。じーっとそれを見続けていると何やら上の方から妙な気配が。人……だよな。この世界は人型の妖怪がわんさかいるから、一概に人と言っても信用出来ない。

ひたひたと歩み寄る女性らしき人物。とりあえず感想。めっさ可愛い。……周りに複数の鉢を浮かばせていなければ。

「あら珍しい。お客さんかしら？」

「一応観光に。ぶらぶら旅して周ったらここに着いた」

白黒のゴスロリ風のドレス姿に黒いブーツ。ウェーブのかかったロングヘアは紫と金色が折半した感じで、全体的になんつか。包容力があるように見える。

名は“聖白蓮”と言うらしく、鉢を浮かせているのは人里から大量に食糧を買い込むためらしい。ちなみに鉢を浮かせている力は魔力と妖力。中々の人外つぶりだと思う。人間らしいけど。

「宜しければ御一緒にどうですか？」だと？ふざけやがって。全力でお供させていただきます！……一応男なんです。

山から少し離れた所に人里はある。デレデレしなから世間話をしていたのだが人里に入ったらそんな暇も無くなった。それほどまでに白蓮の人氣が凄まじいのだ。

あっという間に出来上がる人だかりに何時の間にか弾き飛ばされ

ていた俺。この野郎、手前らふっ飛ばしたるか？ 最近はごつい妖怪やら悪霊やらとしか交流がなかったから、今回の白蓮との交流は非常に大事にしたいとこ。女の子だーい好きなんです。

そんな事も露知らず、白蓮の浮かせている鉢に食糧が貯まる貯まる。白蓮の人氣が如何に凄まじいものかが伺える。

「白蓮様！白蓮様！」と歡喜の声とは対称に、「お前誰だよ？」的な声を浴び続けてる俺。苛々した感情を抑えながら「道中の護衛を任された者です」と取り繕った俺は中々の良い子だと思う。

あらかた鉢に食糧が貯まると白蓮はお礼に札を数枚代表者に渡し、今度は民家を一軒一軒回り出す。何やら体調の悪い者を出来る範囲で診察するらしい。多分御祈りや御祓いをするのかな。経験上俺もそういう事をしてたし。

それはもう懇切丁寧に白蓮は看病をしていた。一人一人に対して確かな慈愛を持ってして。

人間と妖怪をある程度区別している俺じゃあこうはいかない。看病はするがそこに愛は絶対に無い。下手したら看病すらしないし。

「ふう。 “護衛”さん、次に行きますよ」

「乱治。人の道を辛うじて歩んでいるしょうもない人間とは俺の事」

「ふふ、自分でそういう事をおっしゃるなんて。私だって……いえ、ここで話すような事ではありませんね。どうせ当分は山に留まるおつもりでしょう。そこでゆっくり語らうとします」

「だな」

隠し事のある女つてのが魅力的なのはどうかやら迷信ではなかったらしい。最近出会った女性というのがゆうかりんやら魅魔やら、色々癖が強すぎる奴らばかりだったもんだから、白蓮見たいなおしとやかな美人さんに出会えて本当に良かった。

白蓮の振り撒く笑顔に癒されつつ民家を回る事数十軒。患者が癒されてんだか俺が癒されてんだか分からないがのほほんした一時を過ごす事が出来た。

全ての民家を回り終えた後は白蓮と二人っきりで山道に行く。やはり山道は妖怪が出るらしく、一般ピーポーには登山は難しいとの事。ざまあ。

複数の鉢を同時に浮かせている白蓮の力量は言わずもがな。並大抵のものでは無い事が予想される。ただこんなに食糧を買い込んで一体どうするのだろうか？ いや、大体予想は付くんだ。俺自身昔は似たような事をしていた訳だし。

となると道中に妖怪が出る事は無い。

「なんせ妖怪と仲良く暮らしている訳だしな」

今までにここにこしていた白蓮の表情が空気を読まない俺の一言により凍ってしまう。

いやね、魅魔が「妖怪からも人間からも信仰を得てる」って言った時点でこうじゃないかとは思ったさ。で、白蓮の纏っている霧囲気に触れて確信した。

試しにかまかけたらビンゴ。思った以上の反応を得られた。だって白蓮の周りを浮いてる鉢がガタガタ震えているんだぜ？ 分かり

易いっただらありやしない。

「な、何の事でしょうか？」はいはいテンプレテンプレ。声が裏返ってらっしゃいますよ。張り詰めた空気。震える白蓮。月の光に……ゲフンゲフン。

沈黙を破ったのはあちらから。と言うか第三者の介入。俺に向かつて放たれたのは俺の身長大の大きな拳。避ける事をしなかった俺に強い衝撃が襲ってきた。

悲鳴に近い白蓮の叫び声が俺の耳に留まる。あれだけもろに人外の一撃を貰ったのだ。普通の人間ならまず死んでるだろう。

「あゝ、ちよつと痛かったかも」

「「え？」」

ちよいとその辺までふっ飛ばされたが、この程度俺にとって致命傷でもなんでもない。掠り傷だ。

何事も無かったかの様に起き上がると白蓮の他に可愛い子一人と……ゴツイおっさん顔の“何か”一人。いや、顔だけね。可愛い子の後ろにぼつんとある訳よ。しかも無駄にでか過ぎるおっさん顔が多分可愛い子が“あれ”を用いているのだろう。可愛い子の周辺に“あれ”は漂っているし。と、もやもやした物が先程と同じような拳大の形を成してゆく。ふむ、あれでさっきはぶん殴られた訳か。「ふん！」と踏ん張りを利かせた声を出し、謎のおっさん顔がそれを放ってくる。つーかそれおっさんの拳だったのかよ。

喰らってみて分かったが拳はデカいしそれなりの威力もある。が、残念ながら俺にダメージを与えるとまだまだ足りない。ちょ

いと出直してきな。

迫って来た拳に前蹴りをかまし今度は俺の方が軽くふっ飛ばす。

「ぬう、何と言う力」

「くっ！ 雲山、もう一度「お止めなさい！」」

「……とりあえず皆落ち着こうな」

要するに可愛い子こと“雲居一輪”とオンリーおっさん顔の“雲居雲山”の勘違いらしい。俺の事を妖怪退治に來た退治屋と思っただらしく、白蓮を人質に捕っていたように見えてたみたいだ。うっかりさんめ。

どちらかと言うと白蓮より頭巾を被った一輪の方が尼さんに見えるなくもないのだが、人は見掛けによらないらしい。

おっさん顔は入道雲らしく専らの頑固親父。頭の固い雲山親父を一輪が制御（操ったりも）しているらしい。因みに「親子か？」と尋ねてみたのだが、両者共に何も返さなかったので関係は定かではない。

俺自身もこのまま疑われたままだと居心地が悪いので事情を説明。色々と話したが「今の生活をぶっ壊す事は絶対しない」と強く主張したら白蓮の方が納得してくれて、一輪と雲山も伴って俺への警戒

を解いてくれた。

「姐さん行きましょう。皆お腹空かせていますので。雲山、姐さんの荷物を持ってやって」

「心得た」

「それと客人、先程の非礼は詫びよう」

「氣にして無いよ。勘違いさせたつばいしね。後当分お世話になるからよろしくね。食い扶持は自分で稼ぐから」

こうして俺は新たな宿にて当分厄介になる事となった。

アホの子（前書き）

超絶スランプ。もうゴダゴダで酷い酷い。

あと前々回の話で魅魔が「信仰を集めてる“神社”」見たいな事を言っていました。が訂正します。“神社”では無く“寺”です。申し訳ありません（――）m

後今回の話ですがもう一度言います。スランプです。無茶苦茶かとは思いますがご了承ください。あー、息詰まり。

アホの子

昔白蓮には弟がいたらしく、弟と共に長きに渡りこの山で修業をしていたそうだ。弟の名は命蓮。白蓮曰はく、物凄い力を持った目標たる僧侶であつたとか。ただそんな偉大な僧侶を以てしても寿命には勝てなかつたらしく、あつさりこの世を去ってしまう。

この時から白蓮は極端に死を恐れるようになり、法術ではなく妖力・魔力の類といった術を用いて若返り・不老長寿の力を手に入れ、“死”から逃れる事を決意。以来人間には内緒で妖怪等の救済活動を行い、多くの妖怪から魔力や妖力を少しずつだが取り込んでおり、自身の糧としているそう。

可愛い顔して中々やつてる事はえげつないが、取り込む量は一体あたり一割程度と良心的。さすれば寢床と食糧（流石に人間では無い）もまた一日分提供してくれるので、最近ではこの辺りを住み処としている妖怪も増えているとの事。妖怪にとっても白蓮にとっても万々歳……ともいかないらしく、問題もあつたりする。

寢床と食糧を提供する代わりに妖・魔力を一割貰う。加えて食糧を提供していると言う事で『人里には手を出さない』と言う契約もしているらしいのだが、果たして妖怪共がそのような契約を守るだろうか？ 否、守る訳が無い。

白蓮や忠誠を誓った妖怪（一輪や雲山等）達が中心となり目は光らせているようだが、妖怪達は隙を突いては人里を襲っているそう。

そこで俺の出番。一応ここでは妖怪達にも融通が利く腕利きの妖怪退治屋で通す予定なので、俺にとってこれは調度いい弊害。ついでに食い扶持もこれで稼ぐ予定。

一輪が紙にリストアップしておいた妖怪達の情報を受け取りいざ妖怪を取締に行かん。但し非殺生が原則。

「つー訳だチミ達。人里を襲うなよな」

人外魔境。一般人が決して足を踏み入れる事が無い場所。白蓮が妖怪達に提供した地でもあり、表向きは妖怪達も静かに住んでいる。さながら妖怪の里と言っても問題はないだろう。人里と同じような設備がここにはあるのだから。

そして人間である俺が来ても妖怪達の態度は変わる事は無い。特に騒ぎ立てたりはせずちよいと俺を脅し付けているまでに留まっている。怖かないけど。

こいつらが仕掛けるのは恐らく夜。近場は白蓮組みが目を光らせているから、きっとここから結構な距離にある人里が狙い。

「大恩ある白蓮様を困らせる事は絶対しない」とか吐かしているが、妖怪なら妖怪らしく後先考えず人里を襲えと言うのが俺の本音。まあそしたらそしたで返り討ちに合うって分かっているから、妖怪達も表立って人里を襲わないんだと思うけどさ。

しかしまあこれだけ良くして貰えばホント、人里なんて襲う必要無いだろうに。一体何が人里を襲う原動力となっているやら。不本意ながら気になる今日この頃である。

夜。予想通り不穏な動きを見せる妖怪がちらほら。皆その目は血走っており、居心地の悪い妖力で辺りは埋まっている。

何がコイツらをそうさせるか未だに分からないが、少なくとも今コイツらを人里に放つたら大惨事になる事は容易に予想出来る。

日が出ている内に俺に手を出す輩は皆無だったが、「良い子は黙って寝てる時間だ！」と妖怪達の気を引く台詞を吐いたら一斉にこ

こちらに向かって襲い掛かって来た。

いや、ちょ、舐め過ぎてたかもしれないけど何も皆してこっちに向かって来る必要無いじゃん。

「あの人間を殺して喰う！」と言ってる辺り、特に誰かに操られている訳では無さそうだが、一体全体本当に何がこいつらをこいつらに衝動に駆り立てているのか？

まあ今はとりあえずこいつらを全員伸す事が先決だな。

「お前ら、カップラーメンが出来上がる時間を知っているか？……三分だ」

お月様が良く映える闇夜の中、後に「鬼見たいな恐ろしい人間が嬉々として私達をぶっ飛ばしていた」と傘を持った少女なりの妖怪は語る。

「ふーん。で、妖怪としての生き様云々、自分達の鬱憤を晴らす云々って事で、毎度毎度俺達の目が届かない人里を襲っていたと。尚、今回監視に来た輩と言うのが人間である俺であつた為何とかなるか」と……なめとんじゃねーぞ、おんどりやあああああ！」

「ど、どうかお怒りをお収めください！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。さですと怖いさですと怖いさですと怖い」

リーダー格の妖怪の住まいにて現在俺は謝罪を受けている。一匹は特に見覚えは無いがもう一匹の傘を持った少女の妖怪には見覚えがあつたり無かつたり。

片や己の腕力を過信した妖怪。片や人間を驚かせる事を生き様とした妖怪。

俺が説教をした際、腕力を過信した妖怪には反省の色が見えたためここから解放。「他の連中にも強く言うておくように」と言つた

ら腕を捲くつて己の筋肉を強調させてから小屋を出て行つた。……まあ大丈夫だろう。

もう片方は始めの内こそ話を聞いていたが、二十秒後にはうとうと。更に十秒後にはすやすや。ああ、あれか。アホの子か。

「うーん、可愛いから許す……なんて言うと思うてか、貴様ああああ！」

「す、すみませんすみませんすみません食べないで食べないで食べないで食べないで」

いや、ぶっちゃけ可愛いのは事実だけどどちらかと言うとイジメたくなる可愛いさつてやつかな。反応もいちいち面白いし。

俺にさですとの素質があるのかはさておき、こう言つたアホの子は目を離すと何をしでかすか分からない。と言う訳で当分は俺の側で雑用をして貰う事にしよう。その傍ら、脅かし方を伝授。我ながらナイスあいであ。

その旨を伝えると少女の顔面は蒼白に。大きな目ん玉を持った紫色の傘も本体をぶるぶる震わせる。何も捕つて喰おうとする訳じゃないのに。少女曰はく「そうやって油断した所を『ぱくり』。やっぱり食べられちゃうんだ……ヒグッ」とか。

なんてレベルの高い妄想だろう。俺は妖怪なんて食つた事……あるな。

「いやいや、食わないから」

「私が成長した所を？」

「食わないから」

「そうやって油断させて？」

「食わないから」

「そうやって油断」「おんどりやあああああああ！」「許して許して許して許して」

ああ、前途多難。

白蓮達の住まいである倉は見た目は非常にボロいが、中はそれなりに整っていて中々に広い。ただここを住まいとして使っているのは白蓮を含め限られた妖怪だけ。理由はこの倉に残っている霊力（法力とも言つか？）が妖怪達にとって悪影響を及ぼすかららしい。だからこの倉に住める妖怪というのは霊力に対抗する術を持った者だけであり、人数も限られてしまうそう。

もちろん俺には関係無い話。況してや連れの一人や二人のカバーなんてお茶の子さいさい。

「乱治さん。私やこの子は中に入れないんですが？」と言ってく

れるが、勿論それは妖怪であろうと同じ事。妖怪保護専用の術式を練り込んだ懐かしの木彫りチルノ像（首飾りサイズ）を少女に与え、化け傘にはそのまま術式を練り込んでやる。

何の術も無しに妖怪が入ると三分持たずに完全に浄化してしまうそう。恐る恐る倉に足を踏み入れる両者だが、特に何とも無いと分かれると両者は抱き合って喜びを分かち合い始める。いや、この場合は傘に少女が抱き着いたと言っべきか。傘に腕は無いし。

「よがっただあよ。私達当分は食べられないで済むんだあ」

「ほれほれ。玄関口でそんな事されたって鬱陶しいだけだからさっさとこっちに来い。えっと……」

「“多々良小傘”です。暫くご厄介になります」

「うし、分かった。当分……と言うか俺の許しが出るまで君達には雑用をこなして貰う。部屋の掃除やらご飯の用意やら洗濯やら。始めの内は指導をしてやるけど、最終的には君達だけでやって貰うようになるからしっかり覚えるように。もし、覚えられなかったらピーしてピー突っ込んでピーだから。ま、死ぬ気で頑張つて。勿論『脅かし方』についても指導はしてあげるから、気軽に話し掛けてくれな」

「は、はは、はい」

これくらい言えばいくらアホの子とは言え必死になってくれるだ

ろう。脅かし方についてもちゃんとレクチャーしてやるつもりだし、小傘とてあまり損はしないはず。

ただ、ピーが小傘には刺激が強過ぎたのか。暫くの間猫の様に身体を震わせていた。全く、初なやつよのおく。

しっかり者は誰だ（前書き）

ども、作者ですm（――）m

夏休みもほぼ終わり、最近起きるのが辛くなった今日この頃、一度私は振り返ってみます。『夏休み少なくなっけ？』

永夜抄、EX妹紅をクリアーして見ようと試みるも、正直者のなんたらでピチューン。嘘みたいだろこれ。もう残機0何だぜ？……ってのはどうでもいいと思うので、短いですがどうぞ続きを。

しっかり者は誰だ

「手を合わせ〜て」

「「「いただきます！」」」

八畳一間の畳の間に集まった倉住まいの妖怪達と白蓮+俺、化け傘、小傘。毎度毎度俺達倉住みの者達は朝飯を食うべくしてこうして一ヶ所の部屋に集まり飯を食べる。今日の朝飯はご飯、味噌汁ネギ入り、焼き魚。

食糧は人里から無償で提供されてはいるのだが、妖怪達にも分配しようとするとは圧倒的に量が足りない。という訳で十日に一回白蓮と供の妖怪がちよいと遠くの人里に買い出しに出掛けているらしい。勿論それは布教活動も兼ねているとの事。

そんなにここを離れてて平気なのか？ そう思っていたのだが、どうやら心配には及ばないみたいだ。

そもそもこの山には妖怪がわんさか住んでいるため、人間の参拝客など来ないに等しい。だから人間相手の業務なんて白蓮の行脚くらいなんだそうなの。

更に白蓮の他に山の業務を取り仕切っている者がここにはいるみたいなので、ぶっちゃけちゃうと白蓮がいなくても全然影響は無いんだとか。

その事を俺が白蓮に伝えると周りからキツイ視線が突き刺さったが、当の本人は「そういえばそうですね〜」と特に気にせずのほんとした表情で笑顔で俺に同調してくれた。ああ、癒される。

「最近は奴らも人里を襲わなくなっただしな。一重に俺の仁徳ってやつか？」

「それは乱治さんが怖『パコン』ぐもおっ！」

全く小傘ときたらけしからんな。俺が妖怪達を恐怖で押さえ付けたとか、妄言もいい所だ。

デコを押さえて疼くまる薄情者はさておき、皆それぞれ朝飯を食べ終えそれぞれの持ち場に移動する。ここでは『いただきます』は皆一緒なのだが、『ごちそうさま』は別々なのだ。

一輪や白蓮もいつの間にか朝飯を食べ終え、ここに残ったのは俺、化け傘、小傘の三者のみ。そう、後片付け。要するに俺達の立ち位置ってこんなもん。

食器を大きなタライに全て乗せて井戸の前にある洗い場に直行。こればかりは俺の役目。妖怪とはいえ非力な小傘ではこんな重い物は持てない。何れは一人で持つて貰うが。

さて、ここからは小傘達の仕事。化け傘と力を合わせて綱を引っ張って水を引き、その水を使って食器を一つ一つ丁寧に洗い流していく。

始めの内は不満を露にしつつビビりながらの作業だったが、最近では自身の待遇の良さが分かってきたのか。何をするにも専ら一生懸命に作業をしてくれる。

「乱治さん、見て見て。白蓮さんの胸！」

でもやつぱりアホの子。茶碗で胸の大きさ再現するとかその発想に感服。アホだけど。

ただ平べったいお皿使って「ナズさん！」とか言うのは止めれ。あれはあれで貧乳と言うスペック……ゲフンゲフン。ともかく今度からはせめてもうちよい深い皿を使っただけ。

また「手伝い」と称して留守を任されてるはずの水兵服姿の娘さん事“村紗水蜜”もやって来て、作業が捗る事捗る事……じゃねーや。

「いや、持ち場付いてるよ」と言っでは見たがやはりどこ吹く風。留守番と言っても雑用は殆ど俺達がやってしまうし本人はいつつも暇なんだとか。つまりはリアル自宅警備員状態ね。

「乱治はさあ、どうしてここにいたりするのか？　そもそも乱治は人間だし、好き好んで妖怪達の巣窟に足を踏み入れる意味が分からないんですよ。まあ聖に危害を与えるつもりは無いらしいから文句は無いですけど」

「今回はたまたま気に入った白蓮に付いてったらそこが妖怪の巣窟だっただけ。別に深い意味は無いよ」

「……そんな事をシラフで言える輩なんて先ずいませんよ。どれほど自分の力量に自信があるんですか？」

「月を破壊出来る程に」

「 」

全部マジなんだけどなー。村紗から放たれる視線が痛いよ。

食器洗い、洗濯、倉掃除と終わったら次は小傘の為の脅かし方講座。相手がビビるシチュエーション作りやら体を張った脅かし方やら。また特別講師として村紗さんも招き、かつての船上での自身の体験談やらも語って貰ったりと内容は豊富。そしてこの時間だけは小傘も眠ったりはしない様だ。

小傘が勉強している間に化け傘は俺が特別に組んでやった修業の方を外でこなしている。なんでも『そそつかしいご主人を守ってやるのは自分だけ』だとか……多分（コイツ喋れないから）。いや、にしても泣かせてくれる。

内容は傘の強度を高めたりビーム出せるようにする訓練だったりところちからも豊富。ちなみにビームはゆうかりんの“マスパ”を意識してたりしてます。だってカッコイイんだもの。

尚、外での修業に関しては途中から小傘も化け傘に合流させて参加させてる。最低限自分の身は自分で守れるようにならないと、も

しもの時に対応出来なくて最悪、死に至るかもしれないからこれは強制参加。

「乱治さーん、もつとゆるーい弾幕にしてください」とよく泣きが入るが、「さですとな俺には関係無い」って返して雨霰あめあられに弾幕発射。始めの内こそ五秒持たなかったが、最近では化け傘無しで十数秒はグレイズしつつ避けれるようになっている。

「よーし。先生更に弾幕を濃くしちゃうぞー」

「あああああああ！ 無理無理無理いい！」

「と、言いいつつ実は？」

「無理無理無理無理！」

「って言ってるけど実は？」

「無『ボスウツ』ぶふおっ！」

あー、頑張った。先生素直に君を褒めたいぞー。 腹部に弾を

一発貰いその場に小傘は疼くまっつてしまう。始めは血？を吐いていたが今は疼くまるだけで済んでいる。これもかなりの進歩かな。本人は「鬼！ 悪魔！」と文句ばかり垂れてるが、まあなんだ。その程度の罵詈雑言じゃ俺様のハートには響か「×××！」よし、表出る。

脇を擦くすくってお仕置き。本人はかなり危ノーマルな悶え方をしてる

がガン無視。顔が赤くなり息も荒れてきた所で解放してやったが、その場に無造作に倒れるとか仮にも女の子としてどうよ？

結局化け傘が長い舌を小傘に巻き付けて持って帰った。ちなみに舌はヌルヌルさせたりサラサラさせたりと自由に状態を変えられるらしい。

「と言う訳だ寅丸。あいつ甚振^{いたぶ}って遊ぶという予定が崩れたからここに来た」

「どう言う訳だああああ！！！」

「あらあら、星ったら乱治が来た瞬間元氣になっちゃって」

「んもう寅丸ちゃんったら。素直に「嬉しいです」って言えばいいのに」

「殺す！ 毘沙門天の名の下貴様の墓石に名前を刻み込んでやる！」

「ほら、猫じゃらしだよ」

寺の本殿にて三叉戟をぶんぶん振り回す毘沙門天……の代理、“寅丸星”。今は頭に血が上っており完全に冷静さを失っているが、これでも毘沙門天の代わりに人間や妖怪から信仰を受けている物凄く偉い奴。

何でも毘沙門天と言うのはとてつもなく忙しい奴らしく、すぐく稀にしかここには現れないらしい。

以前は寅丸も白蓮の命にて毘沙門天の下で働いていたらしいのだが、「聖の命で無かつたら一日待たずして逃亡してあた」と、気真面目な寅丸をここまで言わしめる程の労働量だそうだ。

で、そんな寅丸であるが今は三叉戟を下ろしてゼエゼエ肩で息をしている。実力は申し分ないのだが、最近はデスクワークが祟ってか、かなり体力が落ちていると見る。

「はあ、はあ、ぐふおっ！ごほっ！」あ、む嚏せた。

「はい、お水」と、その誰もが癒されるであろう笑顔が向けられ、何処からともなく用意された水を差し出す。寅丸の顔が真っ赤なのは嚏せただけじゃないと思うが、本人の誇りの為に黙っておこうと思う。

「で、本題は何です？ 私とて暇では無いんですよ。もちろん聖もです」

「いや何。今の妖怪達はあんたらが提供した場所に住んで貰ってはいるが、些か多過ぎじゃあないか？ 別に今のままでいいってんなら問題無いんだが、逆に問題になりそうだったら話を進める。どうだ？」

「貴方はいきなりぶっ飛んだ話を……まあ確かに現状は場所が不足しがちです。きっと貴方の事だから何処かしろの場所に目通しが付いてるのでしょう。構いませんよ。但し移住は希望制で数には制限を付けさせていただきます」

「話が早くて助かる。場所を提供するに当たってあちら側はどんなに大多数でも受け入れられる状態らしいから遠慮は要らないっと。後近日中に使者を送るらしいから詳しくはその時に」

「分かりました……ってあなたが使者では無いのですか？」

「だーかーらー、俺はたまたま此処が気に入っただけであって、今回の件に関してもたまたまそういった事情を知ったから話を持ち掛けて見ただけ。もし俺が使者だとしたら一体どんだけ無礼な使者だよ？」

「自覚があるならそう思われないように振る舞ってください」

やだ。半分以上バカンスが目的だから使者なんてごめんだね。

その後は本殿の縁側にて白蓮とお茶を啜りつつ世間話をしていた。途中から村紗、一輪&雲山、復活した小傘&化け傘も加わり一気に話は盛り上がった。

ただ、その日の夜は一人だけ仲間外れにされた寅丸が晩飯時からずーっと拗ねていたので、気を利かせた白蓮が夜通しで寅丸の愚痴を聞いてやったと言うそうなの。

次の日寺の業務が滞ったのは言うまでもない。

限られた語り手（前書き）

きつい。ども、休み明けの日々に未だ慣れていない作者ですm（

—）m

大分涼しくなってきた今日この頃、面倒ながらも早速課題が出てしまいました。……一難去ってまたいつちーなん。ぶっちゃけ（ry
冬休みマダー？

限られた語り手

「はぁ……」

「どうしたナゾーリン。ため息なんか着いて」

「ナズーリンだ。いや何、久々に今日毘沙門天様が御主人の仕事っぷりを見に来て下さるから緊張しとおるのだ」

「そうか、ナゼーリンも大変だなあ。確か毘沙門天直属の部下何だって？」

「ナズーリンだ。まあそんな肩書もあるな。それより何故貴様がそれを？ 正直あまり知られてはいけない情報でもあるのだが」

「寅丸が言「御主人ツツ！！」」

あーあ、行っちゃったよ。

時刻は昼時。小傘が村紗の単独講座を受けている間に久々に妖怪達のたまり場に顔を出したら、そこにナズーリンがいたからちよいと世間話をしていた。

何でも今日はモノホンの毘沙門天がここに来るらしく、部下であるナズーリンは凄く緊張している様子。俺？緊張感0です。

にしても割とたまり場の妖怪減ったな。こうやってたまに俺が来て妖怪達の相手をしてやってはいたけど、やっぱり妖怪の自我には抗えないか。寧ろ半分も残っているという事実に驚きだ。一重に白蓮の人となりのお陰なのかね。

ちなみに幻想郷（仮）からやって来た使者は藍だった。人格は前とは全然違っていたが記憶は残っていたらしく、「積年の怨み！」と会って早々に俺に真っ向から向かって来た為、突っ込んだ所をタイミング良くワンパンKO。

「完全体いい、完全になりさえすればああ……」と呟きながら倒れている藍の姿を見て『紫に力を制御されているのか？』何て事も思ったが、考えてみりゃ前も人型で闘っていたからただの虚勢だと俺は判断。と言うかお前それはどう考えてもセルです。本当に（ry
暫く経ち落ち着いた所で寅丸と何か話をしていたらしいのだが、
「紫様ときたら本当に人使いが荒くて……貴方が非常に羨ましい」
とか何故か酒の入った藍が寅丸に絡む姿が見られたので俺もうシラネ。

まあ結局は妖怪移住の話も纏まったし問題は無いんだが。

「……毘沙門天ねえ……見に行きますか」

「頼もー！」

ダンッ！ と勢い余って大きな音を立てて俺参上。 中ではなか
か目を瞑って瞑想？ をしている寅丸にナズーリンに……こいつあ

やばい。一人だけ纏ってる雰囲気が違うのだ。

それは神のみが持つ事が出来る独特なもの。神奈子や諏訪子に感じて以来実に数百年振りであろうか。

上半身裸に黒橙色の縞模様のボタン。筋の通った鼻に気怠そうに開いた細い目。白いバンダナを頭に巻いたその姿は某海賊漫画の神様もどき、エオルそっくり。あんた、出る所間違えたんじゃない？

「騒々しい客人だな」

「賑やかなのはお嫌いかな？」

「……ふむ、神を前にしてなお自然体でいられるか。ナズーリン、寅丸。噂に違わぬ人間だな」

「「態度がデカイだけです」」

そりゃあ長〜い年月を生きてりゃ恐れるものなんてねえ。ほとんど無いに等しいですから。今更神程度でビビる俺じゃあないし、寧ろ歳喰った分図々しさに磨きが掛かった位だ。寅丸やナズーリンが言った通り確かに態度がデカイだけっす。まあTPOは弁えてるつもりだけど……多分。

「ハハハ、私を前にして物怖じしなかったのは人間妖怪通して貴様で二人目だ」とか笑いながら吐かしてるけどそんなに少ないものかね？ 俺の知り合いの一部の連中にもそう言った奴は居ると思うが。

「へえ、俺以外にねえ。一体誰よ？」

「うむ、そいつは鬼であつたな。仕事の都合上私はよく鬼共を使役するのだがな、そいつだけは使役出来なかつた。鬼というのはより強き者に恭順する習性がある故、我が使役する鬼と言うのは皆私との闘いに敗れた鬼なのだが……」

「大御主人。使役出来なかつた鬼と言うのはまさか」

「そうだ、そいつだけは私とて勝てなかつた。あの雷を操りし鬼には「それ本当か！」

昔、昔。そのまた昔。確かに俺はその鬼と面識がある。それどころか苦樂を共にした深い関係にそいつは当たる。顔を合わせただけの仲なんて言うちやちなもんじやない。

一度意識したら止まらない。あの頃の懐かしい思い出が頭を過ぎり出す。やばい、ちよつと涙腺が。歳をとつた分涙脆くなつた俺の目からちらつと零れる一滴。^{ひとしずく} 渴き切つたと思つた俺の瞳に喘^{やうや}かな潤いを与えてくれた。

「急にどうしたのですか？」 大声を出した事は咎めず、俺が何故泣いているのか心配して寅丸が声を掛けてくれたが、俺の涙は留まる事を知らない。

「なあ……そいつはもうこの世にはいないんだろ？」 辛うじて出した声に毘沙門天はしっかりと頷く。遙か昔の人間による侵略戦で命を落としたという説明もくれた。

「侵略戦って……人間達ですか？」

『まさか！』と言った表情の寅丸にナズーリン。そりや今の人間を見ている二人には信じられない話だとは思うが、過去に本当にそういう事があったのだ。それは本当に……悪夢見たいな出来事だったよ。

今だから思うが何故神はこの事態を見過ごしたのだろうか？同じ事に疑問持っていた寅丸がその疑問を投げ掛けるが、返って来た答えは至極簡単な物。「人間が我等を支配出来たからだ」だそうだ。簡単に言ってくれるが奴らの恐ろしさを身を以って味わってる俺はそれだけで納得出来る。他の二人は一応上司が言ってる事だから体裁上は信じているようだが、やはり疑問視しているみたいだ。

二人は更に詳しく追究しようと尋ねていたが、毘沙門天は一切口を割ろうとしない。理由は何となく分かる。「体裁か？」と尋ねたら「……うむ」と難しい顔をして頷いてくれた。

「その頃私は遙か遠くにある大陸にいたから詳しい事までは知らなんだ。ただ神が人間に淘汰されるなど本来そんな事は在ってはならん事であるからな。現に今も我等の間には箝口令が敷かれているから大っ平には話せないのだ」

神とて万能にあらず。それが痛い程分かった戦いでもあったろう。

現にあの侵略を防いだのは神ではなく妖怪達であつたのだから。

そして今ではあの大戦の事を詳しく知る者は、この国の古参の神々を含めた本当に極僅かな者しかいないらしい。況やあの大戦を潜り抜けた者など皆無だと言われているとか。

「侵略を迎え撃つのに一役買ったのがその鬼らしい。物凄い強さを持っていたらしいく、周りの者からも『鬼神』と呼ばれていたそうだ」

「大御主人を敗り、更には神を冠する程の強さですか……相当な手練だったでしょう」

「あ、鬼神と言えば羅刹殿に夜叉殿なら何か詳しい事をご存知では？」

「奴らも私が戦った後鬼神に挑んだ。まあすぐにやられたがな」

何時の間にか俺を無視して始まった『鬼神』談議。話が進むに連れて大戦以前の歴史も毘沙門天は語りだし、寅丸とナズーリンは目を爛々とさせてそれを聞く。

俺も聞き耳を立ててると「鬼神の女房」だの「嵐を司る天狗」だの、懐かしい面々の話も聞こえ感傷に浸ったり。

また、「鬼殺しの妖精」の話に二人共度肝を抜かれたらしく、「その妖精に勝てる気がしない……」「御主人、私もだ」と、自分達の実力と比較して「妖精以下orz」なんて絶望したりしていた。

でもあれは比べる対象が悪すぎる。今まで出会った連中の中でもあいつに勝てるのは極僅かしかない。規格外も程々にして欲しいものだよ全く。

夜。風呂入って飯食って雑談して寝る。これ鉄則。

俺の割り振られた部屋と言うのは“一人”で寝るには中々広い畳み掛けの部屋。そう、一人でなら。

「乱治さんも少しは手伝ってくださいよ」と文句を言いながら布団を敷いてる居候の居候が俺の部屋で睡眠を摂っているため、この部屋は非常に狭く感じる。相棒の化け傘一本位ならどうって事無いのに。

二人分の布団を敷くとあら不思議。それはまるで一枚の大きな布団。ほんの少し間隔はあるが気休め程度でしかない。

勿論もう一部屋貸してくれるように頼みはした。が、「ごめんなさいねえ。ちょうど貴方に貸した部屋しか余りは無くて」何て白蓮に言われたら退かざるを得ないだろう。俺だって無理を押し通そうとする程図々しくは無いのだ。

「乱治さんはまだ寝ないの？」

「お前も少しは危機感を……いや、俺も持たなきゃいけないか」

「どつという意味ですか？」

首を傾げるその仕草はぶっちゃけ可愛いが、妖怪とは言えとりあえず歳頃の女の子としての自覚を少しでいいから持って欲しい。こう言っただ点に関しては将来が凄く心配です。

「まあいいや。先寝てろ。ちょっと便所」

「女の子の前でそう言う話はどうかと」

面倒臭え！ 女の子非道く面倒臭いよ！ 「おやすみなさい」と言っ着小傘が寝付いたのを確認して俺は便所……では無くこの寺の外れにちよいと肝試しに出発しようかと思う。

ま、流石は神様とだけ言っておこう。

神罰（前書き）

えー、お久しぶりです。先ずは更新が無茶苦茶遅れた事に謝罪を。
申し訳ありませんでした>（――）<
当分も更新が滞ると思われますがご了承ください。

神罰

不気味なほどの静けさの中歩み続けること数分。気配を辿った先に待っていたのはやはりあの御方。木上で偉そうに胡坐を掻いて俺を見下ろすその視線は威厳に満ちている。

「神の思し召しかと思つて仕方なく来てやつたつてのに、何でいその態度は」何て軽口を叩いて見るも何の反応も見せない。

あれか。黙っていれば誰かが解決してくれると思つていいのかね？　だとしたら閻魔に頼んでもう一度ベイビーから人生やり直したほうが良いのではないかと。

なーんて馬鹿な事を考えもしたが、とりあえず何の進展も見られないというのは非生産的なので、ここに俺を呼び出した理由を先ずは尋ねることにした。

「……あんたらが放つ“神力”？　つてやつを感じたから来てみたんだけどホント、何か用があるなら早く済ませて欲しいんですがね」

「極僅かな神力をも感じ取るか。やはり相当な実力者であるか、遙か過去に生まれし人間よ」

「ああ、そういう事ね。確かに俺はずーっと昔に生まれた。そしてあの大戦を経験した唯一の人間だよ。で、何？　昔話でも聞きに来たとか？　お連れさんもいるからそういう事かな」なんて」

俺が言い終えると同時に毘沙門天の脇に姿を現す鬼二匹。片方は

鎧を着込み刀を携えて、どこか冷静さが見られる落ち着いた表情をした一本角の鬼。もう片方は海パンを履き、ボディービルダーみたいな肉体を持った二本角の鬼。……海パン、お前ウケ狙っているのか？

とまあ見た目は馬鹿みたいな連中つぽいが、流石は神に仕える鬼といった所。持ち得ている妖力は並大抵の物ではない。

で、毘沙門天がわざわざこいつらを率いてここに来たっていう事はもう言わなくても分かる。最初から「そうなるかなあ？」という予想はしていたことだから驚きはしないが。

「私はお前に何の恨みもないのだがな。この地を創りし神からの依頼では断れぬ故。悪いが死んで貰おう」

「口封じね。神さん方にとっちゃあ自分の治める地が妖怪に護られたなんて事実、汚点でしかないからなあ……舐めるのも大概にとけや」

ああ、何て胸糞悪いんだろう。感情に身を任せたままに俺は毘沙門天に突っ込んで行った。

俺が飛び掛ると同時にあちらの鬼共も迎撃するように俺に向かってくる。片や刀の柄に手を据えた状態で、片や自身の右腕を振りかぶった状態で。

だが何て事は無い。奴等が動き出す瞬間を狙って問答無用にふき飛ばす。それだけで俺は道を開く事が出来るのだから。

ふっ飛ばされた鬼共を見て何が起こったか理解しきれない様子の毘沙門天。そんな呆けた神の右頬目掛けて固く握った右拳を叩き込む。うむ、中々にワンダフルな感触。

鬼共に引き続き毘沙門天も地面とこんにちは。まあ常に人の上に立っているのだから、たまにはこう下からつても悪くは無いだろう。

先程まで毘沙門天が居た木の上に俺が立ち、落とされた三人組は般若のような表情で俺を見上げる。全く何がそんなに気に入らないんだか。

「貴様あああああ!!」

怒りに狂った毘沙門天を筆頭に一齐に俺へと向かってくる。初撃。毘沙門天の飛び膝を軽くないです。とは言っても流石は神。その

スピードは疾風迅雷に値するもの。破壊力は……言うに及ばず。ぶつかった頑丈そうな大木の一部分にはクレーターができており、『パキパキ、バキッ！』と言った音と共にその巨体は地面に倒れ伏してしまった。

して、そんな巨体が倒れ伏す前に追撃を行っていたのが鬼二匹。手を組んで頭を殴ろうとした鬼の一撃を左手で受け止め、居合切りを噛まして来た鬼の一撃を、右手に持った氷剣チルノで受け止める。両者共に強引に力で押し込もうとするがまだ甘い。確かに無茶苦茶力は強いが、まだその上がある事を俺は知っている。多分コイツらも知っていると思うけど。

純粋な腕力。ただそれだけで俺はこの均衡を破る。で、そのまま追撃しようとしたらまた毘沙門天が現れ、なんか金色の三叉戟を振り回して来たし。しかもいい加減足場が悪いときた。一応毘沙門天の三叉戟も避けずに受け止めて見ると『バキッ！』ですよね。

太かった枝はやはり衝撃に耐える事は出来ず、憐れ俺は先に鬼共をぶっ飛ばした場所へと誘導されてしまう。

「死に晒せ！」なんてぶっ飛ばした俺に追い撃ちを掛けるべく向かって来た毘沙門天は聖職者あるまじき事を口走ってるし。加えて下からも鬼共がこちらに向かって来る妖怪が見られた。

「まったく馬鹿の一つ思い見たいにワラワラと。お前らMっ気……っても分からねーか」

あと一步、って所で三者を同時に地面にぶっ飛ばす。どうやら俺の能力は神様にも有効らしく、見事に毘沙門天。列びにその配下である鬼共を完封している。

が、奴らはまだまだやる気十分。俺が地面に着地し頃には既に臨戦体制に入っていた。確かにダメージを負っている筈なのだが、それを顔に出さないのは流石と言うべきか。

本領発揮。毘沙門天が放つ神力が一層力を増す。加えて鬼共の放つ妖力も更に高まり、辺りが異様な雰囲気で包まれる。

別にふっ飛ばしても構わないのだが、真っ向からぶつかるのもまた一興。負けじとこちらは莫大な霊力を解放。

この場はまさに混沌と書いてカオス。神力と妖力と霊力が一同にぶつかり合うなんて機会、果たして俺の生きてきた間にあっただろうか？

「この地を創りし神が貴様を葬る命を出したもう一つの理由が今分かった。その『あらゆるものをふっ飛ばす程度の能力』は危険過ぎる」

「『だから殺される』、なんてすげえ迷惑極まりない話しなんだけどね。っていうか能力知ってたんだ。意外だよ。尤も能力知っててもあんたらじゃどうしようも無いと思うけど」

「吐かせ小童^{いっせいのこ}。ここからは私も容赦はせぬ」

毘沙門天が持っていた金色の三叉戟が、俺を捕えんとばかりに物凄い速さで伸び始める。『まあ速いと言ってもただの突き』何て高を括り、横にずれただけで避けた気になっていた俺の完全な慢心だろう。金色の三叉戟は“直線上”の動きでは無く“曲線上”の動きで俺の左肩を突いていた。

予期せぬ痛みにも身体が硬直する一瞬の隙。左肩から身体を毘沙門天の方へと勢いよく引つ張られ、待ち構えていた海パン鬼の渾身のボディーブローが俺の上半身に突き刺さる。

痛え。まじばねえ威力。口の中が鉄の味で満たされるなんてここ最近記憶に無かったから、それだけに今回の一撃は効いた。完全に平和ボケしてた。

止めとばかりに刀で切り掛ってきた鬼の一撃を左手に持った氷剣チルノで受け止め、今度は背後から迫ってきた海パン鬼の出鼻に裏拳を叩き込む。更に拮抗している状態の鬼にすかさず前蹴りを放ち、毘沙門天の目前でゆっくりと左肩に刺さった三叉戟を引き抜こうとしたのだが、やはりそう簡単にはいかないらしい。

俺が三叉戟に手を掛けようとした時に毘沙門天のジャンピングニール。三叉戟に掛けようとした手で奴の膝をなんとか抑えたが、勢いまで殺す事は出来ず後ろにのけ反ってしまう。

追撃のシャイニングウィザード。毘沙門天のもう片方の足が俺の顔側面を捉える。周りの木々をぶっ飛ばしながら背中から地面を勢いよく滑走。背中がヒリヒリするのはその所為だろう。

どっかの太木にぶつかって漸く勢いも止まる。敢えてここは立ち上がり、息を殺して奴らが来るのを待つ。所謂“死んだフリ戦法”ってやつだ。

「……ですよね」

が、それは自ら墓穴を掘る結果となってしまうた。

空を見上げると夥しい数の金色の三叉戟が、宙を浮いてる毘沙門天の周辺に佇んでいた。まあ、あれだ。俺が死んだフリをしている

間に準備を整えたのだろう。徹底的な神様の意地悪つてやつだな。

「逝け！」という号令と共に降り注ぐ金色の三叉戟。成る程、物量作戦ね。これならふっ飛ばし切る事が出来ないと神様は踏んだみたいだが……見誤りだ、毘沙門天。

イメージは衝撃波。それを身体から爆ぜるように弾き出す。

残念ながら俺の能力の前に物量なんて関係無い。その名の通り“ありとあらゆるもの”をふっ飛ばすのだから。

今回の大量の三叉戟の雨も然り。果たしてあの三叉戟にどんな細工が施されていたのかは知らんが、俺の前では何の意味も成さない。

「とりあえず俺の勝ちね。流石に神様手に掛ける程外道でもないし」

大地にすっかり根付いていた巨大木々がふっ飛び平地と化した周囲。そんな中毘沙門天と鬼二匹は、ぽつんぽつんと落ちてた三叉戟に交じって倒れ伏していた。

数時間後

ろくに睡眠は摂ってねーわ身体はボロボロだわ、現在の俺のコン
ディションは最悪だ。だからと言ってそれが仕事をサボる口実には
ならない。既に小傘は起きて朝ご飯の仕度をしている訳だし、ちゃ
つちやと仕度を済ませてしまおう。

「あれ、乱治さん？ 何でそんなにぼろぼろ「寝相だ」

「いやいや、いくら何でもそれは「寝相だ」

「そもそも「寝相だ」

「……………」

言い切った。完全に言い切ったよ。だって信仰している神様と戦
ったなんて、小傘を含めた他の皆に言える訳が無いでしょ。

もしばれたら面倒な事になるのが目に見えてるのだから、果たし
て誰が好き好んであの戦いの顛末^{てんまつ}を話すと言うのか？ 少なくとも俺
は話さないタイプの人間だ。

これ以上聞いても無駄と踏んだ小傘は手際よくおかずの配膳を済
ませて諦めの態度を示す。よかよか。

「な筈だったんだけどな」

ちやぶ台を囲む面子に三人程いつもと違う顔触れが見られる。そう、毘沙門天に鬼二匹。つい数時間前まで山の奥の方で俺を殺そうとしてた奴らね。

俺以上にボロボロだった三者は当然の様にその理由を聞かれているのだが、まさか神様から「寝相だ」何て言われるとは思わなかったのだろう。白蓮を除いた皆が啞然としたのは当然の結果だと。というか何故だろう、初めてコイツに親近感が沸いた。

同じ様に寅丸が「夜叉殿と羅刹殿は何故？」と聞いていたが、こちらは割とまともに「剣の鍛練だ」「ガハハ！泳いでいたからだ」と対応していたようだ。いや、やっぱり後者は別としてね。

それよりも皆さん。もつと先に聞く事があるだろうよ。ほら、白蓮ははつとしたように「やだ、お茶を用意するのを忘れてましたわって違う違う。」

「何故当然の様に食卓を囲んでいるんだよ」

「ふむ人間、いい質問だ。それは私が神だからだ」

おい。何で皆それで納得出来るか教えて欲しいんだが。つーか何故俺を変な物でも見る様な目で見る？……いや、ほら、あの悪かつたつて。だからその目で俺を見るの止めてくれない？

……とまあおふざけはこれ位にして、皆が朝飯を食べ終えた頃に毘沙門天は皆の注目を集めて話を切り出した。

「ここでの布教活動を止めろ」

去る者、来る者（前書き）

出来栄えが

ああ出来栄えが

出来栄えが

すみません、無茶苦茶かもしれませんがご了承ください。

去る者、来る者

「おーい、白蓮」

「あら、乱治さん。どうかなさったのですか？」

「いや何、ちよいと話をさ」

崇めていた神様からの突然の布教活動の停止命令。あの時は突然の出来事に皆混乱に陥っていたのだが、白蓮だけはその何時もの穏やかな姿勢を崩さずにいた。

そんな白蓮の口から放たれた返事は「分かりました」と言う肯定の意。皆の混乱はピークに達していたが、ここに来て俺は頭が冷える。

急にあんな事を言われても取り乱さないというのは何かしら心当たりがあるのだろう。

だからその理由を聞いてみる。話してくれなかったらそれまでだが白蓮の事だ。根拠は無いが話してくれるような気がする。俺はここでただ一人の人間だし。

縁側でお茶を啜った後、隣に座る様白蓮は俺に促す。どうやら御眼鏡に叶ったみたいだ。供えてあった茶菓子を手土産に白蓮同様、俺もお茶を啜って一息入れる。

ああ極楽。美人の傍らで啜るお茶がこつても美味いとは。

「あゝ今なら天にだって昇れる気がするわ」

「もう、乱治さんは相変わらずですね」

「いやいや、それは白蓮も同じでしょ。でなきゃあんなに落ち着いて毘沙門様に返答出来ないから」

「あらら、分かつちやいましたか」

何時もの様に優しく笑いつつ「困りましたね」なんて実際は全く思ってもいない事を口にする。ちよつと舌を出して茶目っ気を出してる点、そんな様子が伺える。あーもう可愛いな。

でもさ、一体どんな覚悟をしていれば何時も……あんな事を言われた時でさえ取り乱さずにいられるのだろうか？

白蓮が取り乱さずにいた原因は分からないが、覚悟が何処に向けられているのか位は把握している。おそらく、いや。白蓮が抱いている理想。則ち妖怪と人間の共存へ、である。

「私だつて驚かなかつた訳じゃなくてよ。ただ毘沙門様は誰よりも博識で優しいお方だから。私の事情を知つた上であんな事を言ってくれたの」

「事情つて“人と妖怪の共存”？」

「そこまで知っているなら、もうあの台詞の真意も分かっていたと思いましたが。 “人と妖怪の共存”と言っても、それに賛同する人間に妖怪なんてほぼ皆無。寧ろ疎ましいとまで思われている。特

に人からの風当たりは相当なもの。うつかり漏らしてしまったのが運の尽きだったのでしょう」

「時期尚早ってやつか」

「そう、両者に“共存”を呼び掛けるのは余りに早過ぎました。お陰で最近では信仰の集まりも悪いです。だから毘沙門様は私にここを離れるように申した。

ただ建前はそうなっていますが、先に申した通りあの方は非常に優しい。これから始まるでしょう人の迫害から私を遠ざけるという事も念頭に置いて、あの方はあの発言をなさって下さいました」

「神様の優しさねえ」

出来れば俺にも分けて欲しかった。という思いは胸に秘めて、毘沙門天の優しさ（仮）を感じてるっぽい白蓮を見る。ああ、これは自分の崇拜対象を信じてやまない者がする目だ。

まあ実際にあの毘沙門天も白蓮を助けたいつて思っただろうさ。でなきゃあんな風に忠告はしないだろう。下手したらシカトしてたかもしれないし。

ただ気になるのは白蓮がこの信貴山を降りる気配を一切見せない事。従順な白蓮なら直ぐに行動に移すと思っただけ。

「あ、私はここを離れるつもりはありませんよ」

「ふん、離れるつもりは無い……………ブツッ！」

ちよ、ええ！　ちよ……えゝ！？

な、何言っちゃってんのこの子？　あの時確かに『分かりました』
って言ったじゃん！　ここでの布教活動諦める意志見せたりもした
じゃん！

……おいおい、まさか

「白蓮、お前もしかして」

迫害の対象となるのはまさか白蓮だけに留まらない。ここにいる
妖怪達、更には俺にまで手が及ぶだろう。

ただ白蓮がここを離れようとすれば簡単に離れられるし、残って
いる妖怪達もそれに倣ってここを離れる。普通ならこれで問題は無
いのだが、果たして妖怪にとってこの行動は正しいものなのか？　単
なる人間による武力行使如きに屈していいものなのか？

答は否。妖怪達の尊厳に懸けてそれだけはしてはいけない。

妖怪とは人間の恐怖が生んだ奇怪な存在。単なる人間に背を向け
て逃げるなんてそれこそ有り得てはならない。常に妖怪は人間を脅
かす存在でなければいけないし、況してや人間に脅かされるなんて
愚の骨頂であるのだ。

「ええ、妖怪達の味方としてここに残ります」

きつと妖怪達の尊厳を守る為に敢えてここに残るのだろう。先に述べた通り、白蓮がここを離れればここに残っている妖怪達もそれに倣ってここを離れる。が、正直言って残っている妖怪達はそれを望んでいない。

近い内に大きな衝突が起きる。人間と妖怪による大きな衝突が。白蓮は妖怪達の味方としてここに残るだろうが、きつと向かって来る人間には手を出さないだろうな。

「そつか。……俺もそろそろ御暇おいとまする時期かね」

「お手数かけてすみません」

信貴山・麓

「見納めか。当分あいつらの顔は拝めないだろうな」

「はあ、何だか少し寂しくなりますね」

結局俺は少ない荷物に小傘と化け傘を加えて信貴の山を降りた。ただそこら辺の込み入った事情を知らない小傘は、始めこの山を降りる事を頑なに拒んでいた。が、そこら辺の事情を理解していた化け傘は必死に説得して小傘を率いるに至る。

そもそも始めは小傘を連れて行くという発想は俺には無かったのだが、実は化け傘の方がどうしても自分等を連れて行って欲しいと頼んできたのだ。どうも一輪、村紗辺りが化け傘にその辺の事情を吹き込んだらしく、「新しく出来た妹分を頼む」と伝言も頼まれたとか。

化け傘のテレパシーっぽい何かでその旨を伝えられた俺は当然それを承諾。基本的に善人なのだ、俺は。

さて、その善人は道草がてらに麓にある村に足を運んだのだが、物凄い数の陰陽師やら妖怪退治屋やらがいた。しかも一人一人から感じる霊力が強力なものでして云々。仕掛人が誰かは知らないが相当力を入れているというのが分かる。

「何だか、怖いです」と化け傘を抱きしめながらあまり目立たないように小傘は歩いているつもりなのだが、青髪+オッドアイ晒してる時点でアウトだから。まだ普通の唐傘に擬体している化け傘の方が及第点をあげられる。が、如何せん目立ち過ぎた。

「しゃーない、『安宅あたかの関越え』作戦だ」

「へ？……つてふばあ！？」

かの有名な武蔵坊弁慶という御仁は主君、源義経一行らと安宅の関を越える際その主君の正体がばれそうになった時、関所の見張りの目を欺くべく「お前が義経に似てるから疑いが掛けられるんだ！」的な事を言つて主君である義経を杖でおもくそ殴り飛ばしたそうだが……

要するに俺が弁慶。小傘に「そんな奇怪な容姿をしているから妖怪と間違われるんだ！」と言いつつデコピン連打をかまし、周りの目を欺こうつてわけ。

デコピンを放つ傍ら、周りに目を向けて見ると「何だ、大した事の無い妖怪か」つてあれ？ ばれてらっしゃったの？ そういえば関所の見張りも実は義経の正体を分かっていたんだっけ。

……まあいいや、結果オーライ。しくしくしながらおでこを押さえる妖怪を脅威と認定する程、ここにいる奴らは浅はかでは無さそうだ。つまりところそれなりの実力者揃いつて事なのだが。

「（これ位の戦力がなきゃ奴らには対抗出来ないって訳ね）一筋縄じゃいかなーな、あの寺も」

「ヒグツ……痛いよ、腫れてるよ。乱治さんのばかあ」

「あ、そうそう。お前これから俺の弟子になるから俺の事は“師匠”と呼ぶように」

「ちょ、私がいつ乱治さんの弟子に「ああん？」ご鞭撻の程、よろしくお願いします師匠」

うむ、物分かりのよい弟子だ。事実を述べるとこれ、化け傘に頼まれたからなだけだな。

ま、小傘は物凄く運がいい。弟子なんて俺殆ど取らないし。弟子なんて取ったの妹紅くらいじゃないか？あれを師弟の関係というのはどうかと思いはするけど。

笑顔を向けながら涙を流すという器用な事をしながら「食べられちゃうんだ……」と呟いている小傘に、「食べないから」と俺が返すという懐かしの問答をしながらちゃっちゃんと村を離れる事にした。

「……………」

「だから食べねえよ！　ってあれ？　その人もしもーし」

「……………」

「んだよ、つれねーな。　“久し振り”の再会だつてのに」

「そうやって油断した所を……ってあれ？　師匠、さっきの大きな布を纏っていた人って知り合いですか？」

「まあな。完全に無視されたけど」

「まったく、相変わらず素直じゃねーな。」

後日、奇怪な容姿をした女の活躍が各地に伝えられたのは、また別のお話。

去る者、来る者（後書き）

次で聖蓮編はラストかと思われます。先に言っておきませんが、視点が変わります。

終幕・白蓮 妹紅（前書き）

長かったよ、とつつあん。まさかこんなに長引くなんて思いもしませんでした。

なお、今回の話は妹紅視点となる事を先に述べときず。

終幕・白蓮 妹紅

先にすれ違った奴はおそらく。というか十中八九乱治の馬鹿だろ
う。

んで、隣にいた青髪の女の子は乱治に目を付けられた憐れな妖怪。
乱治の事を“師匠”と呼んでいたが、あの様子から見て予想するに
強要されているのだろ。本当、心の底から同情する。悪いように
扱われないと思うけど。

さて、今私は信貴山という山の麓にある村に厄介になつて
いる。何でも山に住まう妖怪共を一掃すると言ったお触れをこの村に縁の
ある名家が出したらしく、こうして名の通った妖怪退治屋やら陰陽
師やらが一同に集結したとの事だ。

斯く言う私もその例に漏れず……ではなく、たまたま強い妖・靈
力に誘われてここに来てみただけ。尤もその最たる原因がつい今し
方村を離れたのばかりではあるが。

それにしたってここに集まつてる連中と言うのは中々の強者揃い。
感じ取れる靈力はそれなりに濃密。こりやまあまあよくもこれだけ
の面子を揃えられたもんだよ。

「何だ女。伽にでも来たのか？」

「ああ？ お前さんと同じ仕事だよ」

「グヘヘ」と言った全く品の無い笑い声で気軽に肩に手を掛けて
くる中年の大男。ったくふざけやがって。

右人差し指を大男の前で立て着火。面食らった顔面を殴り飛ばすとも考えたがまあ寛容な私はデコピン一発で許してやる。

ぱこん、と一発。大男の顔が後ろに弾かれる。へへ、やるね。通常なら相手の身体ごと吹っ飛ばす私のデコピンではあるのだが、目の前の大男は顔こそ弾かれてはいるが、きちんとその場に踏み止まっている。

「おつでれーた。嬢ちゃんはとんでもねー怪力の持ち主だったんだな！」とか、仮にも女の私に向かってそりやないだろ。

「ああ、美しきお嬢さん。その白い髪は私の心を絡み捕り、その赤い瞳は私の心を威抜く為にあるのですか？」

ああ、また変なのかよ……

時刻は夕暮れ時。村のとある大部屋にこの村に来た退治屋やら陰陽師やらが一拳に集まり、明日未明に行われる大掛かりな討伐の段取りが現在話されている最中。胡座を掻いている私の両隣には例の大男と変態が同じ様に胡座を掻いて座っていた。

両者の名はそれぞれ“金太郎”、“桃太郎”というらしい。金太郎はともかくとして、ちょうど私がデコピンを放った後にやって来たのが桃太郎だ。金太郎とは正反対に見目麗しい顔立ちをしており、その存在はまるでどこぞの貴公子その者。始めは私も「いい男だなあ」と思いもした。が、反省しよう。私の早とちりだ。

「ああ、美しいお嬢さん。その白い髪は私の心を絡み捕り、赤い瞳は私の心を威抜く為にあるのですか？ その白い髪を私の×××で更に××たい。その赤い瞳を私があなたを×××事で×××させて自分色の瞳に染めたい。ああ、美しいお嬢さん。是非とも私と共に新しい世界への道を切り開き」

変態が全てを言い切る前に、私は乱治直伝の“ふらんけんしゅたいなー”という体技を叩き込んでいた。

「私にはあなたが他の男と一緒にいる事が耐えられないっ！」

「頼むから黙っててくれ変態」

「何っ！か嬢ちゃん。妙なのに目を付けられたな」

「あんたも十分妙な奴だよ」

周りの視線どこ吹く風。一応元締めらしき人物の話は耳に入れていたのだけれど、これから大掛かりな作業をするに当たってこの緊張感の無さは流石に士気に響くだろうと感じたのだろう。元締めらしき初老の男がこちらに顔を向け……『二カッ』と笑った？

「まあ作戦なんぞ封印組と戦闘組に分かれて戦うだけじゃからな。長々話してもしょうがない。それよか各々情報交換をして己の糧とした方がここに居る御主等にとつては有意義な時間となるじやろう。という訳で各自解散。後は御主等の好きにせい。わしはそうじやな……その美しい姫君に「老体！ 私の姫君だ！」

そこからはやんややんやの大騒ぎ。それはもう先程までの蔵かな雰囲気が『何だったの？』って感じで。特にあの元締め豹変っぷりは目に余る程。桃太郎と何か言い争っているようだけど「いいや、あれは××だ！」とかせめて本人に聞こえないように話し合っ欲しい。言うまでもなく埋めたけど。

乱治が言ったように今までこの容姿のせいで流れ着く村の殆どで厄介者扱いされた私が、こうして歓迎を受けると言うのは何だか新鮮な体験かもしれない。幸い、と言うか奇跡的にこの容姿に文句を付ける輩というのがここにはおらず、それどころか進んで好意を向けてくる者までいる。まあ方向性は置いておくとして。

とにかく、こんな“人”としての温かさに触れるなんて果たしていつ以来だろうか。故に今回は久々の温もりに身を任せていようと思う。

「さあ妹紅殿、私の胸に！」……羽目を外さない程度に。

「おう妹紅。一杯どうだ？」

「あ、悪いね」

「あの爺さんも元気なこつたあ。年の差なんて関係無いとばかりにお前さんに言い寄るんだからさあ」

「年の差なんて関係無い、か。ちょっとだけ考えさせられるね」

「お、満更でも無えってか。ひょっとして年増好みか？」

「馬鹿言つてるともう一度ぶっ飛ばすよ。でもまあ年増と言えば年増好みかな？特に……」

あいつが。と、最後の台詞は酒と一緒に飲み込んだ。

一夜明けて、いよいよ今日が衝突の日。作戦内容は至って簡単。私、金・桃太郎等の戦闘組が先に入山しある程度の妖怪共を叩き潰す。次に封印組が大元の封印に全力で取り掛かる。成る程、至って簡単な作戦だ。

ちなみに大元とはこの山にあるお寺の尼さんらしく、この村にもつい最近まで来てたんだとか。どうも評判は良かったらしいのだが、とある日に「妖怪と人間が共に暮らせる場を設けたい」と宣ったらしく、評判が一気に崩れ落ちたらしい。

無謀だとしか言いようが無い。乱治には遠く及ばないが私だつて通常の間が生きる以上の時を生きてきた。が、妖怪と人間が共存している村なんて未だかつて見た事が無い。

そんな事吐かす輩がこの辺の妖怪共を纏め上げているんだ。村人だつてそりやおっかなびつくりだろ。乱治が昔言つてたっけな。『兵器は持つてるだけで脅威となりうる』とか。

周りでは既に同業者が妖怪共と戦闘を始めており、名声に違わぬ奮戦を見事に繰り広げている。

だが違う。私達が狙っているのはもつと奥にいた大物。ここからでも感じとれる霊力と魔力は、おそらくこの辺の妖怪共の纏め役である尼さんのものか。まあ今はそれよりもだ。

「周りの妖怪を無視してコソコソと寺社にやって来たつもりだったんだけどねえ」

「いやいや正解ですよ。この奥に聖は居りますから」

「それにここに居る妖怪は私こと雲居一輪に、隣に居ります船幽霊の村紗水蜜だけです。良かったですね、私達だけで」

寺社の広場にてニコニコしながら自己紹介をする二者の妖怪。数だけ見れば幸運かもしれないが、明らかに今までの妖怪共とは妖力の桁が一線を画している。あーあ、これは相当骨の折れる作業になるわ。

が、私の心中を察してくれたのか、両隣にいた金太郎と桃太郎が自身の武器を構えて一歩前進。どうやらこの二人があいつらの相手をしてくれそうだ。

ちなみに金太郎の武器は自身の身体と同程度の大斧。桃太郎の武器は刀。しかもどちらの武器もかなりの霊力を宿らせた代物。これならここを二人に任せられるかな。

二人が奴らに向かって行くと同時に、私は寺社の更に奥の方へと足を早めた。

S I D E 金太郎

嬢ちゃんの実力は底が知れ無え。俺だつてそりゃ身の丈程の大斧を得物として使っている訳だから、腕力にも実力にも相当な自信が

あつた訳なんだが……世の中つてのは思った以上に広がったな。

今回集まった退治屋連中は中々の実力者揃いだ。中でもあの爺さんや桃太郎は更に抜きん出た靈力を有していたし、嬢ちゃんに至っては言うまでも無い。

そして今日の前で対峙している妖怪の嬢ちゃんだが、これもまたとんでも無え奴だ。何せ俺の大斧と同程度の……ありや鉄製の錨か？ そんな大層な物を事も無げに構えているんだ。実力は言わずもがな。強ええに決まつてる。

「やれやれ、もつと精進しなきゃなるまい」

「今更だね、おじさん」

『ぶううん！』と風を切る勢いで斧を振り下ろしたんだが、妖怪の嬢ちゃんも下から錨を振り上げていたためか、凄まじい金属音と共に両者の得物がピタツと目前で止まってしまう。

情け無い話だが腕力は互角。昨日の嬢ちゃんと言い妖怪の嬢ちゃんと言い、女つて生き物は何時からこうも強くなつたのかね？

でもまあ戦いつてのは腕力だけでは無い。がたいがいい分打撃の攻撃範囲つてのは明らかに俺に分がある。つまりは前蹴りだ。

「おらあ！」と掛け声交じりに前蹴りを放つ。踏ん張っていた足の力が一瞬緩み、嬢ちゃんの腕力により一気に持つてかれそうになるが……俺の前蹴りに即座に反応した嬢ちゃんはすぐに後ろに跳び退きこれを回避。が、それは読んでる。

足に靈力を付加させ大斧を振り上げた状態で嬢ちゃとの距離を一気に詰める。まさかがたいのいい俺がこんなに速く間を詰めるとは

思わなかっただろう。

間が詰まった瞬間、振り上げていた大斧も一気に振り下ろす。『決まった』と半ば確信した俺だったが、ここでも嬢ちゃんとはとんでもない底力を見せてくれた。

「……よもやあの一撃を受け止めようとは」

「はは。そう、簡単に、こちらら負けられないので、ね！」

軽口を叩いている間に力を抜いたつもりは無い。受け止められたと分かったら今度はそのまま無理矢理押し込もうとした。だが嬢ちゃんはそれすらをも自らの腕力で弾き返したのだ。

思わず後ろに退け反ってしまい、一瞬だが俺は嬢ちゃんから意識を離してしまう。次に嬢ちゃんを確認した時は、海老の様に飛び跳ねながら身体を反り錨を大きく振りかぶった嬢ちゃんの姿だった。

「でやあああああああああ！！」

よくよく見れば嬢ちゃんの腕には霊力のようなモヤが掛かっている。成る程、あれが妖力と言うやつか。おそらくは俺が霊力を足に纏うのを見て真似たのだろう。全く以って厄介な話だ。

だがな嬢ちゃん。こちらら簡単にくたばる程やわな修行は積んで

無いからな。

来る日も来る日も修行の毎日。必死になって肉体を虐め抜いた日々。そうさ、この大斧だつて使いこなせるようになってきたのは数年前。始めの内は振り回されてばかりだったさ。

「それが今ではな……どっせえええい！」

ありつたけの靈力を右腕に注ぎ込む。右腕の筋肉が痛みを伴いながらもはち切れんばかりに膨脹する。畜生、本当に痛えな。

大斧の柄を握る力が更に強まった所、渾身の力で俺は右腕を横薙に振り抜く。嬢ちゃんが振り下ろした錨は既に俺の目の前にある。だがその錨が俺を叩き潰す事は無かった。

「ふう。一丁上がりってか？」

大斧の腹の部分は非常にでかい。それこそ、嬢ちゃんの身体を覆う程度には。

寸での所でその腹の部分を嬢ちゃんの側面に叩き込み、そのまま側方にぶっ飛ばす。威力は言わずもがな。嬢ちゃんがぶっ飛んで行った先の状況を見れば言わなくとも分かる。

勝敗は決した。嬢ちゃんは起き上がらないで俺はその場に立っている。全く以って厄介この上ない妖怪退治だった。

S I D E 桃太郎

ああ、一輪殿はなんと美しい妖怪なのだろう。これが仕事では無かったら間違い無く私は一輪殿に「ちよつと！ 変な妄想しないで頂戴！」おや、私とした事が顔に出ていましたか。やれやれ、私もまだまだ修行が足りないようだ。

それにしても先程から際限無く飛んで来るこのみよん……おっと失礼。妙な拳は厄介ですね。おそらくあれは一輪殿が操っている入道雲のものだとは思いますが、あそこまで大きな物は私も初めて見ました。知人もこれを見たらきつと『みよんみよん！』と驚くでしょうね。

「ふむ、当たらないか。だったら……少し規模を変えてみようか？」

その時一輪殿が浮かべた笑みは確かに妖怪としての残虐性を秘めた物。ですがそんな笑みですら、いや。そんな笑みだからこそ一輪殿が一層美しく見えてしまう。ああ、止めてくれ。これ以上そんな微笑みで私を見ないで欲しい。

薄い桃色の入道雲が徐々に空に充滿していく。一輪殿も紛れるように空中に姿を隠してしまう。ああ、残念。あの笑みをもう少し見ておきたかったのに。

名残惜しい気持ちを抑えつつもう一度状況を確認してみる。ふむ。この辺一帯の上空が桃色に染まっているという事は、あの親父入道の行動範囲がそれだけ広がったという事ですか？

成る程……つまりこれは試練！ 華奢で可憐な一輪殿から言わせれば『この程度の攻撃で音を上げるようではまだまだだね』と言う事か！ だとしたら私はそれに応えねばなるまい。

我が愛刀を下段に構え空を見据える。感覚を研ぎ澄ますと感じる……空に紛れる一輪殿の気配がびんびんと。

先程とは比べ物にならない程の岩石大の拳が雨霞と降って来るも、私はその岩石大の拳を足場にびよんびよん飛び跳ねて一輪殿の気配を感じる所に向かう。途中避け切れそうに無い拳は愛刀で切り捨て、一心不乱にただ跳ねる。

もう少し、もう少しだ。一輪殿の気配を強く感じる場所はすぐ目の前にあるから

「どうかその美しい顔を見せて欲しい」

「調子に乗るなよ、退治屋風情が」

キーン！！

金属と金属がぶつかり合う音が鳴る。そう、私の放った切り上げの一撃は一輪殿の金輪によって受け止められたのだ。しかし大した金ですね。斬鉄の心得がある私の一撃を受け止めるなんて。

ばんばん飛んでくる拳を足場に二度、三度とびよんぴよん跳びながら得物を交える。一輪殿の方も私の愛刀が刃毀れ一つしないのを見て、美しい顔を少しだけ歪めていた。だがそれがまたいい。

「あんたの刀は一体誰が打った物だい？ 神の加護を受けた私の金輪と互角に撃ち合うなんて中々見られた物じゃないよ」

「その質問を受けたのは二度目ですね。私としては貴女のような美しい方には話して差し上げたいのですが、こればかりは私でも分かり兼ねない事なので、話したくても話せないのが現状ですね」

「そうかい。まああんた単体で見ても化け物染みた実力を持つてるのが分かったからよしとするわ。

さて、ぱっぱと決着を着けようかしら？ 私としては早く姐さんの安否を確認しておきたいしね」

「……そうですね。基本私は美しい女性の意見を尊重致しますので。

では
」

再び私達が交じり合った時、桃色の入道は跡形も無く消えていた。

S I D E
妹紅

「ここはつい最近神と人が大暴れした場所。ここの惨状はその所為でもあります」

辺りの木々は殆ど折れ、地面には金の槍が幾つも横たわっている。

本来の私なら滅多に見る事の無い金に狂喜乱舞している所なのだが、状況がそれを許さない。

名を聖白蓮。妖怪達の纏め役で物凄い力を持っている尼さん。一目見て分かった。こいつは凄く“やれる”奴だ。

「人と神が？……あー、何となく分かったかも。それって黒い“甚平”とか言う着物風の物を着ていた人間だろう」

「おや、ご存知でしたか。詳しい事は聞きませんでしたがおそらくあの方が大暴れしたのでしょう。その日の夜は物凄く大気が震えていましたし」

「生きてた所を見るとそれなりに戦ったとは思っただけど、神様に喧嘩を売るなんてのは世界広しと言えどあの男だけだろうね。

で、どうだい。同じ“人外”同士そろそろ始めないかい。あんた、妖怪側なんだろう？」

「ええそうです。今回は私の浅慮が齎した結果ですしね。罪滅ぼしの為に妖怪達に付いているのが事実です。それでもあなた達に手を出すつもりは無かったのですが……貴女を見て気が変わりました。貴女だけはここで叩き潰す」

「同類扱いが気に食わない、か。だったらはっきり言ってやる。大層な志持っていようがあんたは」

私が言い切る前に奴は。白蓮は私に蹴り掛かって来る。表情にこ

そ出さないが心内は怒りでいっぱいだろう。

軽く前に屈んで蹴りを避けると同時に、右の拳を白蓮の脇腹目掛けて被せ　ふと、右の首筋に白蓮の右の膝裏が引っ掛かっている事に私は気が付く。刹那、白蓮の姿が目の前から消え　左側頭部に強い衝撃を覚えた。「　　っ！　！」と強い痛みで顔を歪めるが気は抜けない。隙あらばがんが白蓮は攻めて来るであろうから。だが奴め。まさかあそこから左後ろ回しに蹴りを噛ますなんて、一体どんな鍛え方をしているんだ？

そんな事を感じながらも追い打ちを警戒した私であつたが、いつまで経っても攻めて来ない白蓮を見て反撃の機会と判断。ぶつぶつ唱えている白蓮に向かって不死鳥の右翼を模した、朱の炎を纏いし右腕を振り抜いた。

「けどまあ、この程度でくたばるとは思っていないよ」

白蓮を巻き込んでいた朱の炎が弾かれた様に消える。後に残ったのは白蓮に纏った何か文字のみたいな羅列。それは肩掛けの襷の如く両肩に、腰回りを帯状に、四肢を蛇が絡み付く様に纏っており、最終的には白蓮の手に持つ心棒（巻物の取っ手）に繋がっていた。あれは……嫌な予感しかしない。そう、例えば　身体能力が大きく向上したりとか　いや、十中八九そうだろう。乱治も昔言っていた。『世の中にはがんがん行く魔法使いがいるかもしれない』とか。

早い内に片を付けるべく私の方も炎の密度を上げる。理想の炎は不死鳥のそれ。昔は霊力を糧とした青い炎を用いていたのだが、今となつては妖力を糧とした朱い炎の方が身体に馴染んで使い易い。

後は……と、あっちも万全の体制みたいだ。じゃあ話は早い。

「善人面してんじゃねえええええぞおおおおおおお！
！！」

「いざ、南無三　　！！」

殴りっこ。やってる事は子供の喧嘩。少々歳と規模が行き過ぎているが基本は同じ。気に食わないなら相手が許しを乞うまで殴り続けられる。

右拳、左肘、右膝……と、途中何度も殴り蹴られながらもやられた分やり返す。一撃一撃の威力では魔力で己を強化している白蓮が上。だが私の炎は奴の消耗を著しく加速させている筈。

途中距離を取って弾幕の撃ち合いともなったが、それもやはり如何にして有利に殴り合いを持って行けるかの布石でしかなく、結局は自分の手で直接相手に苦痛を与えない事には私達の心も満たされはしないのだ。

時が経つ毎に痛みは増し動きに鋭さも無くなってくる。やれやれ、不死とは言えまだまだ鍛え方が甘いようだ。来るべき時が来た時にこんな事では私の復讐が成就する事は先ず無いだろう。

だから思い出せ。怒りを、憎しみを、全てを失った喪失感を。それが為に人の身を捨てた私の気持ちを蔑ろにした奴を許すな。あの日乱治の下に置いてった、私の人としての最後の尊厳に懸けて。

「私、には！ 叶えたい、夢が、ある！」

「人間と妖怪の、グフツ！ 共存だろう！ ガア！ だが現実はどうだ！ これが望んでた事かよ？」

「圧倒的に、グツ！ 時間が足りない！」

「だから手前は人間止めたんだろうがああああ！！！」

私の身体毎渾身の浴びせ蹴りを白蓮に被せる。もう何処に当たったのかさえ分からないが地面に転がった所を見ると何処かしらに当たったのだろう。尤も私も身体毎蹴りを被せたので同じ様に地面を転がっているのだが。

しかしどうだ。これで勝敗は決しただろう。ガタつく身体に鞭を入れて立ち上がる。見下ろすとそこに這い付く張ってる筈の白蓮が……居ない。居たのは私と同じ目線に立つ白蓮。

「あなたの目を見れば、ハア、ハア、復讐に生きてる事くらい、ハア、分かります。そんな私怨の為に人外に身を堕としたあなたが……私と同類ですって？ 私は絶対に認めない！」

「自分の理想はそんなに崇高な物か？ はん、そりやそうだよな。手前から見りゃ私の私怨なんか生き長らえる理由になんかなりやしねえだろうよ。見苦しくて、汚くて、そう。まるで死にたくないが

た為に生き長らえているみたいに。

でもな、私から言わせればその私怨こそ全てなんだ！ 人としての生を捨て、来世への望みを絶った今、私に退路は無え。進むしか無いんだよ！

妖怪と人間の共存？ 結構な事じゃないか。私の私怨と比べたら遙かに崇高だよ、認めてやる。だがな、結局同じなんだ。天から定められた生に私達は背いた。仏の道に通じてない私でもこう考えるんだ。手前なら分かるだろ？」

何が奴の琴線に触れたかは知らないが、確かに一瞬『はっ』とした表情をした。それでも奴は私と同類だとは認めないだろう。

では何が私をここまでつき動かすのか？ 答は至極簡単。嫉妬。ただそれだけ。人間だろうが妖怪だろうが他人の為に必死に生き長らえてその理想を実現しようとしている姿は私には眩し過ぎるからホント、何であんたはこうも輝いていられるんだろう？ 私だつてあんたみたいに、

「あんたみたいに輝いてみたかった、なんてね……」

「……もう、いい。もう、いいわ。白黒はつきりさせましょう。私にも、貴女にも、今はそれだけしか出来ない。考えるのはその後にしましょう」

渦巻く様々な感情を糧にして私の掌の中に炎を留める。私が子供

だった頃乱治が一度だけ見せてくれた大技“不死嵐”。膨大な靈力や妖力や乱治は見事に制御していたが、今回はその炎の型。名前は“螢惑星”^{けいこくせい}。かつてかの国が炎を宿す星と語った星の名を引用させて戴いた。

手鞠大だった炎球はいつしか太陽を覆う程の大きさとなり、私の手では支え切れない規模となる。これがいま私が造れる最大規模の物。乱治には到底及ばない。だけどこれが今の私。自分が持ち得る力の全てだ。

常人がこれを貰ったら塵一つ残さず燃え尽きてしまうだろう。でもあいつがこれを貰っても大事には至らないと確信は無いが思ってしまう。だってあいつはそれ以上に輝いて見えるから……

「燃え尽きな！」

「はあああああああああああああ！！！」

光る気を身に纏い“螢惑星”に突っ込むその姿は気高き獅子の如く。真っ向から挑むその姿勢は本当に恐れ入る。

あの穏やかな表情から一変、物凄く苦痛に歪んだ表情で“螢惑星”にぶつかる。あれを維持している私が熱いと思うくらいだから、白蓮が感じている熱さとは想像絶するものである。あの光る気を纏っていないかったらそれこそ耐えられないくらいに。

しかし未だに退く気配を見せず。そればかりか右拳でもいつきり“螢惑星”を殴り付けやがった。『ピシッ』と何かひび割れる音がする。まさか……

一度ならず、二度三度と白蓮は殴り付ける。確かに『ピシピシッ』

とひび割れが徐々に大きくなっていく。それでも“螢惑星”は割れない。そりゃそうか、やわになんか造っちゃいないしな。

と、何度も“螢惑星”を殴り付けている白蓮が急に叫び出した。

「言いたい事は、山程あるけど、今はこれだけ、言っておく。ごめんなさいね！ 貴女の生きる理由を、虚仮にして！

私なんて初めは、ただ死を迎えるのが、怖かったから、魔に身を堕とした、だけだった！」

「はん！ 臆病者が！」

「そうね、臆病者ね！ でもね、私には、見えた！ 生きて、生きて、理想を叶えた先にある、希望の未来が！ 貴女には、見えるかしら、ねー！」

何度も、何度も殴り付けていた為にそれはやって来た。“螢惑星”の崩壊。激情の炎で塗りたくった私の大技を奴は打ち破ったのだ。そのまま奴は私の方へ向かって来る。私はというともう立っているだけで精一杯。寧ろ白蓮がまだ動ける事に驚いている。で、今の私に出来る事なんてあいつを見据える事くらい。ま、最後の意地くらい通させてもらっよ。

「来な、最後だ」

「と・も・だ・ち・に、なりませんかあああああああああ
! !」

はは、“友達”になりたいってのにそいつをおもくそ殴り飛ばす
奴がどこにいるんだい？ 全く、どこまでも目出度い奴だよ。
そんな“友人”の声を余所に、私の意識はここで途切れた。

S I D E ? ?

ふむ、中々に興味深い戦いだつた。両者共に力の限りを尽くした総力戦と言つべきか。互いに何か通ずる物でもあつたようだ。

実に結構。互いに切磋琢磨し、より高みに臨むのが人間というもの。だが

「これとそれとは話が別じゃからな」

「……貴方が代表者ですか？」

「如何にも。尤も種族は違うがな。“ぬらりひょん”、と言えば分かるかな？ ああ、心配せんでも宜しい。わしは無意味に人間を襲いはしない。普段はこうして退治屋の真似事をしておる」

「そう、ですか。こうして理知的に話が出来る時点でそうだと言うのは分かりますが……私が抵抗を止める理由にはならない」

「ふむ、それもまた一興。そのボロボロの身体で果たして如何程持つかな？」

左手を差し出してちよいと力を入れる。ただそれだけじゃ。始めの内こそ蚊が鳴く程度の抵抗をしてくれたがそこな姫君との戦いでやはり限界を迎えてたのか、すぐに意識を手放す。

じゃがわしの仕事はここからじゃ。手の力を抜く事無くそのまま封印作業に取り掛かった。

S I D E 妹紅

「おい、もこたん、もこたん！」

「　　っ、……と、金太郎……何か不快な言動が耳に留まったような？」

「ああ？　頭でも打ったのか？　いや、だから倒れていたのか」

「倒れて……そうだ！　あいつは、白蓮はどうしたんだ！」

「その者はわしが封印した」

封印？　『何で？』……とは聞かなかった。仮にもあいつはこの山の妖怪達の親玉。見かけたら真っ先に封印される対象であるため、ボロボロになった白蓮を封印するのは当然の事。そう、当然の事な

んだ。

「その若造二人が伸した妖怪達も強力な奴らだったらしくての。封印組が束になって漸く封印出来たと言ってたのう」

「俺は改めて妖怪つてのは恐ろしいって事を学んだ」

「美しい方程お強い。だとしたら鬼は皆美しいと思いましたね」

「そうか、二人共勝ったての。ああくそ、私だけ負けたのか……畜生……」

全力を以ってして届かなかった悔しさ。ただ、今はそれだけが私の気持ちを占めている。くそ、くそ。クソッ！

勝ち逃げかよ！ 何だよそれ！？ 簡単に封印なんかされやがつて。もっと根性振り絞って逃げ延びろや！

ああ？ 何見てんだこいつら？ 私の顔に何か付いてるのか？ 悔しさに歪む乙女の表情をじろじろ見てんじゃないぞ！

「お主……いや、よそう。ただその気持ちに更に主を強くするとだけ言っておこう」

山の麓にある村の一軒家にて。その日、私は父上が亡くなった時
依頼久々に涙を流した。

S I D E 寅丸

ただ、目の前にいた妖怪の強大さに私は恐怖していた。

“ぬらりひょん”。全妖怪の頂点に立つ妖怪。あの時聖を封印する際に見せた力の片鱗は今でも忘れ難い恐怖を私に植え付けている。そんな力の片鱗を見て尚聖は奴に抗っていた。そしてそれを見ている私は……逃げ出していた。脇には、奴の力に充てられて気を失ったナズーリンを抱え、必死になって森を駆けていたのだ。

「はは、何が毘沙門天の代理だ……私はただの臆病者じゃないかッ！」

「ご主人、泣くのは後にしよう」

「……ナズーリン……気が付いたのか」

「ああ、今までで最低な目覚めだがな。奴の力に充てられただけで気を失うなんて醜態を晒したんだ。自分は……悔しい！」

という訳でご主人。何時まで悔しがってないでさっさと毘沙門様の下に向かうぞ。そこでもう一度自分を鍛え直そうじゃないか」

「……そうだな。あんなぶ不様は二度と起こすものか。ああ、そうだ。そうに決まってる。もう一度自分を鍛え直すんだ！ 泣いてる暇なんかありはしない」

今はただ悲しみに打ちひしがれるより、いつか来るであろう逆襲の時に備えて……

終幕・白蓮 妹紅（後書き）

最近某東方創作サイトにて、小野塚小町の越冬戦記なるものを読みました。素晴らしい。こんなにもハラハラドキドキさせられたのは久々でした。

自分もいつかああいった作品が作れたらなあ……なんて思ったのはつい最近。改めて自分の作品と向き合う機会になりました。

閑話・されど神社は変わらずに（前書き）

都条例。可決されてしまったが、果たして一体どうなる事やら……
（2010・12・15現在）

ども、将来の漫画の在り方に不安を感じています作者です。それ
以上に今は今週中に課題が仕上がるか不安なんですがね。

閑話・されど神社は変わらずに

悪霊ネットワークにて、信貴の山の妖怪が討伐された一報が俺の耳に入った。尚、この討伐に於いて何人かの超実力者の存在を確認。内一人は妖怪界における超ビックネームだと判明。ただし姿の確認までは出来なかったとの事。妹紅があそこに向かったのは分かっていたが、まさかそれ以上の曲者がいようとは知らなんだ。

悪霊達の思念を聞き取る事を止め、隣の小傘に目を向ける。小傘は悪霊達の思念を未だ聞き取る事が出来ない。故に思念を取る事が出来る化け傘に悪霊達の思念を聞き取らせ、傘からその報を教えて貰うという手段を用いている。

「……師匠には皆があなる事が分かっていたんですか？ あなとも」小傘の耳に一報が入った際、俺と化け傘に向けられた第一声。「ああ」と頷いた後、俺は化け傘に全ての事情を伝えるように促した。

「うん、うん。皆が師匠に付いて行けって言ったのはそういう事だったんだ……師匠、一つ聞いてもいいですか？」

「何だ？」

「私は今とても悲しいです。でも私は妖怪であり、人間に恐怖を与える存在であります。そんな……そんな私ですよ。そんな私がこんな感情を持っていいのかなあ？」

「んなもんお前の勝手だ。妖怪だろうが人間だろうが生き方なんてのは皆違っただから。ま、素直に生きるのが一番だろうよ。何より

お前の体はそう思っているから泣いてんだろ？」

化け傘を胸に抱き泣いている小傘の肩を叩き、そつと抱き寄せる。あれだけ親しくしていた奴らが皆居なくなっちゃったんだ。そりゃお前みたいな妖怪にはさぞ悲しいだろうよ。斯く言う俺がそうだったんだから。弟子も、な。

俺や化け傘が今こいつに出来るのはこうして傍にいてやる事だけ。せめてその悲しみを少しでも涙と一緒に流してくれる事を祈って。

「落ち着いたか？」

「はい。お蔭様で大分」

「だったらそんなお前に朗報だ。だゝいぶ先になるが必ず再会は叶う」

「本当ですか！」と化け傘を強く抱きしめながら小傘はこちらに寄って来る。それよかお前、傘がミシミシ言ってるから少しもち着け。

デコピン一発で冷静さを取り戻させて詳しく説明。日はく「封印を解く者が遠い将来必ず現れる」と。いや、本当だよ？ 確かゲームでもそうだったはずだし。……やった事は無いけど。

とりあえず小傘が元気になったし一見落着。これなら旅に支障はでないだろ。にしても旅ね。さてさて、何処に行きましょうかね？

「……とりあえず幻想郷にでも寄ってくか」

という訳で能力駆使してやって来ました幻想郷。久し振りに見た里は何て言うか……すごく、江戸です。相変わらず時代錯誤している感はあるが、ここの人々はいつも活気で溢れている。だから何て言うか、すごく居心地がいい。

隣では小傘がそんな人里の様子に目を輝かせている。ただの唐傘に変化した化け傘を振り回している所から子供の様に興奮しているのがよく分かる。この様子だともう一発デコピンをかます必要になりそうだな。

巷で親しまれているっぱい蕎麦屋に入り、かけそばを注文。客足はちらほら。俺らの他に三、四人蕎麦を啜っている。普通にあつた椅子（もう驚かん）に座り、うきうきしている小傘の相手をしながら待つこと数分。……本当に来たよ、かけそば。しかもお椀が普通

にきれいだし。

ずるずると嚼つて食つてみる。普通にうめえ。てか小傘、化け傘に蕎麦食わせるの止めれ。変な子と思われちまうから。

「師匠。そういえばお金はあるんですか？」

「ん、あるに決まってるんだろ。それに足りなくなったらお前を売ればいいし」

「さらっと言わないでくださいよ、さらっ」と

「んだよ。だったらそっちの唐傘を売るか？」

「……………「悩むなよ」

若干化け傘が湿ってるように感じなくもない。まさか冷や汗掻いているとか？ どうやら不貞腐れたっぽいなこいつ。それに気付いた小傘は慌てて化け傘のご機嫌を取る。いや、だからここでそういう事したらマジで変な子と思われるから止めてくれないかな。

尚、お勘定の際「儲けとくよ」と哀れみの目で言われて頭を抱えなくなった。

蕎麦を食い終えた後は神社……ではなく、霧の湖との付近にある俺の住み処に久々に向かう。やはり森を歩くとそれなりに妖怪に襲われ掛けたが、ね。頭突きをかまして強制的に黙って貰った。デコピンなんてかわいいもんだろ小傘。

「しっかしまあ相変わらずのボロ家だわ」

「ここが師匠の家ですか。しかしまた何故人里から離れたこんな場所に？」

「何、ちよいと昔にある友人と約束しただけさ」

「ええ！ 師匠って友達がいるんで……ひい！ デコピンは止めてください……あれ？」

「まったく失礼な奴だな。とりあえずここは俺の家な訳だが、お前にも使用許可出すから何時でも好きな時にでも使え。っと確かこの辺に……うし、在ったな。腐食処理を能力ですれば……うん、まだまだいける。寧ろ熟成された味だ」

「あの、怒って無いですか？」

「まったくいちいちビクビクしやがって。俺ってそんなに心の狭い男に見えるのか？」

「……………」「だから悩むなよ」

まあそれはいい。そもそもここに来たのはこいつに俺の住み処を教える＋食料を持って行く為に来たようなものであり、ここに泊まるとかそういう目的で来た訳ではない。

酒、食料を持てるだけ持って向かう場所は博麗神社。まあたまに

は皆で酒でも飲み明かしたい気分にもなるさ。

「おいおい、相変わらず神社に入り浸ってるのかよ三悪女」

博麗神社の縁側では以前と変わらぬ様子で魅魔、ゆうかりん、神綺がお茶を啜っていた。ただし巫女さんはパシリ。

「あらあら、久し振りね」と笑顔のゆうかりんに「まあ納めくだせえ」と例のドライフルーツを献上する。「へえ、いい味出てるわね」とお褒めの言葉を頂いた所で俺と小傘も縁側に座り込み、巫女さんにお茶の催促をする。「何故私が『ぱこん』フモウ！」と容赦なくゆうかりんのデコピンが飛ぶのも相変わらずだ。

久し振りと言っても実は前からそれ程時間は経っていない。それでも久し振りと感じるのは白蓮組みに凄く馴染んでいたからだと思う。と、どうやらお客は俺達だけじゃ無かったみたいだ。

「積年の恨みいいいいいいいい！！！」と見覚えのある
すき間から飛んで来る拳を難無く受け止め、そのまま無理矢理引き
ずり込んで足でげしげし軽く蹴り込む。「床が、床が……あ、あ
あ、あ！」何て言いながら巫女さんも参戦。いつけね、お茶零し
て大惨事引き起こしちゃったＺＥ。

「ちよ、すみません、すみません、すみません！」と必死に謝つてゐる藍であつたが足元に新たなすき間が開け、その場から離脱出来た事で事態も鎮静化した。

「お久しぶりね乱治。先月はお世話になったわ」

「まああれくらいなら。少し位里に貢献しないとどやされそうだし

な。お茶も台無しになった事だしどうだ、一杯？」

「あら、気が利くのね。じゃあ戴こうかしら」

飲み物がお茶から酒に変わり始まった飲み会。俺が持って来たドライフルーツや燻製肉は中々の好評で飛ぶ様に減っていく。

途中、酒が切れたので藍がゆかりんにお使いを頼まれた為に席を外す。「やーい、使いつぱ」と囃し立てたら例の如く拳が飛んできたが軽くスルー。しかも運悪く流れ弾の一発がご主人様に当たってしまい「もう、まだ躰足りないのね」とゆかりんはニコニコ微笑みながら藍を足蹴にし、日傘で頬をぐりぐり。

そんな痛々しい光景にもここにいる連中の半分は狼狽える事は無い。ちなみに例に漏れる三人とは巫女さん、神綺、小傘の事ね。

「そついや神綺。最近魔界にすげえ魔力持った人間が来なかったか？」

「よくご存知ですね。つい最近いきなり現れて物凄く驚きましたよ。まさか乱治さんが？」

「んな訳ねーよ。ただ俺はそいつを封印した奴つてのが気になつてな。魅魔、お前は何か知ってる事は無いか？」

「駄目だね。情報網に引つ掛からなかった時点でお手上げさね。ありや相当な実力者だよ」

「そっか。ゆうかり……って、何やってんだよ」

割と真面目な話をしていたんだけどね。ゆうかりんは自分の膝に小傘を乗せて、なんか人形を扱うかの様に小傘の頭を撫でている。しかも満面の笑みで。

「乱治、この子くれないかしら？ 主に私の玩具的な意味で」とか言ってくる所、半分本気で言ってるっぽい事が伺える。

……何だよ小傘。そんな目で俺を見るなよ。これ以上黙っている
と泣き出しそうなのでゆうかりんにもその事を目で伝える。「あら、残念」とニコニコしながら言っているのは、やはり半分はからかいの意味合いもあったという事だろう。

とまあそんな感じでゆるゆるな団欒はこの後も続く。

「紫さま、頼まれたお酒を買ってきました。それと稗田の者が是非皆様にお会いしたいとの事なのでお連れしました」

「稗田阿末です。本日はこの“幻想郷”に於いて非常に名高いと言われている皆様方が一同に会していると言う事なので、この機会に皆様方の人となりについて書に記そうと思いたく、今回この場に仕りました」

大量の酒と共に稗田阿末という客人を連れ帰って来た藍。あれだな。藍、グツジョブ。可愛い子は大歓迎だ。

巫女さんはどうやら面識があるらしく、この超強者揃いの茶会に現れた常識人に涙を流しながら抱き着いている。阿末の方も慣れた手付きで対処しており、そんな姿を見て一同は苦笑を漏らす。

「まあとりあえず一杯」と珍しく紫が酌をし、阿末も縁側に座る事で一旦は落ち着いていた。

「あなたの要望に応える前に一つ聞きたい事があるのだけど、“幻想郷”というのはこの里のこと？」

「はい。人里の者は皆そう呼んでおります。ただ誰が言い出したか

は分かりません。何時の間にか皆そう呼んでおりました」

「ふーん……いい名前ね。ええ、正式採用するわ。それで、聞いた事は？」

阿末の方から質問をし、その答えを記録する。当然嘘は付いちや正しい記録を取れないから、話せる範囲の真実を話す。ただ紫。「失礼ですが年齢は？」って聞かれて「ゆかりん永遠の十七歳」とか寝言吐かしてんじゃないの。あ、「嘘付け、ババア」と息ピツタリのツツコミありがとよ魅魔、ゆかりん。

怒れるゆかりん１７歳（笑）を藍が宥めつつ、苦笑を交えながら阿末は神綺にも話を伺う。「その跳ね毛は自分の意思で動かせるんですか？」と正直聞いてどうすんの的な質問であつたが、「あ、これって何故か勝手に動くんですよ」と律儀に神綺は質問を返す。ってか自分でも把握仕切れてないのかよ。

魅魔には「失礼ですが脚はありますか？」と聞いていた。そして何故か俺の方を向いてニヤニヤしながら「悪霊だけどあるよ」とフトモモ辺りまで脚を見せたりしていた。ん、その蔑む様な目は何かね小傘。

で、ゆかりんには「今興味のある事は？」て聞いており、何故かこいつもニヤニヤしながら「私より強い奴の存在ね」と、それはもうふざけた回答をしていた。救いだつたのは俺の方を全く向いてなかったって事くらい。

そしてこの後も阿末は様々な事をここにいる面子に聞いていた。

「あっちゃー、結局酔い潰れたか」

「まあ人里の者にしては頑張った方ね。藍、お願い」

「分かりました。では失礼して」

酒は飲んでも吞まれるな。縁側で猫の様に丸まった阿未を藍は優しく抱き上げそのまますき間に消えて行く。日が暮れ始めた頃の出来事だ。

他にダウンしているのは小傘。今はゆかりんの膝の上で『スー』寝息を立てながらぐっすりと眠っている。そんな小傘を何やら優しい気な表情でゆかりんは見つめている。同じ傘を扱う者の先輩として何か母性本能みたいな物を操られたのだろう。

そんなある意味無防備な状態のゆかりんを魅魔がからかって遊んだり、そして煽りを喰らった神綺がゆかりんに睨まれて涙目になったり。

「さてと、私もマヨイガに戻らせて貰うわ。残った仕事を片付けないといけないしね」

「おう、頑張れよ。じゃ俺も帰るか。ゆうかりん、小傘いいか？」

「……しょうがないわね。起こさないであげてよ」

小傘をゆうかりんに頼んで俺の背中にそつと乗せる。ホント、大人しくしてれば可愛い奴なんだけどな。あ、化け傘には悪いが今は歩いて貰おう。ご主人様はお休み中だしね。

だんだんと薄暗くなってくる山道の中。俺は久々の帰路を辿った。

妖怪の山にて（前書き）

コミケに初めて行ってきました。何と云うか、凄く寒かったです。金欠が重なりバイトを始めた現在。期末テストも重なってもう嫌だ。ただ全では三月の一大イベントのため。遅くなりましたが更新いたします。

妖怪の山にて

「うし、山行くか」

「山？ 神社までの道中ですか？」

「違う違う。ここの山」

「……師匠、私の心の中の何かがこう囁いているんです。『山の上は危険だ』って」

「おお！ 何で分かったんだ？ 確かに山の上には鬼や天狗や河童がいるから並大抵の妖怪から見たら危険っちゃ危険なんだが」

「何ですその百鬼夜行！ 嫌です、私行きたくないです！」

宴会の翌日。本日は久々に妖怪の山に登ろうと思っている。異文化コミュニケーションってやつか。人里で江戸時代なんだから、妖怪の山なんてひょっとしたら明治ぶつち切っているかもしれないし。しかし小傘のシックスセンスには恐れ入る。何も話してないのに危険を察知するんだもの。ひょっとすると戦闘より、そういった探知系統の事に小傘は適性があるのかもしれない。元は人を驚かせる事を生業とする、ある意味妖怪らしい妖怪だからね。

ま、それとこれとは別だけど。「一人でここに残るのと俺の側にいるのと、果たしてどっちが安全だろうか？」と言えば小傘も黙るしかない。つまり、元より小傘に選択肢は無いのだ。

「鬼！悪魔！」ふはは、可愛いのう、可愛いのう「×××！」ふ、

我輩も進化したのだ。その程度の暴言など過去に「私刑な。」

×！」「よし

「グスッ……わっちお嫁に行けない」

「妖怪が婚姻とかどうかと思うが」

「師匠！そこは『俺が貰ってやる！』でしょう！」

「最近、お前の気の持ち様が分からなくなってきたよ」

ホント、誰に似たんだか。いや、言うに及ばずか。

「山に何しに……ってあなたですか」

「いやお前、見張りって白狼天狗の仕事だろう？ 何でお前がいるんだよ」

妖怪の山のある一定ラインを越えると目の前の文の様に見張りが文字通り飛んで来る。ただ俺の記憶が正しければ来るのは哨戒天狗。見張りを生業とする奴らが来る筈なのだが、何故か文が来ている。首には何やら真新しいカメラがぶら下がっており、どこも無くそれが光って見えるのは比喩では無い。

「ひ、光ったあ!？」と小傘が驚いている所を見ると俺らは写真に収められたのだろう。小傘の驚き様を見て文も鼻を高くしている様に見える。天狗だけに。

「驚くのはまだ早いです。もっと面白い物が見れますよ。ささ、お二方。私に着いて来て着いて来て」なんてそりやもう満面の笑みで言うもんだから水を差す事も出来ず、俺はとりあえず黙って着いて行った。

「あれは河童の技術か？」

「ええ、“かめら”という物らしいんですけど。あ、そういえばあなたは河童の御意見番でしたっけ。ご存知でしたか？」

「まあ、知っているから今更驚きはしないな。けど、コイツは初めてだから落ちはまだ言わないぞ」

「えっ、さっきの光るやつの正体を師匠は知っているんですか？」

期待を膨らませる小傘の周りを「知りたいですか？ 知りたいですか？」とうざい位に文は飛び回る。多分小傘には声だけしか聞こえていないだろうが、俺の目はばっちり文の動きを捉えている。

「うわぁ、天狗さん凄い速いですね」ってあれ？ 文の動きに小傘の目が追い付いているんだけど……ああ、コイツは嬉しい誤算だ。年下っぽい妖怪に動きを捉えられて悔しそうにしていた文であったが、「あたしもあんな風にうごければなぁ」と言われ、『羨望の眼差しで見られるのも満更でもない』、といった具合に顔をニヤニヤさせていたのは黙ってしようと思う。

何やかんやで文に連れられてどんどん山の奥に進んで行くと、見えてきたのはいつかの山小屋……では無く、何やら立派な“館”らしきものが建っていました。……何ぞこれ？

しかも館の周辺にはいくつもの大きな山小屋が建っており、何て言うか。凄く、集落です。

「ようこそ客人。ここは妖怪の山・天狗諜報部。山や外から入って来る全ての情報を扱っている場所です。数ある山の部署の中でも最重要に位置する部署でもあるため、護りは我等が大天狗様の他に鬼の方々にも交代制で警護をしております」

「いいのかよ。俺達みたいな部外者がこんなところまで来ちゃって？」

「構いません。厳密に言うとなあなたは河童の預りつて事で我々は認識していますので、別に来るだけなら特に問題ありません。

まあそれとはかく、早く凄い物をそちらの妖怪に見せるとしますか。客間に案内しますのでそこでお待ちください」

文に引き連れられて来たのはいつかの談話室（ソファ一付き）。例の如く俺はソファ一にどっかり座り、用意されていたお茶を啜り一息。はあ落ち着く。

一方小傘は初めて見る様々な物に目を奪われている様子。部屋に一步入ったら「何でこんなに明るいですか？」だの「このふわふわした座り物は何ですか？」だのうざったい位に質問を投げ掛けて来る。一々説明するのも面倒だから「河童の技術だ」と一言で済ませて餌（茶菓子）を与えて黙らせたが、正直電灯まで再現されているのには俺も驚いた。というか河童、やり過ぎだ。

結局小傘はもきゅもきゅと茶菓子を食べるに落ち着きのんびりと文が来るのを待っていた訳だが、お茶を啜り終えた頃にやって来たのは文では無かった。

「あやゝ、いるかい……って乱治じゃないか！ 久し振りだ」

「げえっ！ 乱治！」

「何だよ勇儀、その『してやられた！』って感じの驚き様は。にしても萃香は相変わらずちんまいな」

「ちんまい言うな！ それよりどうだい。一発力比べ「あやややや！ 萃香さんに勇儀さんじゃないですか。今日は確か非番では？」

萃香と勇儀と顔を合わせるのは何時以来だろうか。相変わらずの

様子の二人であるが、どこか遅しくなったように見えるのは気のせいでは無いだろう。でなきゃ萃香なんて俺に力比べを挑もうなんて思わない。

遅れて入って来た文が二人を別のソファーに誘導し、鬼二人は当然の様にどっかりと座り込む。テーブルを挟んで俺と小傘がそれぞれ萃香、勇儀と向かい合う。特に前の二人は小傘をじっくりと見つめている。どうせ強さか何かを探っているんだろう。ま、その間小傘は生きた心地がしないだろうがいい経験になるだろう。

とここで見兼ねた文が助け舟を出す。手持ちのポーチから何やら紙を取り出しテーブルの上に置いた。当然俺はそれに見覚えがある。

「え、何で私と師匠がこの札の中に？ あ、でも私達はここにいるし……あれ？」

「ほう、これはまた面妖な物を連中は作ったな」

「にやはは！ これだから河童は面白い」

「ふふふ、皆さん驚いてくれて何よりです」

反応も上々で誇らし気な表情をする文。まあ本当に凄いのは河童なんだけどさ、使用者がいないと作る意味もないから何とも言えんな。周りが騒いでる間にも文は声高々と“写真”について得意気に説明している。普段はあまり話を聞かない鬼二人も今回ばかりはきちんと話を聞いている。尤も専門的な話になってきた所で見切りをつけたようだ。ん、小傘？ 途中でフリーズしてたよ。

「で、結局最後まで話を聞いてくれたのはあなただけですか」と俺に話し掛けるあたり文も見切りを付けたのだろう。「半分位しか理解出来なかったよ」と答えたらため息が聞こえた。

結局あの写真は小傘が貰った。「私ってこんなナリをしてたんだ」とまじまじと自分の姿を見つめ直しているが、やはり新鮮なのだろう。考えても見て欲しい。この時代において自分の姿を確認す

る手段など水面を覗くぐらいしか俺は思い浮かばない。況してや小傘などそれすら思いつかないと思う。

「大切に保管しておけよ」と言いつつ霊力使って劣化しないように保護を施し小傘に写真を渡す。それを小傘は化け傘の内側にペタリ。……うん、一応防水加工も為されているから平気だとは思うよ。

さて、現在俺は萃香と勇儀に連れられて山の更に上を目指して歩いている。ちなみに文は鬼二人に館の警護を押し付けられてここにはいない。やはり上司（鬼）の言う事には逆らえないんだそうだ。

写真を貰って喜んでいた小傘も、足を進めていく内に段々と顔色が悪くなっていく。おそらく上の方から感じる妖力から何が住んでいるのか予想出来たのだろう。化け傘の柄を握る手に力が入っているのが見受けられる。

果てさて、一体どういうつもりなのかね？ 俺を山の上に招待するなんて。勇儀に萃香曰はく、「そうだ、母さんが乱治を呼んでるんだった」とか。これは一戦交える覚悟をしておいた方がいいのか？

「なーんて思ってた来てみてはいいが、鬼神にそっちは天魔。加えて河童の大将まで。この山を代表する種族の頂点が一体全体どうした訳だ？」

天狗装束に身を包んだ長身の男が天魔。幼稚園児が着るような形状の青い園服っぽい物を着た見た目園児が河童の大将。言わずもがな、例の切り株に座っている角の生えた女が鬼神だ。

なんつーか。個性的だよな。河童の大将に至っては年食つてるとは言え完全に見た目妖……幼児だし。まあいいや。様は何で俺がここに招待されたかだ。

「君は相変わらず面倒毎が嫌いそうだね。あ、そっちの傘妖怪。そんな怖がらなくていいから」

「んな無表情な幼児がいたら親が泣くぞ。面倒毎は知っての通り嫌いなんだから早く話せ」

「そうさせてもらっよ。今年の山の祭なんだが、あんた、参加しないかい？」

ちょっとだけ話しましょうか（前書き）

小傘視点です……一応

さてさて皆様お久し振りで。『東方神霊廟』の体験版が例大祭にて頒布されるそうですが、黙って完成版を待つつもりの方の作者のグ
ウワバスです。

遅くなりましたが引き続きお楽しみください。

ちょっとだけ話しましょうか

一年に一回。幻想郷と呼ばれるこの地では春になると大きなお祭りが開かれるそうです。中でも人里と妖怪の山の賑わいは群を抜いているそうで、この日はかりは妖怪の山もある程度までの立ち入りが許されるそうです。

そして現在私こと多々良小傘は、相傘の化け傘を手にした山の中腹にある屋台を師匠と回っていて、今は“八目鰻掬い”というものに挑戦している最中です。

しかしこれが中々難しい。と言うか八目鰻の大きさに対して網の大きさが余りに小さ過ぎでは？　なんて文句を店主の河童に言おうとしたんだけど、隣の妖怪が「餌なのかー」なんて吐かしながら何匹も捕るものだから言うに言えない。と言うか納得いかない。

結局ぼつで“八目鰻掬い”切り上げた私は、他の屋台に木彫りの彫刻を卸していた師匠に合流する事にしました。

「師匠。その木彫りの形って私の首飾りのやつと同じやつですか？」

「いや、それもあるけど他にも色々ある」

「ふーん。でも色々あるって言っても天狗と鬼ばかりじゃないですか」

「いや、よく見ろって。こっちの天狗はかつこよくてこっちの天狗は美しいだろうが。鬼だってこっちは可愛いらしいがこっちは雄々しいだろ？」

確かに師匠の言う通りではあるけれど、一体どうしてそこまでこだわるのだろうか？　ちよつと頭を使って考えてみるけど……分らないや。

結局私は考える事を放棄して師匠の後を付いていく様にして歩き始めた。

師匠の後を付いていく。それはこの山に登る事を意味している。
それ則ち“例の祭”に参加すると捉えて構わないでしょう。

……「師匠。わっちは腹痛を訴え「さっさと行くぞー」いやだ！
絶対に行きたくない！　だって上からは有り得ない程に濃い妖力
が漂っているんだよ！？

そんな所に私のような貧弱妖怪が足を踏み入れたら絶対に食べら

れる。今回に限らずお祭事では毎回『殺しは法度』と言われている。そうだけど、間違って『ペロリ』だって無いとは限らない。

「やだやだやだ！ わっち、まだ死にたくない！」

「んな大袈裟な。それに一応お前のお守りとして前会った河童の大將も呼んでるから安心しろ。上で合流する予定だ」

大袈裟って。師匠、弱小妖怪が鬼や天狗の縄張りに入るってかなりの自殺行為です。現に周りの天狗からは刺すような視線で見られています。鬼？ 私じゃなくて師匠をずっと見ていますよ。

と言うか師匠って一体何者なんだろう。少なくとも私が見てきた人間には全く当て嵌まらない。私が見てきた人間ってのは妖力とか持ってなかったし。だけど師匠自身、自分の事は人間って言うし。

そうこう考えている内に山の頂上広場に到着。生い茂る木々の先に見えるのは不自然に拓けた大きな広場と、その真ん中にぽつんと生えている普通の桐株。そしてそこに胡座を掻いて坐しているのは“鬼神”と呼ばれている鬼。とても美しい方であると思われるが、それ以上に纏っている“モノ”が私の様な弱小妖怪とは全然違う。

「ひ、ひい！」

鬼神が師匠に気が付いたのか、顔をこちらに向ける。その圧倒的なまでの圧力には私は一気に吞まれそうになるのだが、師匠には全く“ぶれ”というものが感じられない。

ふと、『ぽふっ』と、私の頭の上に何かが乗っかる。師匠の手だった。震えていた私の身体が幾分か落ち着いたものとなる。

「こいつを頼んだぞ」と、何時の間にか隣にいた河童の大将さんに連れられて、私が居たのは広場がよく見える木々の上。周りに河童の方々が見られる事からこの辺りが河童の見物席だと予想。その前を天狗が。更に前を鬼が陣取っており、山の序列も理解出来た。

「全くとんでもない連中だね。天魔、君はどう見る？」

「鬼神の方は言わずもがな。私はスキマよりあいつの方が数段恐ろしいと見てる」

「僕たちにとっては確かに鬼神の方が馴染み深いしね。じゃあ人間、乱治を君はどう見る？」

「あれは私にも測りかねん。そもそもあれを受け入れたのは主等だろっに」

「正確には僕の部下が勝手に取り込んでいただけなんだけどね。まあおかげで今の生活があるんだけど。ただあれだけ鬼神の妖気に当たられて平然としている所を見ると、やっぱり只者じゃ無いって事が分かる」

「同感だ。それに恐らく鬼の連中なら我等より詳しい情報を持っていると思うんだがな」

「無駄だね。何度か聞いてみようとしたけど全然喋ってくれない」

師匠、ホントにあなたは何者ですか？ 山の妖怪の主力級の代表者が物凄い評価をしておられています。

と、鬼神が放つ妖力が更に強くなる。すると河童より後ろの方で見物していた妖怪の大半がその場に倒れ込んでしまった。私はというと相棒である唐傘が咄嗟によく分らない結界を張ってくれたので特に支障はないけど、何か情けない。

「にやつはは！ いいね、凄くいいよ！ 格好良く登場するつもりが登場させられちまうとはね」 あ、ありのまま起こった事を今話します！ 「し、四天王の乱入だああああ！」以上。

確かあの鬼は先日会った萃香さんに勇儀さん。鬼神がまさに立ち上がろうとした時に突如として師匠の前にパツと現れたのだ。

「……鬼神、予定を変える。前哨戦にコイツらを相手にする。賭けるのは俺がちよいとだけ話す時間」

「貴様、そんな舐めた真似「五百年前、何が遭ったか忘れたわけじゃないだろうな？」

五百年前に何が遭ったんだあああああ！ 気になるう、すごい気になるうううう。そもそも五百年前と言えばわっちは……生まれてないや。すると師匠って凄い長生きしてたんだ。

などに関心している間に闘いは始まっていた。って、一遍に相手する気！？

「「跪ずきな！」」

「おっと」

萃香さんと勇儀さんが同時に放った拳を師匠はそれぞれ片手で受け止める。その表情には何の変化も見られない。妖怪でさえ恐れる鬼の、それも四天王の拳を受けてだ。

私は戦慄した。こんな人の下で今まで生活していた事に。そして日々おちよくられていた事に。最早食べられる所の問題ではない。私なんかいつでも弄んで殺せるんだ……萃香さん、勇儀さん、がんばれええええええ！　もう師匠なんかけちよんけちよんにやっちゃってください！

私の思いが届いたのか、萃香さんと勇儀さんは師匠に対し圧倒的且つ暴力的なまでの殴打を叩き込む。師匠の身体が右に左にとよるめき、周りの妖怪達からも歓声上がる。でもちよつとやり過ぎじや……無かった。

萃香さんと勇儀さんがふらふらっばい師匠を見て“溜め”に入った時だ。微かに師匠は笑っていたんだ。

萃香さんは脇を締めて小さく。勇儀さんは右腕を振り上げて大きく。

ふと、空気が緩む

次の瞬間、強烈な衝撃が私達にまで及んで来た。ふっ飛ばされそうになった私であつたが、河童の大将さんが襟の部分を咄嗟に掴んでくれたおかげで木から振り落とされずには済んだ。ちよつと苦しかつたけど。

「まさか……いや、彼は一体？」

その光景を目の当たりにした河童の大将さんは呆然としていた。いや、それはここにいる全ての妖怪達に共通だろう。

始めとなんら変わらぬ表情で師匠はその場に佇んでいた。それも衝撃が出る程の鬼の本気の拳をその手に収めた状態で。

更に師匠は収めた拳を強引に手前に引き寄せる。萃香さんと勇儀さんは否応なしに師匠に引つ張られ　ゴツツ　見事な頭突きを頭に叩き込まれていた。

いや、あれは頭突きなんて生易しいものではない。あの鬼を。しかもその四天王を一撃で昏倒させる程の威力。私を含めたその辺の妖怪なら今頃三途の川を渡っているだろう。

辺りにどよめく新たな喧騒。その中心にいるのは間違いなく師匠。気を失っている萃香さんと勇儀さんを足元にぐるっと辺りを一瞥。

途端に静かになる。　何を話すか？　　誰しもがそう思っていた。

「……昔々の大昔。まだこの山が無かった頃の話だ。人間と妖怪との間でそれはそれは大きな争いがあった」

日はく、人は妖怪のみならずその住み処までも滅ぼす瘴気を放ち。
日はく、人は木々を一瞬にして焼き炭に変える炎を放った。

圧倒的なまでの人間の智慧に妖怪は力で対抗する。

日はく、ある妖怪は雷を轟かし。

日はく、ある妖怪は暴風を撒き散らした。

「けれど圧倒的な数の暴力に妖怪達は押され始める。いや、最初から押されっぱなしだった」

昨日まで一緒に話していた隣の妖怪が、次の日幾人もの人間に戮り殺されていた。

その挑発地味な惨殺に怒り狂った妖怪が暴れ狂うも待っていたのは罨の嵐。ある時は光線が身体を蜂の巣だらけにし、またある時は人質もろともおびき寄せられた妖怪を焼き殺すなんて事もあった。

「何時しか俺の周りには妖怪が誰もいなくなっていてな、その中には俺の友と言うべき者達も含まれていた」

雷を轟かす妖怪も暴風を撒き散らす妖怪も、気付けば皆死んでいた。

そして自身にも限界が近付いていたらしく、最終的にありったけの力と怒りを振り絞って放った大技が大戦を終わらせた。

「今ある山はそんな先人達の屍の上に出来ているんだ。土から滲み出ている妖力なんかはその名残だろうよ。」

ま、そんな馬鹿気た話が本当に在ったって事を信じて欲しいのさ」

土を手で掬ってパラパラと地面に落とす。師匠が何を思っているのは分からないけど、その表情は何だかとても悲しそうだった。

彼女の見た大きな背中（前書き）

毎度お馴染み作者のグウワバスです。「例大祭に行つて来ました」
「なんて今更な報告を入れつつ次話投稿。引き続きお楽しみください。」

PS 最近はにとりが物語の主人公、的な妄想が酷くて酷くて。あまりに酷かったら……とりあえず妄想が収まる事を祈ります。

彼女の見た大きな背中

「……鬼は嘘を好かん。何を以ってお前の言っている事を信とすベきか？」

「簡単さ。お前をぶっ飛ばす腕っ節を以ってだ。遥か太古に生きた者の力、身を以って味わうといい」

合図なんてものはない。始まり何てのはただの気まぐれ。そんな闘いの初手は珍しく師匠からで、上段後ろ回し蹴りを放っていた。

もちろん私には予備動作なんてほとんど見えず、気が付いたら鬼神がその衝撃を抑え切れないでふっ飛ばされた光景が広がっており、その光景と師匠の体勢から見て漸く上段後ろ回し蹴りと判断出来ただけなのだが。

ふっ飛ばされてなお鬼神はすぐに体勢を立て直し、天狗も驚きの速さで師匠に突っ込む。えーっと、右肘？ 当然師匠はそれを防ごうとするのだが、その時できた脇腹への隙を狙い済ましたかのように鬼神は蹴りを放つ。

ベキィ！

聞き慣れた音。人間の骨が破壊された時耳にする音が辺りに響く。普通の人間ならこれで動きが止まるのだが今回の人間は普通ではな

い。師匠だ。

何事も無かったかの様にそのまま鬼神の右足を脇腹で抱え右腕を振り上げる。容赦無い師匠の一撃が鬼神の左頬を捉え、鬼神は物凄い勢いでまたもやふっ飛ばされた。それも先程とは違う、受け身すら取る余裕もない状態で。

宙を行く鬼神に追い打ちを掛けるべく師匠は更なる速さで鬼神を追う。動きなんて本当断片的にしか捉えられない。微かに見えた脚の動きから追撃が踵落しだと判断出来た。

周りで鬨いの様子を見ている妖怪達はその光景にただただ驚くのみ。ちなみに私は『もう師匠だからありで』と驚きを投げ出した。難しく考えるのは苦手だから単純に自分を納得させる事にしたんだ。ただ鬼達は例外。あいつらはどこか寂しそうな、だけど納得したような表情で成り行きを見ている。

「あー久しぶりだなこの感覚、加減無しでぶっ放したのは。どっかの悪霊やら狂気振り撒いている奴にだってここまで気持ちいいのはぶっ放した事はないんだぜ？」

「……ふん、何処の誰かは知らないが同列に扱って貰ってくれるな。あの時の屈辱を今日晴らすのだから」

「あー、あれね」と言っているけど師匠、本当に何をしでかしたんですか？ まさか鬼相手に無双でもしでかしたとか……さ、流石に師匠でもそれは無い無い。例え隻腕、片角の無い鬼が「残った腕が疼くぜえ」何て事をおっしゃっているけど無いったら無い。うん、絶対に。そうこう考え込んでいる内に広場の方では新たな局面に

移り変わっていた。

当たらない。右ふつく、左あっぱあ、そこから繋がる打撃の“らっしゅ”、と言った師匠の基本こんびねーしょんとやらが鬼神に。何度もそれを見ている私にとってその師匠の攻撃の軌道は手^{あっぱあまでだけ}に取る様に分かる。だからその攻撃が当たらない理由も私には分かる。

師匠の攻撃が反らされている。圧倒的な速度と質量を以って放たれるそれは例え来ると分かっても私には対処のしようが無い。それを鬼神は“不自然”にも反らしているのだ。

「能力か」

「ああ、取っておきだ。攻めしか知らない鬼が持ち得た守りの力。
“反らす程度の能力”だ」

「そらなんとも抽象的な能力だ、ことおお！」

師匠渾身の“あっぱーかつ”が鬼神の右側方に流れ、同時に放たれていた鬼神の右拳師匠の頬に吸い込まれていく。この形式は確か“かうんたー”。相手の力を利用して自分の攻撃の威力を高める技術だ。

流石の師匠もこの威力に後方にふっ飛ばされる。周りの鬼や妖怪からは歓声が上がリ、それに答えるかのように鬼神は追撃に入る。大地を揺るがす鬼神の踏み付けが師匠の腹部を打ち抜く。それも一度だけではなく、二度三度と徹底的に踏み付け続ける。地面には亀裂が走り、そこに師匠の身体がどんとめり込んで行く。先程

まで意気がついていた人間の追い込まれた姿に妖怪達は歓喜し、あちこちから笑い声が聞こえてくる。

師匠の事を何も知らない妖怪達は皆これで鬼神の勝ちを確信しただろう。……それが師匠の擬態とも知らないで。多分鬼神は気付いている。師匠が全然堪えていないだろう事に。

「根本的にだな、手前えらとは生物としての格が違う。俺が生きて来た時間と、たがだか千年二千年生きてきた手前えらとは積み重ねて来た経験が比らべるに値しねえからな」

鬼神の足を蠅でも振り払うかのようにどかす。そしてまたもや何事も無かったかの様に徐にその場に立ち上がる。

やっぱり師匠には堪えている様子がまるで見当たらない。そういう能力なのかもしれないけど、流石にこれを目の当たりにすると種族の差と言うものに疑問を感じてしまう。……というか千年二千年を“たがだか”と言い切る師匠が何歳なのか気になる。

しかしこれでは手詰まりだろう。師匠の攻撃が当たらないのもそうだが鬼神の攻撃も師匠に効いていないとなると長期戦は覚悟した方がいいだろう。現に河童の長と天魔がそいった方向で話し合っている。

「奴らは我々の見解など追い付かん領域で闘っているな」

「同感だね。で、その傘妖怪。彼と行動を共にしている君の見解

をききたいんだけど？」

「そうですね。体術だけは本気ですね」

「「体術だけ？」」

「はい。どんな能力かは詳しく知りませんが、師匠が能力を使ったらそれこそ今のようないい闘いにはならないでしょう」

「そう……流石は過去を生きた先人、とでも言うべきかな」

「全くだ。伝承でしか聞いた事の無い時代を生きた者となると私達の祖先。先代、先々代の話になるだろうよ」

苦笑を交えながら各々の感想を漏らす。そりゃついさっきまで最強の存在だと思っていた鬼神をまだ余力を残した人間が圧倒しているんだから、先程から散々驚かされている二人はもう笑うしかないだろう。

さて、先程から鬼神が一方的に師匠を殴り続けているのだが師匠が堪えている様子は全く見られない。見た所どれも並大抵の妖怪なら一撃で絶命させる事が出来る威力なんだけど……

「ふう……当たらねえなあ」

「このっ、化け物がああああ！」

化け物。成る程、言い得て妙だ。人間があちきらを見れば妖怪と叫ぶがあちきらから見れば師匠の方が妖怪と呼ぶに相応しい。

鬼の名に相応しい形相で師匠を殴り続けるも師匠に効いている様子は見られない。きつと鬼神も自分の打撃が効いていない事くらい分かつている。それでも殴るのを止めないのは退くと言う事を知らないから。

辺りに響く轟音と共に鬼神が地に伏す。遙か古しえの時を生きた者と今を生きる最強の差は比べようも無く大きなものだった。

「今のは先代の鬼神を初めてぶっ飛ばした時に使った技だ。尤も奴は一撃じゃあ沈まなかったが」

先程から地面にめり込み伏した鬼神に反応が見られない。微かに指が動いている所を見て生きている事は確認出来るのだがこれは完全に戦闘不能。完璧な敗北の図であろう。

屈強な木々は折れ、それを支えていた地面が所々割れている。それはそれは凄まじい戦闘の様子を如実に表しており、私達妖怪を黙らせるには十分なものであった。

で、黙らせた当の本人はと言うと所々血塗れではあるが、疲労した様子は殆ど見られない。人間と妖怪には越えようない身体能力の差があるといわれているけど、ある意味そうかもしれないと私は思う。

だって“あれ”と互角に闘えそうな妖怪の姿が全く思い浮かばないし、そもそも鬼神でも及ばない相手に誰が及ぶのだろう？そう考えると鬼神よりずーっと昔の妖怪って私なんかよりずーっと強かつ

たんだと思うな。師匠もそんなこと言ってた気がするし。

「さて。結果は俺の圧勝だったがそれなりに楽しめたぞ今代の鬼神。気が向いたらまた相手してやるよ」

「……首洗って、待っておれ」

「上等。次会うのを楽しみにしてるさ」

「うおおおおお！！」と何処かしらから一匹の妖怪の雄叫びが上がる。その妖怪に呼応するように、一匹、また一匹と狂ったかのように雄叫びが上がり、やがてそれは歓声へとなり鬼神と師匠に注がれることとなる。

観ていて熱くなる闘いに人間もクソもない。ただ感情がままに熱い思いを吐き出すかのように叫ぶ。そんな姿に私は妖怪らしさを見出だした。

花の無い花見

「私は誰よりも“私らしく”生きていきます」

「ふーん」

「ちょ、軽過ぎやしませんか!？」

闘いの後の宴会も終え、あの盛り上がった祭の翌日。例の俺の家で久々に寛いでいるとなんか小傘が自己宣言を俺にかましてきやがった。

昨日の俺と鬼神の闘いを観ていて感じるモノがあっただろう。俺は反応こそ鈍いが内心ではきちんと拍手を送ってやっている。イハナシダナー。

当然そんな俺の内心になんか気付くわけも無い小傘は「無視、無視何ですか!？」と喚き立て、「下剋上だあ!」と言って俺に飛び掛かるうとする所を無理矢理化け傘に止められている。小傘よ、お前の実力は化け傘以下か。

憐れみの視線を送っていると「そ、そんなあんまり見つめられると照れちゃいますよ」なんとニヤニヤしながら的外れな事を言う始末。ああ、お前はやっぱり俺の弟子だわ。

「前にも似たような事を言ったが別にお前の生き方に文句なんて言う気無えよ。師匠としてお前を弄びながら見守るだけだ」

「ふーん」

「おーしお前、表出る」

「冗談ですよ。で、話は変わりますがこれからどうするつもりですか？　そもそも師匠自身の目的も私は聞いていませんし。あ、この果実いい具合に熟れてる」

そついや俺の目的を話していなかった……な。俺の目的は昔の友人の一人とここで再会すること。そう、外にある不凍の氷像の作者兼モデルにもなっている“あいつ”。

茫然自失としていた時期も合わせりやもう万単位で待っているんだ。後千年位時間潰せば軽く待てる。だからそうだな。

「暇潰し、だな。待ち人を待つための」

「待ち人ですか。……うん、私もそれです。あの山で一緒だった皆と再会しても恥ずかしくない姿を見せられる様に」

「ああ、待っていれば必ず会える。これは俺が保証する。が、俺もお前もどうも時間が有り余っているようだ。だからちよいと全国を周ってみようと思う」

「全国？」

「ああ、全国だ。全国には面白い輩が人妖問わずうじゃうじゃいるしな。きっと楽しい旅になる。お前もい「行きます、行きます！」」

手を挙げながら興奮した様子で俺に詰め寄る小傘は非常に生き生きした表情だった。

「そういえば師匠は何を言い掛けたんですか？」

「絶対言わねえ」

春の妖気……ゲフンゲフン。陽気に連れられてやって来ました。
とりあえず濃い妖気辿って足を運んだら、なんか大きな桜の木があ
ったって話。悔やまれるのはその桜の木が未だに蕾しか付いていな
いことと誰かの所有物だということ。

つーか何なのこの桜の木？なんだかもつそい妖気を孕んでいる
んだけど。そもそもこんな山奥に何故立派なお屋敷があるんよ？

……いや、悪霊ネットワークでも聞いた事はあるんだけどね。現

物見るまではまさかこれほどの物だとは思いませんでした。

西行妖。用は物凄い妖気を宿したせいでそれを嗅ぎ付けて妖怪を大量に呼び寄せてしまうといういわくつきの一品。特に満開時は鬼すら手易く呼び寄せてしまうとか。

「当家に何かご用が？」

「いや、あの桜の木が花を咲かせたら大層美しい光景が広がるのかなあ、と妄想を」

「……そうか、“見る”分ならこちらも咎めはせん。時間を取らせて悪かった。見た所主は妖気と霊気を纏った特殊な者じゃったから些か気を張った。半端な者がこれに魅入られると人妖問わず狂ってしまうからな」

「気にしてないさ。それに俺もこいつも柔な鍛え方して『うがああああ！』」

しばらくお待ち下さい

「……してないからな」

「ほうでふ、やふあなひあえははんはひふえないへふ（そうです、柔な鍛え方なんかしてないです）」

「そ、そのようだよ」

往復ビンタ？ いやいや、蚊が小傘の頬つぺたに止まってただけです。そんな俺達のやり取りを苦笑しながら屋敷の門番は眺めていた。さて、門の外から西行妖を見物しているとね。……いるんですよ。西行妖の妖気に充てられて狂気に駆られた熊妖怪が。

門番は黙って一瞬だが殺気を放つ。おお、中々これは。少なくともただの人間に放てるような代物ではない。が、あの熊見たいなのにはまだ足りない。ああいった獣見たいなタイプの妖怪は些か鈍いからな。もっと強い殺気を放たないと実力差を感じてくれない。まあ殺気を抑えたのはこっちに配慮してくれての事だろう。

それは余りに速過ぎる踏み込みと一閃。熊見たいな妖怪はあっさりとその生を放棄した。

「花すら咲かさぬあれに訝される未熟者が」

迷いの無い一撃と言うか。対象を斬るのに全くブレが見られない。それこそ自分の剣に絶対の自信があるのだろう。剣を持つ物として手合わせ願いたい

「わきやない」

「ん、如何がなされた？」

「いや、いやいや。余りに見事な腕前だったからさぞ高名な剣士の方かと。名を伺っても？……いや、失礼。名乗りが遅れて申し訳ないが俺は乱治。家名はない。こっちの青いのはもうお分かりかと思うが妖怪（九十九神かもしれんが）の多々良小傘だ」

「ふむ。儂の名は魂魄妖忌。ここの庭師兼剣術指南兼門番の真似事をしておる」

やっぱりというか何と言うか、そんな感じはしたよ。妖忌の周りに纏わり付いている半透明の半霊が決め手だったし。

予想と違った点は割と若いという点。爺さんというよりこの時点ではまだ若々しいおっさんだ。尤も半人半霊故に成長も遅い訳だから、見た目以上に歳を重ねているんだろうけど。

「にしても乱治殿の刀はまた変わっておるな。透明な刃など儂は見事ない」

この一言には俺も驚いた。実はこの氷刀・チルノ。チルノの冷気で作られた絶体不凍の“氷”で出来ている。故にこの刀はまるで景色に馴染んだかのようにクリアーなのだ。

先ず常人には見えない。俺なんかは刀に遺るチルノという馴染みの深かった奴の気配から刀の全容が分かるが、初見でこれを見切る奴なんてのはそうはいない。現に幽香達でさえ、俺が話すまで刀を使える事自体知らなかったのだから。

「見えるのか？」

「いや、完全には見えん。半々位だな」

「……半人半霊だからか？」

「なんだ、見えておったのか」

「まあな。長く生きてると色んな物が見えてくる様になる」

「全くだ」

あの後再び西行妖の観賞を始めた俺達だったが、妖忌のご厚意で屋敷内から西行妖を見せてくれる事になった。何でも妖忌の勘が俺達なら大丈夫と言っているんだとか。まあ俺もあの程度で狂わせられるつもりはないしね。

で、間近で見た西行妖は莊嚴の一言。花を咲かせていないこの時点でこの存在感。花が咲いたら事態の收拾が絶対に着かなくなるな。未来の巫女さんマジパネエ。

見ているだけじゃつまらないから西行妖の概要を聞いたり、妖忌の身の上話を聞いたり、持っていた酒を空けて飲み出したり、屋敷の主とそのご友人も同席して飲み会が始まったり……あれ？

「おい、紫。何でここにいるんだよ？」

「別に。ここの主とは交友関係があるのよ。ねえ、幽々子？」

「……………（コクッ）」

「いやいや。いつ見てもお嬢様と紫殿は仲がいいですな」

まあ途中でこいつらが乱入していたのは流石に分かった。妖忌の『儂が斬れなかったもの列伝』腐れ縁の章』辺りから確かに二人は縁側にいたから。

しかし驚いたな。これがあの西行寺幽々子とは。原作と違ってえらく根暗っぽいけど。あれか、やっぱり能力が関係するのか？まあ俺には関係ないけど。

「……………平気？」

「ああ、柔な鍛え方してないからな」

ってあれ、デジャヴ？

「さてと、サクッと死にますか！」

「目え覚ませ」くらあ

しばらくry

「（師匠、生きてるって素晴らしい事です。ただ女の子に対し頬をおもくそグウは無しだと思います）」

「何て言ってるか分からね」

「鬼ね」

いや、人間だから。

「でもまあ、こんなでも鬼神を下したんだから、実力は本物よね？」

「何と！ただ者では無いと思っていましたがやはりそうでしたか。よもやこの時代に鬼と張れる人間がいるとは思いませんでしたぞ」

「……すごいすごい」

「は！年季が違い年季が。こちら千年程度の大妖にやられてち

や昔の連れにどやされちまうよ
「

「昔の連れねえ。良かったら話してください？」

「駄目。紫には借りは無いが貸しがあるし。月での一件は忘れたとは言わせんよ？」

こんな感じで俺は桜の無い花見を楽しんだ。

花の無い花見（後書き）

どこで間違えた。西行寺編が始まってしまった！ 完璧に想定外。急遽脳内プロットを修正。西行寺編の大体の流れをなんとか作ったけど……またハードルが上がっちゃったorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8487/>

東方暴風警報

2011年7月17日15時50分発行